
大神大尉が501統合戦闘航空団に着任するようです（第二期）

赤城晴信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大神大尉が501統合戦闘航空団に着任するようです（第二期）

【Nコード】

N8601W

【作者名】

赤城晴信

【あらすじ】

以前投稿していた同タイトルのSSを都合から一時消していました。

また再投稿したいと思います。

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦の愛と浪漫の冒険活劇を目指して頑張って行きたいです

一期分は既に完成しているのでpが終わり次第随時二期分を書いて行きたいです

第一話「ブリタニアに浪漫の嵐」

第一話「ブリタニアに浪漫の嵐」

私、宮藤芳佳がブリタニアに来てから数日が過ぎました。

日夜坂本さんからのシゴ……厳しい訓練を受けて一人前のウィッチになれるように頑張っています！

でも……やっぱりまだ拳銃を持つ事には抵抗があります……

今日も日課である朝のお掃除をしていたのですが執務室から坂本さんの大きな声が聞こえてきました。

美緒「馬鹿な！お前はそんな人事をむざむざ受けて来たのか！」

ミーナ「……仕方の無い事よ。上層部が私達をよく思っていないのは美緒だって知っているでしょう？戦力が増えるだけマシだと思わないと……」

美緒「役に立たない奴を送られても邪魔になるだけだ！それをしかも隊長に据えろなどと！何処の誰を……」

美緒は机上からミーナが昨夜の会議で貰って来た資料を引ったくり読み始めた。

ミーナ「……どんな人かと思って美緒を呼んだのよ。同じ扶桑海軍だし、それに帝都では有名な部隊なんでしょう？」

美緒「……」

ミーナ「美緒？」

美緒「い、いや！しかしだ！ここは航空部隊だぞ！陸戦特化の、しかもネウロイとは別の驚異、降魔部隊からなぜ！」

ミーナ「女だけのウィッチ部隊。というのが気に入らない人達も居るのでしょね。とにかく一度話をしてみない事には――」

美緒「規律はどうする！？お前が一番ウィッチと男の交流を嫌がっているじゃないか！」

ミーナ「そうだけれど……この経歴を見るとね」

美緒「二度に渡る帝都の危機を救い……つい先月にはガリアの重要都市巴里をネウロイと魔物の侵攻から救った英雄……直接会った事は無いが話は聞き及んでいる。確かにどんな人物か会ってみたいが……しかしいきなりの隊長変更は隊の士気に関わる！」

芳佳は執務室から聞こえて来る声につい聞き耳を立ててしまった。

芳佳「新しい人が来るのかな？　ん……よく聞こえない」

聞いてはいけないと思いつつも、扉に耳を近づけ二人の会話を聞こうとしてしまう。

その時、急に扉が開き芳佳は頭を打って転んでしまう。

美緒「……宮藤か？　盗み聞きはよくないな」

宮藤「す、すいません……つい……新しい人が来るんですか？」

美緒「……宮藤、バルクホルンを呼んで来てくれ」

宮藤「え……あのミーナ隊長は……」

美緒「詳しい説明は後で全員にする。今はバルクホルンを呼んで来てくれ」

宮藤「は、はい！」

いつも以上に険しい表情の美緒に驚いて芳佳は逃げるようにバルクホルンの部屋にと向かった。

リーネ「新しい……隊員さん？」

宮藤「うん……詳しくは聞こえなかったんだけどね、多分そんな感じの話をしていたんだと思う」

ルッキーニ「この前芳佳が来たばっかなのに！？　もう来るの！？」

宮藤「ルッキーニちゃん！？」

美緒に言いつけられて体力作りのマラソンをリーネと芳佳で永遠に行っている。ルッキーニは木の上で芳佳達の話聞いていたようだ。

宮藤「ルッキーニちゃん、まだ私も詳しくは知らないから皆に言

「っっちゃ駄目だよ？」

ルッキーニ「うじゅー何か気になるー坂本少佐かミーナ隊長に聞きに行こうよー」

宮藤「後で説明するって言ってたからそれまで待とう？ 坂本さん今までにないくらい大きな声でお話してたから、きつとまだ話し合っているんじゃないかな」

ルッキーニ「んー気になる気になる気になるうー！」

ルッキーニの声が基地全体に響き渡っていた。

一方、その頃芳佳達ストライクウィッチーズの基地があるブリタニアに向う扶桑の戦艦があった。

「はぁ……今頃皆に説明が行った頃かな……」

一人の青年が溜め息をついて甲板上から海を眺めていた。つい先日巴里での激戦を終え、故郷である扶桑に帰還するものだとばかり考えていた彼は同僚の男が持つて来た一通の書状に驚愕した。

「それじゃあな、俺は巴里の街を堪能させて貰うぜ」

「ま、待ってくれ加山！ 何かの間違いじゃないのか！？」

「俺だって詳しい事は知らないさ、米倉中将より更に上、軍上層部の決定だ。……帝劇の皆には俺から言っておくから」

「そうか……第501統合戦闘航空団……ネウロイとの戦闘に特化したウィッチ部隊だと聞いているが……」

「お前もトコトン女だらけの部隊に縁があるなあ。程々にしておけよ？ 流石にそろそろ誰かに刺されちまうぞ？」

「冗談はよしてくれよ。光武の改造はどうなんだ？」

「うむ……光武にストライカーユニットに使われている魔道エンジンを利用した飛翔用のウィングを取り付ける突貫工事だ。 無茶

苦茶だぜ本当に」

「やれるかどうか分からないが……頑張ってみるよ」

「それでこそだ。俺も色々調べてみたが、配属先にショーをやるような場所はないみたいだから。今度こそモギリはやらなくて

いいみたいだぞ」

アディオス、と残し青年の同僚はいつものように去って行った。
それが数日前の事。

青年の搭乗機「光武F2」の魔改造とも言える強引な改造が終わってすぐに、青年はブリタニアに向けて船で旅立っていた。

船員「大尉！ 前方に複数のネウロイです！」

「何！ 今行く！」

船員の声に青年は艦の中にと走って行く。

「数はどれくらいなんだ！ 場所は！」

船員「駄目です！ この艦の装備では……正確な数や距離までは！」

しかし、ウィッチーズの基地に向かっていている物と思われます！」

「そうか、ん……？ なんだこの動きは……？」

青年はリーダーを見つめる、船員は彼が何を気に掛けているのか数秒遅れて気がついた。

船員「座標がズレているだけでは……？ なぜ数匹だけが離れているんでしょうか……？」

「……まさか、陽動か？」

船員「そんな馬鹿な！ ネウロイがそんな事を……？」

「念のためだ。光武の準備を」

青年はこれまでの経験から、嫌な予感を確かに感じ取っていた。

リーネ「宮藤さん！ 私と一緒に打って！」

芳佳「うん！」

ネウロイの回避位置を予測し芳佳とリーネは同時に射撃を行い、確実に仕留めた。

奇襲を仕掛けて来ていたネウロイを二人の力で撃退する事が出来たのだった。

ミーナ「リネットさん、出来たのね」

リーネ「私、はじめて皆の役に立てた！ ありがとう宮藤さん！」
一緒に出撃していたミーナとエイラは微笑んで二人を見つめている

る。

美緒「待て……なんて事だ！」

喜びを爆発させ、抱き合っていた芳佳とリーネの耳に別働隊として動いていた美緒の緊張した声が響く。

ミーナ「何があったの坂本少佐！」

美緒「囧の囧だ！ 大きく迂回して直接基地を叩こうとしている最後のネウロイが居る！」

ミーナ「そんな……！ 皆！ 早く基地に！」

エーリカ「私達じゃ……ミーナの方が早い！」

エイラ「無茶言うなヨナ！ 私達はネウロイの位置も把握出来てないんだゾ！？ 基地の真上で向かい撃てっテノカ？」

美緒「クソ！ とにかく早く基地に——」

「こちらは、扶桑海軍所属の大神一郎大尉です。ネウロイ撃退の為出撃します！」

ウィッチ達が使っている特殊なインカムに青年の声が響く。

ミーナ「お、大神大尉！ しかし……」

大神「改造した光武は現状で数十分なら飛行可能です！ 時間稼ぎ位なら出来る！」

美緒「大神！ 出来るんだな！」

ミーナ「美緒！」

美緒「今は大神に頼るしかない。大神、ほんの数分時間を稼いでくれればいい！」

バルクホルン「皆急げ！ 何分持つか分からない、出来るだけ早く帰還するんだ！」

ウィッチ達は急いでその場から基地にて向かって飛び始めた。

甲板上では、改造された光武の射出準備が行われていた。

整備兵「大神さん！ 無茶です！ 飛行テストも終わっていないんですよ！？」

大神「大丈夫だ、俺は皆の整備を信じている！」
整備兵「大神さん……どうかご無事で！」

大神「ああ」

光武の背後に取り付けられた魔道エンジンが火を吹きはじめる。

大神は靈力を展開して魔道エンジンにエネルギーを送って行く。

大神「（魔力も靈力も大元では同じ物……出来るかどうかは俺次第だ……）」

大神「行くぞ！ 巴里華撃……そうか、今はまだ正式には何処にも所属してないのか。じゃあ……光武F2、出撃！」

光武F2は轟音を上げて甲板上を疾走し、ついに空中にと舞った。大神「凄い加速だ……！ ネウロイの位置は……あっちか！」

流星に帝劇の皆もまさか今自分がブリタニアの空を飛んでいるとは思うまい、と一瞬思い、大神はネウロイの元にと飛翔して行く。

ルッキーニ「ああ！ 見つけた！ ……って何あれえ！」

バルクホルン「あれは……？ 降魔用の靈子甲冑！？ 靈子甲冑が空を飛んでネウロイと戦闘している！？」

美緒「大神が持たせてくれたか！」

高速で飛行するネウロイのすぐ後ろに大神の光武が迫っていた。

エーリカ「見たところ装備は剣が二本だけみたいだし、後は私達に――」

大神「狼虎滅却――」

ウィッチ達のインカムに再び大神の声が届く、彼女達には大神が何をしようとしているのか理解出来なかった。

ルッキーニ「ええ！？ 剣を構えてるよ！？」

ペリーヌ「何を馬鹿な事を、普通の剣でネウロイを倒せる訳が――」

大神「――紫電一閃！」

カッと、閃光が走り、ネウロイのコアを大神の太刀が確かに捉え、真っ二つにした。

ネウロイは崩壊を始め、ウィッチ達は呆然とそれを見つめる。
ペリーヌ「嘘……ですわ」

エーリカ「ネウロイを……斬っちゃった」

シャーリー「こいつは……びっくりだな」

美緒「……」

リーネ「皆さん！」

芳佳「ネウロイは……ってあれ？　もう誰かが倒しちゃったんですか？」

ようやく到着し、一体誰が倒したんですか？　と問う宮藤の言葉に、それを見ていた者達は無言で光武を指差す事しか出来なかった。

それから数刻後、　ストライクウィッチーズ基地内執務室、　執務室内にはミーナ、　美緒　バルクホルン、　そして大神一郎の姿があった。

扉の外にはギュウギュウに詰めてウィッチ達が内部の様子を探ろうと躍起になっていた。

ミーナ「書状は受け取りました。　しかし、　私達としましても……」

大神「分かっています。　今回の件には自分も少しキナ臭さを感じます。　既に十分に機能している隊にいきなり自分が入っても……隊長になるというのは受けかねます」

ミーナ「ですが上の決定のようですし……何より先程の活躍を見ると……」

大神「いえ……あの、　ミーナ中佐、　階級はミーナ中佐の方が上なので敬語で無くとも……」

ミーナ「あ、　そ、　そうね。　しかし大神大尉のこれまでの戦歴や先程の戦闘を見るとタメ口と言うのも……」

バルクホルン「ウィッチはその特性上軍曹から階級がスタートするからな、　このような事も起こり得るだろうが……だがどうする、

このままミーナに隊長を続けて貰えるのはこちらとしても有り難い事だが、　これ以上上層部に目を付けられるのも避けたい所だぞ」

大神「何か言ってきたら自分が言い訳しましょう。ミーナ隊長の補佐官という事ならば文句は言われど処分とまでは行かないでしょう」

ミーナ「そうですね、では大神大尉にはバルクホルン大尉や坂本少佐のように私の補佐をして頂きます」

バルクホルン「よろしく頼む、正直、先程は驚かされたぞ」

大神「自分も無我夢中でした。よろしく願いますバルクホルン大尉」

美緒「……」

ミーナ「どうかしたの美緒？　そう言えば朝からそんな具合だったわね？」

大神「坂本さんですね、お話は伺っています、よろしく願います。」

美緒「うむ……私も色々話を聞いているぞ」

美緒は怪訝な目付きを大神に向ける。

大神「自分が……何かしたでしょうか？」

美緒「先日扶桑海軍の同僚から聞いた……帝国華撃団及び巴里華撃団を率いた大神大尉はその立場を良い事に風呂場に突入したり13股を掛けるトンデモない男だと言う噂をな」

大神「そ、そんな物は事実無根の噂話です！　自分は特定の女性とお付き合いもしていません！　それを13股など何かの間違いです！」

帝都や巴里に居る隊員達の耳に入ったら色々問題になりそうな発言であったが、大神は必死に坂本に身の潔白を証明しようとしている。

ミーナ「大神大尉……先に言っておきますが、ウィッチ達と必要以上に交流を持つのは控えてくださいね」

大神「ミーナ中佐まで、自分は決してそのような事は！」

ミーナ「違うんです、大神大尉の事を疑っているのではなく、この隊では必要以上に男性とウィッチが交流する事を――」

その時、 ドタドタ、 と音を立てて盗み聞きしようとしていたウ
イチ達が執務室にと雪崩れ込んで来た。

バルクホルン「こ、 コラお前達！ 何をやって――」

ルッキーニ「うわー！これがさっきの機械に乗ってた人！？ ねー
名前は！？」

大神「お、 大神一郎って言うんだ」

ルッキーニ「イチロー？ 変な名前えー！ イチロー！イチロー！」

大神「なんかデジャヴだな……」

エーリカ「びっくりしたよーネウロイを斬るなんて」

シャーリー「そうだけ、 一体どうやったんだ？」

芳佳「あ、 あの私宮藤芳佳って言います！ 同じ扶桑の出身です
！ よろしく願います！」

一斉に大神を取り囲むウイチ達を見て、 ミーナは静かに頭を抱
えた。

次回予告

バルクホルン「我が祖国はネウロイに蹂躪され炎の中に没した。

もう私には戦う事以外何もない。 たった一人になっても……だが
……あの男が来てから…… 次回『君、 死にたもう事なかれ』」

第二話「君死にたもう事なかれ」(前書き)

ストパン×サクラ大戦SS

第二話「君死にたもう事なかれ」

第二話「君死にたもう事なかれ」

私、宮藤芳佳がブリタニアに来てから更に数日が過ぎました。

なんと驚いた事に新しい隊員さんは男の方です。

坂本さんは警戒するように皆さんに言っていました、そんなに悪い人には見えませんでした。

早くもルッキーニちゃんは打ち解けているようです。

私も……大神大尉がどうして戦い続けているのか聞いてみたいのですが……

ルッキーニ「ネバネバーネバネバ〜ねえイチロー、扶桑の人は本当にこれをおいしいって食べるの？」

大神「ああ、納豆は美味しいし日持ちもいいから好んで食べる人は結構多いんじゃないかな？」

ペリーヌ「こんな腐った豆なんて、食べられた物ではありませんわ！」

朝食の時間、大神の隣にはルッキーニだけが座り、後のウィッチ達は微妙に距離を取って朝御飯を取っている。

芳佳「でも納豆は体にいいし、坂本さんも好きだって言っていました」

ペリーヌ「さ、坂本さんですって!？」

ルッキーニへのおかわりを持って来た芳佳が会話に割って入る。

ペリーヌとの軽い言い争いをしている芳佳からルッキーニの分のおかわりを受け取り配膳してやる大神。

大神「(しかし……女性だけの部隊というのも慣れたつもりだったが……今回は何故か警戒されているような……)」

ルッキーニと仲良くしている現在も常に警戒されているような目線

を感じるし、ここに来て数日がたったがまだ隊員達とろくに会話していない状態だ。

大神「（俺が入ったせいで隊の士気が下がっては困る……ある程度は仲良くならないとな）」

大神は帝都、巴里での生活を思い返す、着任した当初は隊員達とも仲良くなれず空回りする事もあった。だが最後には皆で力を合わせて危機を乗り越えて来たのだった。このストライクウィッチーズでも皆と力を合わせてやっていこう。そう決意する大神であった。

大神「なあルッキーニ、俺何か悪い事したかな？」
ルッキーニ「うじゅ？」

朝食を終え、皆各自に訓練や整備に明け暮れている時間である。

大神はルッキーニと整備に向う途中の通路で、訓練飛行を行うバルクホルンとエーリカを見上げてそう呟いた。

大神「どうしてか分からないけど、どうやら俺は皆から警戒されているみたいなんだ」

ルッキーニ「……んーとね、んーと」

ルッキーニは何かを知っているようであったが、中々話だそうとしない。その様子を見て、大神は笑顔を浮かべてルッキーニを撫でてやる。

大神「いや、いいんだ。いきなり男の俺が入って来たら戸惑のは当たり前だよな。無理に言わなくていいよ」

ルッキーニ「あのね、あたしが言ったって言うのは内緒にしてね？」

大神「ルッキーニ？」

ルッキーニ「実はね……ミーナ中佐がイチローの来た日の夜にイチローに内緒で皆を集めたの、そこでね「大神大尉とも他の男性隊員と同じように必要以上に接触しては駄目だ」って言ったの」

バルクホルンとエーリカが幾つもの複雑な動きを重ねて訓練を続けている。大神の目には多少バルクホルンが遅れているように見える。

た。

大神「そうか、この隊では元々ウィッチと男性の接触は禁じられていたのか。それじゃあ仕方のない事だね」

ルッキーニ「仕方くないよ！だってイチローはちゃんとしたストライクウィッチーズの一員だもん！皆で仲良くした方が絶対にいいよ！」

自分の為に声を荒げてくれるルッキーニを嬉しく思い、また大神はルッキーニを撫でてやる。

大神「だからルッキーニは仲良くしてくれるのかい？」

ルッキーニ「うん！なんかお兄ちゃんみたいだし、優しいから！」

大神「ありがとうルッキーニ、嬉しいよ」

そう言って通路を歩いていると、ミーナと美緒が訓練飛行を渋い表情で見守っていた。

ミーナ「……遅れがちね」

美緒「完璧主義のバルクホルンらしくないな、次のシフトは外したほうがいいか」

ミーナ「エースが使えないのは少し不安ね、あら大神大尉」

ルッキーニと歩いていた大神を見つけてミーナが声を掛けて来る、

美緒は少々訝し気な表情で二人を見つめる。

大神「お疲れ様です。これから光武の整備に向かいます、バルクホルン大尉は……調子が悪いのでしょうか？」

美緒「わかるのか？……普段はああではないのだが」

ルッキーニ「ねーイチロー行こうよー！」

大神「ああ、そうだね。では、自分はこれで失礼します」

年齢は大神の方が上だが、階級ではミーナの方が上なので敬語でミーナ達に挨拶をしてから整備室にと向う。

美緒「……ルッキーニの奴、すっかり大神を気に入っているようだな」

ミーナ「そうね……一応接触は禁止だと伝えたのだけれどもね……」

美緒「うむ……バルクホルンの事、どうする？」

美緒は一拍置いてから本題にと戻る、ミーナは少し黙った後に思い当たるふしをあげる。

ミーナ「……宮藤さんが来てから、色々と思う所あるみたいなの」
美緒「宮藤に……？ うむ……組ませてみるか」

美緒の一言で、宮藤とバルクホルンは一時的にペアを組む事になった。

整備兵「大神大尉、もう休んでください。後は我々に」

大神「いや、いいんだ。光武整備のノウハウを伝えられるだけ伝えておきたいんだ」

整備兵「……ですが、先程ウィッチの皆さんが集まっていたようですが」

大神「女性だけの集まりに俺が入っても邪魔になるだけさ、それとも俺がいたら邪魔かい？」

整備兵「いえ！ そんな事はありません！」

整備兵は急いで否定する、リベリオン系の男性であつた彼はシゲシゲと大神を見つめている。

大神「どうかしたかい？」

整備兵「いえ……自分は、どうやら思い違いをしていたようです」
大神「ん？」

整備兵「自分や他の国の整備兵達は新しい隊員が男だと聞いて、内心やっかんでいました。しかし扶桑の整備兵達だけは大神大尉を悪く言っていなかったものでどんな方なのかと思っていましたが……下士官である自分にも威張るような事をせず整備まで手伝ってくれる。貴方になら安心してウィッチの方々を任せられます」

大神「任せるって……そんな大袈裟な」

大神は笑って整備用具を整備兵に渡した。

ルッキーニ「ねーイチロー！ なんで来ないのー？ ケーキ無くなっちゃうよー？」

芳佳「大神大尉の分も用意しているので早く来てくださーい」
その時、整備室までルッキーニと芳佳が大神を迎えに来た。

整備兵「後は大丈夫です、どうぞ遠慮なさらずに」

大神「そうか……すまない」

そう言つて、大神は整備室を後にした。いい上官だと口々に呟く整備兵を見てどこか誇らしげな扶桑の整備兵達であつた。

イチローの分のケーキまで食べちゃおーと残してルッキーニは元来た通路を走つて行つた。

芳佳と大神だけが二人で宿舎内のオープンカフェにと向う。

芳佳「あの……大神大尉」

大神「なんだい？ 後階級はいいよ」

芳佳「はい！ 大神さん……大神さんは、今まで帝都と巴里で戦つて来たんですよ？」

大神「ああ、そうだよ。どうかしたのかい？」

芳佳はモジモジと何かを喋ろうとしてはつつかえている、そして意を決したのか身構えて大神に言葉をぶつけた。

芳佳「大神さんは……どうして戦っているんですか？」

大神「どうして戦っているのか……か。守りたい物や、人が居るからかな」

芳佳「守りたい……からですか？」

芳佳は自身が戦う理由である「守りたい」という言葉が大神の口から出て来た事を嬉しく思った。

大神「ああ、尊敬する人達は皆信念を持って戦っている。俺も自分が出来る範囲で守って行きたいと思つてるんだ」

芳佳「でも、私怖いんです。いつか人を撃つ事になるんじゃないかって」

大神「……昔、心から尊敬していた人を撃たなければならない事があつた」

芳佳「……」

芳佳は大神の口から語られる言葉を真剣な表情で聞いている。

大神「戸惑い、迷って、躊躇して、結局俺は敵になってしまったその人を助ける事が出来なかった」

芳佳「大神さん……」

大神「人を撃たなくとも大切な物を守る、芳佳君はその信念を持って戦うのがいいかもしれない。でも、決めるのは君自身だ」

芳佳「……はい」

大神「大丈夫だ、俺がこの部隊に居る限り絶対に人を撃たせたりはしない」

芳佳「大神さん……ありがとうございます！」

大神の言葉に芳佳は笑顔を浮かべた、まだ迷いはあるようであったが、幾分か芳佳の気持ちは楽になったようであった。

芳佳「じゃあ、私この後リーネちゃんと坂本さんとバルクホルンさんと訓練があるので」

芳佳は大神をオープンカフェまで大神を送ると訓練にと向う。

芳佳「大神さん！」

芳佳の声に大神が振り向くと芳佳は笑顔でこちらを向いていた。

芳佳「私、まだ……怖いですけど……頑張ってみます！皆を守れるように！」

大神「ああ、頑張ってね、芳佳君」

笑顔で芳佳を送り出した大神を遠巻きから見つめるカールスラントの二人。

エーリカ「ふうーん、やるねえ大神大尉も」

ミーナ「……どうしたものかしら」

エーリカ「もうさ、いっその事皆で大神大尉と仲良くなっちゃえばいいじゃん。悪い人ではなさそうだし」

ミーナ「そういう訳にもいきません！他の者達に示しがつかなくなるわ」

ミーナはそう言い残してオープンカフェの席を立った。

エーリカ「どこ行くのー？」

ミーナ「宮藤さん達の訓練を見に行ってくるわ」

エーリカは溜め息をついて大神にじゃれるルッキーニを遠巻きから眺めた。

エーリカ「ミーナもトゥルーデも肩肘張らずにああなればいいのに」
そう呟くと、エーリカ自身も立ち上がって大神達の席にと親睦を深めに向かった。

美緒「ネウロイか!?」

空中での訓練中に下士官が出したプレートにはネウロイの襲来を伝える記載がされていた。

美緒「宮藤! リーネ! バルクホルン! 私達はこのまま向うぞ!」

「了解」

未だバルクホルンの動きに違和感が残る物の、今はそんな事は言っていない。

ミーナ「美緒!」

美緒「ミーナ! それにペリーヌもか、よし続け!」
訓練を見学していたミーナとペリーヌがいち早く美緒達に続く。

大神「ネウロイの襲来か!」

後から席にやって来たエーリカとも打ち解けエーリカとルッキーニと共にお茶をしている大神達にネウロイ襲撃を伝える連絡が来た。

大神「よし! 皆は待機していてくれ!」

ルッキーニ「イチロー一人で行くの!? 危ないよ! あたしも行く!」

エーリカ「そーそ、シャーリーはエイラとサーニヤはもしもの為に待機してて!」

シャーリー「お、おう!」

掛けていく大神とそれに続くルッキーニとエーリカをどこか淋しげな表情で見つめるシャーリー。

エイラ「……寂しいんだろ」

シャーリー「……別に!」

エイラの言葉にシャーリーはそっぽを向いてそう言った。

整備兵「大神大尉！ 準備は出来ています！」

大神「ありがとう！ ルッキーニ！ エーリカ君！ 準備はいいか！？」

素早く光武に乗り込み各兵装を起動させる、 前回の出撃では突貫工事で装着されていた魔道エンジン搭載のウイングであったが、今回は万全の整備がなされる程度の時間を飛行する事を可能にしていた。

ルッキーニ「おっけー！」

エーリカ「いいよ！」

大神「よし！ じゃあー」

ルッキーニ「あ、 待ってイチロー！」

出撃しようとしていた大神をルッキーニがインカムを通して制止する、 何事かと思いルッキーニの方を見る大神の乗る光武F2

ルッキーニ「イチローがさ、 帝都や巴里でやってたって言う出撃のやつやってよ！ あれやりたい！」

大神「ああ！ じゃあ……ストライクウィッチーズ、 出撃！」

ルッキーニ「了解い♪」

エーリカ「えー何それー次は私もやる！」

そう言って、 三人は出撃して行った。 大神の光武を中心にし、

挟むようにエーリカとルッキーニが飛んで行く。

大神「坂本さん達が戦っているポイントまで一気に行く、 周りにネウロイの気配は無いか？」

エーリカ「大丈夫、 坂本少佐達の近くにいる一匹だけだよ！」

最大戦速で坂本達の元に向う三人、 一方で坂本達は苦戦をしいられていた。

バルクホルンは自身のスタンドプレイによって負傷していた、 戦鬨の最中宮藤はバルクホルンを治癒しに向う。

バルクホルン「私はいい……敵を撃て！」

芳佳「嫌です！ 必ず助けます！ 私に出来る事を……人を撃たず

に人を助けるんです！」

叫ぶ芳佳に、バルクホルンは自身の妹の姿を重ねていた。以前のネウロイの襲撃によって負傷していた彼女の妹は未だに病床に居た。バルクホルンは宮藤に守る事が出来無かった自身の妹の影を重ね合わせ、結果ここ数日の不調に繋がっていた。

ペリーヌ「敵がこちらに気がついていますわ！……もう、持ちません！」

治癒を続ける芳佳を守っていたペリーヌは悲鳴を上げた、ネウロイの砲撃にペリーヌのシールドは限界を迎えていた。

大神「ペリーヌ君！ 離脱してくれ！ ルッキーニ君、エーリカ君は敵機を攻撃！」

ルッキーニ「ちょ、ちょっとイチロー！？」

大神は自身の光武F2をペリーヌの前に滑り込ませ、三人の盾になった。

ペリーヌ「無茶ですわ！ いくら霊子甲冑とはいえ長くは持ちませんわ！」

芳佳「大神さん！」

大神「芳佳君！ 俺は大丈夫だ！ 今バルクホルン大尉を守れるのは君だけだ！」

芳佳「は、はい！」

芳佳は大神の言葉で更に治癒に集中する、大神の元には更に激しく砲撃が飛来する。

大神「クッ……！」

ルッキーニ「イチロー！」

特大のレーザーが飛来する直前、ルッキーニは固有魔法である多重シールドを展開して光武の前に立った。

ルッキーニ「うじゅじゅ……やばい……」

複数のシールドが一枚一枚剥がされて行く。ルッキーニの言葉には焦りがにじみ出ていた。

バルクホルン「そうだ……私も……今度こそ守って見せる！」

芳佳「バルクホルンさん!?!」

治療が完璧に行われる前に、バルクホルンは立ち上がり、銃を取った。

芳佳「バルクホルンさん! まだ無理です!」

バルクホルン「もう……もう絶対にやらせはしない!」

そう言って、バルクホルンはネウロイにと突撃して行った。

その凄まじさは鬼気迫る物があり、激しい猛攻で一氣にネウロイのコアを撃ち抜いてしまった。

結果的に、ネウロイを撃破する事が出来たが彼女はスタンドプレイで自身の身を危機に晒してしまった。

ミーナはその事を律する為に、ネウロイを撃破してたたずむバルクホルンの頬を平手で打った。

バルクホルン「……すまない、私達はチームだったんだよな」

ミーナに抱きしめられながらバルクホルンはそう静かに呟いた。

ルッキーニ「もーイチロー! 無茶し過ぎだよ!」

大神「はは……すまない、ついね」

芳佳「あ、あの大神さん! 本当に、本当にありがとうございます

ました!」

大神「ああ、芳佳君、君がバルクホルン大尉を守ったんだ。胸を張って良い事だよ」

ルッキーニ「にひひ、芳佳に張る胸なんてないけどねー」

芳佳「ちょ、ちょっとルッキーニちゃん!?!」

皆のインカムにも彼女達のじやれ合いは聞こえて来ていたが、ミーナの言葉もあったのでその輪に入っていないものか戸惑っていた。

ルッキーニ「あ、そうだ! イチロー! ネウロイに勝ったんだからあれやろうあれ!」

大神「そうだね……よし、それじゃあ……勝利のポーズ!」

ルッキーニ「決めえ!」

ルッキーニと大神だけがポーズを取り一瞬の沈黙が辺りを支配する。エーリカ「ぷっ……あはは! 何それー変なのー」

ルッキーニ「変じゃないよーカッコいいじゃん！ 皆も次からやろーよ」

ペリーヌ「お断りしますわ！」

その笑いで、皆自然と大神とルッキーニの元にと集まっていた。少したって、基地に帰還する最中にペリーヌとバルクホルンから短い個人回線での連絡があった。内容はどちらも同じ。

「今日はありがとう」

との事だった。

次回予告

シャーリー「超高速で飛来するネウロイ！ 私の出番だな！ 更に複数のネウロイも出た！？ 話が違うぞ！？ 海水浴なんてやってる場合じゃない！ 次回『はやい・いっぱい・まじやばい！』
海水浴に浪漫の嵐！」

第三話「はい・いっぱい・まじやばい」(前書き)

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦

第三話「はい・いっぱい・まじやばい」

三話「はい・いっぱい・まじやばい」

私、宮藤芳佳がブリタニアに来てから数週間が過ぎました。

新しい隊員である大神さんは戦う意味を、信念を教えてくださいました。

隊の皆も徐々に大神さんとの距離が埋まっているようです。

でも、まだまだ皆警戒しているようです……

そんな中、坂本さんから海上訓練の命令がありました。

大神「（内心……思っていたがやはりまだ慣れないな）」

廊下で走りまわるルッキニの姿を見て大神は内心ドギマギする。

ウィッチというその特性上、仕方のない事なのだが、彼女達の格好には大神もかなり面食らっていた。

大神「（話には聞いていたが……『ズボン』と言うからにはショー
トパンツや短パンのような物だと思っていたのに……あれじゃまさ
に……）」

ウィッチをよく知らない降魔部隊出身の大神は彼女達の常識、『ズボン』の形状にはかなり驚いていた。大神から見ればどう見てもパンツである。ルッキニは縞パンを丸出しにして廊下を走っている。しかしあれは『ズボン』だ。

大神「（だが……彼女達はどうか……恥ずかしがる事などなく、
当たり前のようにパン……ズボンを穿いている……俺がこれに反応
しているようでは駄目だ！　しかし……）」

「優秀なウィッチ程容姿に恵まれやすい」という調査結果があるように、各国のエース級が集まったこの「ストライクウィッチーズ」はかなり可愛い子が集まっている。表向きは大衆演劇を演じていた帝国華撃団やショーを演じていた巴里華撃団と言った容姿に恵ま

れた女性と多く接して来た大神でも彼女達の可愛さは目を見張る物があった。そんな彼女達が『ズボン』を丸出しにしている。

それを見て平常心でいられる男が居るであろうか。

大神「（加山が『ウィッチ部隊なんて眼福じゃないか』と言っていたのはこれの事だったのか……ここ数週間気にしないようにしていたが……どうしたものか）」

溜め息を付いてから、大神はこのままではいけないと言わんばかりにビシッと自分の雑念を振り払うかのように姿勢をただした。

その姿を柱の陰から見つめる色素の薄い髪を持った少女の瞳。大神はそれに気がついて声を掛ける。

大神「サーニヤ君……だよ？　どうかしたのかい？」

サーニヤ「……」

サーニヤは話し掛けられビクッと反応すると、数秒固まってすぐに逃げて行ってしまった。

大神「……なんだろう、やはりまだ警戒されているのかな？」

彼女はズボンの上に黒いタイツを穿いているのか、それともあの黒いタイツがズボンなんだろうか。そんな雑念塗れでサーニヤの後ろ姿を見送った大神。その直後強い殺気じみた視線をすぐ後ろに感じる。

大神「え、エイラ君!？」

エイラ「……サーニヤに何をしたンダ？」

大神「な、何もしていないよ。今も話掛けたら逃げられてしまっ……」

エイラ「……サーニヤの事をやらしい目で見ていたんじゃないノカ!？」

大神「そんな事ないよ、誤解だ」

エイラ「……フン!」

突然現れては大神を問い詰めたエイラ、サーニヤが逃げて行った方に向かって歩き出し始めた。

ルッキーニ「あっ!　居た!　おーいイチロー!」

大神「あれ、ルッキーニどうしたんだい？」

先程走りまわっていたのはどうやら大神を探していたからだったようだ。

ルッキーニ「んとね、坂本少佐が言ってたんだけどね。明日芳佳とリーネが海上訓練するんだって！」

大神「海上訓練？ そんな訓練もあるのかい？」

自身の海軍士官学校時代の訓練を思い出す大神、しかしルッキーニは何故かとても楽しそうだ。

ルッキーニ「うん！ だからね！ 明日は海水浴だよ！」

大神「成程ね、訓練が関係ないルッキーニは泳ぎに行けるな」

ルッキーニ「うん！ 一緒に遊ぼうね！ あ、後ね一緒にお風呂行こ！」

大神「……何だってルッキーニ？」

ルッキーニの口から出た衝撃の言葉を受け止められず、大神はもう一度聞き返した。

ルッキーニ「だからあ、丁度お風呂入ろうと思ってたから一緒に行こって」

大神「（アイリスやコクリコには無かったパターンだ……そんな純粹な瞳で……）」

純粹な気持ちで大神を誘っているルッキーニ、帝国華撃団のアイリスや巴里華撃団のコクリコと年も近いが変に大人ぶっていないと言うか、いい意味で年相応な少女であった。

大神「さ、流石に男と女で一緒に入るのはまずいだろルッキーニ？」

ルッキーニ「えー？ シャーリーも誘って皆で入ろうよ」

大神「シャ、シャーロット君もかい！？ い、いや俺は遠慮しておくよ！」

ルッキーニとならばまだギリギリ何も問題は起きないだろうが、シャーリーも一緒となれば大問題である、大神の強い精神力を持つてしても間違いが起こってしまう可能性もある。大神はルッキ

ーニからの誘いを全力で断った。

ルッキーニ「ちえーじゃあシャーリーと入ってこよ！」

そう残して、ルッキーニは残念そうな面持ちで帰っていった。

流石にただでさえ警戒されている中でこれ以上警戒されるような事をする訳にはいかない。

その後、ミーナの居る執務室に書類を届け一段落してから大神は部屋に戻ろうと宿舎を歩く。その時であった。大神一郎の「持病」とも言える悪癖が発動したのは。

大神「（ん？　ここが大浴場か）」

これまで、何か問題が起きては困ると自主的に整備兵達が使う別宿舎のシャワールームを使っていた大神は、初めてウィッチ達が使っている大浴場の前を通り掛かった。

その時、大神を「あの感覚」が襲う。

大神「（こ、これは……この感覚は間違いない……『アレ』が来たのか……!）」

帝都や巴里で幾度と無く大神を苦しませた持病。風呂場を前にすると彼はその病気に悩まされていた。

大神「くっ……体が勝手に！」

吸い込まれるように大浴場内に入って行く大神であった。

その数分前。大浴場内

ルッキーニ「でねーイチローと一緒に入ろうって言ったのに来てくねなかったんだよー」

シャーリー「……あのなルッキーニ、それは当たり前だ」

ルッキーニの言葉に半場呆れながら、まだ子供なルッキーニにそれはイケナイ事なのだと教え込もうとする母親代わりであり親友でもあるシャーリー。

ルッキーニ「えーなんで!？」

シャーリー「って言うか私もその場に呼ぶつもりだったのかよ！」

ルッキーニ「いいじゃん！シャーリーいつもリーネや芳佳みたいに隠さないでみんなに見せてるじゃん！」

シャーリー「それは女同士だからだ！ 大尉は男で私達は女だろ？
男と女は一緒に風呂に入らないんだ！」

ルッキーニを諭すように、湯船から立ち上がって諭すシャーリー。
ルッキーニはえーと納得の行かない表情だ。その時、大浴場の扉が音を立てて開かれた。

ルッキーニ「あ、イチロー！ やっぱり一緒に入るの！？ 早く服脱いできなよー」

シャーリー「……」

大神「い、いやこれは体が…勝手に……」
もはや伝統芸能とも言える大神の行動にルッキーニは純粋に喜んで彼を向かい入れようとする。しかし。

シャーリー「は、早く出て行けー！」

大神「す、すまないシャーロット君！」

シャーリーは聞いた事もない大声を出して大神を追い払った。

その数分後、大浴場前で先程の無礼を謝ろうと大神はルッキーニ達が上がるのを待っていた。

大神「はあ……本当にこの癖は直さなければいけないな……」

ルッキーニ「あ、イチローどうしたの正座して」

大神「あ、いや……その、シャーロット君、さっきは本当にすまなかった」

俯いているシャーリーの表情を伺う事は出来ないが、とにかく謝らなくてはと大神は頭を下げた。すると。

シャーリー「あ、あっはは！ 全く無茶苦茶するなあ大神大尉は！
あたし達以外だったら大騒ぎになってたぜ？」

バンバンと大神の背中を叩いて何事もなかったように振る舞ってくれた。

大神「本当にすまなかった……」

シャーリー「まあいいって事よ！」

ルッキーニ「ねー流石シャーリーでしょー！？ 全部見られても全

然気にしないもんね？ だから次も一緒に……シャーリー？」

ルッキーニの言葉に引っ掛かる箇所があったのか、大神の背中を叩いていた手がピタリと止まる。

シャーリー「あ、あはは……ぜ、全部……大神大尉に」

顔を真っ赤にして数秒固まった後、シャーリーは物凄いスピードで走り去って行った。

ルッキーニ「どうしたんだろうシャーリー、いつもと全然違う」

大神「ま、まずい事になってしまった」

大神はなんとか今日の内に謝っておきたいとルッキーニに懇願して一緒にシャーリーを探す事にした。

ルッキーニ「んーストライカーユニットの所だと思ったけど違うかい」

シャーリーを探して周囲を探索するが、シャーリーの姿は見えなかった。

大神「これがシャーロット君のストライカーユニットか」

ルッキーニ「そうだよーシャーリーは音速の壁を超えられるようにいつも改造してるんだよ！」

いつも愛用の魔道エンジン「マーリン」とストライカーユニットを改造しているシャーリー、それは彼女の音速の壁を超えるという夢があつての事だった。

ルッキーニはシャーリーのストライカーユニットの上で遊んでいる。

大神「ル、ルッキーニ！ 危ない！」

ルッキーニ「うわわわ、うにゃあ！」

ガシャン！ と大きな音を立てて転倒するルッキーニ。一緒にシャーリーのストライカーユニットも倒してしまった。

大神「大丈夫かいルッキーニ？」

ルッキーニ「いてて……うにゃー！！」

大神に打ち抱えて貰いなんとか大怪我はま逃れた物の、シャーリーのストライカーユニットを壊してしまった。

ルッキーニ「う、うわぁどうしようイチロー！ 早く直さないと

！」

大神「直せるのかい!？」

ルッキーニ「ここをこうやって……ええとお……んとお……」

大神「正直に言った方がいいよルッキーニ、このまま適当に直して出撃させたらシャーリーの命にかかわる事故になってしまうかもしれない」

なんとか直そうとするルッキーニを見て大神は正直に言うように嗜める。

ルッキーニ「うじゅ……どうしよ」

大神「明日、正直に言おう。俺も一緒に謝りに行くから」

ルッキーニ「うん……」

ルッキーニは泣き出しそうな表情でストライカーユニットを形だけ整備して元に戻した。

次の日に海上訓練を控えた日の夜は各々複雑な気持ちで床に就いたのであった。

次の日、芳佳とリーネの海上訓練が行われている最中、一人ポツンと体育座りをして俯いたり空を見上げたりと挙動不審なシャーリー。

大神「(ま、まずい……なんとかして謝りに行かなくては……)」

ルッキーニ「(い、イチローがまず行ってよ!)」

大神「(そんな!一緒に行くこうルッキーニ!)」

ルッキーニ「(だってなんか知らないけどシャーリーがああなったのはイチローのせいみたいじゃん!まずイチローが謝って!その後あたし行くから!)」

二人は小声で相談する、その姿を不信に見ている他のウィッチ達。バルクホルン「うむ……シャーリーが大人しいと思ったら、何かあったのか?」

エーリカ「一郎が何か言ったのかなー?」

しゃがみ込むシャーリーを見てバルクホルンがエーリカに声を掛け

る。

エーリカは犬かきをして海面から顔だけ出して呟いた。

バルクホルン「……待て、何故大神を下の名前で呼ぶ？」

エーリカ「ん？ 別にいいじゃん」

先日仲良くなってからエーリカがやけに大神と一緒に居る所を目撃していたバルクホルンは内心氣にくわない気持ちでエーリカに尋ねるが軽く切り替えされる。

シャーリー「……ん、何かが太陽を横切った……？ ……あれは」
空を見上げていたシャーリーは太陽を横切った物体に見覚えがあった。

大神「よ、よし。俺が行こう！」

ルッキーニ「頑張ってイチロー！」

立ち上がってシャーリーの元に向かおうとするが、通信機の音が大神の歩を遮る。

美緒「何！ 高高度から超高速で接近するネウロイだど！？」
ダー網を掻い潜ったのか！？」

その言葉に、真っ先に反応したのがシャーリーであった。一番に走り出してストライカーユニットの格納庫にと向う。

大神「まずい！ 待つんだシャーロット君！」

ストライカーユニットが壊れている事を知らないシャーリーは一番に出撃しようと物凄いスピードで大神から離れて行く。

ルッキーニ「あわわ……」

大神「ルッキーニ！ 正直に皆に言うんだ！ 俺はシャーロット君を追いかける！」

ルッキーニ「う、うん……」

皆がまだ自体を把握していない内に大神はかけ出して行った。

ペリーヌ「な、何があったんですの？」

バルクホルン「それよりネウロイだ！ 皆早く向うぞ！」

ルッキーニ「あ、あのね……」

ミーナ「どうかしたの？ ルッキーニさん」

ルッキーニは申し訳なそうに、基地に向う皆に事実を告げ始めた。大神「待つんだ！ 出撃しては駄目だシャーロット君！」

大神が格納庫に着いた時には既にシャーロットはネウロイに向けて出撃して行った所であった。

大神「くっ……まづい！ 早く俺の光武を！」

急いで戦闘服に着替え、大神は自身の光武を起動し大急ぎでシャーリーの後を追いかけた。

ミーナ「シャーリーさん！ シャーリーさん！ すぐに戻って！ ……駄目ね。 繋がらないわ」

ルッキーニ「うう……シャーリー……」

ウィッチ達はシャーリーや大神が出た少し後に基地に到着して簡易な指揮所を作って対応に追われていた。

美緒「しかし……どういう事だ？ このネウロイは何処に向かっている？」

基地から大きく外れて通常のネウロイとは異なる動きをしていた。

ミーナ「そうね……ただ通過して行くだけなのかしら……？」

通信兵「報告します！」

美緒「どうした！ 何があった」

通信兵の緊迫した声が通信機に響く、その声がただ事で無い事を物語っていた。

通信兵「ネウロイです！ 先程のネウロイとは別物です！ 数は三！ かなりの大型です！」

美緒「何！ 別のネウロイ！？ 三匹もだと！？」

ミーナ「ネウロイが組織的な行動をしている……？ 先日 of 匣を使

ったネウロイといい、何かがおかしいわ！」

バルクホルン「今は考えるより迎撃だ！ 皆水着から着替えろ！ ネウロイは待ってくれないぞ！」

訓練でヘトヘトの芳佳とリーネの着替えを急かすバルクホルン、基地は異様な雰囲気包まれていた。

シャーリー「(なんだ……？ 加速が止まらない……！ 凄い！

これなら音速の壁だって!」

ルッキーニの適当な整備が奇跡を産んでいた。偶然が偶然を呼び、シャーリーの加速は音速の壁を突破しようとしていた。

大神「シャー……君……聞こ……止ま……」

大神の途切れ途切れの通信は電波の影響からかシャーリーには届かない、シャーリーはグングン加速を続けてネウロイに迫る。

大神「シャーロット君! 止まるんだ! 君のストライカーユニットは!」

シャーリー「な、なんだ大神大尉か!? なんで――」

大神「シャーロット君! 前! 前だ!」

シャーリー「うっうわっ!」

目前までネウロイに迫っていたシャーリーは瞬時にシールドを展開してネウロイに追突した。そのままの勢いで貫通し、加速を続けた彼女はついに音速を突破したのだった。

シャーリー「これが……音速かあ……腹減ったあ」

音速を突破した反動でシャーリーの水着がボロボロに破けてしまっていた。音速を超えた快感で彼女はゆっくりと空に浮かぶ。

大神「シャーロット君! まずい! 落ちているぞ! 早く光武に!」

大神の緊迫した声でシャーリーは平常心を取り戻す、そして自分を冷静に見る事が出来た。

シャーリー「……だ、駄目だ! 大神大尉! 来るな!」

大神「何を言っているんだ! 落ちているんだぞ! ストライカーユニットも機能していないだろう!」

大神は空中でコクピットハッチを開ける、本来一人乗りの光武に二人も乗るスペースは無いがこの際そんな事を言っている場合ではなかった。

シャーリー「う、う……じゃ、じゃあ! 目を瞑ってくれ!」

大神「目、目をかい!? 何故――」

シャーリー「いいから! 早く!」

そう言って、回収される事を祈ってシャーリーはストライカーユニットを放棄し、光武に乗り移った。

大神「いいい!? あ……あのシャーロット……君!?」

シャーリー「な、何も言わないでくれ……音速を超えた衝撃で……」

大神「と、とにかくこれを羽織っていてくれ!」

大神が自身の戦闘服の上着を脱いでシャーリーに渡す、無いよりはマシであったが狭い光武内では色々と感触が直に伝わって来る。

大神「基地までの辛抱だから……我慢してくれシャーロット君」

シャーリー「ああ……あの大神大尉」

ミーナ「大神大尉! 応答してください!」

シャーリーが何か言いたげであったが、それをミーナの緊迫した声が遮った。

大神「こちら大神機です! シャーロット中尉を無事保護しました!

！なおネウロイはシャーロット中尉が撃破しました!」

ミーナ「緊急事態です! そのネウロイは囿よ! 新たなネウロイが三匹! かなり大型のネウロイよ! ポイントをリーダーに転送します!」

大神「なんですって! 了解しました! すぐに向かいます!」

通信が終わり、指示されたポイントに向かっていく大神。

大神「すまないシャーロット君、狭い光武内だがもう少しの我慢だ」

シャーリー「ああ。分かった……あ、あの大神大尉」

大神「なんだいシャーロット君」

シャーリー「シャーリーだ」

大神「ん?」

シャーリー「皆は私を愛称のシャーリーって呼ぶんだ。だから……

……シャーリーって呼んでくれ」

大神は出来るだけ前だけを見つめるようにしていたので前のスペースに入っているシャーリーの表情を伺う事が出来なかったが、ゆ

つくりとかなずいてシャーリーの名前を呼んだ。

大神「ありがとうシャーリー、俺も名前で呼んでくれていいよ」
シャーリー「……分かった、今日は助けてくれてありがとう。」

昨日の事は皆に黙っててやるよ一郎」

狭い光武の中で二人はなんとも言えない雰囲気でネウロイの居るポイントにと飛行して行った。

ミーナ「ネウロイを確認したわ、皆、行くわよ！」

「了解！」

ウィッチ達は三匹のネウロイは視界に捉えて各自攻撃行動に移る。

キューブ型のネウロイが三匹ウィッチ達の眼前まで迫っており、切り込み役で初弾を打ち込んだルッキーニの攻撃を受ける瞬間に、夥しい数に分離した。

バルクホルン「な、何！」

エイラ「ぶ、分裂したノカ!？」

芳佳「凄い数! 一体何匹に……!」

サーニャの能力を転用して送られて来るリアルタイムの情報は大神の乗る光武や各地の指揮所に届けられている。

大神「なんだ……この数は! レーダーが真っ白で敵の数が分からない! 観測手!」

観測手「なんて数だ! 空がよく見えません! 敵が七分で空の青が三! 敵が七分に青が三です!」

多少距離の離れた所からウィッチの戦闘を記録している観測手に問い合わせるが観測手も混乱していて明瞭な答えが返って来ない。

シャーリー「どういう事だ? 何が起こっているんだ!？」

大神「仲間を呼んだのか、大型のネウロイが創りだした分身か……分からないが早くポイントに向かわなくては!」

更にスピードを上げてポイントに向う大神にシャーリーが寄り添う。

大神「シャ、シャーリー!？」

シャーリー「い、いいから! 神経を集中させてくれ」

大神「一体何を!？」

シャーリー「一郎達が霊力って呼んでる物も、私達が魔力って呼んでる物も元は同じ物なんだろう？　だったら私に同調してくれ！」

大神「あ、ああ！」

シャーリーが魔力を展開して行く。ヒョコっと、シャーリーの頭から使い魔であるウサギの耳が出てくる。

シャーリー「飛ばすぜ！　一郎！」

彼女の固有魔法である「高速」を展開し、光武が通常では出せないスピードでポイントに向かって行った。

ストライクウィッチーズが分離型ネウロイとの激戦を繰り広げ始める数分前。

場所はガリアの重要都市巴里。

「どおいう事ですかあ！」

大神の同期で同じく帝国華撃団に所属する加山は複数の女性達に囲まれていた。

加山「だ、だから説明した通り。大神は特命を受けて帝都では無くブリタニアに向かったんだ」

「そんなあゝ私てつきり帝都に戻るものだと思って色々手紙に書いたのにいゝ」

「そんな事を言っている場合ではない！　どいう事だ？　確かあそこはネウロイとの激戦区だった筈だろう？　何故降魔部隊を率いた隊長がブリタニアに行っているんだ？」

「じゃあじゃあ！　まだイチローはこの西部戦線に居るんだよね！　？　会いに行こうと思えば行ける距離だよ！」

小さな少女のその一言を聞いて皆はピタッと動きを止める。

「そうですよ！　仲間として増援を送るべきです！　隊長代理として、私が行きますね！」

「何を行っているのだ！　隊長代理が隊を留守にしてどうするのだ！　わ、私がブルーメール家を代表して支援物資と共にそのストライクウィッチーズとやらの部隊に――」

「ずるいです！ 自分が大神さんに会いたいただけじゃないですか！」
「な、何を言うか！ それを言ったら――」

加山を置き去りにし言い争いを始める少女達。 先程からこの調子なのでちっとも話が進まない。

「どうもキナ臭い話だな……あのお人好しがまた良からぬ事に巻き込まれてるんじゃないのか？」

一人雰囲気の違い女性に加山は詰め寄られた。 彼女も巴里華撃団の一員であるようだった。

「大神自身も怪しんでいたが、俺達軍人の身としては命令には従わざるを得ない所もあってね」

「やれやれ……何も起きなきゃいいが」

「心配ですか？ 大神さんの事」

その女性の分と加山の分のお茶を持って来た日本人の少女が、その女性にそう尋ねかけた。

「馬鹿言うんじゃないよ……だがあんな奴でも私達の隊長だった男だ。 そうそう簡単に死んで貰っちゃ困るさ」

「大変です！」

その時、シャノワールの一員である少女が顔色を変えて部屋に入ってくる。

「ドーバー海峡沖に巨大な反応あります！ 霊力反応ではないようです……！」

「ドーバー海峡……！？ 大神さんの居るブリタニアの目と鼻の先じゃないですか！」

修道服に身を包んだ少女はそう叫んで、一目散に作戦司令室に向かって走って行く、他の隊員達と加山もその後続いた。

「……正式に援軍要請があった訳じゃない。 第一、私達は降魔部隊だ。 ネウロイ退治はウィッチ達に任せればいい」

シャノワールを取り仕切っている支配人であり、巴里華撃団の総司令でもある女性は神妙な面持ちでモニターを見つめている。 モニターには物凄い数の反応が表示されている。

「でも！ この数は尋常ではありません。 増援に行かせてください！」

「……あんた達がムツシュに会いたいから、 そういうんじゃないんだね？」

「……正直に言ってしまえばその気持ちだってあります、 でも、 巴里からも近いドーバー海峡にこれ程の反応があったなら。 大神さんはこれを見逃すような事は絶対にしません！ 私は大神さんの代わりを預っている身です！ 大神さんなら絶対出撃します！」
修道服の少女は引かない、 総司令の女性はしばらく彼女を見つめた後に。

「だがどうするんだい？ ネウロイってのは空を飛んでるんだよ？」
「私の光武なら、 短時間の飛行ならば出来ます！」

そう言って、 彼女は確固たる意思を突きつけた。 後ろで聞いていた隊員達も諦めて彼女にこの場を託す事にした

「……色々と言いたい事はあるが、 仕方あるまい。 巴里は私達に任せて行って来るのだ隊長代理よ！」

「よし……それならば……メル、 シー！ リボルバーカノン照準合わせ！ 目標『大神一郎』」

「「ウィ、 オーナー！」」

修道服姿の少女は、いつもの天然な表情から一変し、真面目な面持ちで戦闘服にと着替え始めた。

大神「駄目だ！ これじゃあキリがない！」

エーリカ「撃墜数稼ぎには持って来いだけどね！」

バルクホルン「だがどうする！？ どうやら奴らは再生しているようだ……確認しただけで六百匹以上、 コアを見つけない事には……」

弾幕のようにネウロイの攻撃が展開される、ウィッチ達はなんとかシールドを張り、回避し、これをやり過ごしていたがそれにも限度があった。 徐々にだが、彼女達は消耗して行った。

大神「坂本さん！ コアは見えませんか！？」

美緒「駄目だ……！　せめて一匹分の……二百程の分離の中なら探せただろうが……この数では！」

大神「クッ……一気に殲滅しなければ駄目か！　誰か広範囲を攻撃出来る魔法を持っていないのか！？」

ミーナ「ペリーヌさんの電撃と……ハルトマン中尉の疾風ならばあるいは……でもこれまでの戦いで魔力を消費しているので威力は保証出来ないわ」

ミーナの声から事態がかなり深刻である事が伺われる、皆通話している間も攻撃の手を緩めていないが相手の再生能力の方が上回っているようだった。

ペリーヌ「でも……やらない訳にもいきませんわ！」

エーリカ「そうだね……皆一旦引いて！　ペリーヌ！　合わせて！　シュトゥルム！」

ペリーヌ「ええ！　トネール！」

ウィッチ達が引いた後に電撃と疾風が辺りを疾走する、多くのネウロイを撃破して辺りは爆炎に包まれる。

ルッキニー「いやったあ！　これなら！」

美緒「いや……まだだ！　コアは破壊されていない！　だが場所は特定出来た！　ハルトマン！　ペリーヌ！　もう一度私の指示する場所に！」

ルッキニーは歓声を上げたが、戦いはまだ終わってはいなかった。美緒は爆炎の中一点を突き刺し位置を二人に知らせる、しかし。エーリカ「ごめん坂本少佐……今の威力の半分以下しか出せそうにない」

ペリーヌ「私もですわ……」

美緒「クッ……それでは！」

それではコアの破壊に至らない。その言葉を飲み込み美緒は次の手段を考える。

大神「（クッ……『アレ』が使えれば……しかしアレは帝都や巴里

の皆の力を集約しなくては使えない……」

大神はギリッと歯を噛んだ、事態は刻一刻と悪くなっていく、ネウロイはドンドン再生を始めている。

ミーナ「一旦……撃退するのも視野にいれなくてはいけないわね」

美緒「何を言う！　ここでこいつらを逃したら……どれ程の被害が出るか！」

大神「だが……三つのコアを一気に破壊する手段がもう……」

サーニヤ「……何？」

その接近に気がついたのはサーニヤであった。自らの能力『魔導針』によって高速で接近する物体をいち早く察知した。

サーニヤ「何かが高速で接近しています……ネウロイではありませんん」

美緒「ネウロイではない！？　では援軍のウィッチか？　援軍の申請はしていないが……」

大神「あの弾頭は……！？」

大神は遠くに見えて来た弾頭に見覚えがあった。その弾頭は徐々に分解し。そして天使の羽が姿を表した。

ルッキーニ「は、羽！？」

リーネ「凄い……お話の中の天使みたい……」

大神「あ、あの機体は！」

エリカ「エリカ・フォンテーヌ！　行きまーす！」

天使の羽を広げ、ついに彼女はブリタニアの空に舞い上がった。

大神「え、エリカ君！？　どうしてここに！」

エリカ「大神さんのピンチとあらば、地球の裏側にだって出撃します！　それが巴里華撃団です！」

大神「エリカ君……ありがとう。本当に助かった。皆の回復を！」

エリカ「はい！　あ、でも大神さん、その前に……」

大神「ああ……巴里華撃団、出撃！」

エリカ「了解！」

ウィッチ達の飛ぶ空に大きく十字架が描かれた。その一帯を飛んでいたウィッチ達に聖なる光が降り注ぐ。

エーリカ「うわ凄い……力が戻ってくる！ 全開だよ！」

ペリーヌ「これなら行けますわ！」

エリカの回復によってウィッチ達に魔力が戻ってくる、エーリカとペリーヌは坂本の示したポイントに既に向かっている。

エーリカ「これで……」

ペリーヌ「決めますわ！」

先程以上の威力で二人の魔法は繰り出された。三匹の内、二匹のコアの破壊を坂本が確認したが最後の一匹が攻撃から逃れていた。美緒「一匹逃げている！ 誰か——」

美緒の言葉より早く反応していた機影、一気に加速して逃げたコアを持つネウロイに迫る。

エリカ「祈りなさい！」

エリカの光武は機銃を掃射し、ネウロイのコアを見事に打ち抜いて見せた。

ネウロイが崩壊して辺りがキラキラと輝いている。

大神「エリカ君……ありがとう。助かったよ」

エリカ「いえ……お役に立てて良かったです。それより！ 光武の中ですけどあれやりましょう！」

エリカは大神の元に飛んで来て恒例の『アレ』を急かす。

ルッキーニ「あ、そうだ！ 皆もやろー！」

ペリーヌ「だからやりませんわ！」

大神「勝利のポーズ！」

エリカ・ルッキーニ・エーリカ「決め！」

エリカの横ではルッキーニとエーリカが並んでポーズを取っていた。バルクホルン「ハ、ハルトマン！ お前まで何をしているんだ！」

エーリカ「いいじゃん、面白いし」

エリカ「うわーやっぱりこっちでもやってるんですね！」

大神「そうだ、皆紹介が遅れたね。この光武に乗っているのが

巴里華撃団のエリカ君だ」

エリカ「エリカ・フォンテーヌです！ 『巴里華撃団の』 大神さんがお世話になってます！」

何故か巴里華撃団を強調して挨拶するエリカ、しかし皆は再び光武でネウロイを撃破した事に驚いているようだった。

エリカの光武がそう長時間飛行出来ない事もあり、ひとまずは基地にと戻る事にするウィッチ達。基地が目と鼻の先にと迫った時、大神は自身がトンデモない事態に置かれている事に今更ながら気がついた。

シャーリー「なあ、一郎」

大神「なんだいシャーリー」

シャーリー「さっきの子は……巴里華撃団の子なんだよな？」

大神「ああ、そうだよ？」

シャーリー「じゃあ……まずいんじゃないのか？」

大神「何がだい？」

シャーリー「いや……この状況」

大神「……」

大神の顔を冷や汗が流れる。冷静にこの状況を見ると。狭い光武の中に半裸のシャーリー。状況を飲み込めていないウィッチの皆やましてエリカにこの状況を見られるのはどう考えてもよろしくない。

更に悪い事に、皆は既に基地に到着していて大神の光武の到着を外で待っている。

大神「こ、これは……どうしたものか」

基地の滑走路にと着陸したものの、どうしていいか分からず大神は光武から出る事が出来ない。

エリカ「大神さん？ 故障ですか？ 非常用で開けますよー？」

外部に付いている非常用のノズルを操作して光武を開けるエリカ。

大神「ま、待つんだエリカ君！ こ、これは――」

エリカ「もうちゃんと開くじゃないですか大神さん。何をやって

――

数秒後、固まったエリカを不信に思い次々光武の中を覗くウィッチ達。

その後の惨状は戦闘で疲れた大神を更に疲弊させる物となった。

正座させられている大神から少し離れた所で芳佳とリーネが持つて来てくれたバスタオルにくるまりながら。

「……責任とれよな」

シャーリーはそう小さく呟いたのだった。

次回予告

エリカ『大神さん酷いです！ 私と一夜を共にしたあの日々も全部遊びだったんですね！ それにしてもウィッチの皆さんは大胆ですねーパンツ丸出しながら私にはとても出来ないです！ え？ ウィッチの皆さんのパンツが無くなった！？ え、わ、私のもですか！？ 次回『スースーするの』 愛の御旗のもとに！』

第四話「スースーするの」(前書き)

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SSです！

第四話「スースーするの」

四話「スースーするの」

第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」の元に巴里華撃団から増援としてやって来た私はパパーとネウロイをやっつけて大神さんの本妻としての威厳を見せつけたんですがなんと大神さんはブリタニアでも新しい女の子を作っていました！

私、エリカ・フォンテーヌと大神さんの関係は海よりも深く空よりも高い。そう信じていたのに、結局大神さんは私の事を現地妻程度に考えていたんですね！ 酷い！

でもウィッチの皆さんはとっても良い人達でした！ 取りあえず今晚は一泊してから巴里に帰還したいと思います！

酷い目にあった。

ベッドに横たわっている大神は重たいまぶたをまだ開けずにいた。もうすぐ起床ラッパがなる時間だろうか。

昨日、あの時一番初めに光武を開けたエリカは中の様子を見るなり固まってしまい、ドンドンと他のウィッチ達が中を覗き始めた。狭い空間だったのでシャーリーは大神に抱きつくような格好で光武に乗っていた。勿論その格好はビリビリに破けほぼ跡形もなくなってしまうている水着の上に大神の戦闘服を羽織っているだけの物なのでかなり刺激的な格好だ。

大神が怪我をしているのではないかと心配してエリカの次に駆けつけた芳佳は中を見るなり顔を真っ赤にして騒ぎ始める。

芳佳「お、大神さん！ 戦闘中に一体何をしていたんですか？

と、とにかくバスタオル持って来ますから！」

ルッキーニ「わーシャーリーほぼ裸じゃん！ なんでそんな格好してるの？」

芳佳は中をチラッと覗いては同じく赤面しているリーネを連れてバ

スタオルを取りに向かった。　続いてルッキーニやペリーヌにエーリカ達が光武の中を覗く。

エーリカ「ひゅー一郎やるねー戦闘中でも余裕しゃくしゃくって訳ー？」

ペリーヌ「ひ、　ひ、　卑猥ですわ！　何を考えているんですの貴方は！」

美緒「噂は本当だったのか……私はお前を信じていたのだから」

大神「ち、　違います坂本さん！　これはネウロイを撃破したシャーリーが音速を超えた衝撃で――」

エイラ「昨日までシャーロットって呼んでたのに……深い仲になったノカ……」

大神「違うよエイラ君！　これはシャーリーがそう呼んでくれって！」

坂本やエイラまでその騒ぎに入った、　サーニヤは遠くから赤面して光武の中を眺めている。　騒ぎが更に大きくなった時バルクホルンは腕を組んで大神の前に立塞がった。

バルクホルン「お、　大神よ！　貴様は軍人として、　人間として恥ずかしくないのか！　戦闘中に……こ、　このような行為を！」

エーリカ「どのような行為？」

バルクホルン「だ、　だから……男女の……って関係ないだらろハルトマン！」

バスタオルを持って再び駆けつけた芳佳とリーネがシャーリーをバスタオルに包んで光武から出してやる、　ようやく光武から降りる事が出来た大神を待っていたのは正座地獄だった。

エーリカ「びい　ええええええ！　大神さん私の事は遊びだったんですね！　あの夜私をもて遊んだんですね！」

固まっていたエーリカが我に返るなり大声をあげて泣き出す、　しかもかなり誤解を招きそうな言葉まで添えて。

バルクホルン「あ、　あの夜とはなんだ大神！」

大神「エーリカ君何を言っているんだ！　話がドンドンおかしくなっ

ているぞ！」

エリカ「グス……グス……布団に入って……優しく声を掛けてくれて……その後私達は朝まで……——夢ですけど」

最後の一言は本当に小さく付け加える程度に言ったので皆の耳には勿論届いていない。

大神「エリカ君！ 最後！ 最後の一言が一番重要じゃないか！」

エーリカ「ふーんやっぱり巴里でやる事やってたんだねー」

エイラ「ここでもあわ良くばとか思ってたんだろ？ サーニャを見る目がやらしいと思ってたんだ！」

ジトツとした目で正座している大神を見つめるエーリカ、ここぞとばかりに捲くし立てるエイラとそれぞれの反応を見せているウィッチ達。

ルッキーニ「ねーねーペリーヌう」

ペリーヌ「なんですのこんな時に！」

ルッキーニ「さっきから何の話してるの？ イチローはエリカと布団に入って何をしたの？ リーネと芳佳に聞いたらペリーヌなら分かるんじゃないかって」

ペリーヌ「（何言ってくれてるんですのあの二人はー！）」

怒りと照れが織り交じった表示で芳佳とリーネの方を睨むが二人は顔を真っ赤にしてごめないとジェスチャーで伝えてくるばかりだ。ペリーヌ「そ、それはですね……エイラさんがよくご存知の筈だわ」

エイラ「お、お前ふざけるナヨー！」

ペリーヌの横に居たエイラはこの話には関わらないようにしようと、後退りしていたが逃げるのが若干遅かったようだ。

ルッキーニ「エイラあー」

エイラ「わ、わ、私は知らないゾ？ そういうのは誇りあるカールスラント軍人であるバルクホルン大尉殿に聞くんだ！」
バルクホルン「ん？ 私を呼んだか？」

大神にクドクドと説教をしていたバルクホルンの元にルッキーニが

歩いて行く、ペリーヌとエイラは一目散に逃げだした。

バルクホルン「どうしたのだルッキーニ、ふむふむ……ん？ ……

……ん？ だ、誰がそんな事を私に！ ……エイラ・イルマタル・ユートイライネン少尉は何処に行ったあ！」

ミーナ「皆さん、落ち着いてください！ お話はシャーリーさんに全て聞きました！」

隊長であるミーナがこの混乱を収束させる為に立ち上がった。

ミーナ「これは不可抗力の事故です、シャーリーさんはネウロイ撃破時に音速の壁を超えたそうです、その衝撃に水着とストライカーユニットが耐えられず自壊してしまった所を大神大尉に助けて貰ったとの事です」

ミーナの言葉に皆は自分達がとんでもない誤解をしていた事を知る。エリカ「な、なーんだ大神さん！ そうならそうと早く言ってくださいよー」

大神さん「俺は初めからそう言っていたよ……」

エイラ「ま、まあ誤解が解けてよかったじゃナイカ」

大神さん「……エイラ君何故俺の後ろに？」

エイラ「う、うるさい！ しばらく隠れさせてクレ！」

バルクホルンから逃げていたエイラは大神の後ろにと隠れていた。

ルッキーニ「ねえーミーナ隊長おー」

ミーナ「あら、どうしたのルッキーニさん、泣きそうな顔をして」

ルッキーニは涙目でミーナの元にやって来る。

ルッキーニ「皆ひどいんだよ、私が知らないからってたらいい回しにしてえーミーナなら絶対知ってるって皆が言うからー」

ミーナ「あら、皆酷いわね、私で良かったらなんでも聞いて頂戴」

ルッキーニ「本当！ じゃあね、布団に入って男女がやる事って何？ イチローとエリカは何をしていたの？」

ミーナの視線を絶対に見ないように、皆は一目散に滑走路から逃

げだすのであった。

それが昨日の事、　なんとか誤解が解けたのはいいのだが夜食の時もシャーリーとは少し気まずい雰囲気であったし、　何より食事の時も隣で大神に甘えるエリカのせいでいつもより皆の視線が数倍鋭い物になっていた。

大神「ふう……そろそろ起きる……ん？」

だんだん覚醒し始めた大神は自分の布団の中に自分以外の体温を感じた。　恐る恐る目を開けるとそこにはスヤスヤと眠るエリカの姿があった。

大神「……エリカ君？」

エリカ「んふう……あ、　おはようございます大神さん」

大神「な、　なぜ俺のベッドに？」

エリカ「ミーナさんが新しくベッドを用意してくれるって言うていたんですけどね、　それも悪いと思ったので大神さんと寝るのでいいって言ったんです。　大神さんの部屋に来たらもう寝ちゃった後だったので……大神さん？」

大神は静かに頭を抱えた。　この後一体どんな表情をしてミーナに会えばいいのだろうか。

大神「そ、　そうか……それよりエリカ君早く起きないと、　こんな所を誰かに見られたら――」

エリカ「きゃっ！　大神さんのエッチ！　駄目ですよー布団引っ張ったら！　下着だけなんですから！」

大神「な、　何故そんな格好で!？」

エリカ「だって私戦闘服しかないですよ？　戦闘服ピチピチしてて寝にくくて」

当然でしょう？　という表情でそんな事を言うエリカ、　大神は愕然としてしまうがそんな事をしている場合ではない。　起床ラッパ鳴る少し前にはいつも芳佳が日課である掃除をしに来るのであった。　そう、　このように。

芳佳「大神さんおはようございます、今日も一日頑張って……す、すいませんでした!」

芳佳から見れば素肌を大きく露出させたエリカの布団を大神が引張っているの図である、これで誤解されない方が奇跡である。

エリカ「大神さんどうしたんですかー?」

大神「いや……なんかエリカ君とのドタバタも久々だなと思ってね」
「またもや頭を抱える大神、ド天然のエリカに今何故自分がこんなに焦っているのか説明しても無駄である事は巴里での生活で学習していた。」

エリカ「そうですね……大神さんが巴里を旅立ってからまだ一ヶ月も過ぎてませんけど……会えて本当に嬉しかったです」

大神「……エリカ君?」

エリカ「お手紙……読んでくれましたか?」

大神「ああ、読んだよ。嬉しかった」

エリカが大神に宛てた手紙、巴里を離れる際に手渡された手紙にはエリカの正直な気持ち記されていた。「巴里での恋人ではな

く、貴方の恋人になりたい」と、まさかこんなに早く再会す

るとも思っていなかったエリカは多少照れくさそうに笑っている。

エリカ「えへへ、ちょっと照れくさいですねお手紙、ちゃんと持っていてくれますか?」

大神「ああ、勿論さ」

エリカ「あ、あの鞆の中ですねー?ちゃんと持っているか持ち物検査です!」

大神が巴里で使っていた鞆を発見しそこに走っていくエリカ、バリバリの下着姿なのだが大神に取って今はそれ所ではない。

大神「ま、待つんだエリカ君!」

エリカ「うわーやっぱりちゃんと持っていてくれるんですね!

……あれ?」

鞆の中にはエリカが出した手紙の他に四通の手紙が入っていた。

差出人にはエリカの他の巴里華撃団のメンバーの名前。

エリカ「……大神さあん？」

大神「い、いや。やはり隊長として皆の手紙を受け取る義務があるだろう？」

エリカ「酷いです！　大神さんが五股したあ！」

大神「そんな誤解を招くような事を大声で！」

エリカ「酷いです！酷いです！　帝都と合わせて十三股です！　ウィッチの皆さんと合わせれば二十四股です！」

大神「え、エリカ君！　朝だから静かに！　落ち着いてくれ！」

エリカを落ち着ける為に大神はエリカをベッドに座らせようとする、起床ラッパが宿舎に鳴り響くころだった。コンコンと、部屋の扉がノックされるが大神達には聞こえない。

シャーリー「あ、あのさ一郎。昨日はちょっと色々心の整理が付かなくてちゃんと言えなかったからお礼……何やってんだお前ら？」

下着姿のエリカを布団の上に押し倒している大神、部屋に入ってきたシャーリーの目にはそう写っていた。早くも本日二回目の誤解イベントである。

シャーリー「……わ、私は一睡も出来なかったんだからな！」

バーン！　と音を立てて部屋の扉が閉まる。シャーリーはまたもや物凄いスピードで部屋を出て行ったのだった。

エリカ「あれー？　シャーリーさんどうしたんでしょうか？」

相変わらずのトラブルメイカーっぷりを発揮するエリカにガックリと肩を落とす大神であった。

バルクホルン「何をしているかハルトマン！　起床だ！」

エーリカ「もうちょっと……後七十分」

バルクホルン「そんなもうちょっとがあるか！　早く……なんて格好をしているのだハルトマン！」

脱いだ服を布団替わりにして眠っていたエーリカは下半身に何も着用していなかった。それを見たバルクホルンが彼女を律する。

バルクホルン「さっさと服を着んか！」

エーリカはまだ頭に布団を被せたまま二度寝の体制に入っている。

何も着ていない下半身を丸出しにして。

バルクホルン「……まったくどう思う大神、ハルトマンは毎日こ
うなのだ」

エーリカ「ええ!？」

ガバッと起きて布団替わりにしていた服で下半身を隠すエーリカ、

しかしそこに大神は居ずうっすらと笑っているバルクホルンしか
居なかった。

バルクホルン「起きたようだなハルトマン、流石のハルトマンも
大神の前ではちゃんとするようだな？」

エーリカ「……嘘付き、トルウーデはカールスラント軍人なのに
嘘付きだ」

エーリカは赤面した頬を隠すようにまた布団を頭に被った。

バルクホルン「う、嘘ではない! お前を起こす為の戦略的行動
であって決して私は嘘をついた訳ではない!」

エーリカ「嘘付きートルウーデの嘘付きー」

バルクホルン「むむむ……早く起きて来るんだぞ! 今日はお前の
柏葉剣付騎士鉄十字章の授与式があるのだからな!」

バルクホルンにしてやられたのもそうだが、無意識の内に大神の
前ではだらしのない自分を見られたくないと思っていた自分に少し腹
が立ってエーリカは二度寝を敢行した。

エーリカ「……ない」

しばらく二度寝してからゆっくり体を起こすエーリカ、自分の『
ズボン』が何処を探しても見当たらない。

エーリカ「ま、いっか」

そう言って廊下にと歩き出すのだが、先程のバルクホルンの言葉を
を思い出す。

エーリカ「……別に、見られても平気だし」

自分に言い聞かせるようにそう呟くがやはりエーリカにも人並みの

羞恥心はある、下半身を全て大神に見られるのは流石にまずいと思いい浴場の更衣室にと寄ってルッキーニのズボンを借りる事にしたのだった。

大神は執務室にて上層部に送る報告書作成の手伝いをしていた、しかしどうにもミーナからの指示や視線が冷たい気がする、原因は分かっているのだが。

大神「あ、あのミーナ中佐。何か誤解をして――」

ミーナ「昨晚はお楽しみでしたか大神大尉？ エリカさんは巴里華撃団の一員なので文句はいいませんが、ストライクウィッチーズ内ではそのような事をしてはいけませんからね？」

大神「じ、自分はそのような事はしていません！ エリカ君はなんというか……人懐っこい所がある子でして……決して後ろめたい事をしていた訳ではありません！」

ミーナ「……本当ですか？」

大神「勿論です、自分は正義に殉ずるつもりです、特定の女性とお付き合ひというのは……考えておりません！」

ミーナ「そこまで言わなくても……すいません、私が少しムキになり過ぎましたね。大神さんを信じます」

大神の覚悟をミーナは信じる事にした、誤解が解けたので大神はニコツと笑ってミーナを見つめる。

大神「良かった……ミーナ中佐なら信じてくれると思っていました」その時、コンコン、と執務室の扉がノックされる。

ミーナ「はい、どうぞ」

バルクホルン「ミーナ少しいいか？ 事件が起きた」

神妙な顔をしたバルクホルンが執務室にと入って来た。彼女が言うには、なにやら事件が起きたらしい。

大神「ズボンが盗まれた？」

ペリーヌ「そ、そうです……私のズボンが……な、何をマジマジと見ているのですか大神隊員！」

大神「す、すまないペリーヌ君！」

エリカ「大神さあゝん私のパンツも無くなっちゃいましたゝ」

大神「エリカ君のもかい？」

バルクホルンは重大な事件だと息巻いている、芳佳は必死にセーラー服の上は引っ張って下半身を隠している。

大神「芳佳君もかい？」

芳佳「い、いえ私のはあるんですけど……バルクホルンさんが証拠だからって……」

大神に見えないように必死に隠そうとしている芳佳、そんな芳佳を尻目にエーリカはパクパクと朝ごはんを食べている。その隣には汗ビツシヨリなルッキーニ。

バルクホルン「ふむ……皆にはアリバイがある……他に、更衣室に居た人物は？」

プルプルと震えるルッキーニを大浴場に居た美緒、芳佳、ペリ

ーヌ、エリカが見つめる。

ルッキーニ「うにゃあー！」

バルクホルン「逃げたぞ！ 追え！」

小動物のような俊敏さで逃げ出すルッキーニ、その姿はすぐに見えなくなってしまう。

美緒「ルッキーニが犯人だったのか？ 手分けして探すぞ！」

「「はい！」」

大神までも巻き込んだの大捕物が始まったのだった。

大神「やれやれ……何処に行ったんだルッキ……ニイ！？」

ルッキーニを探している最中、ドサツ、と何者かに倉庫の中に引き込まれる大神。

大神「痛てて……誰だいこんな事をするのは……」

微かな明かりしかない倉庫内で目を凝らす、そこにはジッと自分を見つめるエーリカの姿があった。

大神「エーリカ君？ どうしたんだい？」

エーリカ「……別に、普通だよね」

ペタペタと大神の体を触るエーリカ、エーリカは朝何故自分があるような見え透いたトラップに引っ掛かってしまったのか確かめたかったのだ。

エーリカ「(……別になんともない、一郎と一緒にいても普段通りの私だ)」

大神「エーリカ君？ どうしたんだい？」

エーリカ「……ねえ一郎、シャーリーの裸見てどう思った？」

大神「な、何を言うんだエーリカ君！ あの時 は 戦 闘 中 だ っ た か ら 見 て い る 場 合 じ ゃ な っ た よ」

エーリカ「本当かなー？ 今日シャーリー凄い顔してたよ？ 何かしたんじゃないの？」

大神「一体どうしたって言うんだい？ 何か変だぞエーリカ君」

エーリカは少し迷ってズボンにと手を掛ける、

大神「え、エーリカ君何を？」

エーリカ「……」

一気にずり下げようとするが、やはり出来ない。

エーリカ「(……私、見られたくないんだ、一郎に、だらしない所を、恥ずかしい所を)」

自分の気持ちを確かめる為とは言え、かなり大胆な行動に大神は終始ドギマギしている。

エーリカ「ね、一郎はさ。やっぱり綺麗好きで料理が上手いやマトナデシコみたいな子が好きなの？」

大神「何を言い出すんだエーリカ君？」

エーリカ「いいじゃん、教えてよ」

大神「……そうかもしれない、でも深く考えた事がなかったな」

エーリカ「……ふーん」

そう言っ て、エーリカは思いきって大神の胸に寄り添ってみる。

大神「エーリカ君！？」

エーリカ「(ありゃーこりゃ確定かなー)」

大神の体温を感じながら、驚くくらい早鐘を打っている自分の鼓

動を確かめてエーリカは小さく溜め息を付いた。

エーリカ「ね、一郎」

大神「どうしたんだいエーリカ君、さっきからおかしいぞ？」

エーリカ「……私さ、一郎の事——」

ガチャン！ と大きな音を立てて入り口が開かれ、そして閉じる、外ではルッキーニを追い掛ける声が通りすぎて行った。

ルッキーニ「ふう……助かったあ……あれ、ここは……うにゃあ！」

暗がりの中つまずいたルッキーニは警報機に引っかかり、それを鳴らしてしまう。

ルッキーニ「あわわ……どうしょ……どうしょ……」

そんなルッキーニの姿をエーリカは溜め息を付いた。

エーリカ「まっ……いっかまたの機会って事で」

大神「エーリカ君？」

大神の胸からスツと立ち上がってルッキーニを確保しに行くエーリカだった。

エーリカの勲章授与式典が行われている、罰としてバケツを持たされているルッキーニはプルプル震えている。

芳佳「でも……結局ルッキーニちゃんのズボンは何処に行ったんでしょうか？」

バルクホルン「そう言えば……そうだな」

エリカ「そうですよねー私は自分で戦闘服のポケットに入れてたの忘れてましたー」

ルッキーニ「そうだよ！ 私は被害者なんだよー」

リーネ「じゃあ、一体誰が？」

ミーナから勲章を受け取り、それを受け取ったエーリカは壇上を降りて大神の前にと歩み寄った。

ミーナ「ハ、ハルトマン中尉、まだ記念撮影が……」

大神「エーリカ君？」

エーリカ「……えい！」

そう言って、抱きついて来たエーリカを大神が受け止める、所謂お姫様抱っこの格好だ、

エーリカ「ぶい！」

そう言って、大神にお姫様抱っこをされながらポーズを決めるエーリカに各取材陣のフラッシュが降り注ぐ。

エリカ「酷いです！ やっぱり二十四股ですー！ 巴里の皆に報告しますからね！ 大神さん！」

芳佳「ああ！ あ、あのズボン！」

フラッシュの雨に包まるエーリカ、そのズボンを見て驚きの声をあげる芳佳達、今回の事件の真犯人は天使のような笑顔で写真撮影に応じていた。

次回予告

エイラ「全く、なんて奴なんだ大神ハ！ サーニャを毒牙に掛ける訳にはいかナイ！ 私がサーニャを守るンダー！」 サーニャ「次回、『いっしょだよ』ブリタニアに……浪漫の嵐」

第五話「いっしょだよ」(前書き)

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SS

第五話「いっしょだよ」

第五話「いっしょだよ」

私、サーニヤ・V・リトヴァクには最近悩みがあります。それは新しく隊に入って来た隊員の方についてです。帝都、巴里を救った歴戦の隊長である大神一郎大尉。彼には色々お話を聞いてみたいと思っているのですが、私には夜間哨戒任務があつて昼夜逆転の生活を送っているし、エイラからは「大神大尉はケダモノだから近づくな」としよっちゅう言われます。何より私は中々人に自分から話掛ける事が出来ないのです、なのでずっと遠くから大神大尉の事を見ていたのですが……ついに大尉とお話出来るチャンスがやってきました。

エリカ「大神さあゝん帰りたくないですう」

エーリカの勲章授与式も終わった夕方。巴里華撃団の関係者がエリカを迎えにストライクウィッチーズ基地にとやって来た。

大神「わがままを言っちゃ駄目だよエリカ君。エリカ君には巴里の街を守るという責務があるだろう？」

エリカ君「そうですね……」

エリカは光武の詰め込み作業が終わった大型車両の前で未だに駄々をこねている。次に大神に会えるのはいつか分からない、エリカは単純に寂しいのであった。

大神「大丈夫だ、エリカ君ならきっと巴里華撃団の隊長としてやって行けるさ」

その言葉を聞いて、エリカ君の表情が曇る。

エリカ「大神さん、私は隊長代理です。大神さんの代理として一生懸命頑張りますけど……私達の、巴里華撃団の隊長は大神さんなんです……大神さんじゃないといやなんです！」

大神「エリカ君……ありがとう。その気持ち凄く嬉しいよ。必

ずまた巴里に行くから、その時まで俺の代理を務めてくれるかい？」

エリカ「大神さん……はい！ 私にドーンと任せてください！ だから……約束ですよ？」

エリカは少し涙ぐんだが、すぐに涙を拭いて大神に笑顔を見せた。大神「ああ、分かった、約束だ」

エリカ「えへへ……皆さんもお元気で！ また助けが必要だったらいつでも呼んでくださいねー！」

エリカはウィッチーズの皆に手を振って大型車両にと乗り込み、巴里にと戻って行ったのだった。

シャーリー「……」

バルクホルン「どうしたリベリアン？ 嫉妬か？」

シャーリー「な、何言ってるんだよ！ お固いカールスラント軍人でもそんな事言うんだな！」

バルクホルンにしては珍しく人をからかっている、皆エリカに向かって手を振って見送っているが、先程の大神とエリカのやり取りを見せ付けられて複雑な表情を浮かべている者も数人居た。

ミーナ「巴里華撃団の手を借りなければならなかった……それ程今回のネウロイは強力だったわ」

美緒「そうだな、こちら辺でネウロイが複数匹で行動する事は珍しい事だ、それがあんな強力なネウロイが一気に三体も……何かが起こっているのか？」

エリカを見送り、日も傾いてい來ているので皆宿舎にと戻る、その道中でミーナは深刻な表情で呟いた。

大神「ネウロイの動きが活発化して来ているのでしょうか？ 幸い悪魔や怪人、亡霊と言った魔の存在は各地の華撃団の奮闘で抑えこまれています……こちらも活発化して来るといよいよ手の打ちようがありません」

ミーナ「そうね、帝都、巴里に続いて紐育でも華撃団設立の動きがあるようです……魔の者達は大丈夫でしょうが、ネウロイ

の活発化は非常に危険です。現存で対抗出来るのはウィッチのみ、中には特例で大神大尉やエリカさんのような霊子甲冑で対抗出来てしまう方もいますが……極少数です。ここブリタニアを破られる訳には行きません」

大神達のシリアスな話を他の者達は静かに聞いている、皆は自然にミイレーティングルームにと集まっていた。

美緒「うむ、その通りだ。サーニヤ、確かここ一週間の夜間哨戒で数度に渡ってネウロイと遭遇したと報告していたな？」

サーニヤ「はい、いずれもこちらに仕掛けて来るような動きではなく、ずっとこちらを見ているような感じでした」

ミーナ「……ネウロイもこちらの戦力を測っている？」

バルクホルン「まさか、ネウロイがそんな行動しているなど聞いた事もないぞ？　どう思う大神。……大神、なんだそれは？」

大神「い、いえ。自分は普通に座っただけなのですが……」

大神の左右にはエーリカとシャーリー、膝の上にはルッキーニと両手どころか全身に花状態である。

バルクホルン「ハルトマン！　シャーリー！　お前達は何をやってるのだ！」

エーリカ「んー？　一郎の隣に座っちゃ駄目なんて規則あったっけ？」

シャーリー「そ、そうだ！　私はただルッキーニが大神の所に行っただけだから来てただけだぞ？」

ルッキーニ「まーいいじゃん、皆仲良くして良い事だよ！」

ペリーヌ「……仲良くで終わればいいのですけど」

ペリーヌの言葉をルッキーニだけが理解出来ずに頭上に？を浮かべていた、エリカと大神の関係、ウィッチ達の目にはどう見ても恋人同士に見えていた。当初美緒が言っていた十三股が真実味を帯びて来ていたのであった。

ミーナ「……大神大尉、その夜間に現れるネウロイの事が少し気になります。夜間哨戒班を結成し夜間の戦力を強化するべきだと

考えているのですが、その指揮をお願い出来ませんか？」

大神「自分がですか？ 了解しましー」

ルッキーニ「反対はんたーい！ そしたら昼にイチローと遊べなくなっちゃうよ！」

エーリカ「そうだね、一郎は大事な戦力だし、迎撃部隊に残して置いた方がいいんじゃないの？」

シャーリー「うん、うん、私もそう思う」

ミーナはこの三人の反応を見て、恐れていた事が起こりつつある事を悟った。今回の夜間班に大神を配属するという案も大神と彼女達を一定距離取らせるべきだと考えての事であった。ミーナの中のトラウマ。自分のように大切な人を、愛した幼馴染みを戦争で無くしてしまった自身のようなトラウマを皆に抱いて欲しくなかったのだ。他にも隊の風紀や士気が滅茶苦茶になってしまう恐れもある。隊長として、ミーナの判断は正しい物であると言える。

バルクホルン「ミーナ、わ、私も大神は昼の部隊に残して置くべきだと思う」

ミーナ「バルクホルン大尉、貴方まで？」

バルクホルン「い、いや。ハルトマンの言う事にも一理あると……やめろ！ つつくな！ 何をするんだハルトマンにリベリアン！」

バルクホルンの言葉を聞いてエーリカとシャーリーがうりうりとバルクホルンをつつく、バルクホルンは顔を真っ赤にして二人を振り払う。

ミーナ「大神大尉、どう思うでしょうか」

大神「はい、昼の迎撃部隊は元々自分が居なくても十分に機能していました。夜間に現れるネウロイも気になるので夜間哨戒班のお話を受けたと思います」

ルッキーニ「ええーイチロー本当にー？」

ルッキーニはスネたような声を出している、昼の部隊のウィッチ達も何処となく悲しそうな表情を浮かべている。

ミーナ「ありがとうございます大神大尉、では一週間から十日程ネウロイの動きを探ってください」

美緒「宮藤、飛行時間がまだ少ないお前も夜間に行くんだ。いい経験になるだろう」

芳佳「は、はい！ 分かりました！ 大神さん、エイラさん、

サーニヤちゃんよろしくお願いします！」

大神「ああ、こちらこそ。エイラ君、サーニヤ君よろしく頼むよ」

サーニヤ「は、はい。よろしくお願いします」

たどたどしく挨拶するサーニヤを見て、最高に面白くなさそうな表情を浮かべるエイラなのであった。

夜、大神は資料を作成した後に布団に入ろうとしていた、その時軽くドアがノックされる。

大神「はい、どうぞ」

エーリカ「おっじゃましまーす」

大神「え、エーリカ君？」

突然部屋を訪れたのはエーリカであった。彼女はタンクトップのような上着とズボンだけと言うラフな格好である。

大神「どうしたんだいこんな時間に？」

エーリカ「それがさ、久々に部屋を片付けようと手を付けたのはいいんだけどね？ 雪崩みたいに服とか本が崩れて来てベッドを埋め尽くしちゃってさ。寝るところ無くなったから泊めて？」

大神「と、泊めてって……それは別に構わないが、一体どうやったら部屋で雪崩が起きるんだい？」

エーリカ「細かい事はいーの！ さ、寝よう？」

エーリカは大神のベッドに飛び込んだ。

大神「い、一緒にかい？ いいよ俺は床で寝るから」

エーリカ「ふうーん……エリカとは一緒に寝るのに私とは寝てくれないんだ？」

大神「いい!?!? ……だ、誰に聞いたんだい?」

エーリカ「ミーナ」

大神「み、ミーナ隊長……しかし色々まずいんじゃないのかい?」
既にベッドに入って布団まで被っているエーリカ、寝る気満々である。

エーリカ「まずい事、するの?」

大神「な、何を言っているんだエーリカ君! からかわないでくれよ」

エーリカ「……いいから寝よ! 大丈夫だよ一晩くらい。バレないバレない」

大神「……仕方ないか」

スツと布団を捲ってベッドに入る大神、エーリカの体温をすぐ近くに感じる。

その時、コンコンとまた部屋の扉がノックされた。

シャーリー「あ、あの一郎……もう寝てるか?」

大神「い、いやまだ起きているよ」

つつい条件反射的に返事を返してしまった。扉が空いた瞬間に

エーリカを布団の中にと抱き込んで隠す。

エーリカ「(ちょ、ちょっと一郎!)」

大神「(すまないエーリカ君! すぐに終わるから)」

シャーリー「よ、よお一郎。あの……なんだそのふくらみ?」

大神「い、いやこれは少し布団を重ね過ぎてね」

シャーリー「……ほう、布団をね」

パツと布団を捲るシャーリー、その中には勿論抱きしめられたエーリカの姿が。

大神「……違うんだシャーリー君」

シャーリー「わ、わ……私だってええええ!」

そう残してまたもや物凄いスピードで走り去って行ってしまったシャーリーであった。

エーリカ「ありやりや……シャーリーに悪い事したな」

大神「……どうすればいいんだ」

二日連続で自身の痴態を見られてしまった大神、ガックリと肩を落としてしまった。

エーリカ「あ、あの一郎、そろそろ離してくれれば助かるんだけど……」

大神「す、すまない!」

パッとエーリカを解放するとエーリカは大神から離れて後ろを向いてしまった。

大神「すまなかったエーリカ君……エーリカ君?」

エーリカ「……わ、私シャーリーの誤解解いて来るから! やっぱり今日は自分の部屋で寝るよ!」

大神「エーリカ君!?!」

そう言つて、エーリカも疾風のように走り去ってしまった。

エーリカ「ふう……こんな顔誰にも見せられないよ」

エーリカは普段の彼女からは考えられない程赤くなった顔の火照りが冷めるのを待ってから、シャーリーの部屋に向かったのだった。

その翌朝、夜間哨戒班となった大神と芳佳、そしてサーニャとエイラは一緒に朝食を取っていた。美緒の指示でこの食事の後すぐに夜間に備えて寝る事になっていた。

芳佳「さっき起きたばかりなのに……寝れるかな……」

大神「そうだね、流石に寝れるかどうか」

エイラ「で、私達はどうすればいいんだ?」

寝れるかどうか心配な大神と芳佳であったが、エイラとサーニャにとっては慣れっこであった。

美緒「うむ、皆一部屋に固まって寝ればいい。大神のベッドは男性用のベッドが支給されているから大神の部屋がいいだろう」

エイラ「ま、待ってくれよ! 大神と一緒に寝ろってノカ!?!」

エイラの声に離れた所で食事を取っていたエーリカとシャーリーが反応する、ルッキ―ニは大神が取られたような気持ちで寂しそうであった。

美緒「任務の内だ、大神も分かっているだろう？」

大神「は、はい。勿論です」

美緒の威圧するような視線を受けて若干たじろぐ大神。サーニヤは芳佳と多少恥ずかしそうに大神を見つめている。

エイラ「いいか？ サーニヤに絶対変な事するナヨ！？」

大神「分かっているよ、取りあえず……皆はベッドに寝てくれ」

芳佳「大神さんはどうするんですか？」

大神「俺は床でも何処でも大丈夫さ」

皆は大神の部屋にと集まっていた。外からはリーネと坂本が訓練する声が聞こえて来ている。

芳佳「駄目ですよ！ ここは大神さんの部屋なんですから！」

サーニヤ「うん……そんなに気を使ってくれなくても大丈夫です」

エイラ「サーニヤ！」

サーニヤ「エイラ、大神さんはそんな人じゃないわ」

サーニヤに反論されると滅法弱いエイラはうむむと唸ってから「今日だけダカンナー」と叫んだ。

まず寝る前に問題となったのが配置決めである。

芳佳「大神さんの布団なんですから、大神さんが真ん中に寝てください」

エイラ「じゃあ隣は宮藤だな、それで……もう片方がわたしだ！」

大神「エイラ君が？」

エイラ「か、勘違いスナヨナ！ 大神が変な事しようとか考えたらわたしの未来予知ですぐにサーニヤを助ける為ダカンナ！」

そう言って、大神を真ん中にして芳佳とエイラが挟む、サーニヤは少し不服そうであったが無言でエイラの隣にと寝転んだ。

芳佳「……寝れませんか」

大神「そうだな……」

エイラ「い、いつもだったらすぐ寝れるンダ！　大神が居るカラダ！」

大神「お、俺のせいかい？」

サーニヤ「あの……大神大尉」

それまで口を閉ざしていたサーニヤが大神にと話掛けた。

大神「なんだい？　サーニヤ君」

サーニヤ「私も眠れないので……大神大尉のお話を聞かせて欲しいです」

大神「俺の？」

サーニヤ「はい、帝都や巴里で……どんな戦いをしていたのか気になります」

芳佳「私も気になります！　是非聞きたいです」

芳佳もそれに食付いたので大神は帝国華撃団や巴里華撃団に居た頃の話が始める。

まだ駆け出しの新人だった頃、帝国華撃団の皆と協力して悪魔を退けた事もあった

。軍部のクーデターを鎮圧した事もあったし、巴里では怪人や亡霊との激戦を繰り広げた。色々な出会いがあって別れがあった。話している内に段々と皆の事を思い出してくる大神であった。

芳佳「本当に凄いですね……扶桑でニュースになっていた事件ばかりじゃないですか。全部大神さんが解決していたんですか！？」

サーニヤ「巴里での戦いもつい最近までニュースになってた……本当に凄いですね」

大神「いや、俺だけの力じゃないさ、帝国華撃団の皆も、巴里華撃団の皆も必死に戦って、なんとか勝って来たんだよ」

エイラ「まあ……大神の戦いを見てれば分かるよ、色々戦い抜いて来たんだナって」

大神「このストライクウィッチーズでも、一生懸命戦うよ。だから皆も力を貸して欲しい」

大神は何気ない気持ちで皆に声を掛けた。

芳佳「は、はい！ 私なんかの力でよかったらお貸しします！一緒に皆を守りましょう！」

サーニャ「私も……協力します」

エイラ「……フン」

サーニャ「エイラ」

エイラ「分かってるよ！ 言われなくたって戦うっテノ！」

その後も、エイラやサーニャの過去の話や色々な事をして時間だけが過ぎていった。気がつけば皆眠っていて起きた時には夕方になっていた。

皆で寝起きの汗ばんだ体を綺麗にする為に宿舎内に作られたスオムス名物のサウナにと向う夜間哨戒班。

しつかりとアイマスクまでされている大神は何も見ることが出来ずに、皆が上がった後に一人だけで川にと向かわされた。

大神「ふう……成程気持ちがいいな。サウナの後には冷たい川に入るのか。独特な文化だなあ……しかしいい気持ちだ」

川の流れに逆らわずにプカプカと浮んで流れて行く。

エイラ「止まれバカ！ こっから先は行かせないゾ！」

大神「え、エイラ君!？」

岩の上に立塞がっていたのはエイラだった。タオルを体に巻いて、サーニャを守ろうと待機していたのであった。

エイラ「案の定来たな！ 大神ならぜったーウワッ！」

ツルツと、苔の生えた岩の上などに立っていたのでバランスを崩して川に落ちてしまうエイラ。

大神「エイラ君!？」

エイラ「う、ウソダロ!? あ、足が……」

大神「今助ける!」

エイラの元に泳いで行く大神、なんとかエイラを助け出して川岸まで運んでやる。

大神「大丈夫かいエイラく……」

ピタッと動きが止まる大神、それを不思議そうな目で見つめるエイラ。

エイラ「何見て……」

シャーリーの時とは比べ物にならない大惨事が発生していたのであった。必死に泳ごうとしたエイラ、そして必死にエイラを助けようとした大神、二人のタオルはプカプカと川下にと流れ行った。

大神「……」

エイラ「……」

完全に思考が停止してしまう二人。傍から見れば裸同士で見つめ合う二人である。ド変態にしか見えない絵だ。

大神「……あ、あのエイ……」

エイラ「ううううわあああ！ な、なんてモノ見せるんだよバカア！ って言うか見るナ！ なんだよコレ！ 何が起こってるんだヨ！」

大神「お、落ち着くんだ！ 今タオルを拾って来るから！」

大混乱を起こしているエイラを為に一刻も早くタオルを拾って来なければならぬ。大神は急いでサーニャや芳佳に見つかる事無く二人のタオルを拾って来たのだった。

エイラ「……い、イイカ！？ 今この場では何もなかったし見なかった！ ソウダナ！」

大神「あ、ああ。その通りだ」

エイラ「マッタク……あっ……あんなグロテスクなモノ見せやがッテ……」

大神「エイラ君！ 何もなかったし見なかったって今言ったばかりじゃないか！」

エイラ「う、ウルサイ！」

再びタオルを巻いて岩場に座り込む二人、中々に衝撃的な出来事であった。中々立ち上がろうとしないエイラを心配して覗き込む大神。

大神「そろそろ行こうエイラ君、大丈夫かい？」

エイラ「……まだ足が痛いんだヨ……おんぶして運んでクレ」

大神「お、おんぶかい？」

エイラの体を見る、薄手のタオル一枚の状態でおんぶなどしたら色々大変な気がする。しかし先程彼女の全裸を見たばかりだ。

鋼の精神力を持つ大神と言えどもかなりまずいと自覚出来ていた。エイラ「サーニャや宮藤に見つからない内に早くするんだヨ！」

そう言って催促するエイラ、大神は覚悟を決めてエイラをおんぶしてやる。

大神「(……いや駄目だろうこれは)」

体にタオルを巻いているだけである。もはや裸であると言ってもいい。その感触が直に伝わってくる。

大神「(心を無にするんだ!)」

ふにゅ、ふにゅ、と悩ましい感覚が一定間隔でやって来る。

いくら大神と言えども回避は不可能であった。

大神「(そうだ! 薔薇組の皆を思い出すんだ! 薔薇組の皆……よし少し収まって来たぞ!)」

帝国華撃団薔薇組、つまりモーホーの人達ばかりが所属する部隊である。彼らを思い出す事によって多少大神は冷静さを取り戻す事が出来た。

エイラ「オイ……大神、分かってるダロウナ？」

大神「あ、ああ。今回の事はすっかり忘れて――」

エイラ「そ、そうじゃない! ふ、扶桑の人間は……裸全部見えておいて……せ、責任も取らないノカ?」

大神「せ、責任かい!？」

背中に乗るエイラの表情を見る事は出来なかったが、彼女の声は緊張で震えていた。

エイラ「当たり前ダロ! ソノ……ダカラ……優しくしろヨナ……」

大神「え、エイラ君! 話が飛躍し過ぎていまいち何を言っているのか分からないぞ!? とにかく一旦宿舎に帰って落ち着こう!」

エイラ「あ、ああ……」

見つからないように慎重と宿舎にと戻り何事もなかったようにサーニヤと芳佳と合流した大神とエイラであった。勿論、平然と出来る訳もなく夕食の時にはギコチナイ二人に容赦なく勘繰るような目線が集中していたのだった。

サーニヤ「エイラ、大丈夫なの？」

エイラ「サーニヤまで何言ってンダ、大丈夫ダ！ さあ早く行くゾ！」

ついに夜間哨戒の時間となった。大神は光武にと乗り込み、飛行準備を整えた。

芳佳「あ、あのサーニヤちゃん……手を握っていいかな？」

サーニヤ「芳佳ちゃん？ どうしたの？」

芳佳「真っ暗な夜の空に飛び立って行くって……ちよつと怖くて」
サーニヤ「……うん、分かった、一緒に行こう？」

エイラ「……ツタク、行くぞホラ」

サーニヤとエイラが芳佳の手を取る。三人は手を繋いで暗闇にと飛んで行く。

大神はその後に続いて光武を発進させたのであった。

芳佳「うわー綺麗！」

目が慣れて来ると、これ程素晴らしい景色はなかった。月光に照らされ、星々が輝く夜空を飛ぶ。中々に神秘的である。

芳佳「よかった、誕生日にこんな景色見れて嬉しいよ」

大神「芳佳君、今日誕生日だったのかい！？ なんて言わなかったんだい！？」

芳佳「え、だ、だって皆さんには関係ないと思って……」

エイラ「何言ってンダヨ、誕生日だぞ誕生日！ ツタク、サーニヤといいお前といい。変な所で気を使うなヨナー」

エイラは信じられないと言う表情で芳佳を見る。サーニヤは無言で魔導針を展開し神経を集中させる。

エイラ「ン？ ってサーニヤ！ 二人だけの秘密じゃなかったのか

ヨ！」

サーニヤ「ごめんねエイラ、芳佳ちゃんに誕生日プレゼントと思
って」

芳佳「え、一体……え、凄い！」

初めは小さかった音が徐々に大きくなる、どこかの国のラジオ放
送をサーニヤの能力で受信してしたのだった。綺麗な旋律が皆の
インカムに届く。

大神「サーニヤ君の魔法は凄いね」

サーニヤ「いえ……私の能力なんて、ネウロイをやつける事も出
来ません……」

大神「何を言っているだサーニヤ君、君の能力でどれだけの人が
救われた事か、なにより見てごらん。こうやって、人を笑顔
に出来るんだ。素晴らしい魔法だよ」

芳佳「そうだよ！ ありがとうサーニヤちゃん！ 最高のプレゼン
トだよ！」

サーニヤは少し戸惑ってエイラと芳佳を見た、そして静かに、
月光に照らされ、ヒツソリと咲く月見草のように美しい笑顔で微笑
んだ。

しかし、その微笑みを遮るようにラジオにノイズが入り始める。

大神「……これは？」

サーニヤ「……間違いありません、前方にネウロイ、距離は一
万二千です」

大神「よし、皆戦闘準備だ、向こうの出方を伺う」

皆は小さく了解、と答えるとネウロイと一定距離を取って飛行を
始める、サーニヤの魔道針は不気味な音を拾っていた。

芳佳「これは……？ もしかしてネウロイの声？」

エイラ「何言ってるんだヨ……ノイズダロ？」

サーニヤ「いえ……真似しているみたい……さっきのラジオの音楽
を……」

大神「ネウロイが、学習していると言うのかい！？」

エイラ「そんな……ッ！ 避けるミンナ！」

エイラの叫び声の数秒後、ネウロイからの光線が到達する、エイラの未来予知のおかげで被弾無しで回避する事が出来た。

芳佳「どうしましょう……あんな大型のネウロイを……私達だけで？」

エイラ「現にもう戦闘が始まってるンダ！ 背中見せて飛ぶ訳にいかないダロ！」

大神「……俺が攪乱する！ この中で一番の火力はサーニヤ君のフリーガーハマーの連射だ！ サーニヤ君頼んだぞ！」

エイラ「バカ！ 無茶だ大神！」

大神は光武でネウロイの懷にと飛び込む、長距離レーザー主体の攻撃だったネウロイが迎撃用のレーザーを隙間なく斉射する。

芳佳「私が、壁になるから！ サーニヤちゃんが！」

芳佳はサーニヤの前に立塞がりシールドを展開する。

サーニヤ「……」

プルプルと震える手で照準を合わせる、ここで自分がミスを犯したら皆ヤラれてしまうかもしれない。

エイラ「大丈夫だよサーニヤ、私が居る」

ソツと、サーニヤの手を取るエイラ。その手が何もない空間にとフリーガーハマーの照準を持っていく。

サーニヤ「エイラ？」

エイラ「大丈夫、信じるンダ」

サーニヤ「……うん」

懸命に攻撃を回避する大神、迎撃するネウロイは徐々にエイラが構えた照準の位置にと近づいて来る。

エイラ「3、 2、 1 イマダ！」

サーニヤ「っ！」

フリーガーハマーが発射される、真っ直ぐに飛翔して、エイラの示した位置にと着弾する。

轟音が辺りを包んでネウロイが火だるまになる、しかし。

芳佳「そんな！ コアが！」

むき出しになったコアは未だ健在である。

サーニャ「……そんな」

エイラ「大丈夫だ、 信じろってイツタロ？ やっぱり凄い奴だよ、
アイツは」

エイラの言葉に二人は戸惑たが、 その数秒後にはエイラの言った
言葉の意味を理解する事が出来た。

大神「狼虎滅却——」

ネウロイの更に上空、 急上昇した光武がネウロイのコアを狙って
いた。

大神「——無双天威！」

カッと閃光が辺りを包む、 大神の必殺剣がネウロイのコアを貫い
たのだった。 空には、 また静寂が訪れていた。 そしてその静
かな空に、 綺麗な曲が流れて来たのだった。

サーニャ「……この曲」

サーニャは月光に照らされながら上昇して行く、 その姿は、 月
の妖精であると言われれば信じてしまう程に美しい姿だった。

サーニャ「……この曲は……お父様が……お父様！」

寝る前に話していたサーニャの過去、 自身の父とネウロイの侵攻
によって生き別れになってしまっていた。 その父が、 音楽家で
あった父が自分の為に作ってくれた曲、 サーニャの詩が夜空に響
いている。

芳佳「凄い……凄いよ！ こんな事……奇跡だよ！」

エイラ「……奇跡なモンカ」

大神「どういう事だい」

エイラ「……今日はな、 サーニャの誕生日でもあるんだヨ」

エイラは小さく呟くと、 空を泳ぐサーニャの姿を見る。 サーニ
ャの瞳には涙が浮んでいた。

サーニャ「お父様……サーニャは、 サーニャはここにいます……
サーニャは……十四歳になりました……」

その曲が終わるまで、サーニヤは上空高くに浮んでいたが、曲が終わると大神達の元に戻って来た。

サーニヤ「ごめんなさい……つい……」

大神「いいんだ、それよりサーニヤ君、そして芳佳君。お誕生日おめでとう。明日はパーティにしよう」

芳佳「ほ、本当ですか!?!」

大神「ああ、当たり前さ。エイラ君、準備を手伝ってくれるかい?」

エイラ「勿論だ、皆で盛大なパーティにしてやるからナツ!」

サーニヤと芳佳は、笑い合って、大神とエイラに礼を言うのであった。

そして基地にと帰投する途中、サーニヤは芳佳と大神に声を掛けた。

サーニヤ「あの……さっき上昇した時に感知したんですけど……多分、扶桑のラジオだと思うんです……」

大神「本当かい? 芳佳君、ラジオとか聞いて居たかい? 俺はあんまり詳しくないんだが……」

芳佳「わ、私もあんまりです。でも久しぶりに扶桑の音楽が聞けるかもしれませんよ!」

大神「そうだな、じゃあお願い出来るかいサーニヤ君」
サーニヤ「はい」

サーニヤは神経を集中させて魔道針を展開する、段々と音声が増え、音楽が聞こえて来る。

芳佳「こ、これって! 大神さん!」

大神「……」

——歌をさあ歌いましょう、それが夢の続き、さよならは言わないの、また会えるから

春は巡る、いつも美しく、いつかまた、この夢のつづきを

麗しの 帝国歌劇団

大神は自分の目頭が熱くなるのを感じていた。この曲は、大神が巴里に飛び立つ前最後の公演で歌っていた物。そして、それを生で歌っているのは勿論、彼女達である。

大神「……ありがとうサーニャ君、最高にうれしいよ」

サーニャ「いえ……これは、大神さんの前居た帝都の……？」

大神「……ああ、最高の仲間達だ！」

大神は目に少し浮かんだ涙を拭ってそう宣言した、今はまだ泣く時ではない。まだ人類は驚異にさらされているのだから。さよならはいわない また会えるのだから。

これで、これで終わっていればなんと感動的で素晴らしい話であっただろうか。

翌朝、帝都、帝国劇場。

加山は眠たい目をコスって、ロビーを歩いていた。

彼女達にその事実を告げるのは巴里華撃団の面々に伝える数倍の大仕事であった。

なにせ一年ぶりに再会出来ると皆信じていたのだ。

それが突然のブリタニア赴任である。

当然の如く、その場は大荒れであった。

泣き出す者

自分の家で圧力を掛けて自分もストライクウィッチーズに行くと

い出す者

無言の圧力を掛けて来る者

冷静さは装っては居るが軍部に乗り込んで真相を探る等と物騒な事を言い出す者

カタコトの日本語で捲くし立てて来る者

そして、 どうしていいのか呆然とたたずむ事しか出来ない者

と皆それぞれ大神のストライクウィッチーズ入りはショックを受けているようであった。

でも、 自分達が今大神に出来る事は何かと考え、 届くという保証も無いままラジオにと出演したのであった。

そんな彼女達は今ロビーに集合して新聞の朝刊を見入っている。

加山「どうしたんだい雁首揃え……何かあったのかい？」

彼女達の様子は明らかにおかしい物であった。 皆一様にウフフアハハと狂気を感じる笑い声を上げている。

加山は皆を掻き分けて朝刊を手にとった。 彼女達がそうなった原因はデカデカとその日の朝刊の一面にと載っていた。

加山「……大神、 俺は知らんぞ」

加山はそう言っただけでその場を逃げ出し、 次の任務地に逃げるように出向いたのであった。

その文面はこうである。

『柏葉剣付騎士鉄十字勲章を授与されたカールスラント軍、 エーリカ・ハルトマン中尉とそれを抱き抱える我が国の大神一郎大尉』

写真付きで、 でかでかと、 エーリカをお姫様抱っこする大神の姿がその記事には掲載されていたのであった。

大神「ふう……ようやくブリタニアに来てから初めての休みだ、 最近、 何故か体に戦慄や悪寒が走る事があるし、 ゆっくりと体

を休めて……ってサーニャ君！　ここは君の部屋じゃないぞ！　エ
イラ君まで！　次回『ブリタニアの長い休日』　大正桜に浪漫の嵐
」

第六話「ブリタニアの長い休日」（前書き）

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SSです

第六話「ブリタニアの長い休日」

第六話「ブリタニアの長い休日」

俺、大神一郎がブリタニアに来てから二ヶ月が過ぎようとしている。サーニャ君と芳佳君の誕生日パーティを盛大に上げたのが二週間程前、それから夜間哨戒を続けたがああ、戦闘以後ネウロイが出現する事はなかった。夜間哨戒の任務を解かれて通常の部隊に戻った俺にブリタニアに来てから初めての休日が訪れようとしている。そう通常の任務より余程忙しい休日が。

ガリアの重要都市、バ里、シャノワール地下。

そこには新聞を広げて雁首を揃えるバ里華撃団の面々

グリシーヌ「……エリカの話を信じていなかった訳ではないが……

ここまで堂々と証拠を晒すとは、余程隊長は死にたいらしい」

花火「グリシーヌ、落ち着いて……扶桑では浮気は男の甲斐性ともいいますし……それにまだ本当に大神さんが――」

グリシーヌ「そんな扶桑の理屈を私は知らん！ いいのか？ こうやって隊長がドンドン知らない女達と関係を持って行って!？」

花火「それは……嫌ですけども」

物議をかもしているのは勿論あの記事である。扶桑よりも早くこの記事が大々的に報じられ、ここ連日こうやって対策会議をしているのであった。

コクリコ「だからあゝ皆でイチローに会いに行って直接聞こうよ」
エリカ「駄目ですよ……バ里の街を開ける訳には……」

ロベリア「そう言うがよ隊長代理、敵の総大将を倒してから三ヶ月、私達に出撃機会なんてあったかい？」

皆ロベリアの言葉にだんまりとする。バ里での激戦を終えてから、ネウロイの接近はある物のそれらは全てバ里のウィッチ部隊が迎撃している。実際の所、バ里華撃団の戦うべき敵は現在存在し

ていないのだ。

エリカ「でもでも……やっぱりいつ敵が来てもいいように準備しておかないとですよ！」

コクリコ「……ボク、イチローに会いたいよ」

コクリコが小さな声で呟く、 勿論、 皆も口には出さないが同じ気持ちであった。 出来る事ならばすぐに光武を持ち出してストライクウィッチーズに参戦したい気持ちである。

グラン・マ「……あんた達」

連日、 こうやって巴里華撃団の面々が集まっているのをシャノワールの支配人であり巴里華撃団の司令であるグラン・マは勿論知っていた。 彼女達の気持ちを痛い程理解しているつもりだし、 なんとかしてやりたいと思っていたのも事実である。

エリカ「あ、 あー！ 実はお願いしたい事があります！ どうか私達を少しの時間でいいのでストライクウィッチーズに入れて貰えないでしょうか！」

グラン・マ「ああ、 いいよ」

エリカ「勿論駄目だって言うのは分かっています！ でも……え？」
エリカは隊長代理として、 皆の気持ちを代弁する事に必死になっていたのでグラン・マの口から出てきた言葉を一瞬理解する事が出来なかった。

エリカ「え、 えっと。 ちょっと話がよくわからないんですけどお……いいんですか？」

グラン・マ「……本来であれば、 ふざけるんじゃないよ。 と言いたい所なんだけどね。 これを見な」

グラン・マは立派な箱を開けて書状を皆に見せる、 エリカやコクリコはそれを見ても「何これ？」 状態であったが他の三人は息を飲んでいた。

グリシーヌ「これは……ガリア政府からの！？」

エリカ「数ヶ月後にガリア、 ブリタニアを跨ぐ超巨大なネウロイの巢に総攻撃を仕掛ける。 我が国はこれに全戦力の四分の三を投

入する事を決定した。　巴里華撃団もこれに参加する事を命ずる……ってつまりどういう事ですか？」

花火「エリカさん！　その下です！」

珍しく大きな声を出す花火に驚きながらもエリカはその文の下を読み進める。

エリカ「巴里華撃団は対魔用である光武に速やかに飛翔用のパーツを装備し、　特別部隊ストライクウィッチーズに合流する事。　本作戦が終わり次第通常の降魔部隊にと復帰するよう……ってつまり大神さんに会いに行けるって事ですか！？」

コクリコ「そうだよ！　やったあ！」

エリカやコクリコや花火は純粹に大喜びしているが、　グリシーヌとロベリアはまだ不満そうな表情を浮かべている。

グラン・マ「あんた達は不服かい？」

グリシーヌ「いや……どうにもな」

ロベリア「隊長がそのなんとかウィッチーズに行った時と同じだ。

　　キナ臭いんだよ。　どうにも裏を感じるぜ」

グラン・マ「私もそう思って色々問いただしてみたが……どうにもブリタニアの上層部が怪しいね。　それを察知したのが我がガリアと扶桑さ」

エリカ「怪しい？」

エリカはコクリコと抱き合って喜んでいたがグラン・マの表情から緊張感を感じていた。　どうにも、　これは単純な話ではないようだ。

グラン・マ「まだ確たる証拠は掴めていないようだけだね。　どうやらブリタニアはネウロイのコアを使ってネウロイをコントロールする研究を進めているらしいね。　ネウロイをコントロール出来たら最後、　それを軍事転用するのは目に見えてる」

グリシーヌ「そんな馬鹿な！　ネウロイは人類の天敵だ！　人間の欲望の為に使うなどもっての他だ！」

グラン・マ「勿論さ、　だからその動きをいち早く察知した扶桑は

手を打ったのさ。ブリタニア空軍が目の上のたんこぶとしてなんとか解散させようとしていたストライクウィッチーズ。そこに最強の刺客を送り込んだ。歴戦のね」

エリカ「えー凄いですねー！ 一体誰ですか！？ 私が行った時も居たんですか？」

全然話を理解していないエリカを置き去りにして、 グラン・マは話を続ける。

グラン・マ「ムッシュをストライクウィッチーズに入れてブリタニア軍上層部の動きを見ていた訳さ、 幸いまだ大きな動きが起きていないようなので扶桑とガリアは先手を打った。数ヶ月後の大規模作戦の打診、 まだまだネウロイに居て貰わなくては困るブリタニア軍は必ず動きを起こして来るって訳さ」

エリカ「ええー最強の刺客って大神さんですか！？ 流石大神さんです！」

グラン・マ「恐らく、 ムッシュにもこの事は伝えられていないだろうね。今頃扶桑の諜報部隊が多くブリタニアに潜入している筈。大きな動きはまだ先さ。今は私達と扶桑の部隊がストライクウィッチーズに合流して、ブリタニア軍が動きを見せたなら対処、動き無しならそのままネウロイの巣を殲滅すればいい」

グラン・マの口から語られる言葉に皆は複雑な心境であった。純粹に大神と再会出来ると思っていたが、その裏では国家間の色々な思惑が錯綜している。だが、エリカにはそんな事はお構いなしであった。

エリカ「とにかく、また大神さんの元で戦えるんです！ 早く光武を改造してブリタニアに行きましょー！」

ロベリア「お前なあ……まあ、国取り合戦は上の馬鹿共にやらせておけばいいんだ。私達は私達の仕事をするだけさ」

隊長代理より隊長らしい事を言うロベリアは、そう言って作戦司令室から出て行った。

グリシーヌ「口は悪いが、ロベリアの言う通りだ。早速準備に

取り掛かろう」

エリカ「そうですよ！　ってそう言えば扶桑からも部隊が来るんですか？」

グラン・マ「ああ、多分合流すればストライクウィッチーズはこの地球上で最強の部隊になるだろうね」

エリカ「ええ〜！　楽しみですよ！　どんな人達ですかね？」

エリカの天然具合に皆ズッコケそうになるが、無言で部屋を出て行くのであった。

ブリタニア空軍、極秘施設内部。

マロニー「では……お受けになったのですか！？」

首相「ああ、断る要素はあるまい」

ブリタニア国空軍大将であるマロニーは自分の策が後手後手になって居る事に苛立ちを隠せなかった。本来であればストライクウィッチーズに一定期間戦わせた所で自身が極秘開発している「ウォーロック」を投入してネウロイを殲滅及び掌握、後々にはブリタニアや世界をこの手に、と野望を抱いていたのだが扶桑の人間がストライクウィッチーズに加入してから計画が狂い始めている。

マロニー「了解いたしました……私も準備を進めます」

首相「頼んだぞ」

そして今回の大規模作戦、まだネウロイに退場されては困るのだ。なんとしてもネウロイを支配下に置かなくてはならない。

マロニー「計画を繰り上げるぞ！　一分一秒でも早くウォーロックを完成させるのだ！」

すべてを独断で進めるマロニーの怒号が、施設内に響き渡たるのであった。

大神「ん……んん」

大神はあまりの寝苦しさに目を覚ました。自分のベッドの筈なのに右にはサーニャ、左にはエイラ。あの夜以降、サーニャは

夜間哨戒後、度々寝ぼけて大神のベッドにと潜り込んでいた。

そのサーニヤを追いかけて、「大神がサーニヤに手を出さないように見張り」と言う名目でエイラもベッドに潜り込んで来る始末であった。

大神「(……)そうか、今日はブリタニアに来てから初めての休みか……)」

先日、夜間哨戒班での任務を終え、その後ミーナと坂本と共にブリタニア軍に呼び出され報告等を行って来た。大神が隊長に就任していない事を詰め寄られるかと思ったがなぜかそんなに聞かれる事も無かった。

そしてブリタニアから帰ってきたらすでに夜だったので皆と会話する事無く布団に入っただけであった。

昼間の部隊で活動しているウィッチ達は既に二週間程大神と話をしていないのだ。ルッキニーなどは大神が夜間哨戒から解放されたと聞いてテンションが上がっていたのに報告に連れ出されてしまい泣きそうな表情であった。

大神「えっと……取りあえず起きるか」

サーニヤとエイラを起こさないようにベッドから起き上がるが、寝間着の裾をエイラが握って離さない。

大神「エイラ君……寝ぼけているのか」

エイラ「サーニヤあ……大神い……何やってんだヨォ……私も混ぜてくれヨォ……」

大神「……何の夢を見ているんだろう」

若干身震いしながらエイラの真っ白な指を取る、あれからエイラを見る度に『あの時』の事を思い出すがどうやら向こうもそうのようで、どことなくぎこちなくなってしまう。

静かに扉を閉めて廊下に出た。今日の予定はまだ決まっていなかったので取りあえず朝御飯を取ろうと食堂に向う事にする。なんとなく廊下の窓から外を見るとリーネが花壇に花を植えていた。

気になって階下に降りて花壇にと向う。

大神「やぁリーネ君、おはよう」

リーネ「お、大神大尉！？おはようございます！」

大神「花を植えているのかい？」

リーネは花の苗に囲まれている。久しぶりに大神と会ったので緊張しているようであった。

リーネ「はい、でも色々苗の種類があって植え方がよく分からなくて……」

大神「そうか……俺も詳しくないからな……」

苗を見渡すが大神にも区別が付かないような苗が多々あった。

大神「俺も出来る限り手伝うよ」

大神も苗を手取るが、リーネの表情はドンドン曇って行った。

大神「リーネ君？」

リーネ「……大神大尉は、その実力で多くの人々を救って来ました。とても尊敬しています……私は毎日坂本さんに訓練して頂いても全然成長出来ません……私にはこうやって花を植える事しか……」

リーネは俯いて苗を植えている。彼女は地元であるブリタニアの出身であった。なんとしても故郷を守りたいとの思いでストライクウィッチーズに加入した物の、元来彼女は戦争をするような性格ではない。優しい彼女はウィッチとして伸び悩んでいたのだった。

大神「リーネ君、自身を持つんだ。君は芳佳君と二人でネウロイドだって撃破した。もう立派なウィッチさ」

リーネ「……でも」

大神「それに、こんな時代だからこそ花を植えるが大事だ。戦争が終われば俺らのような軍人は必要なくなる。人々の心を支えるのは花や木々さ」

リーネ「大神大尉……ありがとうございます」

ペリーヌ「まあ、大神大尉にしては良い事を言っていますわね。

リーネさん、その花はもっと日当たりのいい場所に、水をあ

げすぎてはいけませんわ」

リーネの後ろからペリーヌが手を伸ばす、いつの間にかやって来ていたペリーヌに驚きながらもリーネは指示通り苗を植えていく。リーネ「私……まだまだ自信が持てませんが……精一杯頑張ってみます」

大神「ああ、誰だって新人の時期があるんだ。俺も一杯失敗して、少しずつ成長して来たんだよ。ペリーヌ君、手伝ってくれるかい？」

ペリーヌ「……まあ大神大尉には一応恩もございますし、ここは私も手伝って差し上げますわ」

大神「恩？ 俺何かしたかい？」

大神はペリーヌが言っている事に心当たりが無かったのでペリーヌに聞き返す。

ペリーヌ「……先日もネウロイの攻撃から庇っていただきましたし。

私、出身がガリアですよ」

リーネ「そっか、大神さんはガリアを救っていますもんね」

大神「俺だけの頑張りじゃないさ、巴里の皆と力を合わせた結果さ。ブリタニアのネウロイを倒す為に、一緒に頑張ってるさ。ペリーヌとリーネと一緒にしばらく花を植えてから、大神は食堂にと向かったのであった。苗を植えている間に皆起床して来ていたように食堂には多くのウィッチ達が集まっていた。

ルッキーニ「あっ！ イチロおー久しぶりい！」

真っ先に大神を見つけたルッキーニ飛びついて来た、久々の再会を喜んでいるようだ。

大神「久しぶりだね、俺の分の御飯あるかい？」

芳佳「はい、用意してあります」

芳佳が大神の分の食事を持って来て配膳して行く、席に付いた大神の周りには既にウィッチ達が着席している。

大神「こうやってちゃんと話のは久しぶりだね皆」

シャーリー「ちよろちよろ見かけてたから久々って感じではないけ

どな」

エーリカ「それよりさ、 一郎今日休みでしょ？ 遊びに行こうよ」

大神「エーリカ君も休みなのかい？ 今日オフなのは俺にシャーリー君とリーネ君だと聞いていたけど」

エーリカは隣に座って大神のおかずを勝手に食べながら遊びに誘っている。

エーリカ「前々から溜まっていた休暇を使えってミーナがうるさくてさ。仕方なく使ったんだ」

本当は一昨日に戦力不足を心配するミーナになんとかお願いして休みを貰っていたエーリカであったが、 そんな事を言って誤魔化している

シャーリー「本当かあ？ 一郎と一緒に遊びたくて休み取ったんじゃないのかあ？」

シャーリーがからかうような口調で勘ぐって来るがエーリカは涼し気な表情で受け流している。

大神「ブリタニアの街を見てみたいと思ってるんだが……誰か一緒に行くかい？」

ルッキーニ「はいはい！ 行く行く！」

シャーリー「ルッキーニは休みじゃないだろ！ まあ、 私は暇だから付き合ってもいいぜ」

エーリカ「シャーリー行く気満々の癖に、 勿論、 私も行けど。 リーネも今日オフだからリーネに道案内お願いしようよ。

いい？ リーネ？」

リーネ「は、 はい！ 大丈夫です！」

作業を終えて食堂に来たリーネはいきなりの問い掛けに驚きながらもそれを了承する。

大神「すまないリーネ君、 ついでに物資もいくらか調達して来よう、 バルクホルン大尉、 何か必要な物資がありますか？」

大神はバルクホルンと物資の相談をはじめたが、 他の一緒に行くウィッチ達は大神と街に行けるとあって内心ウキウキであった。

それから一時間後、 ストライクウィッチーズの備品である軍用トラックが基地の前に回される、 運転席にはシャーリー、 助手席にリーネが座っている。

残りの数人が荷台に乗っている。 御世辞にもデートとは言いがたい格好であったが、 エーリカが元気に出発の号令を掛ける。

エーリカ「よし！ しゅっぱあつっ！」

エイラ「おー」

サーニヤ「……おー」

シャーリー「……なんでエイラとサーニヤが居るんだ？」

バルクホルン「まったくだ、 夜間哨戒班は夜からの勤務とは言え昼間何をしてもいいと言う訳ではないのだぞ！」

そう言うバルクホルンに皆の視線が集まる。

バルクホルン「な、 なんだ！ 私は正式な任務中だぞ！？ ミー

ナからの指示も受けた！ 補給物資の量が思った以上に多かったので直接私が行き調達する事となったのだ！」

エーリカ「ミーナ頭抱えてたよ？ あんまり無理言って困らせちゃ駄目だよトゥルーデ」

バルクホルン「無理など言っていない！ 私は——」

シャーリー「なーもう車出していいか？ 昼までには街着かなきゃまずいだろう？」

大神「ああ、 出してくれシャーリー」

バルクホルン「待て！ まだ話は——」

シャーリー「よっしゃあ！ 飛ばすぜ！」

後ろに乗っていた数人が吹っ飛びそうになるくらいの加速でトラックが基地を飛び出して行くのを、 基地内部でミーナが見つめていた。

ミーナ「はあ……」

美緒「……まさかあのバルクホルンまでもがな」

ミーナ「本人は任務だと言い張っていたけれども……どうしたものかしら」

坂本「多くの人間に好意を持たれながらその人間関係を円滑に進め、特に問題が起きていないと言うのが凄い物だな」

当初ミーナが注意を促していた「必要以上の接触禁止」などはもう誰も守るつもりはないだろう。それで隊に問題が起きているのなら事なのであるが、隊の士気は高く風紀の乱れも見られない。かえって大神が夜間哨戒で居なかった二週間の方が隊員達の動きが悪かった程だ。

ミーナ「三度に渡る英雄的戦功、人柄も良く皆に等しく優しい……まあこれでモテない方がおかしいわね」

美緒「まさかミーナ！ お前まで！」

ミーナ「……美緒には前も話したでしょう？ 私には忘れられない人が居るから……でも素敵な男性だとは思います」

美緒「そ、そうか。それならば問題無いが……」

ミーナ「そう言う美緒はどうなのかしら？」

美緒「私は……嫌いではないが、ウィッチとして人々を守る盾とならねばならないんだ。恋愛などしている暇はない」

ミーナ「……」

美緒の表情から多少満更でもない雰囲気を感じ取ったミーナは苦笑を浮かべて窓の外に再び目をやる。トラックは既に見えない所まで行ってしまったようだ。

リーネ「あう……」

エイラ「だ、だらしなイナリーネ……ウッ」

シャーリーのトンデモな運転であつという間に街にと着いたがその代償を受けた者が数人苦しんでいた。

エーリカ「一郎は平気なんだね」

大神「酔いは士官学校時代の艦上訓練で一生分やったさ、大丈夫かいリーネ君、エイラ君」

バルクホルン「私は物資の調達に掛かる！ 荷物を持つのにには力のある男手が必要だ、と言う訳で大神に——やめろ！ またお前ら

か！ つつくな！」

自信の固有魔法が「怪力」であるバルクホルンが力のある男手が欲しいなどの見え透いた嘘を言っている事にエーリカ、シャーリー、エイラがツンツンとバルクホルンをつついてからかう。

エーリカ「トゥルーデは任務なんだよね？」

バルクホルン「そうだ、 正真正銘——」

エーリカ「じゃあ、 休日の私達が任務の邪魔したら悪いよね。行こっか一郎」

多少バルクホルンに悪いような気がしたがエーリカであったが、任務をダシに一郎と二人で街を歩こうとしたトゥルーデもトゥルーデだよねえ。 と内心つぶやき大神の背中を押して街のメインストリートに向う。

大神「押さないでくれよエーリカ君。 バルクホルン大尉、 後で手伝いに行きます！」

エーリカの後にシャーリーやエイラ、 申し訳無さそうな顔をしてサーニヤまでもが続いて行った。 残されたのはバルクホルンとリーネだけであった。

リーネ「あ、 あの。 私で良かったらお手伝いします……」

バルクホルン「お前はいい奴だなリーネ……よろしく頼む」

少し肩を落としたバルクホルンであったがめげずにメモ帳を開き物資を調達に向かったのであった。

エイラ「中々大きい街だな」

シャーリー「リーネが言うには首都に続く街道からなる街らしいからそれなりに栄えてるんだと。 あれ？ 一郎はどうした？」

サーニヤ「……あそこ」

サーニヤが指差す先にはベンチに座ってアイスを食べるエーリカと大神の姿があった。

エーリカ「いやー悪いね、 奢って貰って」

大神「いや、 俺もブリタニアのアイスを食べてみたかったんだ」

エーリカ「へえーじゃあハイ！ あくん……なーんて——」

大神「うん、 美味しいね」

エーリカが冗談半分期待半分のつもりで差し出した自分のアイスをパクっと食べる大神、 笑顔を浮かべる大神にエーリカは赤面して俯く。

エーリカ「お、 おかしいな、 扶桑の男の人はこういう事あまりしないって聞いてたのに……いやいいんだけどね」

大神「エーリカ君も食べるかい、 はい」

エーリカ「い、 いただきます。 うん、 美味しい」

大神が差し出したアイスを今度はエーリカが食べる。

それを見ていた市民達がヒソヒソと会話しているのが遠巻きから眺めていたシャーリー達の耳に入ってくる。

市民1「あれ、 この前の新聞に載ってたストライクウィッチーズのハルトマン中尉と大神大尉じゃない？ やっぱり付き合ってるのかな」

市民2「そうでしょ、 全世界にお姫様抱っこされてる所見せびらかす程だもん。 でもお似合いだよね」

通り過ぎる市民の話を聞いて怪訝そうな顔を浮かべるエイラとシャーリー。

シャーリー「ああ見えてハルトマンやるなあ……計算でやってるのかあ？ そんなタイプじゃないか」

サーニヤ「ハルトマンさんはそういう人じゃないと思います……」

エイラ「本当に恐ろしいのはああいうタイプだな。 素であんな事されればそりゃ男だってコロっと行くサ」

シャーリー「なんだよエイラ、 随分恋愛知ってますみたいな言いぐさじゃないか」

エイラ「そ、 そんなんじゃネーヨ！ 仲間なんだから噛みついて来るなヨナ」

シャーリーは悪い悪いと流している、 「見られた」 同士と言う事で妙な仲間意識がエイラの胸の中で生まれていた。 勿論シャーリーはそんな事は知らないのであるが。

エーリカ「あれ皆どうしたの？ 皆もアイス食べようよ！ 一郎が奢ってくれるよ！」

大神「中々美味しかったよ。種類は何かいいかな？」

皆の元に帰って来た大神達と合流し、その後アイスを奢って貰いぎこちなく近づいては大神に「私にもアーンさせろ&しろコノヤロウ」オーラを放つエイラとシャーリー、それとは対象的に素直に言ってアーンして貰い静かに上機嫌なサーニヤと共に街の探索に移る大神であった。

サーニヤ「あっ……」

街の小さな露店、そこには小さな猫の置物が売られていた。猫の置物集めが趣味のサーニヤはそれに見入って買うかどうか迷っているようだった。

大神「サーニヤ君、猫が好きなのかい？」

サーニヤ「あっ……はい、置物集めて……」

大神「そうか、おじさん、これを一つお願いします」

サーニヤ「え？ そ、そんな。いいです大神大尉、自分で買えます」

大神「まあ、そんな高い物じゃないし、記念って事で貰ってくれないかい？」

遠慮するサーニヤに大神が微笑んで袋に入った置物を差し出す。

サーニヤは少しの間遠慮していたようであったが、大神の言葉を聞いて嬉しそうに受け取った。

サーニヤ「ありがとうございます大神大尉……大事にします」

大神「ああ、皆何処に行ったのかな。探そうか」

サーニヤ「はい」

その二人を遠巻きから見つめる三つの影。

シャーリー「……ハルトマンと言いサーニヤと言い、上手いねかし」

エイラ「サーニヤア……サーニヤアアア！」

エーリカ「ちょ、ちょつとお。さっきの見てたの？」

シャーリー「見せ付けてたじゃないか」

エーリカ「そんなんじゃないよー！ 二人も素直になったら一郎はきっと答えてくれるよ！」

エーリカの言葉に必死に反論している二人であったが、さっさとその場から離れて追いかけるエーリカであった。

バルクホルン「まったく、ハルトマンと言いルツキー二と言い宮藤と言い。皆大神とベタベタし過ぎなのだ！ そう思わんかりーネ！」

リーネ「はあ……そ、そうでしょうか……」

バルクホルン「特にハルトマンだ！ これまで私が何度言って聞かせても掃除をしようとしなかったのに！ この前自主的に掃除を始めようとしたのだぞ！ 結局あまりの量に挫折していたが……あれは絶対大神に部屋を見られたくないからだ！」

リーネ「掃除はしてないですね……」

リーネはアハハと苦笑いしながらバルクホルンの手伝いをしている。固有魔法の怪力を発動させ、大量の物資をトラックにと運んでいるバルクホルンは先程からブツブツと文句を呟いていた。

大神「凄いですね……俺が手伝う必要もないかな。リーネ君、俺も持つよ」

後ろからやって来た大神はリーネから荷物を受け取りバルクホルンの隣に並んだ。

バルクホルン「む、むう……大神！ 私は前々から言うべきだと思っていたのだ！」

大神「な、なんででしょうか！」

階級的には同じ大神であるが彼女の迫力に押されてつい姿勢をただしてしまふ。

バルクホルン「そ、その、なんだ。お前は随分多くの隊員達と仲良くしているようだがな」

エーリカ「もっと私にカマってよー」

バルクホルン「そうだ！　もっと私にもカマって……って何を言わせるのだハルトマン！　違う！　私は……その、　そうだ！　必要以上の接触は禁止されているのだ！　節度をわきまえるようにな！」いきなりバルクホルンの後ろに現れて彼女を茶化すエーリカ達とも合流し、　大神達のトラックは夕焼けの街道を走り出すのであった。

そして、　その日の夜。　ミーティングルーム。

大神「大規模反攻作戦……ですか？」

ミーナ「そうです、　皆さんも聞いてください。　本日夕刻にあった連絡で全軍に通達されましたが。　数ヶ月後にガリア及びブリタニアに跨ぐ超巨大敵拠点に攻撃を仕掛けます。　これはブリタニア、ガリア、　扶桑軍の合同作戦となります」

バルクホルン「なるほど……ここら辺一体のネウロイを掃討するつもりか……しかし敵の本丸を突くのはいいがそこまでの道をどう切り開く？」

ミーナ「それがこれから先の私達の任務です。　今までは防戦一方でしたがこれからは攻勢にでなければいけません」

ミーナはホワイトボードを使って作戦を伝えて行く。

当初は全長数キロ程だったネウロイの巣であったが、　最新の調査では数十キロの大きさまで成長しているらしい。　世界的に見ても有数の規模である。

芳佳「……守るんじゃなく……戦争をしなきゃいけないですね」

大神「芳佳君、　気休めにしかないかもしれないが。　ネウロイを倒す事で間接的に多くの人を守る事が出来るんだ。　分かってくれ」

芳佳「大神さん……はい……頑張ってみます」

ミーナ「本作戦には多くのウィッチが参戦する手筈になっています。　このストライクウィッチーズにも数週間以内に臨時の援軍が参戦する予定です。　戦力は三倍以上になるわ」

美緒「そんなにか……どこのウィッチ達が来るんだ？　一応エース

部隊なんだ。それなりの実績が欲しいぞ」

ミーナ「実績は問題ないです。超一級ですが……その……」

ミーナはチラッと大神の方を見る、大神はなぜそこで自分が見られたのか皆目見当も付かなかったが、その真意をすぐに思い知る事になる。

ミーナ「まず……大神大尉に電報です」

大神大尉「電報……？ 自分にですか？」

大神は一枚の紙を受け取る。その紙を見つめて数秒大神の動きが固まる。

ルッキニー「ねーなんて書いてあるのお？」

電報内容は至ってシンプル。

「トウチャクシダイシャシンノセツメイモトム、シングウジサクラ カンザキスミレ マリアタチバナ アイリス リコウラン キリシマカンナ ソレッタオリヒメ レニミルヒシュトラーク」

との事であった。

大神の頭の中を写真という言葉が駆け巡る。いつの何の事であろうか。彼女達が電報までよこす程の写真とはなんであったろうか。

そして到着とはどういう事であろうか。

ミーナ「援軍は、ウィッチではありません。大神大尉の働きで、ウィッチ部隊でも霊子甲冑の改造次第で降魔部隊でも十分通用する事が判明しました。そこで……帝国華撃団と、巴里華撃団が決戦時に援軍として参戦します」

美緒「……成程、確かに最強の部隊になりそうだ」

坂本の言葉に皆は明るい表情であったが、一名だけが切羽詰まった表情であったと言う。

次回予告

美緒「……これが運命だと言うなら受け止めよう、だが、もう少し、ほんの少しでいい……持ってくれ……せめて、この戦い

が終わるまでは 次回「君を忘れない」
それまで……私は飛ぶ！」

第七話 「君を忘れない」 (前書き)

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SSです

第七話 「君を忘れない」

第七話 「君を忘れない」

私、坂本美緒は幼少の頃から空を飛んで来た。宮藤博士の開発したストライカーユニット、鋼の箒を駆り幾多のネウロイを撃破して来た。だが、どんなに凄んでみせようと所詮私はウィッチなのだ。ウィッチの運命からは逃れる事は出来ないだろう……近い内に私は……だが、まだ飛べる。宮藤博士の娘である宮藤芳佳、せめて彼女を一人様のウィッチにと育てるまで。私は飛ぶ。

ストライクウィッチーズ基地、整備室

整備兵「はぁ……可愛いなあ……」

一人の整備兵が溜め息をついてウィッチ達を眺める。魔力、霊力は容姿端麗の者に多く宿りやすいとの調査があるように、ウィッチ達は皆美人、美少女揃いであった。特に各国のエースが集まるこのストライクウィッチーズではなおのことである。

整備兵「俺達是这样やって眺めてるだけ……酷ってもんじゃないかい？」

整備を進めながら彼は周囲にボヤキ続けている、整備兵達は皆少なからずこの気持ちを持っていたが、上司からの命令である以上従わざるを得なかった。

大神「……」

大神は今日も整備兵達と共に整備をおこなっていたが、彼の言葉になんとも言えない申し訳なさを覚えていた。

整備兵「いやね、別に大神大尉がどうこうって事じゃないんですよ。でも男として、可愛い子にお近づきになりたいって気持ち分かるでしょう？」

男は大神が居る事に気がついて慌てて弁明を始める、そう言いな

がら大神に肩を組んでくる。欧州の国々出身であろうか、随分フランクな奴である。別段大神も階級等にこだわる人間ではないので気にはしていないのだが。

大神「うむ……必要以上の接触禁止というのは確かに他部隊では聞いた事が無い規則だが……」

整備兵「でしよう！？ 大神大尉の事ですから。もうミーナ隊長とはねんごろなんでしょう？ せめて世間話くらいはOKって事でお願いしてくれませんかねえ」

他の整備兵は失礼な態度を取るこの男を制止しようかどうか迷っているようだ、立场上止めた方がいいのであろうが、彼の提案は自分達にとっても非常に有益な物である。結局彼らは見て見ぬふりをして大神達の会話に聞き耳を立てるのであった。

大神「話すだけ話してみよう。それと、言っておくが俺はどのウィッチ達ともそんな関係にはなっていないからな」

バルクホルン「大神！ 今後の進軍予定を会議するので執務室まで来てくれ！」

大神「了解しました！ じゃあ、あんまり変な噂を流さないでくれよ？」

大神はバルクホルンに呼ばれたのでその整備兵との会話を終え、執務室にと走って行った。

整備兵「お願いしますよー大尉！ いやいや、話の分かる大尉殿だねえ」

整備兵はそう言って、大神の光武の整備にと戻るのであった。

執務室にはミーナに坂本、バルクホルンそして大神の四人が集まっていた。ストライクウィッチーズの上級士官達が顔を合わせ今後の作戦を立てて行く。

ミーナ「では、超巨大敵拠点への道を切り開く為には……」

バルクホルン「周りにある小型の巢、これらを破壊して行くしかない。各国の戦艦が長距離射撃を行える距離までのネウロイ

の巢はすべて取り払いたい」

大神「扶桑からは大和、及び大和型二番艦武蔵も来ます、大型ネウロイには大きなダメージを与える事は出来ないでしょうが、小型ネウロイ程度ならば一掃出来るでしょう」

ミーナ「作戦開始は早ければ二ヶ月程で始まります。それまでにこれら小型の巢に攻撃を仕掛けましょう。厳しい戦いになるでしょうが、皆さんの奮闘を期待しています」

大神「あの、ミーナ中佐」

ミーナの話が一区切りした所でミーナを呼び止める大神。

大神「下士官からウィッチとの必要以上の接触禁止について少しづつ不満の声が出ています。多少の立ち話程度ならばと思うのですが……一考していただけませんか？」

ミーナ「……規則は規則ですので、それは各員に徹底させます」

大神「しかし……」

ミーナ「……坂本少佐とバルクホルン大尉は退席してください。」

大神大尉に話があります」

ミーナの言葉で二人は執務室の外にと出た、この二人はミーナと旧知の仲である。彼女の事情は知っていたが、いささか接触禁止の規則は厳し過ぎるとも考えていた。

バルクホルン「……ミーナの奴、話すつもりだろうか」

美緒「……」

バルクホルン「少佐？」

美緒「宮藤だ」

坂本は窓の外で戦闘訓練を行なう宮藤達を見つめている。

バルクホルン「宮藤の奴、少しずつですが成長しています。少

佐の訓練の賜物ですね」

美緒「……いや、きつと私だけではあそこまで宮藤を成長させる事が出来なかっただろうな、主に精神面だな」

宮藤はリーネとペアを組みシャーリー、ルッキーニチームと戦っている。宮藤の動きはストライクウィッチーズに來た当初とは比

べ物にならない程によくなっている。

バルクホルン「……大神ですか」

美緒「ああ、流石と言う所だな。歴戦の隊長だけあって隊員の事を良く見ているしアドバイスも的確だ」

バルクホルン「ですが、まだ宮藤には少佐が必要です。宮藤が指針としているのは間違いなく貴方だ」

宮藤は空中を駆け巡り、坂本が得意とする「左ひねり込み」を決めてシャーリーとルッキーニにペイント弾を当ててみせた。

バルクホルン「ほう、ルッキーニとシャーリーから一本取るか」
美緒「……」

坂本は無言のまま、通路を歩き始めた。バルクホルンは感心するように宮藤を眺めていた。

ミーナ「……下士官達の気持ちは分かります」

大神「では、何故でしょうか。ミーナ中佐程聡明な方がわざわざ隊の士気を下げるような真似をするとは思えないのですが」

ミーナ「……一説では。ウィッチ達は純潔でなければその力を発揮出来ないと言われています。若い男性の近くに置くのがどれほど危険な事か分かるでしょう？」

純潔、大神はその言葉の意味を理解していたが、ただの絵空事だと思えた。何故純潔でなければ力を発揮出来ないのか。嫌な大人の言い訳に聞こえた。

大神「それは一説の筈です。ミーナ中佐。貴方程の方がそんな科学的根拠のない話を本気で信じているのですか!？」

ミーナ「……大神大尉、貴方も霊力を扱う者として。覚えがある筈です。術者の精神状態がどれほどに大事であるか」

大神「……ミーナ中佐？」

ミーナはしばらく考え込んでから。いつものトーンとは全然違う、感情的な声で話始めた。心なしか声も震えているようであった。
ミーナ「……例えばです。もし今貴方が死んだら。ウィッチー

ズの半数以上が魔法を使える精神状態でなくなるでしょうね」

大神「……」

ミーナ「……私は、過去にとっても大切な人が居ました。幼馴染みで……はつきり言えば恋愛感情を持っていました……でも、彼が戦場から帰って来る事がありませんでした……私が再び空を駆けネウロイと戦闘出来るようになるまでには長い時間が掛かりました、そして今でも……忘れる事の出来ない思いとして心に残っています」

大神は言葉を発する事が出来なかった。ミーナは泣いていた。涙を流しながら、大神に向き直った。

ミーナ「大神大尉……分かってください、これは――」

大神「死にません」

ミーナ「……大神大尉？」

大神「戦争である以上、難しい事かもしれません。でも、俺がここに居る以上、絶対に誰一人として殺させません。もう、

目の前で大切な人に死なれるのはコリゴリです。ですから。

俺が誰一人として殺させません。勿論、俺も絶対に死にません」

ミーナ「何の、何の根拠があってそんな事を言うんですか！」

ミーナは珍しく感情を爆発させている。大神はそれでも取り乱さず、ミーナに向かって微笑み。まったく根拠の無い言葉を投げ掛けた。

大神「何故ならば、それが帝国華撃団で、巴里華撃団で、ストライクウィッチーズだからです」

ミーナ「……」

科学的根拠などまったくない。根性論の域に達していない酷い理論である。いや理論とも言えない屁理屈のレベルだろう。しかし。大神一郎が、そう言っているのである。誰一人として仲間を失わず、悪を蹴散らし、正義を示す。それが帝国華撃団で、巴里華撃団で、ストライクウィッチーズなのだ。

ミーナ「馬鹿みたいです、私に科学的根拠の無い事を信じるのか

なんて言ってそんな事を……でも、凄いですね。その言葉に説得力を持たせる事が出来るのは多分世界中で大神大尉だけです」

大神「ミーナ中佐の言う事は分かります。でもせめて、整備中の会話や日常会話くらいならばいいんじゃないですか？」

ミーナ「分かりました、考えてみますね」

涙を拭いてミーナは、大神に向かって微笑んだ。

ミーナ「大神大尉がモテる訳ですね。こんなムチャクチャな人。

他には絶対居ないもの」

大神「モテるなんて、自分は全然ですよ」

ミーナ「……死なないでくださいね大神大尉。もうあんな思いしたくないので」

大神「了解です。では自分は早速整備兵達に伝えてまいります」

大神はそう言って、執務室を後にした。

ミーナ「はあ……あの人の事はやっぱり忘れられないけど。凄い人ね、大神大尉は」

エーリカやバルクホルンには比較的素の自分を見せているが、まさか男性に素の自分をまた見せる事になるとは思っていなかったミーナは溜め息をついて自分の気持ちを落着かせた。

整備兵「ほら見る皆！我等が大神大尉ならやってくれると思ってたぜ！俺だぜ？俺がお願いしたんだぜ！？」

整備兵達は大神の言葉に大喜びであった。これまでは日常会話も隠れて少しだけであったり、ウィッチ達も警戒してろくに会話など出来なかったが、これでウィッチ達と正々堂々と会話する事が出来る。

大神「だが、節度は守るんだぞ。ミーナ中佐を後悔させるような事は絶対するんじゃないぞ」

整備兵「分かってますよ大神大尉！あんな美人泣かせる男なんてよっぽどのクズが余程の伊達男だぜ！」

果たして自分はどっちだろうかと苦笑いを浮かべて大神は整備兵達

の輪の中に入っていた。

その時、基地にネウロイの襲撃を伝える警報が鳴り響く、これまで歓喜していた整備兵達はまたたく間に皆持ち場について行く。大神「ネウロイか……こちらが打って出る前に向こうから来たか……」

大神は急いで自らの光武に乗り込んだ。

ミーナ「私と夜間哨戒班の二人はもしもの事を考え基地に待機します。現場での指揮は坂本少佐と大神大尉にお願いします」

「了解！」

インカムにはミーナの声が響いている。ウィッチ達は大神を中心に横一線に編隊を組み飛行している。

美緒「発見した。距離一万二千、大型ネウロイが二、小型が三……なんだあれは!？」

緊迫した坂本の声が伝わって来る、レーダーには通常のネウロイのようにしか写っていないが、坂本の魔眼は何か別の物を捉えたようだ。

バルクホルン「……あれは……人型だと!？」

他のウィッチ達が坂本に遅れて敵を目視する、ネウロイ達を指揮するかの如く、ネウロイ達の最奥に人型のネウロイが確かに居た。

芳佳「そ、そんな。人型って……」

美緒「宮藤! 人型でもネウロイだ! 撃て!」

芳佳「は、はい!」

坂本の激が飛ぶ時には既に戦闘が始まっていた。大型のネウロイの光線を掻い潜り、まずはエーリカとバルクホルンが小型のネウロイを撃破した。

続いて大神が光武を飛翔させ最後の小型ネウロイを一刀両断する。ペリーヌ「あの大型ネウロイ、今までのネウロイと段違いですわ!」

リーネの支援射撃が飛ぶ、しかし大型のネウロイの表面は堅くリ

ーネの魔弾ですら貫く事が出来ない。

リーネ「そんな……私の弾じゃ……」

エーリカ「私が！」

エーリカが俊敏な動きで弾幕の中を掻い潜って行く。しかし収束したビームがエーリカを襲う。

芳佳「ハルトマンさん！」

巨大なシールドがエーリカの前に展開される、芳佳が反応してエーリカの前に立塞がったのだ。

エーリカ「ありがとうミヤフジ、助かったよー」

シャーリー「ルッキーニ！」

ルッキーニ「あいさー！」

シャーリーの元にルッキーニが飛んでいく、多重シールドを展開したルッキーニをシャーリーがネウロイに向けて高速で投げつける。ルッキーニ「おりゃあー！」

相手の光線すら切り裂いて、ルッキーニは敵大型ネウロイを貫通した。

ルッキーニ「一機げきはー！」

結果として撃破出来た物の、ルッキーニの多重シールドですら一枚を残すだけで他は破られてしまっている。ネウロイは戦う度にその戦力を増して来ていた。

大神「後二機！ 各員奮闘せよ！」

エーリカ「りょーかい！ ってミヤフジ！？」

芳佳は人型ネウロイと平行して飛んでいる。向こうのネウロイも攻撃して来る様子もなく、二人はただ互いを見つめあって飛んでいるだけであった。

芳佳「な、なんで……撃ってこないんだろう……まさか……この子……」

美緒「宮藤！ 何をやっている！ 撃て！ 撃つんだ！」

芳佳「で、でも……坂本さん……」

大神「宮藤芳佳軍曹！」

大神の大声に、芳佳は反射的に人型ネウロイから距離を取った。

芳佳「大神さん……」

大神「宮藤芳佳軍曹！ 君の覚悟はその程度か！」

芳佳「な、何を……」

大神「守るんじゃないのか！ 皆を守るんじゃないのか！ 守る為には撃たねばならない時もある！ 君には君にしか出来ない事がある筈だ！」

芳佳「私に……私に出来る事……」

大神が芳佳を一喝している間も、戦闘は続いて行く。四人がかりで大型ネウロイを攪乱し、徐々に敵の装甲を削る。

美緒「宮藤の奴……もう大丈夫か……ッ！？」

一瞬の気の緩みを突かれて、坂本の元に収束された光線が襲う、この距離では回避は間に合わない、瞬時の判断でシールドを展開するが、しかし。

美緒「――そんな」

シールドは光線を防ぎきれず、坂本を襲った。

ペリーヌ「少佐！」

芳佳「坂本さん！」

大神「芳佳君！ 君が助けるんだ！ 君にしか出来ない事だ！ 完璧に坂本さんを治療してみせるんだ！」

芳佳「は、はい！ 私のせいで……私があんな事しなければ坂本さんは……絶対に治してみせます！」

落下していく坂本を芳佳が空中でなんとか捕まえ、最寄りの島に緊急着陸する。芳佳は全神経を集中させて治療に取り掛かった。ペリーヌ「私が……指一本触れさせませんわ！ 安心して治療をなさい！」

芳佳の後ろをペリーヌが守る、大神はその姿を一瞬だけ見てすぐに敵にと向き直った。

大神「どう思うバルクホルン大尉、あの人型ネウロイ、ただこちらを観測しているように見える」

バルクホルン「ああ、考えにくい事だが。ネウロイにも感情や意思のような物があるのかもしれない……どうした！？ 何故引いていく！？」

大型ネウロイと人型のネウロイは一定時間戦った後、逃げるように戦場を脱して行った。

大神「退却したのか……！？ 成程、確かに意思があるような行動だ……」

エーリカ「坂本少佐は大丈夫なの！？」

リーネ「基地の方が設備も充実しています！ 早く基地に戻りましょう！」

負傷した坂本を基地に移送し、芳佳が懸命の治療を続ける。

傷が完治し、坂本が目を覚ましたのはその日の夕方の方であった。

芳佳「……大神大尉」

大神「芳佳君、お疲れ様。大変だったね」

夕焼けのテラス、大神は一人海を眺めていた。

芳佳「本当に、本当にすみませんでした！ 私の……私の身勝手な行動で……坂本さんを負傷させてしまいました……」

大神「確かに、戦闘中のああいふ行動はよくないけど。こうして坂本少佐を救う事が出来たんだ」

芳佳「私……何も分かっていますでした……口先だけで守る守るって……現実を守るどころか……怪我をさせてしまうなんて……」

大神は無言で芳佳の頭を撫でてやる、芳佳は流れて来る涙を懸命に拭いていた。

大神「優しい子だね、芳佳君は。でも、今は君のような子が戦争に出てこなければいけない時代なんだ……人類の天敵ネウロイが今もこの地球上で多くの人々を殺めている。魔の者達も虎視眈々と人類を狙っている……芳佳君の気持ちも分かる、あの人型ネウロイは確かに変だった。でも今君は軍人だ。それを忘れてはいけない」

芳佳「はい……ごめんなさい……ごめんなさい大神さん」

大神「ああ、今日は疲れたね。芳佳君の美味しい御飯が食べたいな。きつと、皆もそうだ」

芳佳「はい……はい！ 迷惑を掛けた分、一杯作ります！」

大神「ああ、楽しみにしているよ」

芳佳は一生懸命涙を拭いてから、笑って調理場にと走っていった。

大神「……さて」

大神はそんな芳佳を見送って、意を決したように基地の内部に戻っていった。

その日の夜、今日は綺麗な月夜である。月光に照らされながら、

坂本は中庭を歩いていた。

大神「傷の方は大丈夫ですか、坂本さん」

美緒「大神か……どうしたこんな夜中に」

大神「……女性にこんな事を聞くのは失礼かもしれませんが、坂本さんは今年で二十になられるんですね？」

美緒「……そうだ」

坂本は静かに答えた。一般的にウィッチがその絶対的な魔力を発揮出来るのは二十歳前後まで。多くのウィッチ達は二十を前に引退して行くのが現状だ。そんな中坂本は現在十九、未だ一線級の力を発揮しているのが奇跡のような物だった。

大神「今日のシールド、坂本さんは止めれると思って展開した。ですが……」

美緒「分かっているさ、大神の前にバルクホルンとミーナが来て同じ事を言ってきた。引退しろとな。失礼な奴らだ。私はまだまだ戦える」

大神「……坂本さん、皆貴方を心配しているのです。貴方は、ここまでよく戦って来ました。全てのウィッチの鏡とも言える働きです」

美緒「……私が、無用だと言うのか」

虫の鳴く声だけが辺りに響く、　大神と坂本は顔を見合ったまま、
どちらも動かない。

大神「今、　坂本さんに死なれる訳にはいけません。　宮藤軍曹を
始め、　貴方を慕うウィッチは多くいます」

美緒「だが！　私の声は宮藤に届かなかった！　きつとお前が居な
ければもっと厳しい状況に陥っていただろう！　もう……私は……
居らない人間だと言うのか！」

大神「坂本少佐！」

大神は坂本の腕を引く、　細く、　か弱い乙女の腕である。　上官
ではあるが、　自分より年下の少女の手なのだ。　大神は優しくそ
の手を取り。　諭すように言う。

大神「自分達も……勿論嫌です！　出来る事ならば貴方と共に飛び
たい！　ですが……ですが……」

美緒「……私は、　小さな頃からずっとネウロイと戦って来たんだ
……私の……人生の全てなんだ……その全てを失った私など誰も慕
ってくれない！　私は！　私は飛び続けなきゃいけないんだ！」

大神「坂本さん！」

大神は坂本の肩を掴む、　坂本の目にはうっすらと涙が浮んでいる。
これまでの人生を全てネウロイ殲滅の為に費やして来た少女、
その双肩は今やあまりにも弱々しかった。

大神「坂本さん……悲しい事を言わないでください……魔力を失お
うが！　鋼鉄の箒を失おうが！　皆は貴方を慕います！　貴方の背
中を追いかけて皆走っているんです！　そんな情けない事を言わな
いでください！」

美緒「大神……でも……でも……私は……飛びたいんだ……せめて
……この戦いが終わるまででいい……私が宮藤を連れて来たんだ。

せめて宮藤が一人様になるまでは……」

大神「……坂本少佐！」

坂本の気持ちは大神にも痛い程に伝わっていた。　だが、　ウィッ
チの運命に逆らう事は出来ない。　なんとかして、　目の前の少女

に力を与えたい。せめて、あとほんの数ヶ月でいい。大神は無意識の内に彼女を抱きしめていた。

美緒「お、大神……？」

大神「（エリカ君のようにいかないかもしれない……でも……それでも！）」

大神は坂本を抱きしめたまま、霊力を最大に放出する。大神の体から目視出来る程に霊力が溢れ出す。

美緒「な、何をして……」

大神「坂本さんに……自分の霊力を渡します。意味の無い事かもしれない……それでも……受け取ってください」

美緒「……温かいな」

坂本はその霊力ごと大神を受け入れ、目を閉じる。あながち、大神の行動は間違っていない。エリカの治癒能力と原理は同じである、いささか強引なやり方ではあるが。

大神「……なんだが、気恥ずかしいですね」

美緒「お、お前からして来たんだろう……その……もっと……近づいていいか？」

大神「ええ……どうぞ」

数分経ってから、少し冷静になって来て二人とも気恥ずかしくなってしまう。それでも心地いい大神の霊力に坂本は大神の肩に寄り掛かる。

美緒「……皆の言う事も分かる……でも……私は戦いたいんだ」

大神「……まったく、頑固ですね。坂本さんは」

美緒「な、なんだと！ 私は上官だぞ！」

軽口をいいながらも、たっぷりと三十分程抱き合いながら坂本は魔力を補充した。

大神「どうでしょうか？」

美緒「うむ……大神のが体の中に入ってるのを感じるぞ」

大神「そ、そうですか」

かなりアレな発言であったが、大神は坂本から離れて立ち上がった

た。少し名残惜しそうな表情をする坂本であつたが大神が立つたので一緒に立ち上がった。

大神「少しでもこちらから見て違和感を感じたら、戦闘中でも離脱して貰います。これだけは約束してください。扶桑海軍の一員として、貴方を失うのはどうしても避けたいのです」

美緒「……扶桑海軍としてか？」

大神「え？」

美緒「お、大神は……どうなんだ！」

大神「……当たり前前の事を聞かないでください、自分も絶対に貴方を失いたくありませんよ」

美緒「そ、そうか……ならば、コマメに魔力を補充しなくてはいけないな！」

大神「……はい？」

大神は坂本が何を言いだしたのか咄嗟に理解出来なかったが、坂本はそっぽを向いて乱暴に言い放った。

美緒「だから！ またお前から補充する！ ……私が呼んだ時は部屋に来てくれ。以上だ」

大神「……了解しました。自分のでなければいくらでも」
坂本の衰えが解消された訳ではない。だが、もうしばらくは空を飛び続ける事が出来るだろう。

決戦の日は、刻一刻と迫っている。

次回予告

大神「ついにこちらから攻勢に出る事となった、だが俺らの目の前に現れたのは巨大な空母型ネウロイだった。ウィッチーズ全員で攻撃しても苦戦を強いられる戦いに、一筋の光が差し込んだ。

次回「光は東方より」 大正桜に浪漫の嵐！」

第八話「光は東方より」(前書き)

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SS

第八話「光は東方より」

第八話「光は東方より」

俺、大神一郎がストライクウィッチーズに赴任してから早くも数ヶ月が過ぎた。

ついに俺達ストライクウィッチーズが攻勢に出る事になった、まずは小型の巢を潰しに掛かったのだが現れたのは俺達の想像を遥かに超える敵だった。

ミーナ「以上、これが本作戦の概要です。作戦に備え明日は全員オフにしますが、スクランブルの可能性もあるので常に数人は基地に残るようにしてください。出撃は明後日の正午。各員準備をお願いします。それでは解散してください」

ミーティングルームには全てのウィッチ達が集まっている。これからストライクウィッチーズが攻略するのは複数確認されている小型の巢の中でも一番重要と言われている地点だ、ここを攻略する事で戦艦の砲撃が超巨大敵拠点に届くようになる。ウィッチ達の手が届くくらい強力とは言え、支援砲撃は欲しい所である。

ルッキニー「ようし一郎！どっちがネウロイ倒せるか勝負しようよー！」

バルクホルン「遊びじゃないんだぞルッキニー少尉」

解散を言い渡した筈であるが、大神の周りから皆離れようとしていない。ミーナは溜め息を付いて大神の近くに座る。

ミーナ「まったく、いいですか皆さん、私から正式に必要な以上の接触禁止を解除しましたが、節度は守るんですよ？」

エーリカ「一番節度守ってないのはシャーリーだよねえ。もう全部だもん」

シャーリー「その事は忘れてくれって言っただろ！そう言うハルトマンだっていつもイチャイチャしてるじゃないか！」

芳佳「……その、毎朝違う方と寝ているのは駄目だと思います」
大神「よ、芳佳君!？」

芳佳の爆弾発言で一氣に場が沸騰する、大神は確かに嫌な予感を感じとっていた。

坂本「どういう事だ大神! お前は……道理で、随分手馴れていると思ったのだ!」

大神「誤解です坂本少佐!」

バルクホルン「宮藤、詳細を頼む」

芳佳「え、あの……毎朝お掃除に行くとハルトマンさんだったりエイラさんだったりサーニャちゃんと寝ているので……」

バルクホルン「大神、齒を食いしばれ」

大神「違うんです! バルクホルン大尉!」

この手の修羅場にどうにも縁がある大神である。それでもまだ「彼女達」が居ないのでマシな方ではあるが。

エーリカ「ねー坂本少佐」

美緒「なんだハルトマン、いくらお前程の戦績を残そうともやっ
て良い事と悪い事が

」

エーリカ「手馴れているって言ったけど。一郎と何したの?」

ミーティングルームの時間が止まる、坂本は固まってしまいどうにか誤魔化さなければと思いをフル回転させる。

美緒「別に、なんでもないさ。なあ大神」

ルッキーニ「あーそう言えば最近何回か、夜坂本少佐の部屋にイチローが入るのを見たよ?」

ペリーヌ「大神大尉! あ、貴方まさか……少佐を……!」

エーリカ「……一郎?」

大神「それは……坂本少佐と今後の扶桑海軍について語りあって――」

エイラ「お、お、オマエハー! 私の裸を見ただけでは飽き足らず少佐とまでそんな事しているのかァー!」

エイラの一言が決定打だった。大神の長い長い夜の始まりであった。超個性派揃いの帝国華撃団に巴里華撃団、大神は内心その彼女達に比べればストライクウィッチーズの面々はまだまだアクの少ない方だと思っていたが。誤解を解き終わったのは既に日付が変わる頃であった。その間、大神は彼女達の怖さを存分に思い知るのであった。

翌朝、大神が目を覚ますと隣にはリーネと芳佳が眠っている。凄まじい出来事であった。昨夜正座の大神を取り囲んだ少女達は終盤になると謎の取り決めをし始めた。これまでエーリカ、エイラ、サーニャのみが大神と寝ている事が不平等だと訴えるミーナを除く他の隊員達の圧力によって、夜の大神の隣は輪番制で変更していくと言う驚愕の新ルールが採用された。ジャンケンによって初日に選ばれたのは仲良しコンビのリーネと芳佳であった。

大神「……まずい事になった」

帝都や巴里の皆に知られたら昨夜以上の惨状が繰り広げられるであろう。自業自得とは言え溜め息が止まらない大神であった。

今日は攻勢に出るストライクウィッチーズにとって最後の休みになる。ゆっくりと体を休ませてあげよう。そう考え大神は静かに自分の部屋を出た。

ミーナ「あら、おはようございます。随分お疲れのようですね？」

大神「……勘弁してください」

昨夜何度も比較的冷静であったミーナに助けを求める視線を送った大神であったがことごとく無視されてしまっていた。

ミーナ「自業自得です、この事が他の兵達に知られたら大騒ぎなんですからね？　くれぐれもお願ひします」

大神「……分かっています、ミーナ中佐はこんな朝早くから何をしていたんですか？」

ミーナ「軍からの緊急連絡があったの。これを見てください」

大神「急な天変地異？」

報告書に書かれていたのは日蝕や高波と言った普段は起きない怪奇現象がここ数日起きているとの事であった。

大神「東から徐々に発生していますね……新手的ネウロイでしょうか？」

ミーナ「その可能性もあるわね……一応頭に入れておくべきかしら」明日に迫った作戦を今から変更する訳にはいかない。念のために注意を払っておく事を確認してその場を離れるミーナと大神であった。

大神「さて……どうしようかな」

まだ芳佳は寝ているので朝ごはんもまだであろう。大神はブラブラと基地を散歩する事に決めた。

廊下を歩いて行くと、エーリカの部屋の前にバルクホルンが立っていた。今まさにエーリカを起こそうとしていたようで気合を入れて部屋に入ろうとしている。

大神「おはようございます、バルクホルン大尉」

バルクホルン「ん……大神か、何もしていないだろうな？」

ギロつと大神を睨むバルクホルン、昨夜の取り決めで大神が芳佳とリーネと寝ていた事は周知の事実なのだった。

大神「も、もちろんです。バルクホルン大尉」

バルクホルン「……大神、前から気になっていたのだが。なぜ私には敬語なのだ」

大神「階級が同じなので……軍も違うので一応と思ひまして……」

バルクホルン「階級は一緒だが年はお前の方が上だ。敬語は必要ないだろう。どちらかと言えば私が敬語で話すべきだ」

大神「了解しました。以後敬語はやめます、ではなんと呼べばいいでしょうか？」

バルクホルン「うむ……」

大神の言葉を聞いて、バルクホルンは少々考えると頬を染めて大神を見つめた。

バルクホルン「皆がいる時はバルクホルンでいい……色々うるさい奴らもいるしな……だが！ ……二人の時はトゥルーデと呼ぶんだ！」

大神「分かったよ、 トゥルーデ」

バルクホルン「……」

体の底からこみ上げてくる物を感じて身もだえしそうになるバルクホルンであったが、 大神の目もあったのでなんとか平静を保つ事が出来た。

大神「これからエーリカ君を起こすのかい？」

バルクホルン「ああ……そうだ大神、 お前も手伝ってくれ」

大神「ああ、 いいよ」

バルクホルンは一応前回のような格好をしていたらあまりにもかわいそうなので一旦部屋の中を覗く、 今日はずっとズボンを穿いているようだったので大神を手招きして中に入れる。

大神「（す、 凄い部屋だな……）」

バルクホルン「（何度言ってもこれなのだ、 大神からも言ってくれ……さて）」

バルクホルン「ハルトマン起きろ！ もう朝だ！」

エーリカ「……後五時間」

バルクホルン「寝過ぎだ！ 早く起きろ！」

エーリカ「……おやすみ」

エーリカは一応ベッドの上に居るが、 その周りには脱ぎ散らかした服が散乱している。

バルクホルン「……まったく、 大神から何か言ってやってくれ」

エーリカ「……またそんな事言って、 トゥルーデはいつからそんな嘘付きに——」

大神「エーリカ君……流石に片付けた方がいいと思うが……」

エーリカ「嘘……！」

エーリカはガバッと起き上がって大神達の方を向く、 まさか本当に大神が居ると思っていなかったので驚愕の表情を浮かべている。

エーリカ「……トゥルーデのいじわる」

エーリカはベッドに倒れこむと顔を枕に突っ伏した。

バルクホルン「つ、連れて来た訳じゃないぞ!? たまたま部屋の前を大神が通り掛かったからだ!」

エーリカ「……引いたよね、一郎」

大神「なぜ引くんさい? それより今日はせっかくの休みなんだ。一緒に片付けてしまおう」

エーリカ「え……手伝ってくれるの?」

バルクホルン「駄目だぞ大神! こういうのは自分でやらなければいけないのだ!」

大神「だが、これは一人で出来る量を遥かに超えているよ。手伝うから一旦片付けてしまおう」

エーリカ「ありがとう一郎……そんな優しい所が大好き」

バルクホルン「な、な、何を言っているのだハルトマン!」

突然の告白にバルクホルンは完全にテンパっている。

大神「た、隊員としてって事だろう?」

エーリカ「んーん、男の人として、一人の人間としての一郎が大好き」

バルクホルン「……」

大神「な……なんと言うか、ありがとうエーリカ君、嬉しいよ」

エーリカ「返事は戦いが終わってからでいいよ、一郎の事情は察してるつもりだし。さ、頑張ってお部屋掃除しよー」

あまりの展開に閉口してしまうバルクホルン、しかしどこかでここまで素直になれる彼女に羨ましさを感じていた。大神にとってもここまでストレートに好意を伝えられた事はあまり経験のない事であった。その後は何事も無かったかのように大掃除が始まり、

数時間掛かりでエーリカの部屋をなんとか綺麗にしたのであった。

エーリカ「ありがとうー凄いね、来たばかりの時みたいだよ!」

大神「次からは一人でやるんだよエーリカ君」

エーリカ「りょーかい。ありがとう一郎」

大神「じゃあ、俺は行くよ」

そう行つて部屋を後にする大神を見送つたエーリカとバルクホルン、扉が閉まるとエーリカはベッドにと再び倒れこんだ。

エーリカ「……言っちゃったなあ」

バルクホルン「ある意味、あそこまで素直に言えるのは感心するぞ」

エーリカ「一郎、カールスラントに来てくれないかな」

バルクホルン「……無理だろうな。今回の任務が終われば扶桑に帰るだろう」

エーリカ「私とトゥルーデとミーナに一郎を加えてさ、カールスラント華撃団なんてどうかな？」

バルクホルン「……ハルトマン」

エーリカ「分かつてる、無理だよね……私、ウィッチなのに……たまにこの戦いが終わらなければいいのにつて思っちゃう……ウィッチ失格だよ。この女だらけのウィッチ社会の中で一郎に出会えた事が奇跡みたいな物なのに……」

バルクホルンはエーリカにんと声を掛けていいか分からなかった。普段あれ程天真爛漫な彼女がこんな事を言うとは思つてもみなかった。

バルクホルン「……私達が戦場に立つ限り、いつかまた大神ともめぐりあう事が出来る筈だ。今は明日の作戦を成功させる事だけを考えなければいけない」

エーリカ「……うん」

バルクホルン「……カールスラント華撃団と言うのは少し語呂が悪いな、ほかの物を考えよう」

エーリカ「……ありがとうトゥルーデ。トゥルーデも好きだよ」

ルッキーニ「あ、イチロー！　おーい！」

テラスに向うとルッキーニとシャーリーがお茶をしていた。ルツ

キーニはブンブンと手を振って大神を呼ぶ。

大神「おはようルッキーニ、 シャーリー君」

シャーリー「よう、 宮藤とリーネに変な事してないだろうな？」

大神「勘弁してくれよ……俺もいいかい？」

ルッキーニが大神の分のティーセットを走って取って来てくれた。

大神「何の話をしていたんだい？」

シャーリー「いや……別にないも」

ルッキーニ「えー話してたじゃん！ ねえ、 イチローはこのストライクウィッチーズでの任務が終わればどうなるの？」

大神「俺かい？ 多分帝国華撃団に戻るんじゃないかな？」

ルッキーニ「うじゅ……やっぱりそうだね……紐育華撃団には行かないの？ 新しく出来るんでしょ？」

先日大神が話していた事を覚えていたルッキーニとシャーリーは少しの希望を持ってその事を聞いた。

大神「多分、 俺は行かないと思うな……どうかしたのかい？」

シャーリー「私達の今後の身の振り方を話してたのさ。 指令があればその場所に行くまでだけ……ルッキーニにリベリオンを見せてあげたくてさ」

大神「良い事じゃないか。 リベリオンか……俺も行った事がないなあ」

ルッキーニ「それでね、 もしイチローと一緒に来てくれたらなっ
て話して……」

シャーリー「……その、 やっぱ難しいか？」

大神「多分、 難しいと思う……でも、 俺もリベリオンを見てみたいよ。 旅行にだったら行けると思う」

ルッキーニ「そっかあ……残念だったねシャーリー」

シャーリー「る、 ルッキーニ！ なんで私の名前が出るんだよ！」
ルッキーニ「残念じゃないの？ 私は凄く寂しいよ……シャーリーも寂しいでしょ？」

シャーリー「え……いや勿論寂しいけどさ……」

大神「ありがとう、 きつとまた会いに行くよ。 それに帝都に来

てくれれば歓迎するよ」

大神の言葉でルッキーニとシャーリーの顔が一気に明るくなる、大神自身も今後どうなるかは分からないが、一度生まれ故郷である扶桑に帰りたい気持ちは強かった。

ゆっくりとお茶を楽しむと時刻は既に昼過ぎのようであった。ふと思い出すと朝ごはんを食べていなかったので昼ごはんも兼ねて食事を取りに食堂にと向う大神だった。

食堂には芳佳とリーネ。そして坂本とペリーヌの姿があった。

芳佳「あ、大神さん！　そ、その……すいませんでした、私ずっと寝いて……」

リーネ「私も……恥ずかしいです」

大神「大丈夫だよ。今日は休みなんだから何時まで寝ていたって構わないんだ」

ペリーヌ「……まさかとは思いますが、昨晚遅くまでよからぬ事をしていて寝不足という訳ではありませんよね？」

大神「違うよペリーヌ君、昨日はすぐ寝たよ」

芳佳「(……私とリーネちゃんはドキドキしてすぐ寝れなかったけど)」

美緒「まったく、たるんでいるぞお前達。明日の作戦に支障が出ないようにな」

ペリーヌ「少佐の言う通りですわ！」

宮藤「すいません坂本さん……」

大神「隣、よろしいですか坂本さん」

美緒「ああ、宮藤、大神の分の昼ごはんを頼む」

大神は坂本の隣に着席して芳佳から昼ごはんを貰う、その様子を眺めていたペリーヌが何か言いたげに二人を見ている。

大神「どうしたんだいペリーヌ君」

ペリーヌ「……やはり、おかしいですわ！　少佐と大神大尉の仲はそこまで親密ではなかった筈です！　ずっと見ていたから分かりますわ！」

美緒「ペリーヌ、昨夜も言ったが私と大神には何もないぞ」

昨晚の話では、衰えの見える坂本に靈力を分けているので夜坂本の部屋に行っているなどと言う訳にはいなかったので曖昧な答えでお茶を濁していた。

宮藤「確かに……なんか坂本さんの大神さんを見る目が前と違う気がします」

美緒「宮藤……お前までか！」

宮藤「ご、ごめんなさい！」

大神「同じ扶桑海軍の仲間なんだ、仲がいいのは良い事じゃないか」

美緒「そうだ！ 大神の言う通りだ！」

ペリーヌ「……腑に落ちませんわ」

事実としてあの夜から明らかに二人の関係は変わっているのだが、

上官として、人生の先輩としてそのような面を宮藤達に見せる

訳にはいかないと必死に坂本は誤魔化した。

リーネ「明日の作戦……大丈夫でしょうか」

美緒「なんだリーネ、心配か？」

宮藤「私も少し怖いです……」

リーネはずっとこの事が気になっていたようだった、やはりストライクウィッチーズにとって初めての攻勢とあって皆それなりに重圧を感じていた。

大神「分かるよ、俺も考えれば迎撃戦や大きな決戦はいきなりの事が多かったし、こうやってじっくりと作戦を立てての攻略戦って言うのは経験が少ないかもしれない」

美緒「うむ……しかしこの一大反攻作戦が成功すれば人類に取っては大きなプラスになる……怖いのは私も一緒だ。皆の背中を皆で守り合えば絶対成功する筈だ」

大神「坂本さんの言う通りだよ。俺が芳佳君とリーネ君を守るから。芳佳君とリーネ君は俺を守ってくれ」

宮藤「そんな……私なんかが大神さんを守るなんて……でも精一杯

頑張ります！」

リーネ「私も、皆さんを出来るだけ援護出来るように頑張ります」
経験の浅い芳佳とリーネの覚悟も決まったようだ、ベテランの域に入りつつある大神と坂本でさえ重圧を感じているのだ。彼女たちのプレッシャーは相当の物であっただろう。

その後も芳佳達と談笑してから大神は食堂を後にした。

芳佳達にバレないように今晚霊力補給をしたいと伝えようとする坂本の姿が非常に可愛いらしかったがそれを言ったらボコボコにされそうだったので大神は何も言わずに頷いた。

大神「さて……これで皆と——」

廊下を歩いていると物凄い衝撃が大神を襲った。何者かに部屋に連れ込まれたのだ。

エイラ「……ヨシ」

サーニヤ「エイラ……無茶し過ぎよ」

エイラ「こいつにはコレくらいが丁度いいんだヨ」

サーニヤの部屋に連れ込まれた大神は薄暗い部屋の中頭をさすった。

大神「もうちょっと穏便に入れて欲しかったな」

エイラ「……浮気者にはこれくらいでいいんだヨ」

昨晚に一番の衝撃発言にして話が拗れた最大の原因がエイラの一言であった。

もはや誤魔化しようもなくなただ真実を話す事しか出来なかったので皆に大神とエイラの痴態が知れ渡ってしまった。

サーニヤ「大神さんを困らせたら駄目よエイラ。大神さんは浮気者なんかじゃないわ」

エイラ「二十股以上してる奴がどこの世界に居るんだヨ！どこからどう見ても浮気者だ！」

エイラはそう乱暴に言ってベッドの上にタロットカードを並べる、

よく当たるとの噂は大神も聞いていたが実際に彼女がやっている所は見た事がなかった。

エイラ「浮気者の末路を占ってやるヨ」

大神「お手柔らかに頼むよ」

エイラ「……」

エイラはしばらくタロットカードと睨めっこを続け、数分後に顔をあげた。

エイラ「占いによると、お前にはスオムス生まれの超美少女がお似合いだと出ているナ、早めに告白すればイイゾ」

サーニャ「……エイラ」

エイラ「……冗談ダヨ、多くの人に囲まれ皆に慕われる、今と同じダヨ」

大神「そうか、良かった。皆の幸せと平和を守れるように頑張るよ」

エイラ「……その中に、私とサーニャは入ってるノカ？」

エイラは少し俯いてから呟くように発した。今まで何度も自分の未来を占おうと思ったが怖くて出来なかった。エイラは吐き出すように小さな声で、無け無しの勇気を振り絞って大神に尋ねた。

エイラ「どうせ、帝都や巴里に山ほど恋人が居るんだロ？……私達の事なんてすぐに……」

大神「恋人なんて居ないよ。俺は、仲間の事を忘れたりとは絶対にしない。エイラ君もサーニャ君も共に戦った仲間だ。生涯の友だよ」

サーニャ「大神大尉……ありがとうございます……私も……大神さんの事忘れません」

エイラ「……まあ、当然だよな、裸まで見られて忘れられたらたまったもんじゃネーヨ」

大神「……そこら辺の記憶はお互いに忘れた方がいいと思うけど」
エイラ「私の裸ダゾ!? もっとありがたがれヨナ!」

外は既に夕焼けに包まれている。今日は皆早めに寝て明日に備える手筈になっている。

その後、皆で一緒に夕食を取り明日の必勝を誓い合ったストライクウィッチーズであった。

翌日、 正午、 ストライクウィッチーズ基地滑走路

ミーナ「……正午になりました。 それではこれより作戦を発動します。 皆の奮闘に期待します」

バルクホルン「では、 通達のように編隊を組みネウロイ基地に攻撃を仕掛けるぞ！」

ルッキーニ「よっしっ！ イチローあれお願い！」

大神「お、 俺かい？」

シャーリー「ま、 あれは一郎じゃないと格好付かないしな」

ペリーヌ「早くしないと時間が無駄ですわ」

大神「ああ……ストライクウィッチーズ出撃！」

「了解！」

大神の声に、 皆が同調して声を上げると、 ウィッチ達は編隊を組んでネウロイの巣にと向かって行った。

小型の巣までは数十キロ程、 先日の調査では巣の大きさは三百メートル程度、 まだまだ成長途中の巣である。

坂本「目標確認、 内部に複数のコアが見えるが外にはあまりネウロイの姿は見えないようだ！ 一気に叩くぞ！」

ミーナ「まずは各個撃破です！ 巣の中から本命が出てくるまで数を減らします！」

「了解！」

ウィッチ達は各々の判断で巣の外壁近くを飛ぶ、 内部から次々と小型ネウロイが出現する。

エーリカ「入れ食い入れ食い！」

バルクホルン「ふっ、 全部倒せばカールスラントの勲章全てでも足りない功績だな！」

カールスラント組はその卓越した技能で次々と小型ネウロイをなぎ払っていく。

芳佳「大神さん！ 指示をお願いします！」

大神「侵略する事火の如し！ 火作戦で行くぞ！」

リーネ「了解です！」

大神も新兵達の事を見守りながら次々と敵をなぎ払っていく。

観測手「凄いな……流石エース部隊だ」

離れた所から戦闘を観測する兵達は驚愕の声を上げる、ウィッチ達の働きはまさに一騎当千、小型ネウロイ程度では最早相手にすらなっていない。

美緒「出てくるぞ！ 大型ネウロイだ！」

ミーナ達が当初「本命」としていた大型ネウロイ、先日の戦いで確認された物と同等のサイズであった。

芳佳「あれは……！」

その大型ネウロイを指揮するかのよう、またあの人型ネウロイが現れた。

美緒「宮藤……！」

芳佳「分かっています！ 守る為に……ごめんね！」

芳佳は人型ネウロイに威嚇の射撃を開始する、攻撃する事すら出来なかった前回の戦闘から比べると大きな進歩である。

エーリカ「一回コツ掴んじゃえば……これくらい！」

エーリカは大型ネウロイの死角に入り込み攻撃を途切れなく続ける。

むき出しになった

大型ネウロイのコアを撃って見事一人で大型ネウロイを仕留めてみせた。

エイラ「サーニヤ、 1、 4、 6、 9ダ」

サーニヤ「うん」

エイラの指示通りの座標に弾頭を打ち込むサーニヤ、そこに吸い込まれるようにネウロイがやってくる。

エイラ「よっしビンゴダ！」

大神「（やはり、エイラ君とサーニヤ君も入る事で格段に戦闘能力があがる……これならば行ける！）」

ペリーヌ「リーネさん！ 援護を！」

リーネ「はい！」

ウィッチ達の戦いはまさに圧倒的であった。ネウロイの巢を制圧するのも時間の問題に見えたが、しかし。

芳佳「坂本さん！ 人型ネウロイが巢の中に！」

美緒「深追いはするな！ まずは外の敵を……なんだ！」

人型ネウロイが巢の中に入った途端、衝撃が辺りを疾走する。

大神「一旦引くんだ！ 何かがおかしい！」

ミーナ「総員！ 一時下がってください！ 様子を見ます！」

ミーナの指示を聞くまでもなく、ウィッチ達は一定の距離を取っていた。これまで実戦を経験してきたの勘のような物であろうか、彼女達は本能的に「ヤバさ」を感じて離脱していた。

シャーリー「巢が……形を変えている？」

美緒「何が起こっているんだ……皆油断するなよ！ 何が起こってもおかしくはない！」

巢はドンドン形を変え、一機のネウロイにと変形する。まるで、人類の持つ兵器、戦艦のような形にと変形した。

美緒「……戦艦？ いや……なんだこの反応の数は！ 戦艦じゃない！ あれは空母だ！ 内部にとんでもない数の小型ネウロイが搭載されている！ 奴ら！ 巢を空母に作り変えたんだ！」

坂本が言い終わるや否や、小型のネウロイが射出される。数百はあるのか、空母型ネウロイ自体も多く、光線を放ってこちらに攻撃を仕掛けて来る。

大神「あの空母型ネウロイを落とせばこちらの勝ちなんだが……」
バルクホルン「だ、だが……数が多すぎて空母型に近づけん！」
エイラ「これじゃあ予知したって一緒ダヨ！」

美緒「……ミーナ！」

ミーナ「……」

ミーナは決断を迫られる。坂本の表情からも分かるように、戦況は大きく変わった。現在の戦力ではあの空母型ネウロイを落とせる見込みは少ない。こちらにも相当の痛手を追うだろう。

大神「自分が、出来るだけ空母型に斬り込みます！ それまでに退路を！」

ミーナ「いけません大神大尉！ 危険すぎます！」

大神「このままではどちらにしろ全滅です！ エーリカ君！ ペリーヌ君！ 全力を出し切っている！ 余力を残さず広範囲魔法で道を開いてくれ！ このままでは手遅れになる！」

エーリカ「そんな！ 一郎はどうするの？」

大神「俺は光武に乗っている！ 皆より生存率が高い！」

これは、大神の嘘である、確かに光武に乗っている分生身ではないが、光武にはウィッチ達と違いシールドを張る能力が備わっていない。危険な事には変わりはないのだ。

美緒「よせ！ 大神！」

大神「大丈夫です！ 行きます！」

大神は光武を飛翔させ、おびただしい数のネウロイの群れに突っ込んで行く。数十のネウロイが大神の光武を取り囲むが、大神はそれらを全て斬り伏せる、だが、いかんせん数が多すぎる、斬り伏せた倍のネウロイが大神を襲わんと集まりだしていた。

その様子を、一番遠くで眺めていたのはリーネであった。支援砲撃すら及ばない程のネウロイの群れ、自分ではどうにも出来ない事はどうの昔に理解していた。

リーネ「誰か……誰か大神さんを――」

そのリーネの言葉を遮って、猛烈な旋風がリーネの横を通り過ぎる。

リーネ「何……？ これは……さくらの花びら……！？」

さくらの花びらのように見えたのは霊力の放出、リーネの手のひらに落ちる頃にはその花びらは消えていた。

大神「グッ……！ せめてウィッチの皆だけでも引いて貰わなければ！」

孤軍奮闘する大神の背後に複数のネウロイが迫る、その動きを止めたのは、ウィッチでも魔法でもない。凜とした。少女の一

喝であつた。

——そこまでよ！

戦場に声が響く、勿論、ネウロイは人語など理解していない、それでも動きを止めたのは、あまりに強力な八つの霊力、それに反応してネウロイの動きは制止して、その霊力の発信源に向き直る。

その隙に、大量のネウロイを葬り去る光武達。ウィッチ達はその姿を啞然として見つめていた。

「『帝国華撃団、参上！』」

東方より差し込んだ光、経験、戦力共に最強とも言える帝都の護り手達がブリタニアの空に馳せ参じていた。

さくら「お待たせしました大神さん、帝国華撃団、これより指揮下に入ります」

すみれ「まったく、相変わらず無茶をなさっているようですね」

大神「皆……来てくれたのか！」

マリア「巨大な反応を感知したので、一足先にやって来ました」
アイリス「お兄ちゃん久しぶりー！ 会いたかったよ！」

紅蘭「それにしても、ごっつい数やなあ」

カンナ「久々の戦闘で腕がなるぜ！」

話ながらも、彼女達は次々とネウロイを倒して行く。李紅蘭の手によって改造された光武は全て魔道エンジン搭載の飛翔ユニットを装備している。空をも制した彼女達に敵など存在しなかった。織姫「まったく、少尉さんは、あ、今は大尉さんでしたね。

いつもピンチなんですから」

レニ「でも、大丈夫。僕達が揃えば、どんな敵だって倒せる」

美緒「これが……帝国華撃団」

ペリーヌ「無茶苦茶ですわ……」

ペリーヌの言う通り、無茶苦茶な戦力である、これまで彼女達はネウロイの戦闘経験等無かったが、そんな物など関係無いと言わんばかりに次々と撃破して行った。

大神「小型ネウロイは帝国華撃団が引き受ける！ ウィッチの皆は空母型を！」

美緒「し、しかし、あの空母型に我々の攻撃が通るかどうか！」
マリア「要は、あの装甲を剥がしてしまえばいいのですね？」

ミーナ「え、ええ。そうよ」

どこかしら似た雰囲気を感じ取ったのか、マリアがミーナに通信を入れる、マリアは皆を見回し、大神に進言する。

マリア「隊長、支援砲撃あのネウロイの装甲を吹き飛ばしましょう。既に射程内です」

大神「そうか……君達は「あれ」に乗って？」

マリア「ふふっ……米田中将がハリキッていましたよ。久しぶりの大戦だって」

大神「……よし！ 皆、一時撃退してくれ！ 支援砲撃が来る！」
バルクホルン「離脱？ 何を言っているのだ！ 戦艦の支援砲撃程

度ではあの空母には傷すら付かないぞ！」

ルッキーニ「な、なんか来たー！」

ルッキーニの声に振り向いたウィッチ達は、まさに絶句してしまった。

エーリカ「……ねえ、私夢でも見てるのかな」

ミーナ「……私も、頭が痛くなってきたわ」

彼女達が絶句する訳、有り得ない光景が目の前に広がる。巨大な、巨大を通り越しデカ過ぎる戦艦が「空を」飛んでいる。

大神「ミカサ！ 応答願います！ 支援砲撃をお願いします」

かえで「了解したわ、久しぶりね大神君」

超弩級空中戦艦ミカサ。帝国華撃団の決戦兵器であり。この時代全ての戦艦を凌駕する超兵器である。その全長は約九キロ。

報告されていた天変地異はミカサによって引き起こされていたのだ

った。

ミーナ「しかし、通常兵器で大丈夫でしょうか？」

大神「問題ありません。ミカサの主砲は九十三尺、メートルに直すと二十八メートルあります」

この当時最強の戦艦大和の主砲が四十八センチである事を見ても、帝国華撃団のとてもなさが分かる。

芳佳「す、凄い！ それなら！」

ペリーヌ「凄いとかさというレベルじゃありませんわ！ オーバーテクノロジーも程々になさい！」

大神「とにかく引くんだ！ 主砲の衝撃で俺らまで吹き飛ばされてしまう！」

全速力で皆が空母型ネウロイから離脱して行く、全員の離脱が確認された事が司令の米田に報告されると老兵はほくそ笑んで座席に座りなおした。

米田「さてさて、ネウロイに見せてやろうかい。帝国華撃団の力を」

かえで「主砲、発射準備完了です！」

米田「よし！ 主砲！ 発射！」

轟音と共に、主砲が発射され空母型ネウロイに直撃、体積の半分以上を吹き飛ばしてコアがむき出しになる。

大神「未だ！ 皆！」

ミーナ「了解！」

ウィッチ達が即座に編隊を組んで空母型ネウロイに向う。

カンナ「対した機動力だなー！」

マリア「やはり、空中戦闘は彼女達の方が慣れているわね」驚きの声を上げる帝国華撃団の面々であった。

バルクホルン「行くぞ！ ハルトマン！ ミーナ！」

エーリカ「帝国華撃団にばかり良い所取られてたら立場無いもんね！」

ミーナ「そうね、皆さん！ 総攻撃よ！」

ミーナの指示で、ウィッチ達が一斉に攻撃する、空母型ネウロイは崩壊を始め、ネウロイの巢攻略戦は無事に完了したのであった。

さくら「大神さん！」

取りあえずウィッチ達は帝国華撃団のミカサにと着艦する、内部の部屋に入ると、帝国華撃団の面々が待っていた。あつという間に皆に囲まれる大神であった。

すみれ「まったく！ 巴里からなかなか帰って来ないからこちらから来てあげましたわ！ 感謝なさい！」

マリア「お変わりありませんね隊長、安心しました」
アイリス「お兄ちゃん！」

大神に抱きつくアイリス、皆大神との再会に嬉しさを爆発させる。

芳佳「……大神さん、やっぱり凄い隊長なんですね」

美緒「ああ、そうだな」

エーリカ「本当に、無茶苦茶だよ帝国華撃団は」

すみれ「……あー！ い、居ましたわ！」

突然、大声を上げるすみれ、何事かと大神がすみれを見ると、エーリカを指さしてワナワナと震えている。

大神「エーリカ君がどうかしたのかい？」

李紅蘭「感動の再会はそろそろおしまいでええよね？」

織姫「そうでーす、色々聞きたい事もありまーす！」

大神「ど、どうしたんだい皆！？」

先程までの感動ムードから一転、突然空気が悪くなった皆に恐怖心を覚えて大神は恐る恐る聞く。

さくら「大神さん、基地に着いたらゆーっくりお話聞きますからね？」

さくらが手に持っていた新聞を見て、大神は自分の顔面からドンドン血の気が引いていくのを感じた。

次回予告

大神「ついに始まった最終決戦、俺達はずいに超巨大敵拠点にと攻撃を仕掛ける。苦戦を強いられるが、巴里から舞い降りた天使達によって攻略目前まで事を進める事が出来た。しかし、その最中思いもよらぬ乱入者によって大きく俺らの運命は動かされる事になった。次回「御旗のもとに」大正桜に浪漫の嵐！」

第九話「御旗のもとに」(前書き)

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SS

第九話「御旗のもとに」

第九話「御旗のもとに」

あの戦闘から数時間が過ぎた、ミカサは基地沖合数キロの所に停泊している。

俺、大神一郎を取り囲んでいるのは十九人もの少女達。胃に穴が空きそうな重圧の中、史上最悪の戦いが幕を開けようとしていた。

ストライクウィッチーズ基地、ミーティングルーム。

大神「(……最悪の展開だ)」

ミカサを無事に着水させ、帝国華撃団の面々に基地の部屋が振り分けられると早速彼女達は大神をミーティングルームにと呼び寄せた。

やはり気になるのかウィッチ達も全員集合でミーティングルームは物々しい雰囲気にも包まれている。

大神「み、皆本当に久しぶりだね……」

すみれ「それはさっきやりましたわ。わたし達が聞きたいのは。

この写真は一体どういう事なのかと言う事ですわ！」

すみれはバンッと扶桑の新聞を机に叩きつける。エーリカをお姫様だっこしている大神の一面記事だ。

エーリカ「あ、私の授与式の時だね」

織姫「エーリカ・ハルトマンです！初めて生で見ました！」

レニ「欧州では有名人だね。カールスラントのエースだ」

ウィッチ達はその外見と戦闘能力で話題に登り易い、各報道も積極的な情報を発進するので世間的な認知度は高い。

エーリカ「そんな有名かなー、それで。その写真がどうしたの？」

すみれ「どうしたじゃありませんわ！なぜ大尉とこんなに密着し

て写真を取っているかしら？」

エーリカ「え？　どうしてって……なんとなくだけど……ねえ一郎」

大神「ああ、深い意味はないぞすみれ君」

すみれ「い、い、一郎ですってえ！　大尉！　名前で呼ばせているとはどういう事ですか！？」

紅蘭「これは思った以上やなあ……」

カンナ「海外では名前で呼ぶ物なんじゃないのか？」

やはりこんな時一番冷静なのはカンナである、的確な言葉に大神はすぐに同意を示す。

大神「カンナの言う通りだよすみれ君、海外では名前で呼ぶのは珍しい事じゃない」

ルッキニー「そうそう、イチローはイチローだよ！」

アイリス「むう……お兄ちゃん！　またイチローなんて呼ばせてえ！　アイリスと同じ位の年なのに！」

大神「ま、まあアイリス、これはあだ名みたいな感じだから……」

シャーリー「お兄ちゃんだって……そう言えば一郎真っ先にルッキニーと仲良くなってたよな」

エイラ「中々私達に手を出してこないと思ったタラ……そっちの趣味だったノカ……」

大神「変な誤解はよしてくれ！」

すみれ「さくらさん！　貴方も黙っていないで何か言ったらどうなんですの！？」

さくら「え、ええ……でも、嬉しくて」

すみれ「嬉しい？」

さくら「実際に会うまで、絶対に事の真相を聞き出すなんて皆と話してましたけど……久しぶりに大神さんに会って……話せた事が嬉しくて……」

マリア「さくら……」

レニ「そうだね、僕も嬉しいよ」

すみれ「ま、まあそれは私もそうですけど……でもそれとこれとは話が別ですわ!」

そんなさくらの様子を見てウィッチ達はこれが大和撫子かと驚愕する。

エーリカ「あれがヤマトナデシコって奴なのかなー」

ペリーヌ「随分とお淑やかなのですね」

そんな彼女達を尻目に、芳佳は興奮した様子で帝国華撃団の面々を見つめる。

芳佳「凄い……帝国歌劇団だ……みっちゃんと見に行きたいって話してたんだよお……」

リーネ「帝国華撃団って、平時では舞台俳優をやっているんだっけ?」

芳佳「そうだよ! トップスタアの神崎すみれさんに男役のマリア・タチバナさん……かつこいい……」

美緒「私はそういう所は疎いのだが……広告などで見た事があるぞ」

大神「と、とにかく! 折角久しぶりの再会なんだ、祝勝会も兼ねてパーティーでもやろう!」

ルッキーニ「賛成賛成! やっぱり皆仲良しがイチバン!」

大神「じゃあ俺は早速準備に――」

ルッキーニ「そう言えば今日は私とシャーリーが一郎と寝る番だね! 楽しみー!」

ヒシツと。大神の服の裾が誰かに捕まれる、大神はあまりの重圧に振り返る事が出来なかった。丸く収まり掛けていた場合はルッキーニの天然で見事にブチ壊された。

さくら「……大神さん、色々と言撤回してよろしいですか?」

大神「ま、待つんださくら君……」

カチツとすみれが携帯式ナギナタを懷から出して展開する、他の隊員達も次々と各々の武器を構えて行く。

レニ「……隊長、失望した」

紅蘭「せやなー確か試作型の拷問器具がミカサの整備室にあったな

」

すみれ「私たちの目が無い事を良い事に……やりたい放題だった訳ですわね？」

大神「み、皆！ さくら君達に説明を――」

大神が振り返ると、ウィッチ達は既に部屋から退避していた。

ミーティングルームに一人取り残された大神であった。

大神「そ、そんな……」

さくら「桜花……」

大神「待ってくれ！ ぶ、武器はまず――」

ウィッチ達が退避した廊下に、大神の悲鳴が聞こえて来る。

エーリカ「ちよっとかわいそうじゃない？」

エイラ「自業自得ダロ」

美緒「扶桑の女は怒れば怖いからな」

ミーナ「ミーティングルームが壊れなければいいけど……」

大神の悲鳴と謝罪の声は数時間途切れる事はなく、戦闘より余程疲弊した大神が許しを得られたのは夕刻の事であった。

エーリカ「それでわあ帝国華撃団とストライクウィッチーズの合流を祝してえ！」

バルクホルン「うるさいぞハルトマン！ 何回目の音頭だと……お前、これは酒ではないか！」

大神の制裁が行われた後、ストライクウィッチーズ宿舎で祝勝会と合流記念の宴会が開かれた。米田達は帝国華撃団の整備兵や火器管制を制御する下士官達を連れてストライクウィッチーズの整備兵達と別の場所で大宴会を開いている。

エーリカ「うるさいなあ……ブリタニアでは十五からお酒飲んでいいルールなんだよおねえーリーネ？」

リーネ「そ、そうだったかな……」

エーリカ「ほらバルクホルンも飲みなよおー」

バルクホルン「こ、こら！ こぼれているぞ！」

ルッキーニ「私も飲むー!」

芳佳「駄目だよルッキーニちゃん、私達はジュースじゃないと。」

アイリスちゃんも飲む?」

アイリス「ありがとー芳佳」

芳佳は早速アイリスと仲良くなっていた。一方の大神の周りではまた一波乱起ころうとしていた。

すみれ「大尉いゝ私は一年も待つて居たんですのよおゝそれを他の女を作っているなんてえゝ今晚で一年の遅れを取り戻しますわあゝ」

大神「誰だいすみれ君に飲ませたは!」?

さくら「すいませえん大神さん。私は止めたんですけどお」

大神「さ、さくら君まで飲んでいるのかい!」?

エイラ「一郎、住むのは南の方がいいナ、白い家に庭付きで、

子供は三人位ダナ。勿論サーニャも一緒に住むからどっちも平等にするんだゾ?」

大神「なんの話をしているんだエイラ君!」? 君まで飲んで……」

美緒「何を言うかあエイラ! 大神、横須賀なんてどうだ? あ

そこは基地に近いし帝都も近くだ。子は国の宝だ。多い事にこ

した事はないぞ! ハッハッハッ!」

大神「坂本さんまで……」

大神の周りは異様に酒のスピードが早く、ドンドンと皆テンショ

ンがおかしくなっている。

ミーナ「……はあ」

マリア「……大変そうね、貴方も」

そこから離れ、少量の酒で留めているのはミーナとマリア。隊

長と隊長代理だけあって冷静である。

ミーナ「貴方は、大神大尉の所に行かなくていいの?」

マリア「年長者として、あの中に混ざるのはちよつとね。後で

ゆっくりと話をするわ」

ミーナ「……大神大尉のおかげで、随分隊の雰囲気が変わったわ。感謝しています」

マリア「私達も、昔はバラバラだったけど。隊長のおかげで一つになった……これ以上の女性関係は勘弁して欲しいけど」

ミーナ「ふふっ、無理ね。あれは天性の物よ」

すみれとエイラに押し潰されそうになっている大神を見て、マリアは小さく溜め息を付くのであった。

さくら「大神さん……私、大神さんがブリタニアに行ったって聞いた時は本当に悲しかったです」

大神「すまない、急な命令で報告が出来なくて……でもこうやって会えて本当に嬉しいよ」

さくら「はい……大神さん、さっきの話……」

大神「ん？ エイラ君や坂本さんの話かい？ あれは宵の席の事だから……」

さくら「……私、大神さんがどんな選択をしてもそれを尊重したいと思います……でも、出来るなら……ずっとお側に居たいです」

大神「さくら君……きつと、俺は戦いから抜け出せないと思う……皆の幸せと平和を守る為、この身が碎けるまで戦って行きたい……そんな俺と……一緒に戦ってくれるかい？」

さくら「はい……何処までも……ご一緒します」

大神とさくらは見つめあい、笑いあった。非常にいい雰囲気であつたが。

バルクホルン「大神いー！ 私を抱けえー！」

すっかり出来上がったバルクホルンにのしかかりを食らって倒れこむ大神であつた。

大神「ど、どうしたんだいバルクホルン！」

バルクホルン「バルクホルンじゃない！ トウルーデと呼べ！」

大神「しかし……今は大勢人が居るじゃないか」

バルクホルン「うるさいトウルーデって呼べえ！」

大神「わ、分かったよトウルーデ。だから一旦離れてくれ」

バルクホルン「嫌だあゝ」

エーリカ「……飲ませ過ぎたかな」

シャーリー「誰か写真機持っていないか？ 是非この光景を写真に残したいんだがなあ」

紅蘭「あ、うちの御手製のならあるけど？」

シャーリー「よし、頼む」

翌朝、枕元にあった写真を見て悶絶する事になるバルクホルンであった。

宴会もたけなわになり、それぞれが部屋に戻って就寝した。翌日の壮絶な二日酔いに皆苦しみながらも、ストライクウィッチーズと帝国華撃団は次の作戦にと進むのであった。

ミーナ「では、第八次報告を開始します」

ミーナと坂本はブリタニア軍参謀本部にと来ていた。帝国華撃団と合流してからの一ヶ月、まさに破竹の勢いでストライクウィッチーズは巢を攻略して行った。ブリタニアの空は徐々に解放されて行ったのだった。

ミーナ「資料にある通り、小型の巢は全て攻略しました。これにより各国の戦艦による支援砲撃が敵本丸にと届きます。後は、

最終作戦の発動指示を待つだけです」

首相「うむ……素晴らしい働きだ。合流予定である巴里華撃団の様子はどうか」

美緒「予想以上に改造作業が難航していたようですので、先日帝国華撃団の李紅蘭を巴里に派遣しました。これにより作業効率は数倍に高まった筈です」

首相「ふむ……急で申し訳ないが、三日後に最終作戦を発動させる」

ミーナ「す、三日後ですか！？ 先程報告したように、未だ巴里華撃団の光武は改造が終わっていません。とてもではありませんが数日では間に合いません」

首相「それは分かる……しかし、今回の作戦の立案者である扶桑とガリアから催促が来ている。彼らは主力戦艦を集結させている

のだ。その間にお国が焼かれるのを心配しているのだろう……本
国としても、これ以上待たせる訳にはいけないのだ。分かって
くれ」

美緒「（扶桑とガリアが焦っている……？ 何かあるな……）」

ミーナ「了解しました……ところで、マロニー大將は……」

首相「うむ……どうやら作戦に向け最後の追い込みをしているよう
だ。なにやら新兵器の開発を進めているようだ」

ミーナ「新兵器……ですか」

マロニーは声高かくウィッチーズ不要論を唱えていた一人だ、彼
の事も気掛かりであったが、今はそれ以上の追求も出来ずにミー
ナは一步後ろにと下がった。

ミーナ「以上で、報告を終わります。基地に帰って準備を進め
ます」

首相「頼むぞ。君達がこの作戦の要だ」

美緒「必ずや、ブリタニアのネウロイを一掃してみせます」

ミーナと坂本は参謀本部を後にして、ストライクウィッチーズ基
地にと帰還した。

大神「三日後か……急だな」

バルクホルン「だが……攻略すれば我々の勝利だ、ブリタニアか
らネウロイを一掃する事が出来る」

カンナ「最終決戦って訳か、この一ヶ月、戦いっぱなしだった
がそれも最後か」

さくら「作戦内容はどうなのでしょう？」

ミーナ「特別、これまでと違う事をする訳ではありません。し
かし……あまりにも巢がデカ過ぎます。全長はミカサの倍以上、

内部に居るネウロイの数は予想の段階で数千から数万」

レニ「数が多すぎる……援軍はどうなっているの？」

ミーナ「……本来ならば、各国のウィッチ達が集結する筈でした
が、何者かの妨害でその命令が解除されています。ガリアと扶
桑の戦艦は来てくれましたが……実質私達だけで数万の相手をしな

くてはいけません」

エーリカ「ひゃーカールスラントに新しい勲章用意して貰わないとね。もう勲章に付ける物がないよ」

ペリーヌ「しかし、私達がやらなければ後がありませんわ」

大神「大丈夫だ、ストライクウィッチーズも、帝国華撃団も死力を尽くして戦えばきっと勝てるさ」

ミーナ「すいません……本来ならばこれはウィッチがやらなければいけない戦いなのに……」

大神「何を言うんですか。俺達は仲間です。何より、帝国華撃団は正義の為に戦うのですから」

さくら「ええ、例えばそれが命を掛ける戦いであっても」

すみれ「私達は一步も引きませんわ」

アイリス「いつの日かこの地球に」

レニ「悪がなくなる日まで」

マリア「私達は戦い続けます」

カンナ「それが天下無敵のお！」

織姫「帝国華撃団なのでーす！」

帝国華撃団の面々はビシッと姿勢をただして大神に続く、
流石舞台俳優と言った所である。

芳佳「か、 かつこいい！」

リーネ「凄いいね……私より小さい子も居るのに……」

ルッキニー「ねーストライクウィッチーズでもあれやろうよー」

シャーリー「さ、 流石に私達じゃ格好つかないだろ」

エーリカ「ブリタニア華撃団に部隊名変える？」

バルクホルン「ハルトマン、 華撃団って言葉結構気に入ってるだろ」

決戦を前にして、 彼女達はリラックスしていた。 きっと、 これならば勝てると大神は安堵していた。

ミーナ「紅蘭さんの報告によると、 巴里華撃団は間に合うかどうかの瀬戸際だそうです。 私達と帝国華撃団でやる覚悟をしなければ

ばいけません……最後の戦いです。健闘を祈ります」
ミーナの言葉を聞いて、皆身を引き締めて決戦にと向うのであった。

三日後、決戦当日、超弩級空中戦艦ミカサ内部

ミーナ「では、これより超巨大敵拠点に攻撃を仕掛けます。まずはミカサの主砲で敵拠点に風穴を開けます。そこから内部に入、十分から二十分間隔でミカサの支援砲撃を行います。砲撃時はこちらから指示を出すので各員その時は一時拠点から離脱してください。くれぐれも内部に入りすぎないようにお願いします」
「了解！」

皆の表情は堅い、この戦いでブリタニアどころか欧州、もしくは世界の命運が左右されるのだ。緊張しない方がおかしい。

ミーナ「では、皆さん発艦準備に掛かってください」

ミーナの声に皆は無言で頷き準備に掛かる、大神は、全員に聞こえるように回線を開いてさくらに通信を送った。

大神「さくら君、去年の上野の桜は綺麗に咲いていたかい？」

さくら「え？ あ、はい。例年通り綺麗な桜でした」

ペリーヌ「こんな時に何を言っていますの！？」

大神「久しぶりに上野の桜を見たいな。春までは遠いが……皆で花見にでも行こう」

ルッキーニ「いいなあ……桜見てみたいなあ……」

大神「何を言っているんだ。ストライクウィッチーズの皆も一緒に。俺が招待するよ」

ルッキーニ「本当！？ やったあ！」

美緒「全てはこの作戦で勝ってから。そういう事だな大神」

大神「はい……いいかい皆、総員！ 花見の準備をせよ！」

大神の言葉に皆が笑う。緊張は適度に解れたようだ。

すみれ「大尉！ まったく……こんな時にふざけないでください！」
大神「すまない。ミーナ中佐。指示をお願いします」

ミーナ「ええ、 それでは総員、 出撃してください！」
「了解！」

ブリタニアの空にウィッチと光武が舞う。 今、 最終決戦に向け
て心まで鋼鉄に武装した乙女達が決戦の場にと向う。

美緒「目標を確認……！ なんて言う必要もないな……これは」

カンナ「で、 でっけー！」

巨大な入道雲のような形状をした巢、 いや。 敵要塞と言っても
いいかもしれない。 その巨大過ぎる拠点の周りには無数のネウロ
イ、 小型の巢を攻略した時とは比べ物にならない数だ。

米田「まずは俺らが行く！ 主砲！ てえ！」

ミカサの主砲が火を拭く、 やはりミカサの主砲の威力は凄まじい
がそれでも数十メートルの穴が空いただけであった。

ミーナ「あれ程のネウロイの群れの中敵拠点に砲弾が到達する事自
体が凄いわね……皆行くわよ！」

大神「総員！ 最後の戦いだ！ 気を引き締めて掛かってくれ！」

さくら「大神さん、 いつものやつ、 お願いします！」

大神「ああ、 帝国華撃団花組！ 出撃！」

「了解！」

光武が敵の群れに飛び込んで行く、 ウィッチ達もそれに負けじと
後に続く。

ルッキーニ「イチロー！ 私達にもやってよー気合入るって！」

大神「そうかい？」

バルクホルン「早くしてくれ！ もう戦闘が始まる！」

大神「よし……！ ストライクウィッチーズ！ 出撃！」

「了解！」

大神の掛け声と共に、 戦闘が始まる。

大和、 武蔵、 そして他の戦艦にも戦闘開始の入電が飛ぶ。

大和艦長「よし！ 扶桑海軍はこれより援護砲撃を開始する、 く
れぐれもウィッチの皆さんに当てるんじゃないぞ！ 大神大尉と坂
本少佐も空に居るんだ！ 情けない姿を見せるな！」

下士官「大和主砲！ 角度調整良し！ 対ネウロイ徹甲榴弾装填確認。 いつでも行けます！」

大和艦長「頼むぞ……帝国華撃団、そしてストライクウィッチーズ！」

各国の戦艦の援護砲撃が次々とネウロイの群れに届く。 少しずつではあるが敵にダメージを与えている。

エーリカ「撃てば当たる！ 照準いらないよ！」

バルクホルン「いいか、戦艦には絶対ネウロイを向かわせるな！

数千万から数億の船だ、沈んだら大損害だ！」

芳佳達の棒給が数十円のこの当時の物価から考えると、戦艦の高価さが分かる。 なんととしても沈めさせる訳にはいかない。

すみれ「連雀の舞！」

さくら「桜花霧翔！」

さくらとすみれの放つ攻撃で次々とネウロイは撃破されて行く。

しかし、巢の中から出て来る敵の数は一向に減らない。

ミーナ「つく……まさか拠点内部に入り込む事すら出来ないなんて

……ミカサ！ 応答願います！ 敵の数が多すぎます！ 再び支援

砲撃を願います！」

かえで「さっきの砲撃でこちらの存在にネウロイが気がついてしま

ったみたいなの！ 対空砲火で手が回らないわ！ なんとか二分後

にもう一発撃つから、それまでに一時撃退してちょうだい！」

ミーナ「そんな……ミカサから攻撃するなんて……」

ネウロイの攻撃はドンドン利己的になって行く、まるで人間を相

手にしているような用兵っぷりであった。

大和観測手「敵機接近！ 数三！」

大和艦長「対空砲火！」

ウィッチと帝国華撃団が逃したネウロイが大和に向う。 大和の防

御能力はネウロイの攻撃を耐え切る程強くはない。

大和観測手「駄目です！ 一つ撃ち漏らしました！ 来ます！」

大和艦長「なんてこった！ 総員、衝撃に備えろ！」

ネウロイが大和に迫る直前、白銀の光武がネウロイを斬り伏せる。大神「大和には、指一本触れさせない！」

大和観測手「やった！ 白い光武です！ 帝国華撃団の大神大尉です！」

大和の搭乗員から歓声があがる、観測手は被弾を覚悟した瞬間に目の前に現れた光武に興奮を隠せないようだった。

大和艦長「たいした男だ……命を助けられたな」

その数秒後、二度目のミカサ主砲が発射される。またもや大量のネウロイを巻き込んで敵拠点に着弾するが、大きなダメージは確認されない。

レニ「大き過ぎるんだ……せめて、半分のサイズだったら……」

織姫「泣き言を言っている場合じゃないです！ まずは拠点に取り付かないと！」

ウィッチ達と光武は再び拠点にと向って飛ぶ、先程よりかは確かに拠点に近づいたが、まだ拠点に取り付いた者はいない。

武蔵艦長「これは、長期戦になるぞ」

武蔵副長「長引けば長引く程、こちらの不利になりますな」

武蔵艦長「ウィッチの皆さんの力は無限ではない。補給や休息も必要だ……出来るならば短期決戦が理想であったが……」

武蔵通信手「報告します！ 大和で被弾による小規模火災発生！ ガリアの戦艦にも被害が目立って来ました！」

武蔵艦長「うむ……まだだ！ 我等より一回りも二回りも幼いウィッチの皆さんが戦っているのだぞ！ ここで退いては扶桑海軍の名が泣くぞ！」

艦長の激が飛ぶ、少女であるウィッチが戦っているのだ。ここで背中を見せるような男は扶桑軍人ではない。皆その覚悟でこの戦場にと出て来ていた。

ペリーヌ、エーリカ、すみれと言った広範囲攻撃を得意とする者達の奮戦は特筆すべき物であった。限界直前まで魔力、霊力を消費して、なんとか道を作りだしている。

芳佳「宮藤芳佳！ 基地内部に侵入しました！ 大神さんとさくらさん、 エーリカさんとバルクホルンさんも一緒です！」

芳佳の一報に戦場の兵達が歓声をあげる、 しかし、 戦いはまだ始まったばかりだ。 この後内部での攻略戦を控えている。

ミーナ「美緒！」

美緒「ああ！」

ミーナと坂本が手を繋いで互いの魔法を同時に発動させる。 二人の魔法が混ざり、 ネウロイ基地内部の詳細が鮮明に理解出来た。

美緒「つく……ミーナ！」

ミーナ「……しかし、 事実です」

美緒「こんな事が……あるか！」

ミーナ「……皆さんに、 お伝えしなければいけない事実があります」

ウィッチ達のインカムと、 光武の通信にミーナの声が響く。 その声は、 事の重大さを物語っているようであった。

ミーナ「私と坂本少佐の能力で敵の詳細の数が分かりました……敵拠点の中央に巨大なコアがあります。 それを壊せばこの基地は崩壊する筈です」

ルッキニー「やったあ！ それなら！」

ミーナ「ですが……ですが、 そこに到達するまでに倒さなければいけないネウロイの数は凡そ五万……です」

坂本は己の魔眼に移る真実が嘘だと願いたかった。 基地内部に見えるおびただしい数のコアの反応、 反応を示す赤い光がない箇所を探す方が容易な程であった。

リーネ「そんな……」

芳佳「五万……そんな数、 見た事ないよ……」

絶望感が体の底から溢れて来る。 これが、 人類の天敵であるネウロイの力なのであろうか。

大神「まだだ……まだ何か方法がある筈だ！」

そんな中、 帝国華撃団は前を見つめていた。 大神の声を聞き、

ウィッチ達の心にも少しの希望が生まれる。

美緒「そうだ……ウィッチに不可能はない！ 私達が諦めてどうする！」

ミーナ「ですが……五万という数を倒すには……」

大神「……アレが使えれば」

エリカ「では、使いましう！ アレを！」

突然、大神の光武に通信が割り込んで来る、戦闘服に身を包んだエリカの姿が映し出された。

大神「エリカ君！？」

エリカ「大神さん、出撃命令をお願いします」

大神「し、しかし。君達は大丈夫なのかい？」

エリカ「言っただけでしょう？ 大神さんの命令さえあれば私達は地球の裏側にだって出撃します。さあ、命令をください！」

大神「よし……巴里華撃団！ 出撃！ 目標、帝国華撃団及びストライクウィッチーズの援護！」

「了解！」

巴里華撃団の面々の声が響いた。

シャノワール地下、司令室。

メル「大神隊長の出撃命令、確認しました」

グラン・マ「よし、リボルバーカノン起動。目標敵巨大拠点！」

メル・シー「ウィ・オーナー！」

凱旋門の地下に格納されたリボルバーカノンが起動される。巴里の市民達は初めこれを見た時は驚きを隠せなかったが、今や少し離れた所で歓声を送っている。

グラン・マ「リボルバーカノン、発射！」

轟音と共に、光武が格納された弾頭が発射される、一度成層圏まで到達した弾頭は再突入してものの数十秒で目標に到達した。

ルッキーニ「わっ！ 来た！ しかも弾頭の数前より多い！」

五つの弾頭が分離し、中から光武が出現する。

「巴里華撃団！ 参上！」

巴里より舞い降りた天使達、これによって。全ての戦力がここに集結した。

エリカ「お前たせしました大神さん。　巴里華撃団、指揮下に入ります」

大神「エリカ君、よく来てくれた。　グリシーヌ、花火君、ロベリア、コクリコ、早速で悪いが状況は最悪に近い。　一氣に決めるぞ！」

最後の弾頭が到着し、中から紅蘭の光武が出現する。

紅蘭「ほんま、　帝国華撃団も人の事言えへんけど無茶苦茶やなあ　巴里華撃団」

グリシーヌ「貴公達には言われたくはないがな……」

エリカ「まずは、皆さんの傷を治療します！　アイリスさん、お手伝いお願いします！」

アイリス「はい！　お兄ちゃん達巢から出てきてえー！」

大神達が巢から出ると、エリカとアイリスの治癒の光が降り注ぐ、体力、霊力、魔力共に全開まで回復する。

カンナ「サンキューエリカ！　これでまだまだ戦えるぜ！」

敵拠点の前に並ぶ十一のウィッチと十四の光武、その光景は壮観であった。

大神「帝国華撃団の皆、　巴里華撃団の皆……五万全てを倒せるかどうか分からないが……俺らでコアをむき出しにしてやろう」

サーニヤ「……待ってください、何か来ます」

サーニヤはピクツと、反応して空を見つめる。

大神「何か……？　ミーナ隊長、増援は無い予定でしたよね？」

ミーナ「ええ……」

サーニヤ「凄いスピードです……光武より……ウィッチよりも早い？　これはまるで……」

サーニヤの言葉を遮り、それは飛来した。

鋼鉄の機動兵器「ウォーロック」である。

大神「な、なんだ！？」

カンナ「お、 おい！ 敵に突っ込んで行くつもりだぞ！？」

ウォーロックは巡航形態のままネウロイに突撃して行った。

バルクホルン「な、 なんだ！？ 何が起こっているんだ！」

大神達は我が目を疑った。 ウォーロックが通り過ぎた後、 ネウ

ロイ達はウォーロックに従うようにその後を付いて飛び始めたのだ。

次々と、 ネウロイはウォーロックの支配下に置かれて行く。

ミーナ「そんな……まさか……」

マロニー「ご覧頂けましたか、 首相」

首相「……まさか、 本当に」

マロニー「では約束通りに……」

首相「ああ……後は任せよう」

間に合った。 マロニーは内心安堵していた。 予想より早く最終

決戦が始まってしまった物の、 なんとかウォーロックの実戦投入

が間に合ってくれた。

マロニー「ふふ……さて」

マロニーは下士官から通信機を受け取り、 戦場に居る全ての兵達

に向けて通信を始めた。

マロニー「ガリア、 扶桑両軍の兵達よ、 作戦は無事終了した。

ご苦労だった。 ブリタニア空軍の新兵器「ウォーロック」によ

ってこの巢のネウロイは全て支配下に置かれた。 これにより、

本作戦は終了したのだ」

現場は騒然としている、 多くの兵達は自体を把握出来ていなかった。

た。

米田「加山……尻尾を掴み損ねたか……」

かえで「司令……」

米田「皆を回収しな。 俺達は……負けたんだ」

米田は苦虫を潰したような顔を浮かべてそう指示する。 その時、

ウィッチ達の元に、マロニーから通信が入る。

マロニー「聞こえるかね、 ストライクウィッチーズの諸君」

ミーナ「……マロニー空軍大将」

マロニー「ご苦勞だった、君達の任務は終わりだ。至急原隊に復歸したまえ」

ミーナ「まだです！先程大將は全てのネウロイを支配下に置いたと言いましたが、内部のネウロイはまだの筈です！」

マロニー「時間の問題なのだよ、もう一度言う。ストライクウイッチーズは現時刻を持って、解散だ」

芳佳「解散……？そんな……」

ウィッチ達の知らぬ所で起きていた水面下の戦い。ブリタニア空軍の新兵器開発と、その尻尾を掴む為の諜報戦はガリア、扶桑の敗北に終わったようだった。後味の悪い形で戦いは終わったかのように思えたが、異変はすぐに起きはじめたのだった。

次回予告

芳佳「私に出来る事、一つずつ叶えたい。私に出来る事、貴方にも伝えたい。諦めないで、翼広げて、さあ飛ぼうよ、明日の為に 次回最終話「わたしに出来る事」 守りたいから、私は飛ぶ！」

最終話 「わたしに出来る事」 (前書き)

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SS

最終話 「わたしに出来る事」

最終話 「わたしに出来る事」

超弩級空中戦艦ミカサ

内部の部屋に集まった皆の表情は固まっていた。

ストライクウィッチーズ突然の解散。つい数分前まで戦闘をしていた彼女達はまだ事態を把握しきれない。

ペリーヌ「ど、どういう事ですの……？ あの兵器は一体……？」

マロニーとの通信が終わると、各々は先程の兵器について話始める。なんとも後味の悪い幕引きであった。

米田「……ご苦労だったな、皆。ゆっくり休んでくれ」

大神「米田司令！ 一体どういう事なのでしょうか！」

帝国劇場支配人にして帝国華撃団司令の米田中将。彼がゆっくりと皆が居る部屋に入ってくる。副司令のかえでも一緒であった。

米田「……もう全部話してもいいだろう。今回の件、全ては扶桑の諜報員が仕入れた一つの情報から始まった」

米田の言葉を皆は静かに聞く。事の真相が全て語られようとしていた。

米田「その情報、ブリタニアの一部の者がネウロイのコアを軍事転用し、ネウロイを掌握する為の研究が進められているとの情報だ」

バルクホルン「そ、そんな馬鹿な事があるか！ 許される事ではない！」

グリシーヌ「扶桑から我がガリアに情報がリークされ、協議の結果、我等は先手を撃つ事にした。ブリタニア空軍が目の上のおたんこぶとして潰そうとしていたストライクウィッチーズを守る為の最強の刺客、大神一郎を送り込み。更に扶桑、ガリア両国の

諜報員達が多数ブリタニアに入った」

米田「事態は一刻を争った。ウォーロック研究施設は数日間隔で移動され、情報を掴むのは困難を極めたのだ。なんとかウォーロック完成間近の情報を入手したのが一週間前、これ以上待てないと最終作戦を開始したが……どうやら裏目を引いてしまったようだな……ここまでの物を完成させて来るとは……」

坂本「大神はこの事を……」

大神「いや、知らなかった。初耳だよ」

米田「大神に求めたのはストライクウィッチーズを守る事とその強化だ。裏方の事は専門の部隊がある……お前達はよくやってくれた……向こうが上手だったのだ」

ルッキーニ「じゃ、じゃあ。これでおしまいなの？　もう私達要らないの？」

米田「あの兵器が量産されるのならウィッチは不要になるだろう」

芳佳「……そ、そんな」

米田「事態は更に深刻だ……現在のネウロイと人類の戦いは姿を変え、人と人の戦争になるだろうな。中世に逆戻りだ」

ミーナ「ネウロイを掌握する技術はブリタニアの、それも極一部の人間だけが持つ技術と言う事になります……これは非常に危険なバランスです」

エリカ「つ、つまり……戦争になっちゃうんですか？」

グリシーヌ「……最悪、世界大戦もあり得るだろうな」

グリシーヌの言葉に、皆は事の重大さを思い知る。ウィッチ達のショックは相当の物であった。これまで人類の為に、死力を尽くして戦って来たのだ。

大神「……もう、打つ手はないのですか？」

米田「これまであらゆる手を尽くして来た……頼みの月組からも連絡がない」

沈黙が辺りを包む、数分の間、誰も口を開く事が出来なかったが。突然の警報が事態を急展開させる。

米田「なんだ！ 何があった！」

通信手「緊急警報！ ウォーロックとネウロイの様子が変です！ 外を見てください！」

皆は走って窓際にと向う。

大神「ネウロイとネウロイが……同士討ちしている！？」

坂本「いや……違う！ 助けているのだ！ ウォーロックの支配下に入ったネウロイを支配下に入っていないネウロイが取り込んでいるのだ！」

米田「マロニー空軍大将に通信を入れろ！ すぐにだ！」

米田の言葉に即座に通信が飛ぶ。

通信手「通信、繋がりました」

マロニー「まだ居たのかね。確か扶桑の米田中将でしたね」

米田「おう、どうも様子が変だぜ？ オタクの新兵器」

マロニー「少々抵抗にあっているだけだ。問題は無い」

アイリス「み、見て！」

アイリスの言葉に皆が再び窓の外を見る、甲高いネウロイの数千数万の鳴き声が辺りに響き渡り、雪崩のように巢の中からネウロイが流れだし、ウォーロックを巢の中にと引きずり込んだ。

マロニー「おい！ どうなっている！ 制御は聞いているのだろうな！」

マロニーの声が通信機の向こうから聞こえて来る。想定外の事態なのは間違い無かった。

ミーナ「美緒！」

坂本「今見ている……やられたな。ウォーロックも、ウォーロック支配下に入ったネウロイも全てを飲み込んでしまった……」

紅蘭「変形していくで！」

入道雲のような形をしていた巢は形を変え、一つの意味を持つネウロイのように攻撃的な形状に変形した。

大神「……皆、行くぞ」

マロニー「待て！ その場を動くんじゃない！ 貴様らはもう用無

しだ!」

ミーナ「マロニー大将! 今はそのような事を言っている場合ではありません!」

マロニー「うるさい! 私は大将だぞ! 貴様らの首など一瞬で飛ばせるのだ! 貴様らの家族ごと最前線に飛ばしてやる!」

米田「畜生が……腐ってやがるぜ。功名心に目が眩んだな?」

マロニー「黙れ! 貴様らとて人の事を言えまい! 鼠共を使って嗅ぎまわっていたのは知っているぞ!」

大神「……マロニー大将、今この瞬間から取る我々の行動は全て、この扶桑海軍大神一郎が責任を持ちます」

マロニー「何に! 貴様か……! 英雄気取りの小僧め……一つや二つ戦果を上げただけで調子にのるな!」

大神「通信を切ってください」

大神の言葉と共に通信が切られる。

大神「君達を戦わせる訳にはいかない……ミカサで待っていてくれ」
大神はそう残して、格納庫にと走りだした。

ロベリア「はっ、馬鹿じゃないのか? あいつ、何を今更」

ロベリアの言葉に皆は頷いて、米田を見た。

米田「……行って来な、扶桑陸軍中将なんて肩書きも役に立つもんだ。お前たちを飛ばさせたりは絶対しねえ。思う存分戦って来な」

少女達は米田に敬礼し、走りだした。

マロニー「クソ! どうなっているんだ! オイ! 何故返事をしない! 誰か居ないのか!」

先程のネウロイの動きでウォーロックは反応を失ってしまった。

加山「貴方で最後ですよ、マロニー空軍大将」

狼狽するマロニーの後頭部に拳銃が突きつけられる。

加山「ようやくと、捕まえましたよ。今俺の部下達が貴方の研究資料を片っ端から焼いています。貴方の部下も全て確保しまし

た。あんな物はこの世にあっちゃいけない」

マロニー「き、貴様ら……何者だ！」

加山「帝国華撃団月組、太陽の陽を浴び咲く花組の裏方……そんな所です。さあ大神……後は存分にやってくれ」

加山の部下達が次々と到着し、マロニーを確保した。

マロニーの野望は後一步の所でついたのだった。

ミカサから一機の光武が出撃する、大神は一人でもあのネウロイと戦う覚悟を決めていた。

大神「あれが動きでしたら……内部のコアさえ壊せば！」

すみれ「大尉一人で出来る訳ないでしょう？ 昔からそういう所は変わらないのですから」

大神「すみれ君！」

さくら「帝国華撃団としてではなく、真宮寺さくらとして、大神さんと戦います！」

エーリカ「水くさいよねーここまで一緒に戦って来たのに」

シャーリー「まったくだぜ、ウィッチの私達が中でただ見てるだけなんて許されないよな」

大神の光武を中心に、彼女達は後に続く。帝国華撃団も巴里華撃団も、ストライクウィッチーズも関係無い。一つの部隊が出来る上がっていた。

大神「しかし！ 君達が戦ったら君達の家族まで危険に晒されてしまう！」

ミーナ「これはストライクウィッチーズとしてでなく、私個人での勝手な行動です。罰は受けます」

大神「君達に罰を受けさせる訳にはいかない！ ……そう、これは俺の身勝手なんだ……帝国華撃団、巴里華撃団、ストライクウィッチーズの皆に命ずる！ これより三つの部隊を一時解散し一つの部隊に再編成する！ これは全て俺、大神一郎の独断だ！ 責任は俺が持つ！」

エリカ「大神さん！？何を言って――」

大神「帝国華撃団の皆、バ里華撃団の皆、そしてストライクウィッチーズの皆、全員必ず帰還せよ！大神華撃団！出撃！」

「……了解！」

大神の言葉に皆は反射的に返事を返す。交わる事が無い筈の三つの部隊、一人の男のによって実現した最強の部隊。大神華撃団が最終決戦に向けて出撃した。

ミーナ「指示をお願いします！大神隊長！」

ストライクウィッチーズの皆はミーナの言葉を聞いて実感する、

そう、今自分達の隊長はミーナではない。ミーナ自身も彼の元で戦える事に身震いしていた。

芳佳「そっか……大神さんが……隊長なんだ！」

エーリカ「大神華撃団かあ……名前って発想は無かったなあ……」

バルクホルン「戦闘中だぞハルトマン！絶対に勝つぞ！隊長！」

大神「まずは道を切り開くぞ！帝都の皆！」

さくら「了解！」

すみれ「まったく……大所帯ですわね」

カンナ「仲間は多ければ多い程良いって奴よ！」

大神と最も長く戦って来た彼女達が一番に飛び込む。

ブリタニアの空に躍り出る戦士達。

その動きはまさに圧巻、光速、衝撃の帝国華撃団は伊達ではない。

紅蘭「何人やろ、1、2、3……」

レニ「隊長含めて二十五人。この数と戦力。まさに最強の部隊だよ」

話しながらも次々とネウロイを蹴散らして行く。今の彼女たちにはネウロイなど相手になる存在ではない。大神の言葉に、限界値を遥かに超えた力を発揮している。

大和艦長「全艦隊に告げる！空を見よ！最後まで諦める事無く戦う若人の姿を見よ！我等も最後の力を振り絞り、一機でも多

く敵を葬り去るのだ！」

大和艦長の通信に艦隊内の兵達は声を大きく上げる。士気は最高潮にまで高まっている。

武蔵艦長「どういう事だろうな、副長」

武蔵副長「ハッ、なんでしょうか」

武蔵艦長「これ程の窮地なのにだ、何故だろう。微塵も負ける気がせん」

武蔵副長「奇遇ですな。私ものです」

大神達の戦う姿を見て。皆は最後の力を振り絞り援護砲撃を再開した。

大神「帝都の皆が道を作ってくれた！ 巴里の皆！」

エリカ「はい！」

グリシーヌ「さあ行くぞ！ 巴里華撃団は優雅に舞うのだ！」

コクリコ「グリシーヌ、はりきってるね！」

ロベリア「久々に隊長に会えたからってハリキッてんだろ」

花火「きつと……皆そうだと思います」

グリシーヌ「うるさいぞ！ 集中しろ！」

友を守り、我が道を行く。愛の御旗のもとに集った乙女たちが敵をなぎ払う。

ブリタニアの空に咲く勇姿。

巨大な巢から吐き出されるネウロイの数は今や万を超えている。

それでも、彼女達は一步も引く事はない。

大神「道が開かれた！ 一気に行くぞ！ ウィッチの皆！」

ミーナ「行きますよ皆さん！」

ルッキニー「うひゃー一杯、でもなんでだろ、全然怖く無い」

シャーリー「そうだな、今は……絶対に負ける気しないぜ！」

芳佳「大神さんが教えてくれた事……人々を守る為に……私は飛びます！」

坂本「遅れるなよりーネ！ お前は立派なウィッチだ！ きつと、私よりも立派な兵になる！」

リーネ「さ、坂本さん！　ありがとうございます！　私……頑張ります！」

ウィッチ達が群れの中央に突入する。次々出てくるネウロイを片っ端から倒して行く。彼女達が最強のウィッチ部隊なのは疑う余地も無かった。

エーリカ「ね、一郎。戦闘中で悪いんだけどさ」

大神「なんだいエーリカ君」

エーリカ「この一ヶ月、帝国華撃団の皆が来て、一郎と帝国華撃団の皆が凄いお似合いだったから。私諦めようと思ったんだけどね……ごめん、やっぱ無理。大神隊長が大好き」

大神「え、エーリカ君！？　回線が……」

「……」

皆の無言の圧力を感じる、しかし今は戦闘中だ。

大神「す、すべてはこの戦いに勝利してからだ！　上野の桜は綺麗だ、エーリカ君。いや、皆で見に行こう！」

ペリーヌ「そうですね、扶桑の桜というのも見てみたいですわ、さっきの通信と話は別ですけど」

エイラ「色々な資料で見た事があるゾ、楽しみだな。さっきの通信と話は別だけドナ」

織姫「皆とやる宴会は格別です！　さっきの通信と話は別ですけど？」

マリア「準備が大変そうね、頑張らないと。大神隊長、所ですが、後でゆっくりとお話したい事があります」

大神「……」

戦闘が終わった後に起こるであろう惨事に、背筋が凍る思いの大神であったが、そんな事を言っている場合ではない。長期戦ではやはり不利だ。一気に勝負を決める為に大神は皆に通信を送る。大神「帝都の為……巴里の為……ブリタニアの為……いや、世界中全ての人の為に絶対に勝利しなくてはいけない！　皆力を貸してくれ！」

エリカ「はい！ アレをやるんですね！」

芳佳「あ、アレ？」

さくら「大神さんの事を想い、大神さんに力を託せば……きっと出来る筈です！」

大神「行くぞ！ 皆！ 狼虎……！」

さくら「大神さん！」

すみれ「大尉！」

カンナ「隊長！」

マリア「隊長！」

アイリス「お兄ちゃん！」

紅蘭「大神はん！」

織姫「大尉さん！」

レニ「隊長！」

皆の霊力が大神に集まる、まばゆいばかりの霊力が一般の人間にも見える程に集約して行く。

花火「隊長！」

グリシーヌ「隊長！」

コクリコ「イチロー！」

ロベリア「隊長！」

エリカ「大神さん！」

それはネウロイさえも恐れる程の力の塊。それが全て大神の光武にと集まっている。

大神「……滅却！」

芳佳「大神さん！」

坂本「大神！」

リーネ「大神さん！」

ペリーヌ「大尉！」

ルッキーニ「イチロー！」

シャーリー「一郎！」

エイラ「一郎！」

サーニャ「大神大尉！」

バルクホルン「大神！」

ミーナ「大神大尉！」

エーリカ「一郎！」

全ての力が集まる、大神は単身敵拠点に向かって突撃する。

大神「俺が！俺達こそが……！正義だ！」

大神「狼虎滅却——震天動地！」

帝国華撃団、巴里華撃団、ストライクウィッチーズ、靈力と魔力、皆の想い、それが今一つになり、大神を通して放出される。

巴里を救った究極の必殺技、皆の力を集約したその攻撃は敵拠点に直撃する。

少し離れた所に居る大和にまで衝撃が届き、艦が揺れる。

大和艦長「どうなったのだ！大神大尉の光武は！」

観測手「敵拠点は形状崩壊を始めています！ネウロイの姿もあります！我々の勝利です！……ですが！大神大尉が……！」

大和艦長「……あの衝撃では」

観測手「そんな……そんな事が……」

下士官「……あそこだ！西の空を見ろ！」

キラキラと輝くネウロイの残骸、美しい光景の中、白銀の光武がゆっくりと飛行していた。

大神「……俺達の、勝ちだ」

その後、次々と仲間達が大神の光武に殺到した為、バランスを崩して何度も墜落しそうになりながらも、なんとか大神は大和の甲板にと緊急着陸した。

大和艦長「……やれやれ、黒髪の貴公子等と噂される訳だ。派手な戦いだっただよ」

大神「いえ……必死でして……」

大和艦長「ふふっ……これ以上長話をしていたら私が撃たれてしまいそうだ。誰か、写真機を持って来てくれ。彼女達と大神大

尉で一枚取ってやろうではないか」

下士官「はい！ 只今！」

下士官は喜んで写真機を取りに走った。大和の艦長達と握手を交わして大神は皆の所に帰る、皆は写真に写る場所でまたモメているようだった。

さくら「こ、こればかりは譲れません！」

エリカ「私は大神さんのこっち隣ですからあ、反対側はどうぞ皆で決めてください」

すみれ「何で貴方の位置が確定していますの！？ そこは私ですわ！」

エーリカ「じゃあ、間を取って私が」

グリシーヌ「駄目だ！ それより先程の通信はどういう事だ！」
たっぷり十分程揉めて、やっと整列した彼女達の真ん中に大神が入る。

大神「それじゃ、皆行くぞ……勝利のポーズ！」

あの戦いから、三ヶ月が過ぎました。私、宮藤芳佳は今扶桑に戻って来ています。

私の、大事な宝物。あの時撮った写真は毎日眺めています。写真の中で皆は笑顔で写っています。あの後、小型の巣を攻略した時以上の大宴会が開かれました。

戦闘中のエーリカさんの通信を皆しっかりと聞いていたみたいで、大神さんは問い詰められてタジタジになっていました。エーリカさんはニコニコ笑って大神さんの隣でお酒を飲んでいました。エーリカさんの他にも色々な人達が好意を抱いていたようで。その宴会の最後の方はそれはとても凄い物でした。

何日も宴会した後、その時はやって来ました。帝国華撃団の皆さんは扶桑にと帰還する事になりましたが、大神さんはこれまでの功績を理由にこの先の進退問題についてある程度

自由を与えられたみたいでした。

皆はそれとなく一緒に来てくれないかとお願いしていましたが、やはり大神さんはこれから先も戦い続ける為に、一旦帝都に帰る事に決めました。

その、別れの日、ミカサの甲板に皆が集まってお別れを言った日。

私と坂本さんは一緒に扶桑まで送って貰う事になったので、私と坂本さんは大神さんとのお別れまだでしたが。他の皆にとってはお別れの日です。

皆、我慢して居ましたが。大神さんが一人一人に声を掛けると我慢出来ずに皆泣いてしまいました。いつも元気なルツキーニちゃんや、凜としたバルクホルンさん、エイラさんやサーニャちゃん、そしてあのハルトマンさんまで涙ぐんで居ましたが、最後は皆笑顔で大神さんを見送っていました。さよならではなく、また会えるから。と言う大神さんの言葉は非常に心強い物でした。

坂本さんが来て、扶桑を出たあの頃、私は何も出来ない未熟者でした。

ストライクウィッチーズの皆に出会い、坂本さんに訓練して貰い。そして、大神さんに戦う意味と信念を教わり。私は最後まで戦う事が出来ました。

私はストライクウィッチーズとして、そして大神華撃団として戦えた事を誇りに思います。

上野の桜は、きっと、きっと来年も綺麗に咲く筈です。

皆で行く花見を、とても楽しみにしています。

大神隊長がストライクウィッチーズに着任するようです

第一部 完

次期予告（前書き）

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SS
ストライクウィッチーズ2分は少しオリジナル分が多くなるかもしれません

次期予告

私、宮藤芳佳は今欧州に向かう飛空艇の中に居ます。あの大戦から半年、私は中学校を卒業し実家の診療所に入ろうと思っていたのですが、お父さんからの二通目の手紙が私の運命を大きく変えたのでした。あれは一週間程前の出来事でした。

大神大尉が501統合戦闘航空団に着任するようです(第二期)

第一話「花萌える欧州」

※ストライクウィッチーズ2分は少しオリジナル分が多くなるかもしれません。

あわよくばネウロイとの戦いに決着を付けるオリジナル三期(短め)もやりたいな……と思っていますが流石に……
やるとしたらストライクウィッチーズの監督も大好きなあの作品をリスペクトした流れに……

ともかく二期分もよろしくお願いします。

※友人に「大神さんって3終わった時点で中尉じゃなかったっけ？」
と言われ調べてみるとどうやら巴里終了時では中尉のようです……
この世界では大尉に昇進したと言う事で……

一話は近日中に投稿予定です

第一話「花萌える欧州」(前書き)

ストライクウィッチーズ2×サクラ大戦SSです！

ここから第二期分に入りたいと思います

第一話「花萌える欧州」

第一話「花萌える欧州」

私、宮藤芳佳は今欧州に向かう飛空艇の中に居ます。あの大戦から半年、私は中学校を卒業し実家の診療所に入ろうと思っていたのですが、お父さんからの二通目の手紙が私の運命を大きく変えたのでした。あれは一週間程前の出来事でした。

みっちゃん「芳佳ちゃん！」

芳佳「あ、みっちゃん！」

中学校の卒業式が無事に終わり、芳佳は帰路に付こうと校舎を出た。校門近くでみっちゃんとその祖父がオンボロの耕運機で出迎えてくれた。

芳佳「みっちゃんは凄いよね、高校に行くんだもんね」

みっちゃん「そんな事ないよ……芳佳ちゃんはお家を継ぐんだよね？」

芳佳「うん……そうなんだけど……」

芳佳は、迷っていた。ブリタニアでの激戦を終え、扶桑にと帰って来ていた芳佳は軍を抜けている状態だった。もはや戦いの中に身を投じる事は無いと自分でも思っていた。しかし。

みっちゃんと芳佳は、みっちゃんの祖父に診療所へと送って貰う。

芳佳の実家でもあるそこに入ると、一番大きな額に飾られた写真が目立つ場所に置かれている。

みっちゃん「何回見ても良い写真だね、みんな笑ってる」

芳佳「うん……皆元気にしているかな」

あの決戦の後に撮られた写真、帝国華撃団、巴里華撃団、そしてストライクウィッチーズの面々で撮った写真を芳佳は毎日のように見つめていた。それだけではない。

みっちゃん「凄いよね、この真ん中の人、こっちに帰って来て

からすぐまた事件を解決したんでしょ？」

芳佳が大事に保存している新聞、そこにはつい数カ月前まで起こっていた帝都での事件の記事が大々的に書かれていた。

芳佳「本当に凄いよ！でもその事件の後処理のせいでお花見が中止になっちゃったけど……」

しょんぼりと俯く芳佳、帝都を再び襲った魔の者達を退けたのは勿論帝国華撃団の面々、そしてそれを率いていたのは勿論彼である。

みっちゃん「欧州でも新しいネウロイの巣が見つかって緊張が高まってるし……新聞では人類の逆襲だって大騒ぎしてるし……どうなっちゃうんだろうね」

芳佳達ストライクウィッチーズがもたらした大勝利、これは大きく世間を動かした。人類はネウロイに勝ち得る。地球上からネウロイを一掃するべく、大規模作戦が発動されるとの噂もあった。芳佳「ネウロイ掃討なんて……ドーバー海峡のネウロイを倒すだけでもあれだけの戦力が必要だったのに……」

欧州での情勢は芳佳達にも聞こえて来ている。共に戦った戦友達は多くがまた戦線に投入されていると言う。

芳佳「(……私に……出来る事)」

確かに、診療所を継ぐと言う事は大事な事である。芳佳の住む小さな村でもこの診療所を頼ってくれる人が大勢居る。

芳佳「(でも……欧州では……)」

芳佳は戦場を知っている。自分の治癒能力で救える命があるかも知れない。

芳佳「(私……どうすれば……大神さん)」

みっちゃん「芳佳ちゃん！誰か来てるよ!？」

芳佳「あ、はい!」

ボーっと新聞を見つめていた芳佳は来客が来ていた事に気が付かなかった。

その来客は、半年前芳佳に手紙を届けた人物と同じ、何度か言

葉を交わして部屋の中にと戻る。その手紙を見て、芳佳は驚愕の声を上げる。

芳佳「お父さんからだ！」

半年前、扶桑に帰って来てからすぐに死んでいる筈の芳佳の父から手紙が来ていた。今回も差出人は同じ。

みっちゃん「なんて書いてるの？」

芳佳「ん……これなんだろう？」

みっちゃん「何かの設計図……？」

専門知識の無い芳佳には何の設計図かは検討もつかない物であった。しかし、ストライカーユニット開発に大きく関わっていた父からの設計図だ。大切な資料である事は間違い無かった。

芳佳「……坂本さんなら分かるかも」

みっちゃん「芳佳ちゃんの家に来た人？」

芳佳「うん！ 届けなきゃ！」

みっちゃん「え、今から！？」

時刻は正午を回った頃、芳佳は山を降りて海軍の基地がある街まで行く事にした。

同時刻、扶桑帝都、賢人機関

リベリア大統領「つまり……ネウロイに奪われてしまったユーラシアを奪い返す為、技術を全て公開しろと」

米田「……」

扶桑を裏から操っている賢人機関、その会議室には扶桑を始めとする大国の首相に軍の責任者達が集まっていた。

花小路「技術の共有と言って頂きたい。こちらも虎の子である蒸気機関を利用した飛行戦艦の技術を公開しよう」

花小路の言葉に会場をざわつく、今、人類の行く末を掛けた会議が扶桑で極秘裏に開かれていた。

米田「（……まあこれくらいは仕方ねえかい）」

ガリア首相「先の戦いで絶大な力を誇った扶桑の決戦兵器、あの

技術を皆で共有出来れば、ネウロイなど一掃できましょう」

米田達の手元にある資料、『神壱号作戦・ユーラシア中央殴り込み艦隊の概要』と記されている。多少アレな命名をした張本人、作戦の立案者である米田は溜息を付いて各国の反応を見る。

米田「（ミカサの技術を公開すると言ったら目の色が変わりやがった。相変わらず口の上い爺さんだぜ）」

ロマーニヤ大公「技術共有はありがたい、話を戻したいのだが、我が国に現れた新たなネウロイの巣なのだが……」

花小路「それについては提案がある。今一度、ロマーニヤに置いて彼女達を再集結させるのはどうだろうか」

ブリタニア首相「なるほど、民達からも根強い人気のある彼女達がまた戦果を上げれば作戦を実行しやすくなる。いい考えだと思うが……」

各国の首相達もこの件について異論は無いようだった。

花小路「では決まりだ。ロマーニヤの巣は今一度ストライクウィッチーズに任せよう。米田、彼らはどうしている？」

米田「しばらくは先の一件の後始末で動けませんね。まずは嬢ちゃん達だけで頑張って貰いましょうや」

各国の偉い方達は会議が終わるとすぐに会議室を後にして、自国にと戻って行った。

花小路「……これでいいんだな？」

米田「はい、人類が生き残る為……仕方無いでしょうな」

この計画が発動するのはまだまだ先の事になるであろう、まず欧州はロマーニヤにて、再びネウロイとの戦いが始まろうとしていた。

美緒「まったく……本当にいいんだな宮藤」

芳佳「えへへ……ごめんなさい坂本さん、でも、やっぱり私皆を守りたいんです」

芳佳が基地に着くと、基地は騒然としていた。欧州はロマーニ

ヤにて新たな巢が出現したらしく、扶桑からもウィッチが向かう事になっていたのだ。その中に、かつての上官である美緒の姿があった。

次々飛び込んで来る欧州からの無線の中には親友であるリーネの物もあった。助けを求める彼女の声に、ついに芳佳は決意し、欧州行きを志願したのであった。多少、強引なやり方であったが。

美緒「ストライカーユニットを履いて飛空艇を追いかけて来るとは……本当に無茶苦茶な奴だ……あいつの無茶苦茶が移ったんじゃないのか？」

芳佳「そ、そうかもしれないです……」

芳佳が飛空艇に追いついてからおよそ一週間、何度かの中継を挟んで芳佳はついにロマーニヤの近くにと近づいて来ていた。毎日のように美緒から小言を頂いては今のような会話をしている。

芳佳「坂本さんは……大丈夫なんですか？」

美緒「何を言うか、若い奴らに早々負けていられるか……なんか今の発言が年寄りっぽかったな」

芳佳「そ、そんな事無いです！でも……ウィッチはドンドン魔力が弱くなって行くなって言うし……」

美緒「うむ……まあ、ちょっと前に補充したしなんとかなる筈だ」

芳佳「補充ですか？」

美緒「い、いやこっちの話だ」

帝都に仕事や修行の旅で訪れる度に「補充」をしていた美緒であったが、彼女の大きく変わった部分であるのは肩に掛けた刀である。芳佳も何度も不思議そうにその刀について尋ねたが、「そのうち分かる」の一点張りであった。

操縦者「な、なんだ……？……敵です！ネウロイです！」

その時、操縦者の叫びが機内に響いたかと思うとネウロイの放つ光線が飛空艇を襲う。

美緒「つく！大丈夫か！土方！」

土方「だ、 大丈夫です……」

芳佳「は、 早く治療を！」

大きく機体が揺れ、 負傷した土方を芳佳が直ぐ様治療する。

美緒「振り切れないのか！」

操縦者「駄目です！ 相手の足が早くて……」

美緒「救難信号を出しておけ！ 私が出る！」

土方「む、 無茶です！ まだこのストライカーユニットは……！」

芳佳「喋らないでください！ 傷に響きます！」

強引に出撃しようとする美緒を土方が止める。 美緒の新型ストライカーユニットは調整がまだ終わっていなかったのだ。

芳佳「これで一応の手当は終わりました……でもまだ激しく動いや駄目ですよ！？」

土方「動けば大丈夫です。 自分達がストライカーユニットの最終調整をします。 それまでなんとか凌いでください！」

操縦者「もう無理ですよ！ ネウロイは目と鼻の……いや……あれはヴェネツィアの艦隊です！」

こちらを狙わんとするネウロイに砲撃が火を拭く、 下の海にはヴェネツィアの艦隊が広がりネウロイに攻撃を仕掛けています。 しかし、 その攻撃はネウロイの足止め程度にしかない。

美緒「駄目だ……やはり通常兵器ではネウロイに……ネウロイの力も強くなっているのか！ 調整を早くするんだ！」

土方「了解！」

土方や他の整備兵達は急いで美緒の新型ストライカーユニット「紫電」の整備にと取り掛かっている。 芳佳「……坂本さん、 私が出て時間を稼ぎます！」

美緒「無理だ、 お前には半年のブランクがある」

芳佳「大丈夫です、 盾変わりにはなります。 それに、 私が行かなければ下の艦隊も大きな打撃を受けてしまいます」

美緒「……すまん宮藤、 すぐ私も行く。 数分時間を稼いでくれ、 ロマーニャのウィッチ部隊に援軍を要請した。 必ず助けは来る

筈だ！」

多少困ったような表情を浮かべた美緒であったが、芳佳の瞳にはかつてのような迷いや弱々しさが感じられない。今の彼女になれば、任せておける。そう確信した美緒であった。

芳佳「了解しました！ 宮藤芳佳！ 出撃します！」

小さく息を吐いて、芳佳は飛空艇から空にと舞い上がった。

芳佳「（久しぶりだな……この感覚）」

空を駆け、艦隊の間をすり抜けてネウロイの元にと飛ぶ。芳佳の姿を見た船員達は次々と歓声を上げて彼女を見送った。

ネウロイのコアが赤く発光し、艦隊に光線の雨を降らせた。

芳佳は空中で気合を入れ、巨大なシールドを展開した。

操縦者「す、凄い！ なんてデカさだ！」

美緒「（ブランクなんて物じゃない……まだまだ成長途中なのか……あの魔力、羨ましい物だ）」

才能の表れであるシールドのデカさ。芳佳のシールドはストライクウィッチーズどのウィッチのシールドよりも大きかった。彼女の魔力は今や底なしと言える程に成長していた。

芳佳「あのネウロイ……堅い！」

前大戦からの愛銃である機関銃を斉射し、数度に渡り攻撃を仕掛けるが分厚い装甲と驚異的な回復力で中々ネウロイにダメージを追わせる事が出来ない。

芳佳「なんとか……引きつけなきゃ！」

やはり、ネウロイはドンドンその力を増して来ている。物の数分で眩いばかりの光線は芳佳を次々と襲い回避とシールドを使った防戦を強いられる事になってしまった。

芳佳「艦隊からは……よし引き離れた——」

一瞬の気の緩み、艦隊からネウロイを引き離れた事を確認する為に目を切ってしまった芳佳に数十の光線が襲い掛かる。シールドを張る時間すらなくなるとか回避するが、光線が芳佳の真横をかすめて体勢を崩して落下を始めてしまう。

芳佳「落ちてる……シールド張らな——えっ!？」

パンツと発砲音が何度も響きネウロイに直撃する、芳佳が体勢を立て直して振り返ると物凄いスピードでウィッチが近づいて来た。シャーリー「イッヤッホーイ! 久しぶりだなー宮藤!」

芳佳「じゃ、シャーリーさん!？」

挨拶だけ残してシャーリーはネウロイにと攻撃を仕掛けに飛び込んだ。その後ろからスーと近づいて来るもう一人の少女。

ルッキーニ「チャオー芳佳、久しぶりだねー」

芳佳「ルッキーニちゃんも! どうしたの!？」

ルッキーニ「どうしたも何も——」

リーネ「芳佳ちゃん!」

芳佳「リーネちゃん!」

リーネが芳佳の元にと飛んで来て二人は再会の抱擁を交わした。

ルッキーニもシャーリーと共にネウロイにと攻撃を仕掛ける。

ペリーヌ「まったく、抱き合ってる場合じゃありませんわ。な

んですのあのネウロイは」

芳佳「凄い堅くて……回復力も凄いです!」

ペリーヌ「なら、皆で行きますわよ!」

そう発したペリーヌの上空を数発のロケット弾が飛翔する。

ペリーヌ「ロケット弾!？」

芳佳「って事は!」

遠くから飛んで来るのはエイラとサーニヤ、彼女達も芳佳達の姿を遠目に捉えて二人で笑いあった。

エイラ「じゃあ、私先に行くカラ」

サーニヤ「うん」

ロマーニヤ沖にと集結する伝説の魔女達、戦力差は完全にひっくり返り次々とネウロイの装甲を剥がして行く。

土方「坂本さん! あと一分程で出れます!」

坂本「懐かしい面々が集まっているようだ……同窓会気分と言ってられないか」

飛空艇の中で美緒が微笑む、彼女達の動きは半年前となら変わらず俊敏で、これならば今回のロマーニャ解放戦もきつと戦い抜けると美緒は強く信じる事が出来た。

シャーリー「おいおい！ 攻撃がドンドン激しくなって来てるぞ！」
ルッキーニ「最後の力振り絞ってるんだよ！ もうちょいもうちょい！」

ネウロイは特大の光線を放とうと光線を集中させる。その力を集中させている付近の装甲を遠くから数発の弾丸が狙撃し光線を妨害する。

——そこまでよ！

可愛らしい声が戦場に響く。一人ポーズを決めた少女が空中に浮んでいる。

エーリカ「カールスラント華撃団、参上！」

一人笑顔でそう決めているエーリカを尻目に、彼女の後ろについて居た二人は彼女を無視して芳佳達と合流しに向かう。

エーリカ「ちよっとおー！ 一緒に合わせようって言ったじゃん！」

バルクホルン「だからそれは私達じゃ決まらなと何度言ったら分かるのだハルトマン！ 何より今は戦闘中だ！」

ミーナ「……ほら、行きますよ。皆さんが呆れているわ」

芳佳「ミーナさん、ハルトマンさん、バルクホルンさん……凄

い……皆集まっちゃった……」

美緒「私を忘れて貰っちゃ困るな」

ペリーヌ「しよ、少佐！ お久しぶりです！」

美緒「ああ、久しぶりだなペリーヌ、ミーナ、では行こうか」

ミーナ「ええ、それでは、攻撃開始！」

欧州の空にと再び舞い戻って来た伝説のウィッチ達。ストライクウィッチーズの前では通常的大型ネウロイ一体では相手にならないだろう。彼女達の流れるような連携攻撃の前にネウロイはドンドン追い込まれて行く。しかし、中々最後の決め手となるダメージを与えられない。相手方の回復力が想像以上の物だったのだ。

美緒「私が行く！」

ミーナ「美緒！」

ペリーヌ「無茶ですわ！」

眼帯を外し、 相手からの光線を掻い潜りながら敵の上空にと入り込む。

美緒「くらえ——烈風斬！」

ついに抜刀した美緒はそのままネウロイにと斬りかかり、 なんとネウロイを真つ二つに切り裂いてしまった。

シャーリー「えええ……まじかよ坂本少佐……」

エーリカ「……なんかデジャブ」

ルッキーニ「すごい！ 凄いよ坂本少佐！」

喜んだり驚いたりしているウィッチ達の元に美緒が戻って来て「ウィッチに不可能は無い」と豪快に笑っている。

ウィッチ達はそのまま新しく与えられた基地にと帰還した。

芳佳「そうだったんですか……私ストライクウィッチーズが再集結されるなんて知りませんでした……」

シャーリー「急だったしな、 私達だって急いて来たんだぜ！？」

ルッキーニ「ねーシャーリーは本当に大急ぎだったもんねー？」

シャーリー「……余計な事言うな！」

ミーナ「では、 皆さん。 正式にストライクウィッチーズとして再び戦って貰う事になります。 今度の目標はロマーニャ上空に現れた新たなネウロイの巢の撃破です。 また皆さんと戦える事が出来て嬉しいわ」

ミーナが皆に笑顔を向けてそう発するが、 何処か皆ソワソワとして、 辺りをキョロキョロと見渡している。 苦笑を浮かべてミーナはコホンを小さく咳払いしてから更に言葉を続けた。

ミーナ「恐らく皆さんが今探している方は。 今回ストライクウィッチーズには参加しません。 私達だけ——」

ルッキーニ「ええー！？ なんでえー！？ 芳佳達一緒に来たんじゃないのぉ！？」

芳佳「え、 えっと。 今帝都は結構忙しいみたいで……」

エーリカ「花見の約束だってうやむやになっちゃしい……まあ仕方無いなあ……」

エイラ「仕方無く無いダロ！ どうせ帝都で恋人達と色々ヤッてるんだ！ 来ないと華撃団の皆に色々バラすゾって言えば来るツテ！」
サーニヤ「駄目よエイラ……それじゃあ困らせてしまう事になるわ……」

美緒「ミーナ、 そ、 その……本当に無理なのか？」

皆それぞれの反応を示していてミーナはどれほど彼がウィッチ達の中で大きな存在になっていたのかを再認識する。

ミーナ「現状では無理との事です……が、 再度要請してみます。

宮藤さんの言う通り。 今帝都は大きな戦いを乗り越えたばかりで混乱しています。 その混乱が収まれば、 きつと私達を助けに来てくれる筈です」

バルクホルン「ふん、 皆依存し過ぎだ。 本来、 ストライクウィッチーズは我々だけの部隊だったのだ！ 我々だけでも十分戦う事は出来る」

エーリカ「夜な夜な枕を濡らしてた人が言う言葉かなー？」

バルクホルン「ぬ、 濡らしてなどいない！ それはお前だろうハルトマン！ とにかくだ！ 我々だけでもしっかりとやれると言う事を見せてやろうではないか！」

ミーナのサポート役だけあって皆に喝を入れるバルクホルンであった。

こうして、 ロマーニヤでの新たな戦いが始まった。

本来ならば違った結末を迎える筈だった歴史は一人の男によって変えられた、 この世界の行く末がどうなるのかまだ誰にも分からないだろう。

次回予告 ペリーヌ「わたくし程のウィッチが再特訓ですってえ！

？ しかも豆狸と一緒にい！？
……まあ、久々に基本をおさ
らいするのも悪く無いですわね。 次回『一緒に出来る事』 鍛え
て調子を戻しておきますから……早く来なさい！」

第二話「一緒に出来る事」(前書き)

ストライクウィッチーズ2×サクラ大戦SSです

第二話「一緒に出来る事」

第二話「一緒に出来る事」

私、宮藤芳佳がロマーニャに来てから一週間が過ぎました。

基地の整備も進み、ようやくストライクウィッチーズが動き始めたのですが、私やリーネちゃん、それにペリーヌさんはこの半年間前線に出て居なかったので少し練度が落ちてしまっているみたいなんです……ついに坂本さんとミーナ中佐から再訓練をいいつけられてしまいました……

扶桑国帝都、帝国劇場地下光武格納庫。

紅蘭「珍しくお偉いさん連れて地下に来たと思ったら……はあゝまた難儀な事言いだすんやねえ」

多くの整備兵達が右往左往して光武の整備を進めている中、米田中将と数人の男が珍しく地下の格納庫にとやって来た。米田は前回の戦い、怨霊となった大久保長安との戦い以降支配人と帝国華撃団総司令の座を大神にと譲っていた。しかし、まだ自分に出来る事はあると軍には留まっていたのだった。

紅蘭「双武を作ったのですら大仕事やったのに……さらに発展させて決戦兵器を作れなんて」

米田「時間はまだある、人類反撃の象徴となるようなド派手な機体作ってくれや。建造費用は言い値で出すからよ」

紅蘭「ほんまに！？じゃあ前からやって見たかった……そうや確か試作型がこの奥に！」

物凄い音を立ててガラクタの山を漁る紅蘭、二人のその姿を訝しげに見つめるが米田がそれを察し笑って二人を小突く。

米田「心配すんнатての、間違はなく帝国華撃団、いや日本でも有数の頭脳だ、必ずや作りあげてくれる。じゃあ紅蘭、俺達はそれを伝えたかっただけなんだな」

紅蘭「あ、ちょい待ち！」

ガラクタをひっくり返していた紅蘭は去ろうとしていた米田を引き止めジッと見つめる。

米田「なんだ、どうしたんだ」

紅蘭「聞いたんやけど、またロマーニヤでストライクウィッチーズが再集結したらしいやないですか」

米田「……耳が早いこって」

紅蘭「また、行くん？」

米田「後片付けが一段落したらって事で今は断ってるよ……まあでも再三に渡って要請は来てるな」

紅蘭「……だから程々にせなアカンって言うたんや！」

紅蘭は珍しく頬を膨らせて自分が制作したガラクタ漁りに戻る、彼がブリタニアから戻って来て半年、巴里から合わせて一年半も彼とろくに会えなかったのだ。まだまだ彼と一緒に居たと言うのは帝劇の総意であった。

米田「ハハ、しっかりと手綱握っとけよ？ 男を捕まえるにや袋を掴めってな。胃袋か玉——」

紅蘭「こんな所に轟爆飛翔君が、ちょっと起動して——」

米田「じゃあ俺らは仕事もあるんでな」

紅蘭「……出来るもんならもうしてるわアホ」

逃げるように帰って行った米田達をジトっと見つめる紅蘭であった。最後のセクハラはともかく、既に米田達軍部は作戦に向けて動きだしている。事態は少しずつ進展を見せているようだ。

ロマーニヤ公国、ストライクウィッチーズ基地。

美緒「……またミスか」

ミーナ「問題ね」

午前中の飛行訓練で結果が思わしくなかった三人、芳佳、リーネ、ペリーヌは居残りで午後も訓練となっていた。それでも半年のブランクはそう簡単には埋まらない。美緒は彼女達の飛行を

見守っていたが、しばらくしてから彼女達を呼び出した。

美緒「駄目だな、思った以上だぞ」

芳佳「……ごめんなさい」

ペリーヌ「恥ずかしい限りですわ……」

リーネ「うう……」

彼女達は皆俯いてしまい申し訳なさそうにしている。

美緒「仕方あるまい。いい機会だ。再特訓して来い、幸いな事に近くに私も教えを受けた魔女が居る」

ペリーヌ「少佐が教えを受けた!?! 是非行かせてください!」

芳佳「頑張って感覚を取り戻して来ます! 頑張ろうねリーネちゃん!」

リーネ「うん! 芳佳ちゃん!」

美緒「よし、では連絡を付けてやる。お前達は準備をしておけ」

芳佳達は元気に返事を返した。早くもその日の内に美緒が言う魔女に連絡が付き、次の日から預かって貰う事となった。

ルッキーニ「ええー再訓練!?! なんか面白そー!」

バルクホルン「少佐の先生か……どんなウィッチなのだろう」

その日夕食、皆でテーブルを囲んで食事をする。

坂本「ウィッチと言うか……魔女って感じの人だな」

芳佳「魔女……ですか?」

リーネ「昔はウィッチじゃなく魔女って言っていたらしいけど……」
皆は坂本の言葉に?マークを飛ばしたが、坂本は行けば分かった話を終わらせた。

シャーリー「そう言えば中佐、扶桑側はなんて言っていたんですか?」

ミーナ「そうね、同じよ。『別件が片付いてから検討する』

の一点張りね」

エーリカ「シャーリー気になって気になってしょうがないもんねー?」

シャーリー「な、なんだよ! この前はハルトマンが聞いていた

じゃないか！」

エイラ「最後に会ってからもう半年……少佐は扶桑であいつと会ってたノカ？」

やはり、彼の事は一日一回話題に上がるようであった、彼女達は相当彼を心待ちにしているようであった。

美緒「ん？ いや……別に会ってな——」

エイラ「まさかとは思うケド、誇り高き扶桑海軍の坂本美緒少佐が嘘なんて付かないよナア？ そう思うダロ皆？」

エーリカ「そうだよねーちゃんと本当の事言ってくれるよね」

美緒「……何が言いたい」

エイラ「そ、そんな怖い顔で見ないでくれヨォ……だって、少佐はあの馬鹿を部屋にコッソリ呼び出したりしてたじゃナイカ！ 帝都に帰ってからだって何かしてたカモってシャーリーが言い出して……それで……」

シャーリー「エ、エイラ！ あの時はお前が！」

エイラ「でも言ったのはシャーリーダロ！」

美緒「……そうかそうか、お前達は私の事をそういう女だと思っていたのか」

俯き気味の美緒から表情を読み取る事は出来ず、ドスの利いた声にビビりまくるエイラ。

エイラ「あああ、いや、違うんだッテ！ オイずるいゾ！ シヤーリーや中尉に大尉、ツンツン眼鏡やリーネだって気になるって言ってたじゃナイカ！」

バルクホルン「な、何を言うか！ あれは……違うんです少佐、

私は勿論少佐を信じています！」

ペリーヌ「わたくしもですわ！ エイラさんが勝手に疑っているんですわ！ 勿論何もしていませんわよね少佐！」

皆の視線が美緒に集まる、固唾を飲んで美緒の言葉を待つ一同。

美緒「あ、当たり前だろう！ 軍人たるものい、色恋沙汰は厳禁だ！」

「(メツチャ狼狽してんじゃん!)」

皆の心の叫びが一致した。 どう見ても狼狽している美緒、 心なしか頬も薄く染まっている。

エーリカ「……ミヤフジと一緒に坂本少佐と来たんだよね? 機内で坂本少佐何か変わった事言ってた?」

美緒「こ、この話はもうお終いだ! 明日に備え宮藤、リーネ、ペリーヌの三人は体を休めるように! 宮藤今日も美味かったぞ!」

そそくさと食器を下げて食堂から逃げた美緒、 残された皆は下世話な想像を始める。

エイラ「あのリアクションは……まさか最後マデ」

ペリーヌ「な、な、何を言っていますのエイラさん! そんな訳ないでしょう!」

サーニヤ「エイラ……下品」

エイラ「サーニヤだって気にしたじゃナイカ! 皆して良い子ブツで私にだけ聞かせるなんてズルイゾ!」

ミーナ「はあ……ほら皆さん、ここら辺にして今日は休みましょう。 宮藤さん、リーネさん、ペリーヌさん。 明日から頑張ってくださいね」

ミーナの仲裁でようやくその場は収まった。 解散した彼女達はそれぞれ部屋に戻り体を休めた。

ペリーヌ「ここら辺の筈なのですけど……」

リーネ「あのお家でしようか?」

翌日、 芳佳達は最小限の装備だけを持ち美緒に紹介された魔女の元にとやって来た。 早朝から出発して付いたのは朝食が終わる頃の時だった。

彼女達を迎えたのは老齢に差し掛かろうとしている女性だった。 相当に口が悪い女性であったのでペリーヌは怒り始めたが修行はすぐに開始された。

ペリーヌ「まったく、なんなのですか? 今の時代に箒での飛行

だなんて」

芳佳「で、でも……かなり難しい……」

彼女達に言い渡された修行はストライカーユニットではなく箒で飛行し、遠く離れた井戸から水を汲んでくるといふシンプルな物であったが、普段ストライカーユニットで飛ぶ事に慣れている彼女達は箒での飛行にかなり苦戦していた。

アンナ「機械に頼っているからさ、最近のウィッチ達は基本的な魔力の運用がまったく出来てないんだよ。まずは力を抜きな」

リーネ「あっ……」

アンナがグツとリーネの箒を股間にと押し付ける、リーネはビクツと仰け反って思わず声を出す。

アンナ「魔力の流れを良くする事で継戦能力の向上や固有魔法を効率的に運用出来る。とにかく行ってきたな！」

芳佳「は、はい！」

老齢の魔女に一喝され芳佳達はフラフラと箒で空に上がって行った。一度の往復で組める水はバケツ一個、それを三人で行っているので一往復でバケツ三つ、一日に使う為の水を運ぶにはあと何往復もしなければいけない。

ペリーヌ「これで本当に……感覚が取り戻せるんでしょうね！」

芳佳「ん……食い込む……」

ただただキツイ修行に音を上げそうになりながらもなんとかその日に必要な水を確保出来たのは日が暮れてからの事だった。

その日の夜、ガリア重要都市巴里、シャノワール。

エリカ「んふふー♪ ふふふー♪」

巴里華撃団の面々は帝都での戦い、大久保長安との戦いにも参加していた。

その戦いを終えて巴里に帰って来たのが一月程前、それまで休止していたシャノワールのショウも再会されて今日も控室で彼女達は準備を進めていた。

その中でも一際上機嫌なのが彼女であった。

グリシーヌ「……また今日も上機嫌だな隊長代理よ」

エリカ「ええ？　そうですかねー？」

ずっとこの調子なのだ、大久保長安との最終決戦から常に。

グリシーヌ「そうだ！　上機嫌なのは結構だが！　以前にましてシヨウで転ぶメルやシーとぶつかる小道具は壊す！　少しは気を引き締めたらどうなのだ！」

エリカ「はーい、　気をつけまーす！」

グリシーヌ「むむむ……エリカ！　言っておくぞ！　あの時は……あの時の隊長の選択は仕方無くだと言う事を忘れるな！」

エリカ「何言ってるんですかー大神さんは……大神さんは私を……私を正妻に……私を選んで……はああ……」

自分で自分を抱きしめてクネクネと動いているエリカ、　うぬぬと唸るばかりのグリシーヌであった。

グリシーヌ「違う！　たまたまエリカと隊長の霊力の相性が良かっただけだ！　あれは別に正妻云々の話では無い！」

扶桑初の複座式光武『双武』は搭乗者の霊力の質が似通り、　尚且つ二人のコンビネーションが正確に一致しなければその強力な力を制御出来ないと言う弱点があった。

その話が帝国華撃団、　巴里華撃団の面々に通達された時。　確かに帝劇は地獄であった。

我こそが最高の相性だと言い合う彼女達を前に、　散々迷った挙句に霊力の総量、　そして窮地で発揮される火事場の馬鹿力を見込んで彼はエリカの手を取ったのであった。　それをエリカは双武のパートナーどころか人生のパートナー的な物と受け止めた。『……優しくしてくださいね？』と呟いたエリカの後ろには、　恐ろしいまでの霊力が荒れ狂っていたと言う。

エリカ「違いますー！　あれはそういう事なんですー！」

ロベリア「妄想は程々にしとけよ、　頼むから私達のシヨウに影響を及ぼすようなトチリ方しないでくれ」

グリシーヌ「そうだ！ 第一、もうすでにブルーメール家はそれなりのポストを準備しているのだ……隊長は是非ブルーメール家に……」

花火「すみれさんも同じような事を仰っていましたけど……」
この一ヶ月ずっとこのような感じで、エリカはすっかり上機嫌なのであった。

エリカ「そう言えば聞きましたか？ ロマーニヤでストライクウィッチーズが再結成したらしいですよ？」

グリシーヌ「うむ、再びネウロイの巣が出現したそうだ」

エリカ「同じ釜の飯を食べたお友達です！ いざとなれば私達も援軍に向かいましょう！」

コクリコ「そうそう！ もうちょっと頑張ればこの欧州も解放されるってこの前ラジオでやってたよ？ 応援に行こうよ！」

エリカの言葉にコクリコも賛同する。

ロベリア「水を差すようで悪いが、そう簡単では無いと思うぜ。

元々ロマーニヤ方面にはネウロイはそこまで居なかった、それがここに来て突如果が現れた。このままじゃ終わりの無いモグラ叩きだぜ」

花火「ブリタニアとガリアは既に解放されているので、欧州各地の戦線に戦力が振り分けられ人類優勢との事です……信じたい物ですが……」

グリシーヌ「ネウロイの目的が未だに分かっていない。 なんの為に人類へ攻撃を仕掛けて来ているかさえ分かれば……」

ロベリア「だがな、忘れちゃ困るのは家の本職は降魔退治だって事だよ。 紐育でも華撃団が出来上がっちゃいるがまだまだ魔の者達がいっぱい現れるか……何だよ、その目は」

ロベリアは皆の視線が自分に集まっているの事に気がついた。

エリカ「素晴らしいです！ やっぱりロベリアさんも正義の心を持ち平和を願っていたんですね！」

コクリコ「うん、ちょっと前だったらそんな事どうでもいい〜とか言ってたのに」

グリシーヌ「ふふ、世紀の大泥坊も一人の男でここまで変わるか？」

ロベリア「つく！ うるさいんだよ！ 私は金さえ貰えればいいんだ！」

エリカ「何処行くんですかー？」

ロベリア「出番だよ！」

バン！ と激しく控室の扉が閉じロベリアが出て行った、多かれ少なかれ、彼と触れ合った事で皆にも変化が出ているようだ。

芳佳「気持ちいいー！」

ペリーヌ「ようやく慣れて来ましたわ」

翌日になると、早くも芳佳達は箒の修行に適応し始めていた。

まがりにもブリタニアとガリアを解放した伝説のウィッチ達である。

その素質はすば抜けている。

今や小さなバケツ何処か、巨大な金タライを三人で協力して運んでいる。このペースだったら昼過ぎには昨日一日掛けて運んだ水量を運べそうな勢いであった。

リーネ「あれ？ あれは……」

芳佳「どうしたのリーネちゃん？」

その時、狙撃手であるリーネはいち早く遠方から迫る物体に気がついた。芳佳やペリーヌもそれに遅れる事数秒で迫り来る物体がネウロイである事を察知する。

同時刻、ロマーニャ新ストライクウィッチーズ基地。

観測兵「報告します！ ヴェネツィア方面からネウロイが出現！ 数は一！ 目標は真っ直ぐに海上を移動しています！」

観測兵の大声が響く。直ぐ様ミーナと美緒は地図を広げて進路を予測する。

ミーナ「陸地にはほぼかすらない。迎撃場所は海上になるわ。」

私達の管轄外ね」

美緒「いや……唯一かする陸地……ここは！」

美緒は血相を変えて通信機を取った。

芳佳「アンナさん！　ここにネウロイが！」

アンナ「今、あんたらの上司から連絡があった。基地からの部隊は今からじゃ間に合わないそうだ。さっさと逃げな。私も避難する」

芳佳「でも……このお家にはお孫さん達が！」

昨夜、芳佳達が眠れずに夜風に当たっているとアンナが早く寝ろと注意しにやって来た。その時、アンナから色々と話を聞いていたのだった。海辺にあるアンナの家にと続く橋。今日この橋を渡って家に孫達が疎開して来る事。久々に孫達とゆっくりと過ごせる事。修行の際はあまりの厳しさに内心アンナを心良く思っていたいなかった芳佳達であったが。嬉しそうに話すアンナを見て少しずつ打ち解けていたのだった。

アンナ「いいから逃げな！　対抗手段も無いのに出たら無駄死するのがオチだよ！」

芳佳「……逃げません！」

宮藤芳佳は強い口調でそう答えた。かつての彼女では絶対にあり得ないような強い口調で。その迫力にアンナも押される。

芳佳「こんな時……あの人だったら絶対に逃げません！　眼の前に困ってる人が居る、助けを求める人が居る！　絶対に……止めてみせます！　それが、ストライクウィッチーズです！」

アンナ「……」

芳佳「行こう！　皆！」

ペリーヌ「ええ」

リーネ「うん！」

箒から鋼鉄の箒へ。彼女達は空にと物凄いスピードで登って行った。

芳佳「（凄い……軽い！）」

修行によって大きく、彼女達的能力が上がった訳ではない。変わったのは魔力の使い方。これまでストライカーユニットを動かす為に十の魔力を使っていたとするならば。今現在彼女達はその半分以上でストライカーユニットを運用出来ている。

ペリーヌ「私とリーネさんが編隊で攻撃！ 宮藤さんは援護して！」
芳佳・リーネ「了解！」

ネウロイもこちらに気がつき攻撃を開始する。光線を掻い潜りながら彼女達は修行の成果を実感する。

だが、向こうの防御力も高くコアを撃ちぬく事が出来ない。

ペリーヌ「やはり……私達三人では大型ネウロイを……」

芳佳「大丈夫、出来るよ！ 三人同時に同じ箇所に攻撃出来れば！」

光線を避け、ネウロイの下方にと回りこむ。

リーネ「そんな……高度なテクニク出来るかな……」

芳佳「これまで一緒に戦って来たんだもん、きっと出来るよ！」
笑顔の芳佳を見てリーネとペリーヌも覚悟を決めた。

ペリーヌ「行きますわよ！ 攻撃開始！」

ペリーヌの声に従い三人は攻撃を集中させる。一点に攻撃が集まりネウロイのコアがむき出しになる。

芳佳「見えた！ リーネちゃん！」

リーネ「うん！」

三人の内でもっとも火力のあるリーネが最後の砲撃を浴びせ。ネウロイを無事撃破する事が出来た。

美緒「そうですか、無事撃破出来ましたか」

アンナ「まさか二日で修行を終えちゃうとは驚きだよ。あんたもいつでも鍛え直してやるよ」

美緒「ハッハッハ！ ではまたよろしくお願いします」

内心クソババアと毒づきながらも美緒は孫達の騒ぐ声が聞こえて来る通信を切った。

ちようどその頃、修行を終えた芳佳達が基地にと帰還して来たの

であった。

それから一週間後、東京湾某所。

早朝の埠頭には数人の作業員だけが集まっており。荷物の積み込みが急がれていた。

「つい昨日作業が一段落したばかりですのに」

「すまない。あれほど要請があると言う事は、やはり何かあるんだと思う。小型蒸気潜水空母まで貸して貰って……感謝しているよ」

一人の少女が男を見送りに来ていた。男は潜水艦の前に立ち少女に答える。

「知りませんわよ、皆さん寂しそうにしていましたし。私は平気ですけども」

「頑張って終わらせて来るよ。待って居てくれるかい？」

「……ええ、待っていますから。早く帰って来なさい！」

一隻の潜水艦が欧州に向けて出発して行った。

次回予告 芳佳「現れた新たなネウロイ、今までのネウロイとはまったく違う攻撃に私達は苦戦を強いられました。その戦いの最中、運命の砲撃が飛来する。次回『約束の空』」

第三話「約束の空」 (前書き)

ストライクウィッチーズ2×サクラ大戦SS

第三話「約束の空」

第三話「約束の空」

私達ストライクウィッチーズがロマーニャ公国で再結成してからも
う少いで一ヶ月になろうとしています。私達前線を離れていたウ
イッチも徐々に勘を取り戻し哨戒任務に励んで来ました。ようや
くあの頃のストライクウィッチーズが戻って来たと坂本さんも嬉し
そうです。それでも、やっぱり皆何処か寂しそうな表情をたま
に浮かべています。……仕方の無い事なのですが、私も少し寂
しいです。

美緒「新型のネウロイ……か」

ミーナ「ええ、欧州に限らず世界中で一定の周期で新型ネウロイ
が確認されている。ネウロイは戦いの度に成長しているようね……」

バルクホルン「……埒があかな。出来る事なら本丸を見つけ出
して叩きたい物だが……」

昼下がりのストライクウィッチーズ基地、執務室。

美緒を始めとする上級の士官達が顔を揃えて作戦を確認している。
相変わらず世間は人類反撃の機運だと好き勝手に言うて居る物の。

現場はそう簡単な事だとは考えていない。

ネウロイの戦力は相変わらず驚異的だ。いつこの攻勢が崩れるか
は分からない状況なのだ。

美緒「更に、何処からか戦力を回して貰える余裕は無い。私達
だけでロマーニャの巢を叩かなければいけない」

ミーナ「ブリタニア・ガリア解放戦では多くの艦が動いてくれまし
た。艦にネウロイさえ近づけなければ戦艦でも小型ネウロイを駆
逐出来ると実証されたのは大きかったけど……今回は流石に前回程
動員出来ないでしょうね」

バルクホルン「……認めたくは無い物だが、やはり華撃団が居ると居ないでは戦場の士気も違う。多くの船員や我々が感じたようにあの絶対に勝てるという根拠の無い自信は奴らじゃ無ければだせまい……なんだミーナその目は！」

ミーナ「華撃団、かしら？」

珍しくからかうような口調のミーナにバルクホルンは頬を染めて声を荒げた。

バルクホルン「ミーナ！ 私は真面目な話をしているのだ！」

ミーナ「冗談よ、巢の規模は現段階で前回最終決戦時の半分程。

まだまだ調査が必要ね。しばらくは偵察が主になると思うけど。頑張って行きましょう」

美緒「よし、こちら辺にしよう……所でミーナ」

ミーナ「相変わらずよ。今度は検討中の一点張りね」

最早、要件を伝えなくてもミーナには理解出来るらしく。直ぐ様答えを返す。この一ヶ月隊員が入れ替わりで聞きに来るのだ。

理解出来るのも当たり前だった。

美緒「そうか、分かった。昼ご飯にしよう」

美緒達は執務室を後にして食堂にと向かった。

食堂では相変わらず芳佳が配膳をしながら追加の料理を作っている。

美緒「すまんな宮藤。私達の分も頼む」

芳佳「あ、坂本さん！ 分かりましたー」

バルクホルン「それで、ハルトマン達は何をやっているのだ？」

食堂の奥にはウィッチ達が集まって何やらエイラを囲んでいる。

エイリカ「何って、エイラのお悩み相談室」

美緒「何だ、悩みがあるのかエイラ」

エイラ「だから！ 私が皆の悩みを聞いてこのタロットで解決するんだッテノ！ 何で皆して同じ事言うダヨ！」

エイリカ「前々からよく当たるって聞いてたけど、本当によく当たるみたいだよ。トゥルーデも想い人がいつ来てくれるのか占って貰ったら？」

バルクホルン「……うるさいぞハルトマン、私は見学でいい!」
バルクホルンは少し離れた席にドツカリと座り芳佳から昼食の入ったお盆を受け取った。

エイラ「誰か居ないノカ? 失せ物から迷い人まで何でも大丈夫だゾ?」

エーリカ「うーん、じゃあ言いだしっぺでもあるし。私が行くよ」

エイラ「そうかそうか、じゃあ中尉何でも聞いてクレ」

エーリカ「じゃあねー……好きな人が居るんだけど。その人がどんな感じの子が本当に好みかを占って」

さらっと「好きな人が居る」と言つてのけるエーリカに皆は内心穏やかで無かったが、ある意味その潔さは格好いい物だった。

エイラ「ちゅ、中尉の好きな奴がどんな馬鹿か知らないケド!

一応占つて見るゾ! うん、そうダナ! スオムス生まれで白銀の髪が良く似合う器量良しが好みらしいゾ!」

サーニヤ「……前もそれやった」

エーリカ「第一、タロットめくつてないじゃん! 本気でやってよ」

エイラ「い、いや……だって……」

エーリカ「何か問題あるの?」

中々占いを始めないエイラを見てエーリカが疑問符を浮かべる。

エイラ「もし……もし自分と全然違うようなタイプが好みだったらどうするんだヨ!」

エーリカ「……チキン」

シャーリー「チキンだな」

ルッキニー「チキンー♪」

エイラ「うるさいゾ! そういうのは無しダ! もっとちゃんとしたのを頼む!」

完全に赤面して、からかう三人を追い払うエイラ。その様子を見ていた美緒が今度はエイラに正対して座る。

美緒「面白そうじゃないか、では私も何か占って貰おうか」

エイラ「少佐か……手強そうだな……」

美緒「だが、私自身特に占って貰いたい事は無いのだが……何占いが人気なんだ？」

エイラ「人気って……でもまあ私達みたいな年頃の女が集まったらやっぱり恋愛占いになるのかなあ……」

威厳ある美緒の恋愛占い、これに興味の無い隊員は居ないだろう、芳佳までもがコッソリと聞き耳を立てている。

美緒「れ、恋愛か？ いや、私は――」

エイラ「大丈夫大丈夫、占いは占いだカラ！ 当たるもハツケ当たらぬもハツケ！」

美緒「人事だと思って……まあいい、早くやってくれ」

何だかんだ言って美緒も年頃の女子である、興味が無い訳では無い。

エイラ「任せてクレ……んと……近いうちに白馬の王子様が現れる……」

「……」

占いの結果に辺りは静寂に包まれる。美緒だけはドギマギとした滅多に見れない表情を浮かべていたのだが、しかし。

エイラ「……プッ」

美緒「……エイラ・イルマタル・ユーティライネン中尉。何故今

吹き出しそうになったのか教えてくれないか？」

エイラ「あああ！ いや！ 違うんだッテ！ その……少佐は凛々しいから王子様って言うより武士が騎馬に乗って迎えに来るんじゃないのかナァ……とか思っタリ」

シャーリー「ククク……駄目だ腹筋が……」

バルクホルン「しょ、少佐、私は結構な事だと思……ック」

美緒「お前達……私だって普通の女だぞ！ 王子様が来て何が悪いんだ！」

ルッキーニ「あ、芳佳も笑い堪えてるー！」

美緒「宮藤い！」

芳佳「違うんです坂本さん！」

美緒が芳佳を追いかけて居る内に基地内に警報が響く。

ミーナ「敵襲！？ 状況が掴めないなので私とリーネさん、ペリーヌさん、そして宮藤さんは基地で待機！ 残りの皆さんは出撃してください！」

「了解！」

それまでの悪ふざけなど微塵も感じさせずに皆は直ぐ様戦闘態勢に移行して行った。

ミーナ「状況は！」

ミーナが指令所に着くと数人の通信兵が状況をまとめて居た。

通信兵「基地沖百五十キロの地点に正体不明のネウロイです！ 偵察機の報告によるとまったく見た事の無い大型ネウロイだそうです！」

ミーナ「伏兵の可能性は！」

通信兵「現在、辺り三百キロに目標ネウロイ以外の反応ありません」

ミーナ「分かりました。まだ状況が不鮮明です。坂本少佐、

指揮をお願いします」

美緒「心得た。行くぞ！ 出撃だ！」

ウィッチ達は美緒に返事を返すと大空にと向かい出撃して行った。

ロマーニヤ沖、海底。

神崎重工社員「長い旅路でしたね、道中色々ありましたが。ようやく欧州ですな」

中年の男が部屋にノックして入って来る。長い旅路の末、ようやく青男は欧州に到着したのだ。

「ええ、これも全て神崎重工のおかげです。感謝しています」
神崎重工社員「いいえ、お嬢様のわがままにはもう慣れてますよ。何より、お嬢様が見込んだ男の頼みでもありますから」

「恐縮です。 それでは自分は光武の整備に――」

船員「大尉！ レーダーに反応有り！ かなりのデカさです！」

「そうか、 分かった、 すぐに行く！」

中年の男は青年が急いで走っていくのを邪魔にならないように避けてその後ろ姿を見送った。

神崎重工社員「何より、 自慢になりますよ……あの『黒髪の貴公子』を運んだなんてね」

そう笑った男も自分の持ち場にと戻って行った。

船員「近辺の基地からウィッチも出撃したようです……どうしましようか」

「……少し嫌な予感がする、 自分も出よう」

船員「了解しました。 緊急浮上！ 射出体勢に入れ！ ……光武の射出なんて初めてですが」

「大丈夫、 微調整は自分がやります」

青年はそう微笑む、 自分の光武にと向かって行った。

美緒「目標を確認！ 距離一万！ 各自攻撃を仕掛けるぞ！」

「了解」

各自が散開して目標に攻撃を仕掛ける、 しかしこのネウロイはいつもと様子が違うようだ。

ルッキーニ「何これー！？ 遅ーい！」

エーリカ「これだけデカければ的だよ……攻撃もそんなに激しくないし……」

バルクホルン「どういう事でしょうか少佐？」

美緒「不気味だな……皆不用意に近づくな！」

エイラ「ネウロイにも失敗作があるんじゃないノカ？」

サーニヤ「……！ 来ます！」

サーニヤが珍しくそう叫んだ時、 その攻撃は始まった。

オオオーんと、 凄まじい重低音が辺りに一瞬響く。 そしてウィッチ達全員に妙な脱力感が襲い掛かる。

ルッキーニ「うにゃ……何これ……」

シャーリー「体が重い……こんなんじゃ攻撃なんて……」

バルクホルン「皆気をしっかり持て……攻撃が来るぞ……」

光線と触手のような腕がウィッチ達に迫る。回避したりシールドを張るので精一杯でそこから反撃など出来るよしも無かった。

ミーナ「美緒！ 美緒！！ 何が起こっているの！！」

芳佳「み、ミーナ中佐！ 皆の魔力反応が……」

ミーナ「なんて事……！ 精神攻撃とでも言うの……？」

指令所にあるメーターにはウィッチ達の魔力反応を示した値がメーター状に表情されている。その値は軒並み最低を示しており。飛行するのがやつの状況であると指令所でも知る事が出来た。

ミーナ「美緒！ 逃げて！ 美緒！」

芳佳「ミーナ中佐！ 私が出ます！ なんとか出来るかもしれない！」

ミーナ「駄目よ！ 対処法が分からない今……貴方を行かせる訳にはいきません！」

芳佳「そんな……じゃあ皆は……！」

ミーナ「信じるしか無いわ……皆を」

芳佳はきつく握られたミーナの拳を見てそれ以上言葉を続ける事が出来なかった。

美緒「皆！ 引くぞ……これ以上は無理だ……皆！ しっかりしろ……」

バルクホルン「駄目だ……頭が回らない……」

皆の目からは最早生気が感じられなかった、ただ棒立ちで空中に浮かんでいただけであった。

美緒「最早……これまでか……」

あの美緒の口から諦めの言葉がこぼれた。巨大な新型ネウロイは触手を何本にも束ねて巨大な腕を作り、それをウィッチ達に振り下ろさんと振り上げた。

その腕を、 正確無比の砲撃が捉える。

通信兵「敵ネウロイ砲撃されました！」

リーネ「高速で飛来する物体あり……これは！」

続けざまに砲撃が直撃する。 砲撃の主は空になった光武用バズーカを投げ捨て美緒の前にと降り立った。

大神「遅くなってすまない……大丈夫かい。 皆」

美緒「……大神？」

ルツキーニ「イチロー！」

バルクホルン「大神！」

サーニヤ「……大神大尉！」

エイラ「一郎！」

シャーリー「一郎！」

エーリカ「……一郎！」

皆の前に降り立った白銀の光武二式、 その中に乗るのは勿論あの男である。

大神「急いで来たんだが、 厄介そうな相手だね」

エイラ「お、 遅いんだヨ！ 来るなら……もっと早く来い馬鹿！」

シャーリー「まったくだぜ、 かつこつけていい所で来やがって」

エーリカ「……ちよつとかつこ良すぎてヤバいけどね」

さつきまでとは明らかに皆の表情が変わっている。 皆、 この一ヶ月一様にこの瞬間を待ち望んでいたのだからそれも頷ける。

サーニヤ「……音？ そうか、 この音で……」

サーニヤのアンテナに微量の音が引つ掛かる。 サーニヤの能力でなければ聞き取れない程のか細い音である。

大神「何か分かったのかいサーニヤ君」

サーニヤ「はい、 敵は音波を飛ばして私達の魔力の流れや精神に攻撃をしていました……私がその音波の発信源を潰してみせます。

でも……ちよつとあの腕が邪魔で」

シャーリー「そういう事だったら……！」

バルクホルン「私達に任せておけ！」

二人がネウロイにと飛び込んで行き。触手が束ねられた腕に攻撃を加える。

腕は攻撃に弾かれその機能を奪われる。

エイラ「今だ！ サーニャ！」

サーニャ「流石です……シャーリーさん、バルクホルンさん」

サーニャの砲撃が飛ぶ、全弾不可避のロケット弾が敵ネウロイにと直撃する。

通信兵「敵ネウロイに着弾！ 押して居ます！」

ミーナ「……まったく、現金な子達ね」

ミーナの視線の先には魔力反応を示すメーター。術者の精神状態に大きく左右されるその反応。その反応は全て最大を示していた。

エーリカ「私達は触手のお片づけ！ 行くよ！」

ルッキーニ「あいさー！」

エイラ「……白馬のつてより白銀だったナア」

ウィッチ達は次々とネウロイにと攻撃を仕掛ける。先程まではとは明らかに動きが変わっている。彼女達にとって。大神一郎が来るという事はそういう事なのだ。

大神「凄い触手の数だな！」

エイラ「一郎！ 右上二秒後に左下！」

大神「ありがとうエイラ！」

美緒「シャーリー！」

シャーリー「おう少佐！ いっけええ！」

シャーリーがいつもルッキーニにしているように美緒を固有魔法「高速」で射出する。

一気にネウロイの頭上にと到達した美緒は抜刀して敵ネウロイの触手郡にと突撃する。

美緒「はああああ！」

迫り来る触手を片っ端から切り伏せ。敵のコアのみを目掛けて飛ぶ。

美緒「くらえ——烈風斬！」

触手の群れを切り伏せ、そしてコアをも貫く烈風斬を放ち。敵
ネウロイにと止めを挿した。

かなり強引に止めを挿したので少し体勢を崩してしまった美緒を大神の光武が優しく抱き寄せた。

大神「大丈夫ですか、坂本さん」

美緒「……ああ、大丈夫だ。少しストライカーユニットに無理を掛け過ぎたようだ」

大神「そうですか、では自分の光武で回収します」

そう言って光武のコクピットを開ける大神。

美緒「……」

大神「……坂本さん？」

ジッと自分を見つめる美緒に少し戸惑って大神は声を掛けた。

美緒「……お前も、王子様って柄じゃないな」

大神「あの……？ 坂本さん？」

美緒「なんでも無い。基地まで頼む」

そう言って、光武のコクピットに入り込んで大神にと体を預ける美緒であった。

美緒「まったく、帝国華撃団は本当に大した千両役者だよ」

大神「どういう事です？」

美緒「来てくれるなんて、私は知らなかったんだぞ？」

基地へ向かう最中、皆は大神を囲むように編隊を組んで飛行している。

大神「あれ程要請があったので……急いで来たんですよ」

美緒「まったく……だが助かった、ありがとう……一郎」

大神「……無事皆を助けられて良かった、またよろしく頼むよ美緒」

美緒「よし、ちゃんと出来てるな」

大神「やっぱり、慣れませんか……」

エイラ「うわぁ……なんか名前で呼び合いだしタゾ」

エーリカ「ありゃーこれはやっぱ扶桑でする事してたパターンかなー」

シャーリー「……節操無いなあ一郎も」

コクピットでくつつく大神と美緒の間に割って入るように通信が入って来る。突然の出来事に流石の美緒もテンパっている。

美緒「な、なんだお前ら！ 盗み聞きとは趣味が悪いぞ！」

シャーリー「いや、少佐インカム付けたままだから勝手に聞こえて来てるんだけど……なんか一郎と少佐が名前で呼び合ってるというらしい雰囲気……」

美緒「シャーリー！ 違うぞ！ 私は名前で呼ぶ事を許してなどー」

エイラ「階級は少佐の方が上だけど年齢では一郎の方が上だからナァ……二人きりの時は美緒って呼ぶんだ！ とか言ったりトカ？」

美緒「言っていない！」

バルクホルン「そ、そうですね少佐。そんな事する奴など居ませんよね！」

エーリカ「当たるんだねえエイラのタロット」

エイラ「ナ？ 言っタロ？」

美緒「貴様ら話を聞けえ！」

大神「何だか久しぶりの感覚だな……」

エーリカ「うん、久しぶりだね一郎。色々覚悟してね」

大神「……どんな意味だい？」

基地では芳佳やリーネ達が滑走路に出て皆の帰還を待ちわびていた。着陸し、大神から光武から出ると皆がすぐに集まって来る。

大神「あらためまして、扶桑海軍大神一郎。再びストライクウィッチーズに着任します」

ミーナ「おかえりなさい大神大尉。これで、ストライクウィツ

チーズ全員集合ね」

芳佳「おかえりなさい大神さん！」

美緒「待っていたぞ」

ペリーヌ「まあ、久しぶりに扶桑のお茶受けが食べたかった頃ですし？」

リーネ「ペリーヌさん、ずっと大神さんの事待っていましたものね」

シャーリー「これで暇なくてすむな」

ルッキーニ「うんうん！ やっと皆集まったよー！ それじゃあ久しぶりに行ってみよー！」

大神「早速やるのかい？」

ルッキーニ「もっちりーん！ イチローが居ないと出来ないんだから！」

ルッキーニの言葉で皆がゾロゾロと大神の近くにとやって来る。

大神「そ、そうか……じゃあ久しぶりに、勝利のポーズ！」

「決め！」

記録員にまた写真を取らせた一同であった。

こうして。ようやくストライクウィッチーズは前大戦の状態に戻ったのであった。

次回予告

シャーリー「まったく、ハルトマンやエイラならともかく、少佐まで一郎にベツタリとはねえ……ま、私は自分のペースでまったりゆっくり行くさ。次回『エグい・ゴツイ・まじやばーい』

……嫌な予感がガンガンにするな」

第四話「エグい・ゴツい・まじやばーい」(前書き)

ストライクウィッチーズ2×サクラ大戦SS

少し間が空いてしまいました。

ポンポンと書いて行きたいです。

第四話「エグい・ゴツい・まじやばーい」

第四話「エグい・ゴツい・まじやばーい」

俺、大神一郎が欧州はローマ・ニャに來たのが今日の昼の出来事だった。久々の再会とあって今晚は皆と一緒に食事をして近況を報告し合う事になった。久々にストライクウィッチーズの皆に会ったから話が弾むと思ったのだが……どうも違う方向に盛り上がってしまったみたいだ……

エーリカ「では！　大神一郎大尉のストライクウィッチーズ再着任を祝して！」

乾杯！　と皆の大きな声が食堂に響く。戦闘が終わった後に芳佳とリーネがご馳走を用意してくれ、そのまま大神再着任の宴にと突入した。

シャーリー「それにしても、よく來たな一郎。連絡くれたらよかったのに」

大神「ああすまない。急な事だったから事後承諾の形で扶桑を出て來てしまったんだ。今米田中将や上層部の人達は忙しいみたいでね」

バルクホルン「忙しい？　そんなに扶桑の戦いは大きい物だったのか？」

大神「いや、大久保長安との戦いもあったけど。どうやらそれとは別に大規模作戦が動き出しているらしい。俺達にはまだ詳細は伝わって來ていないけどね」

ミーナ「ありがとう、引き続きデータを取って。大神大尉、

先程の戦闘データが上がりました」

ミーナは数枚の資料を兵から受け取りそれを読み上げる。

大神「やはり、新型のネウロイでしたか」

ミーナ「驚異的ね。まさかネウロイが精神的な攻撃を仕掛けて来るなんて……正直に言えば大神大尉が来なければかなりまずい事になって居たわね」

バルクホルン「我々がそこまで追い詰められるとは、あの妙な脱力感はかなりキツかったぞ」

ミーナ「皆さんの魔力反応のグラフです。一度飛行不能直前まで落ち込んでいますが……大尉が来たらグラフを振りきらんばかりの上昇、世の魔法や降魔に関する科学者学者が見たら腰を抜かすわね」

エーリカ「……つまり、私達是一郎が来たのが嬉し過ぎてネウロイの精神攻撃を破ったって事？」

ミーナ「直接的な勝因はサーニャさんのロケット弾の直撃ですが、まあ、そういう事になります。魔力も霊力も精神状態に大きく関与しますから、無い話ではないけど……」

エーリカ「……ちょっと世間には公表出来ないなあ」

戦闘に参加していたウィッチ達が赤面して俯く。安い言い様だが、愛の力は凄まじいという所なのだろうか。

バルクホルン「べ、別に我々だけでも精神攻撃を破れたのだ！

大神がたまたま来たからそういう結果になったが！」

エーリカ「トゥルーデのグラフ、相当上昇してるけど？」

バルクホルン「たまたまだ！大神が来たのは関係無い！」

ルッキニー「もー！折角イチローが来たんだから今晚位はネウロイの事忘れようよー！」

ルッキニーの言葉に皆が頷く。皆は席に座り直して今一度宴を始めた。

芳佳「大神さん、扶桑での戦いお疲れ様でした。結構大きなニユースになってましたよね」

大神「ああ、なんとか帝国華撃団と巴里華撃団の力を合わせて勝つ事が出来た。おかげで皆と約束した花見が中止になってしまったけど……」

エーリカ「冷たいよねー私達も呼んでくれたらよかったのに」

大神「す、すまないエーリカ君。流石に魔の者達との戦いに貴重なウィッチを巻き込むのはまずいと思ってね」

エーリカ「一郎達だって、降魔部隊なのにネウロイ倒してたじゃん。私達だってやろうと思えばきつと出来るよー、はい、あーん」

大神「そ、そうかな？」

大神は苦笑いしながらエーリカからおかずを貰う。その様子を見て早くも皆の顔色が変わる。

シャーリー「……なあハルトマン、近くないか？　というかもう色々隠すつもり無しなのか？」

ペリーヌ「そうですね！　中佐！　これは隊の風紀に関わりますわ！　」

ルッキーニ「えー？　いいじゃん！　皆で仲良くしてどうして「ふうき」が駄目になるの？」

ミーナ「……ええと、これはどうなのかしら」

珍しくミーナが戸惑っている。線引きが難しいという所もあるが、何より昔から親交のあるエーリカのあんな姿を見た事が無かったので少し迷ってしまったようだ。

エイラ「あーんは駄目ダロ！　あんなあざとい事サラッと素で出来るのは中尉くらいだケド！」

エーリカ「いいよねールッキーニ？　いいじゃん。こんな事で風紀は乱れないよ」

美緒「大神！　飯くらい自分で食べんか！　嘆かわしい！」

大神「す、すいません坂本さん。　つい」

美緒の喝が飛び大神は隣に座っていたエーリカから少しだけ距離を置き席を戻した。

エイラ「少佐、自分が出来ないからッテ……」

美緒「何か言ったかエイラ！」

エイラ「な、なんでもアリマセン少佐殿」

シャーリー「……美緒」

ルッキーニ「……一郎」

美緒「シャーリー！ ルッキーニ！ 貴様らは！」

ミーナ「どうしたの美緒？」

美緒「い、いや。 なんでもないんだミーナ」

抱き合ってふざけるルッキーニとシャーリーを小突いて止める美緒、
うっかりミスで弄られる要素を露呈してしまったのでこれから先
当分は皆に弄られそうな勢いであった。

リーネ「あの、 大神さんの部屋割りはどうしましょうか……」

大神「部屋割り？」

エイラ「前の基地と違って今の基地は二人で一部屋なンダ、 だから……ソ、 ソウカ……なあ一郎、 お前の空き部屋無いみたいだから。 私とサーニヤの部屋に入るとイイゾ」

大神「そ、 そうなるのでしょうかミーナ中佐？」

エーリカ「……はんたーい」

シャーリー「同じく」

バルクホルン「そ、 そうだ！ 私とハルトマンの部屋を片付ければまだスペースがある！ 私の部屋に来るべきだ！」

エーリカ「あ、 いい考え」

エイラ「都合いいゾ中尉！ 私達の部屋だってまだまだスペースあるゾ！」

ミーナ「……部屋割りについては少し考えなければいけませんね。

一応私は隊長と言う事で一人部屋ですので当分は私と共用でも――
」

ミーナが言い終わらない内に反対の太合唱が起きる。

ミーナ「分かりました！ 私の部屋と言うのは冗談です！ では大

神大尉、 この件は貴方に一任します！」

大神「自分がですか！？ ……いい！？」

ミーナの言葉を発端とし、 大神に鋭い視線が幾重にも降り注ぐ。
皆声には出さないが「勿論私だよね？」と言いたげな目である。

大神「ミーナ中佐、 適当な部屋は空いて無いのですか？ なんなら使われていない物置のような部屋でも構いませんが……」

ミーナ「物置……そう言えば使われてない部屋が――」
エーリカ「無いよねミーナ？」

シャーリー「ああ、 無いな」

バルクホルン「うむ、 無い」

サーニャ「……ありません」

芳佳「な、 無かったよねリーネちゃん？」

リーネ「う、 うん。 もう空き部屋は無いよね？」

ルッキーニ「あれ？ 一階に物置が――」

ペリーヌ「ありませんわ！」

エイラ「いいから早く私達の部屋にすれば良いンダヨ！ べ、 ベッドは無いから仕方無く私のベッドに入れてやるヨ」

美緒「……大神」

分かってるな？ と美緒の目が言っている。 これは非常にまずい展開だと大神は既に察している。

大神「……現在の部屋割りはどうなって居るんだい？」

ミーナ「私が一人部屋で、 フラウとトゥルーデ、 エイラさんとサーニャさん、 宮藤さんと美緒、 ペリーヌさんとリーネさん、 ルッキーニさんとシャーリーさん。 となっていますね」

大神「そ、 そうですか……」

追い詰められる大神、 彼の出した結論は最も角が立たない物であっただろうが、 それは間違い無く修羅の道であった。

大神「で、 では。 一箇所に留まるのも悪いので、 荷物だけ物置にでも置かせて貰って数日事に違う部屋に移動する……という事にしようと思う……んだが」

シャーリー「……成程、 そうやってドンドンと恋人を増やして来た訳か」

大神「それは誤解だシャーリー君！」

エーリカ「前回一郎と一緒に寝るのをローテンションにしてた逆バ

ージョンかぁ……一郎が言うなら従うけど。 覚悟した方良いと思うよ?」

大神「こ、 怖いな」

ミーナ「はぁ……いいですか? 勿論ですがこの事は他言無用です。 他の隊員にバレたら大変な事になるんですからね!」

はーいと皆が返事をする、 ミーナと大神だけが苦笑いを浮かべていた。 結局その後美緒の一声で今晩は美緒と芳佳の部屋で寝る事となった大神であった。 他の面々からは職権濫用だと騒がれていたが美緒の威圧感でなんとか事無きを得たようだった。

美緒「さて、 明日はカールスラントからの新型ストライカーユニットが搬入されて来る。 早く寝るぞ」

大神「ええ、 ですがその……自分の布団が……」

芳佳「私と坂本さんのベッドをくつつければ三人で寝れると思いますよ?」

美緒「うむ、 その通りだ。 早速準備しよう」

大神「三人一緒に寝るんですか!?!」

美緒「……大神、 もう色々と後戻り出来ないという事を自覚しておけよ」

美緒と芳佳はベッドを整えながら大神の方を見ないで話を続ける。

恐ろしいオーラに満ち溢れている。

大神「……どういう事でしようか?」

美緒「帝都に八人、 巴里に五人、 そしてストライクウィッチーズに十一人。 普通なら誰かに刺されていてもおかしく無いんだからな」

芳佳「浮気は駄目ですよ……大神さん」

大神「う、 浮気という訳では」

美緒「帝都や巴里では隊長として、 ストライクウィッチーズでも一隊員として皆を気遣うのは結構だが、 お前の部下達は皆年頃の女なのだ……一つ屋根の下で何ヶ月も一緒に居て特別な感情が生れない訳が無い。 女社会のウィッチ部隊では尚の事な」

大神「自分も皆の好意はありがたいと思っています。　ですが今はまだ……」

大神は静かにそう続ける。　自身は戦いに身を捧げているつもりでいるのだ。

大神「正直に言えば、　皆に魅力を感じ無いと言えは嘘になります。　ですが今欲に溺れてしまう訳には……」

美緒「私以上の堅物だな。　いいじゃないか……私達の気持ちだっ
て考えてくれ……」

芳佳「でも……戦いが終わったら、　終わったら皆の気持ちに答えてくれるんですよね？」

大神「え、　ええ？」

芳佳「くれるんですよね？」

大神「……頑張るよ」

珍しく押しの強い芳佳に押されてついそう答えてしまった大神、
それを聞いてニッコリと笑う芳佳。

芳佳「きっと皆喜びますよ。　教えてあげないと」

大神「あ、　あはは……」

もしかしたら、　今自分とはんでもない約束をしてしまったのでは無いのかと若干身震いする大神であった。

翌朝、　新ストライクウィッチーズ基地に一機のストライカーユニットが搬入された。

美緒「これがカールスラントの新型か……」

ミーナ「正確には試作機ね、　Me262V1ジェットストライカーよ」

エーリカ「あっつー。　ん？　何これ？」

赤く塗装された機体の前にはミーナと美緒が立ってスペック表を眺めている。　エーリカは服をパタパタとして暑さをやり過ごしている。

バルクホルン「開発中だった物が届いたのか！」

ミーナ「最大速度950キロ以上とあるわね……本当なら凄い性能ね」

シャーリー「950！　なあ私に履かせてくれよ！」

音速の世界を目指すシャーリーにとっては魅力的な性能であった。

シャーリーがいの一番に機体にと触れる。

バルクホルン「いいや、私が履こう。カールスラントの機体は私が使うべきだ」

シャーリー「んだよー国なんて関係無いだろ？　音速の世界を知る私が使うんだ！」

ルッキーニ「いっちばーん！」

バルクホルンとシャーリーが機体の前で口喧嘩をしている隙をついてルッキーニがジェットストライカーにと飛び込む。

シャーリー「ずるいぞルッキーニ！」

ルッキーニ「にひひひ……うにゃああああ！」

機体に閃光が走り起動を始めていたが、ルッキーニは奇声を上げてジェットストライカーから飛び出した。

シャーリー「どうしたんだよルッキーニ！」

ルッキーニ「なんかびびびってした……シャーリーあの機体には乗らない方がいいよ……」

ルッキーニの表情を覗き込んでシャーリーは数秒考え込むと顔を上げた。

シャーリー「やっぱあたしはやめておくよ。　まだマーリンでやり残した事もあるしな」

バルクホルン「ふっ、　怖気付いたかりベリアン」

シャーリー「なにい！？」

シャーリーが声を荒げるとバルクホルンがジェットストライカーを履き機体を起動させる。

バルクホルン「……凄い」

ジェットストライカーが轟音を上げる、　その音に他の隊員がハンガーにと駆けつける。

大神「何の騒ぎだい？」

美緒「大神か、あれがカールスラントの新型だ。バルクホルンとシャーリーどちらが履くかで揉めていたんだ」

バルクホルン「さて、早速性能テストと行こうじゃないか。どうだリベリアン、これまでのレシプロストライカーでこれに勝てると思うか？」

シャーリー「なんだと！」

また言い争いを始めたシャーリーとバルクホルンを見てミーナと美緒は大きく溜息を付いた。

ルッキーニ「まずは上昇力勝負だよー！」

三十分後、結局勝負する運びとなった二人はハンガーから出て滑走路にと立っていた。

ルッキーニの掛け声と共に二人は上昇を始め、滑走路からは目視出来ない程の高さにと至る。

サーニヤ「……シャーリーさん、一万メートルで上昇が停止しました。バルクホルンさんまだ上昇しています……凄い」

エイラ「はえ」

記録員を務めるサーニヤを尻目にエイラは興味無さそうに見つめている。

美緒「凄いな」

ミーナ「物凄い技術ね」

大神「……」

美緒「どうしたんだ大神」

大神「いえ、少し気になる所がありました」

大神は上昇力勝負から帰って来た二人の元にと歩いて行った。

シャーリー「ほい、頂きー」

バルクホルン「……負けた腹いせか？ 大人気無いぞ」

大神「バルクホルン、いいかい？」

一旦の昼食を取る二人の隣に大神が座る。

バルクホルン「なんだ大神、どうだ、カールスラントの科学力

は世界一だろう」

大神「……バルクホルン、体に違和感等はないかい？」

バルクホルン「……どういう事だ？」

大神「昔、俺は神武と天武という二つの光武に乗っていた時期があった」

シャーリー「ジンプとテンブ？　どんな機体だったんだ？」

大神「どちらも強力な力を持っていたが搭乗者に大きな負担を強い
る機体だったんだ、　どうにも、　ジェットストライカーからはそ
れと同じ匂いがするんだ」

バルクホルン「……何を言うか、　私がいこなして見せる」

バルクホルンは立ち上がって再びジェットストライカーの元にと向
かう。

シャーリー「やれやれ、　次は搭載量勝負だそうだ」

ルッキーニ「頑張ってるねシャーリー！」

大神「……何も無ければいいが」

大神の心配をよそに、　バルクホルンとシャーリーの、　レシプロ
とジェットの戦いは第二戦に入った。

芳佳「そ、　そんなに持って大丈夫なんですか？」

シャーリー「私の機体は万能機だからな」

まるで決戦時並のフル装備でマーリンを履くシャーリー、　しか
しそれ以上の重装備でバルクホルンがジェットストライカーを履く。

バルクホルン「待たせたな」

50mmカノン砲一門に30mm機関砲四門、　通常ならばどうあ
がいても持てない量だがバルクホルンの固有魔法「怪力」とジェッ
トストライカーの飛行能力はそれを可能とした。

シャーリー「う、　嘘だろ？」

空中を自由に飛び回り目視のバルーンを撃ちぬいて見せたバルクホ
ルンを見てシャーリーはそう小さく呟いた。

芳佳「今晚の夕食は肉じゃがですよー」

ペリーヌ「なんでこんな油臭い所で……」

リーネ「芳佳ちゃん、バルクホルンさんの事が心配なんですよ」
ハンガーで早めの夕食を取るウィッチ達、シャーリーはピンピン
としているがバルクホルンは尋常では無い程に疲れているように見
えた。

芳佳「大丈夫ですか？　バルクホルンさん……？」

バルクホルン「あ、ああ……宮藤か……そこに置いてくれ、少
し休みたい」

ぐったりとしているバルクホルンを心配そうに見つめる芳佳であっ
た。

芳佳「バルクホルンさん、大丈夫でしょうか」

シャーリー「まあ、大丈夫だろ？　あーしかしドラム缶が風呂に
なるとはなー」

食後、新ストライクウィッチーズ基地にはまだ風呂が無いのでお
手製のドラム缶風呂に浸かる芳佳とシャーリー。

芳佳「坂本さんも昔よく使っていたみたいですよ」

ルッキーニ「おーい！　私達も入れてよー！」

シャーリー「おうルッキーニ、早く来……ってオイ！」

芳佳「お、大神さん！？」

大神「る、ルッキーニ！　芳佳君にシャーリーが居るじゃないか
！」

ルッキーニ「え？　いいじゃん。前も一緒に入ったじゃん」

芳佳「……大神さん？」

大神「違うんだ芳佳君！　あの時は体が勝手に……とにかく俺は後
にするよ」

ルッキーニ「えー？　一緒に入ろうよーそれに早く入らないと風邪
引いちゃうよ？」

ルッキーニは芳佳のドラム缶風呂に飛び込んでプハーツと顔を出す。
シャーリー「ちょ、ちょっと待てよ、ドラム缶風呂は二個しか
無いんだぞ？　ルッキーニがそっち入ったって事は……」

ルッキーニ「シャーリーの方も詰めればもう一人は入るでしょ？」

シャーリー「ば、馬鹿言うな！ この状態で一緒に入ったら……
どう考えても駄目だ！」

芳佳「でも早くしないと大神さんが風邪引いちゃうし……」

シャーリー「ううう……一郎！ 出来るだけそっと入れよ！」

大神「は、入るのかい！？」

シャーリー「いいから早くしろよ！ こうなりやもうヤケだ！」

そう言って、精一杯にドラム缶の端っこに詰めるシャーリーであった。

エイラ「ハッ！」

サーニヤ「……どうしたのエイラ？」

エイラ「なんか今嫌な予感がしたゾ！」

美緒「なんだ？ ネウロイか？」

エイラ「いやなんダロ……なんか確実に血の雨が振りそうなヒドイ
事が起こりそうナ……」

美緒「穏やかじゃないな、では私も一風呂浴びに行くかな」

ペリーヌ「あら？ バルクホルン大尉は？」

リーネ「今日はもう寝るそうです……大丈夫でしょうか？」

談話室でゆつくりしていたエイラ達であったが、美緒はゆつくり
と惨劇の現場にと歩を進めるのであった。

大神「(……)」

シャーリー「(……)」

大神・シャーリー「(いや、駄目だろこれ)」

ルッキニーに唆され同じドラム缶風呂に入ったシャーリーと大神、

タオル一枚で狭いドラム缶風呂に二人である。 どう考えてもア

ウトだった。

ルッキニー「あれえー？ なんかあっち静かになっちゃたね？」

芳佳「……」

芳佳が訝しげな表情でジーっと二人を見つめる。 それにシャーリ
ーが気づいて大神に小声で話し掛ける。

シャーリー「(い、一郎……何か話さないと……宮藤が怪しんで

るぞ！」

大神「（シャーリー君、　まず少し動いてくれないか？　色々当たって……流石に理性が吹っ飛びそうだ）」

シャーリー「（な、　何言ってるんだよ！　それを言ったら私だって……それに今動いたら……色々間違いが起こりそうだし）」

芳佳「……大神さん、　シャーリーさん、　ルッキーニちゃんの前で何しているんですか？」

芳佳は顔を真っ赤にして二人を叱る。　ルッキーニだけがまったりと風呂に入っている。

シャーリー「な、　何言ってるんだ宮藤！　何もしてない……して……馬鹿何動いてんだ！　もう無理だって！」

大神「流石にキツイよシャーリー君！　もう少し奥に！」

美緒「……」

大神「……あ」

シャーリー「……いや」

美緒「何動いてんだ……もう少し奥に……か」

大神「ぶ、　部分的にまずい所だけ抜粋しないでください！」

美緒「シャーリー、　大神、　そこを動くな？　宮藤、　烈風丸を持ってこい」

大神「誤解です坂本さん！」

シャーリー「あっ！　……そんなに動くなって……」

美緒「ふふふ……今日の烈風丸はよく斬れるぞ大神」

芳佳「持って来ましたー」

大神「芳佳君！」

その後、　ぐっすりと眠るバルクホルンが一瞬目を覚ます程の大騒ぎがあったようだが、　それでもバルクホルンの体はジェットストライカーに蝕まれておりすぐに倒れるように眠りに付いたようであった。

翌朝、　新ストライクウィッチーズ基地滑走路

バルクホルン「よし、　次はいよいよスピードだ……どうしたんだ、

酷い顔だぞ？」

シャーリー「……ちょっと色々あって寝不足なんだ、お前こそ酷いぞ？ 大丈夫なのか？」

ルッキニー「一郎がお星様になっちゃったもんね……」

大神「……死ぬかと思ったよ」

美緒「しっかりと事情を説明してくればよかったのだ。私はてっきり新手の……まあ終わった事はもういいではないか！ ハッハッハ！」

バルクホルン「？ まあいい、早速始めるぞ」

シャーリー「ああ、ちょっと眠いけどスピードじゃ負けないぜ！」「ルッキニー「じゃあよいドーン！」

そう言って、二人は空にと登って行った。

大きくバルクホルンが差を広げたように見えたが、後に錐揉み飛行をして海にと墜落してしまった。

大神「まずい！ 小型艇を！」

そう言って、大神達が必死の救助を繰り広げるのだった。

エーリカ「あ、起きた」

バルクホルン「どうした、皆で集まって」

エーリカ「トゥルーデ、海に落っこちたんだよ？」

バルクホルン「馬鹿な、この私がそんな初歩的なミスを」

美緒「バルクホルンのせいでは無い。どうやらあのジェットストライカーに欠陥があるようだ」

バルクホルン「……試作機に欠陥は付き物だ。改善する為にはテストデータは必要不可欠だ」

ミーナ「駄目よ、バルクホルン大尉、当面はジェットストライカーの使用は——」

ミーナが言い掛けた所で、ネウロイの襲来を告げる警報が鳴り響く。

ミーナ「いいですねバルクホルン大尉！ 今は体を休めてください

！ 夜間哨戒班の二人、大神大尉、リーネさん芳佳さんと私は司令室で待機、他の皆さんは迎撃に上がってください！」

了解、と声が響く。バルクホルンを医務室に残して皆は出撃して行った。

バルクホルン「……」

エーリカ「隙ありー！」

バルクホルン「なっ！」

バルクホルンの耳にインカムが嵌められる。

エーリカ「状況は伝わった方がいいでしょ？」

バルクホルン「……すまないハルトマン」

エーリカ「いいって事よー」

そう言い残してエーリカは再び駆け出して行った。

美緒「敵機確認！ 早いぞ！」

シャーリー「普通のネウロイっぽくて良かったな、また精神攻撃かと思ってハラハラしたぞ」

ペリーヌ「このネウロイだって十分厄介ですわ！」

ルッキニー「うにゃーはやーい！」

弾道弾型のネウロイは超スピードで大陸へと向かっている。このネウロイを地上に上げる訳にはいかない。

エーリカ「ん！？ 分裂するよ！」

弾道弾型の数カ所がパージされ、それぞれが高速で突破を試みる。美緒「数で押す気か！ 総員、なんとしてもここで食い止めるぞ

！ シャーリー！」

シャーリー「なんだい少佐！」

美緒「コアを持った真ん中の本体、あれが一番早い。あれは頼むぞ！」

シャーリー「了解した！」

美緒「よし！ こちら坂本だ！ こちらで迎撃に当るがあまりに敵が早い！ 至急増援をくれ！」

ミーナ「了解！ 宮藤さん、 リーネさん、 大神大尉の指揮で増援に向かってください！ 大神大尉、 お願いします」

大神「了解しました！ 行こう芳佳君！ リーネ君！」

芳佳「はい！ 行こうリーネちゃん！」

リーネ「うん！」

大神達がハンガーに向かう間も、 インカムからは通信の声が聞こえて来る。

ペリーヌ「このネウロイ、 早すぎますわ！ これでは照準が！」

ルッキニー「大丈夫シャーリー！？」

シャーリー「おいおい……まさか私が追いつけないなんて！」

大神「シャーリーで追いつけない……？ こちらも数で仕掛かるしかないのか？」

ハンガーにと到着すると、 バルクホルンがジェットストライカーを装着して今にも飛び立とうしている所だった。

大神「何をやっているんだ！」

バルクホルン「知れた事だ、 増援に向かう」

芳佳「無茶です！ つい数時間前に墜落したばかりなのに！」

バルクホルン「では聞こう、 シャーリーでも追いつけなかったネウロイに対抗する手段がジェットストライカー以外にあるか？」

大神「……しかし無茶だ！ バルクホルンの命に関わる！」

バルクホルン「……シャーリー達だって命掛けで戦っている。 それに……」

「……適当で規則は守らないいい加減なりベリアンだが……ここまで一緒に戦って来た仲間なんだ！ なんとしても……なんとして

も守りたいんだ！ このジェットストライカーに少しでも希望があるのなら！ この身を掛けてでも！」

シャーリー「……バルクホルン」

インカムを通して、 バルクホルンの言葉はシャーリーに届いていた。 いつも憎まれ口ばかり言い合っていたバルクホルンの口からそんな言葉が出るとも思わず、 ついつい目頭が熱くなって来るシャーリー。

大神「……分かった、そこまで言うのなら。しかし今のバルクホルンを行かせる訳には行かない」

バルクホルン「嫌だ！ お前が止めようとも——」
強引に出撃しようとするバルクホルンを大神が抱きしめて止める。

大神の体から薄い青い光が溢れ出す。

大神「暴れないで、 トウルーデ」

バルクホルン「……うん、 一郎……温かい」

バルクホルンの体に力が戻って来る。 美緒にやった方法と同じ手段で、 バルクホルンにと霊力を流す。

エーリカ「……トウルーデ、 ね」

坂本「……戦闘中だ！ 気を抜くな！」

内心穏やかでない二人だったが、 戦闘中にそんな事を言っている場合では無い。

バルクホルン「ありがたい、 これでしばらくは飛べる！ ジェツ

トストライカー、 出るぞ！」

大神「俺達も追いかける！ 無理だけはしないでくれよ！」

バルクホルン「分かっている！」

そう残したバルクホルンは、 もう既にかなり遠くまで飛んで行っている。

シャーリー「クソ！ 動きが！ 相手が早すぎるんだ！」

コアを持つ本体は分離したネウロイより更に早い動きであった、

シャーリーが必死に射撃するが軽く避けられてしまう。

シャーリー「何！ 更に分離した！」

止めを刺そうとしたのか、 ネウロイは更に分離して、 シャーリーを襲う。

シャーリー「つく！」

その時、 ドン、 と轟音が響いてカノン砲が火を拭く。 凄まじ

い火力で一瞬にしてネウロイがひしゃげて崩壊を始める。

続けてドン、 ドンと続けざまに発砲され、 これも全てネウロイに直撃し、 そのコアを破壊する。

シャーリー「……お早い到着だな」

バルクホルン「ふん、やはりお前では無理だったようだな、リベリアン」

シャーリー「ふふん、仲間だから、守りたかったんだろ？」

バルクホルン「な、聞いていたのか！？　そうか少佐と同じミス……迂闊だった

……」

シャーリー「ははは……ありがとうバルクホルン、嬉しかった」

バルクホルン「……ふん」

キラキラと輝くネウロイ崩壊の光の中、二人は互いに照れたような表情を浮かべていた。

美緒「本体を倒した事で分離も消えたか……なんとかなったな」

バルクホルン「……ん、待てよ。つ、通信が全部聞かれていたのか？」

シャーリー「ああ、全部聞こえてたよトゥルーデ」

ルツキーニ「うん一郎……温かい……にやはははは！」

バルクホルン「あああああ！　大神！　お前のせいだぞ！」

エーリカ「もういいじゃん、一郎って呼びなよー」

馬鹿にするシャーリーとルツキーニの言葉に空中で悶絶するバルクホルン、ジェットストライカーの事もあるので早めに基地にと帰投したのだが、その道中もずっと言われっぱなしの有様であった。

ペリーヌ「まったく、人騒がせなストライカーでしたわね」

大神「だが、ネウロイも無事倒せたし、バルクホルンも無事だったから良かったよ」

ペリーヌ「……貴方は自分の心配をした方がいいんじゃないくて？」

大神「……殺意の波動がバンバン向けられているよ」

知らない内に近い仲のバルクホルンをトゥルーデと呼んでいた事、自分達だけの秘密の筈だった霊力の補充をバルクホルンにもした事、怒れる二人の波動が大神にビンビンに向けられていた。

エーリカ「……まあ、いいけどさ」

美緒「……いや、よくない」

大神「あ、あはは」

乾いた笑いを浮かべる事しか出来ないの大神だった。夕暮れのストライクウィッチーズ基地ではジェットストライカーの封印作業が行われていた。

ミーナ「まだ、実践で使えるレベルでは無いのは残念ね」

バルクホルン「ああ、私のデータが少しでも改善に役立てばいいが……」

ハルトマン「すいません……私達のせいで……」

シャーリー「なんでハルトマンが謝るんだよ」

エーリカ「そうそう、別に謝まなくてもさ」

エイラ「……うお！ 分離したノカ！？」

サーニヤ「……ハルトマンさんが二人？」

事情を知っている数人以外が驚きの声を上げる。知らない内にハルトマンが二人になっていたのだ。

ミーナ「こちら、ジェットストライカーの開発スタッフであるウルスラ・ハルトマン中尉よ。エーリカ・ハルトマン中尉の双子の妹さんね」

ペリーヌ「そ、そっくりですわ」

シャーリー「眼鏡が無ければ分からないぜ……」

ウルスラ「すいませんでしたバルクホルン大尉、危険な目に合わせてしまった」

バルクホルン「いいんだ、私のデータでよければ役立ててくれ」
ウルスラ「ありがとうございます。必ずジェットストライカーを完成させて見せます」

エーリカ「折角来たんだし、お風呂入って行きなよー私達小さいから三人でも入れるよねー一郎？」

ウルスラ「三人？」

大神「じよ、冗談が上手いなエーリカ君は」

美緒「……」

シャーリー「……」

大神「あはは……」

ウルスラ「成程貴方が……大変そうですね」

エーリカ「さ、行こうよウルスラ！」

ウルスラ「ごめんなさい姉さん、すぐに本国に帰らなきゃなくて。

お二人でゆっくりとお風呂を楽しんでください」

エーリカ「そう？　じゃあまた今度ね？　行こっか一郎！」

美緒「……」

シャーリー「……」

大神「よ、芳佳君、水を一杯くれるかい……？」

こうして、ジェットストライカーは再びカールスラントにと戻っていったのだった。しかし今の大神にはそんな事を気にする事が出来ない程のプレッシャーが掛かっていたのだった。

次回予告　ルツキーニ「ロマーニヤ観光なら私にお任せ！　美味しいものはロゼッタ、フェットチーネ、スプリ、マルガリータ、アクアパッツア、でも本当はママのズッパがいちばん！　次回『私のロマーニヤ』　さあロマーニヤ観光にれっつごー！」

第五話「私のロマーニャ」(前書き)

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SS

第五話「私のローマニヤ」

第五話「私のローマニヤ」

俺、大神一郎が欧州はローマニヤに着任してから一週間が過ぎた。扶桑以外に巴里、ブリタニアと国を渡り歩いて来た自分だが歴史あるローマの街を少し見てみたいと思っていた。今日はひよんな事からそんなローマに行く事になったので楽しみにしていたのだが……

ペリーヌ「……これで、最後ですわね」

深夜、ペリーヌは自らの部屋で最後に残った家宝の宝剣を手にとった。

ガリアの名家クロステルマン家、ペリーヌはその一人娘であった。欧州の貴族達には没落貴族とクロステルマン家の影口を叩く者も居た、ネウロイに襲来されて焦土と化してしまったガリアの南方、その復興にクロステルマン家は全力を尽くしていた。

ペリーヌ「お父様のお気に入りだった宝剣……申し訳ございません」家宝や財宝を売っては復興費用に当てる。そしてその姿を誰にも見せない。まさに貴族の鏡とも言える行動であった。

リーネ「……ペリーヌさん」

ペリーヌ「り、リネットさん!? 起きていらしたの!?!」

リーネ「その剣も……売ってしまうんですか?」

ペリーヌ「……安物ですわ。それに私剣なんて興味ありませんの」

そう言って、布団にと潜り込むペリーヌ。

リーネ「……きつと、ガリアを復興させましょうね。私には何にも出来ませんが、出来る限りお手伝いしますから」

ペリーヌ「……ありがとう、リーネさん」

そう言って、二人は寝静まって行ったのだった。

翌日、新ストライクウィッチーズ基地談話室。

シャーリー「米が無いって？」

ミーナ「他にも備品が必要なの、シャーリーさん、また運転お願い出来るかしら？ 道案内は地元なのでルッキーニさんに」

ルッキーニ「やたードライブドライブ！」

ミーナの言葉にルッキーニがジャンプして喜んでいる。

バルクホルン「任務なんだからな、遊んだりするなよ？」

ミーナ「大神大尉、護衛をお願いしますね。宮藤さん、買出しをお願いします。皆さん欲しい物があったら宮藤さんに伝えてください」

大神「了解しました」

エーリカ「……ねえミーナ」

ミーナ「始めからおきますが、今日の買出しにはこれ以上の人員はさきませんので」

ミーナの言葉に次々ブーイングが飛ぶ。

ミーナ「……分かりました！ 一名だけです！ あと夜間哨戒班の

二人は駄目ですからね！」

エイラ「ブー！ ブー！」

親指を下にして何度も腕を振るエイラ、サーニヤも何処か悲しそうな顔をしている。

エーリカ「それじゃあ『買い出し班の護衛』という重大な任務を誰が受け持つか、ジャンケンたいかい！」

名目上まさか大神とのデートとする訳にもいかないので公式にはこうなる訳である。

ミーナ「言っておきますが！ デートじゃないんですからね！」

一同は『はい』と元気に答えて激戦のジャンケン大会が始まる。

芳佳は負けた人から買って来て欲しい物を聞いて回っている。

激闘の末決勝に残ったのはエーリカとペリーヌ。ペリーヌはあまり乗り気で無いように適当にジャンケンをしていたが無欲の勝利と

言う物か、最後まで残ってしまった。

エーリカ「決勝はペリーヌかぁ……いざ尋常に！」

ペリーヌ「私は別にいいのですけど……」

ポント、出された手はエーリカがパーでペリーヌがチョキ。こうして、買い出し班の護衛は大神とペリーヌが務める事になったのだった。

大神「じゃあ、早速準備に掛かろう」

シャーリー「久々の運転だ、腕が鳴るぜ」

芳佳「あ、安全運転をお願いしますねシャーリーさん」

ペリーヌ「……」

必死でシャーリーに懇願する芳佳を横目に、ペリーヌは自室にと戻って家宝の宝剣を箱にと詰めて持ちださんと持ち上げた。

大神「ペリーヌ君、荷物かい？」

ペリーヌ「……ええ」

ペリーヌは急いでいたので自室の扉を開けっぱなしにしまっていた。自分の不注意を呪いながらも平静を装い返事を返す。

大神「……噂は聞いているよ、私財を投じて復興に当たっている」と

ペリーヌ「……まあ、南方には他に有力な貴族もいませんし、行政もまずは他の重要拠点から復興するつもりなのでしょう？ 自分達の事は自分達でやりますわ」

大神「……すまない」

大神の言葉にペリーヌは顔を上げる。何故大神に謝られるか理解出来なかったのだ。

ペリーヌ「なぜ大尉が謝るのですか？」

大神「ペリーヌ君の故郷が焼かれている頃、俺達は巴里を防衛するので精一杯だった……俺達がもう少し早く怪人達を倒せていれば」
ペリーヌ「何を言うかと思えば……本来ならば、ネウロイと怪人の二重苦で巴里は、いえガリアはあつという間に陥落していた筈なんです。それを大尉達が踏みとどまってくれていたから花の都

巴里はその美しい姿を残している。私達は何度お礼を言っても足りない程ですわ」

ペリーヌは呆れたように、しかし尊敬の念を持って大神にそう伝える。しかし大神はまだ暗い顔をしている。

大神「……しかし、あんまりじゃないか。こうやって君は私財を使ってまで復興に当たっているのに、貴族達はいいように言っている。俺達がもっと頑張っていれば君にこんな思いをさせずにすんだのに」

ペリーヌ「いいんです。言いたいものには言わせておけば。それに傍から見れば没落貴族と言われても仕方の無い有様なのは事実ですわ」

ペリーヌはそう言って宝剣の入った箱を持ち上げようとする。それを大神が複雑な表情で「変わるよ」と言って受け持った。

大神「俺も巴里で、いやガリアで戦った人間として全力で協力するよ。手伝って欲しい事があれば言ってくれ」

ペリーヌ「大尉のお気持ちは嬉しいですが、復興には長い年月が掛かりますわ。その覚悟がありますの？」

大神「ああ、何年掛かろうと一緒にやって行こう。ペリーヌ君」
ペリーヌ「まったく軽々しく言ってくれますわ！そこまで言うのでしたらガリア南方とクロステルマン家復興に最後まで付き合ってくださいますので覚悟なさい！」

大神「クロステルマン家の方かい！？……いや、そうだな。そこも再興させてこそ本当の復興だ。ガリア南方とクロステルマン家。どちらも一緒に復興させよう」

ペリーヌ「……いい、意味を分かっているのかしら本当に！」
ほんの照れ隠しのつもりで言った言葉に予想以上のカウンターが帰って来てついつい赤面してしまうペリーヌだった。

基地の前には軍用トラックが横付けされている。中ではシャーリーとルッキーニが浮かれ気味で出発を今か今かと待っている。

芳佳「お待たせしましたー！ やっと皆さんの欲しい物を全部メモ

して来ましたー！」

シャーリー「遅いぞ宮藤！　じゃあ早速遅れを取り戻すか！」

大神「芳佳君、　ペリーヌ君、　何処かにつかまっていた方がいいと思うよ」

芳佳「へ？」

ペリーヌ「？　道はしっかりと舗装されてー」

文字通り大神の方にと吹っ飛ぶ程の加速をもろに食らってしまった芳佳とペリーヌ。　危うく外に飛び出しそうになるのを大神に助けて貰いローマまでの旅路が始まった。

ペリーヌ「……まだ世界が回っていますわ」

宮藤「……でも凄い速さでローマに付きましたよ」

大神「ここがローマか」

ぐったりしている二人をしり目に元気な大神は古都ローマを見渡している。

ルッキーニ「どうイチロー！　良い所でしょー！？」

大神「ああ、　もっとじっくり見たいがまずは買い出しを済ませてしまおう。　ルッキーニ、　何処か買い出し出来るような場所はあるかい？」

ルッキーニ「買い物ならすぐそのメインストリート一本でなんでも揃うよ！　じゃあ早速買い物行こう一郎！」

大神「引っ張らないでくれよルッキーニ！　芳佳君、　二手に別れよう！　シャーリーとペリーヌ君と一緒に食料以外の補充品と頼まれた買い物を買わせてくれ！　俺とルッキーニで食料を買うから！」

宮藤「大神さーん！　お金！　お金持たなくていいんですかー？」

……ああもう行っちゃった」

シャーリー「……」

ペリーヌ「一緒にデート出来なくて残念ですわね？」

シャーリー「そんなじゃねーよ！　ほら買い出し行くぞー！」

ペリーヌにまでからかわれて顔を真っ赤にしながらシャーリー達は

メインストリートにと向かって行つた。

ルッキーニ「ほら見て！　でっかいでしょ！？」

大神「本当だ、　凄い活気だ。　近代的な設備と遙か古代からある名所が混在しているのは面白いね」

ルッキーニ「でしょー？　　買い物早く終わらせて観光名所に行こうね！　……うにゃ？」

ルッキーニはメインストリートから一本外れた路地を逃げる少女の姿を見つけていた。　その後ろには数人の黒服の男達。

ルッキーニ「見てイチロー！　悪い奴らに追いかけてる！」

大神「落ち着くんだルッキーニ！　まだ悪い奴と決まった訳じゃ……しかし放つてもおけないか」

ルッキーニ「流石一郎！　早く助けないと！」

大神「まずは話を聞くんだよルッキーニ！」

人混みの中、　ルッキーニは脅威の敏捷性で裏路地にと飛び込んで行く。　大神は人混みをかき分けながらそれに少し遅れて路地裏にと向かう。

ルッキーニ「へへー！　　ぶい！」

そこには得意気な表情で少女を助けたルッキーニがいた。　黒服の男達は皆ノックアウトされている。

大神「ルッキーニ！　ちゃんと話を聞いたのかい！？」

ルッキーニ「……にゃはは」

大神「……大丈夫かい？　何故彼らに追いかけていたんだい？」

大神は苦笑して少女にと話掛ける。　少しビクツと驚いてルッキーニの影に隠れたが、　すぐに顔を出して少女は答える。

マリア「ありがとうございます……私はマリアと申します。　その……急に追いかかれて……」

ルッキーニ「マリアって言うんだー！　お家はこの近く？」

マリア「お家……は近いのですが……ローマの街を歩いた事が無く……どうしても一回街を歩いてみたかったのです」

ルッキーニ「お家が近いのに街に出た事無いの！？」　　じゃあイチロ

ーと私と一緒に観光しよー!」

大神「おいおいルッキーニ、　マリア、　大丈夫なのかい?」

マリア「お願いします、　もう……今日しかチャンスは無いんです」
大神「(どこかの貴族の娘だろうか……話が本当だとすると少し可愛そうでもある……黒服の人達にはもう少し待って貰って観光くらいなら)」

大神「よし、　じゃあルッキーニに案内をお願いします。　でもまずは買い出しをしっかりとしよう。　マリア、　手伝ってくれるかい?」

マリア「お買い物ですか!　はい、　是非手伝わせてください!」
ルッキーニ「よーし!　じゃあまずは買い出しにしゅっぱーつ!」
雑務だと言うのに、　マリアは目をキラキラと輝かせ大神とルッキーニの隣に並び付いて来る。

マリアはメインストリートを歩くだけでとても楽しそうだった。

店に並ぶ物すべてに興味を示して楽しそうに店の人と会話している。
三人で協力したので、　あっという間に食料の買い出しは終わった。
ルッキーニ「じゃあ!　早速ローマ観光に出発!」

大神「ありがとうマリア、　荷物重くなかったかい?」

マリア「はい!　ちよつと重かったですけど大丈夫です!」
こうして、　三人はローマ観光にと向かうのであった。

シャーリー「……『観光して来ます、　夕方にもたここで』　……
なんだよー!　私達も連れてけよー!」

それから数分後、　シャーリー達も買い出しを終えてトラックにと戻って来ると。　荷台には食料と書き置きメモが。

ペリーヌ「……まあ、　私達は私達で勝手に観光していればどこかで落ち合う事もあるでしょう。　私は少し古物商と銀行に用事がありますので……」

宮藤「私もお手伝いしますよ。　用事を終わらせて一緒に観光しましよー」

ペリーヌ「い、いいですわよ別に……」

シャーリー「立派だと思うぜ。 関心するし尊敬する。 私達にも少し手伝いさせてくれよ」

ペリーヌ「……別に私は」

貴族として、物を売りに行く姿を見られたくないという意地もあったが、この仲間達にそんな物など不要だと悟り、皆で再び街に向かうのであった。

マリア「おいしい！」

ルッキニー「でしょー！？ え！？ 皆も食べたい！？ おじさんもう5つ！」

大神「ここがスペイン広場か……ってルッキニー！？」

一つ目の観光地に付いて見学していた大神だったが、少し目を離れた隙にマリアとルッキニーはジェラートを食べていた。しかも広場に居た子供達にまで振舞っている。

おじさん「……あんたが払ってくれるのかい？」

大神「ええ！？ ルッキニー！ お金払ってないのかい！？」

ルッキニー「……あ、お財布忘れた」

大神「……分かった。俺が出すよ」

仮に財布があったとしてもまさかルッキニーに払わせる訳にもいかないと思い、大神はジェラート屋の店長にと料金を払う。

その後も昼食のステーキやお菓子代も大神が払う事になりドンドン大神の財布は軽くなって行くのだった。

ペリーヌ「まったく、私は恥ずかしいですわ！」

シャーリー「そう言うなって、おかげで大分高く売れたじゃないか！」

宮藤「物凄い交渉でしたね……」

古物商でペリーヌの宝剣を鑑定して貰うとそこそこの値が付いた。

ペリーヌはそれで売ろうとしたのだが、シャーリーが「素人だ

「と思って騙そうとしている！」と言いがかりを付けて値上げ交渉にと突入したのだった。

シャーリー「いやーまさかあの商人本当に安く付けてたとはねー言ってみるもんだぜ」

ペリーヌ「か、確証も無く言ってたんですの！？　もし善良な商人だったらどうしますの！」

シャーリー「そんな時は謝ればいいだろう？　お、美味そうなお菓子が売ってるぞ！」

シャーリーはしゃあしゃあとそう言って甘味屋にと吸い込まれるように入って行った。

ペリーヌ「まったく……私は銀行と電信局に行きますから宮藤さんはシャーリーさんとお菓子を食べて待っていてください」

芳佳「あ、はい！　ペリーヌさんの分も頼んでおきますね！」

ペリーヌ「……お願いしますわ」

ペリーヌは銀行で送金の手続きを終えると電信局にと向かい。　ガリアの元領地に通信を繋いで貰った。

ペリーヌ「アーサー、私よ。　今送金の手続きを終えたので数日の内に到着する筈ですわ。

元執事や領地の民達で未だに自分を慕ってくれている者達が戦地に出ているペリーヌに変わり復興作業を続けてくれている。

いつものように送金の報告だけして通信を終えようと思ったのだが、アーサーの声がいつものより上ずっている。

ペリーヌ「どうしたのアーサー？　何があったの？」

アーサー「お嬢様……私は感動しています……世の貴族達は皆私達を嘲笑っていると思っていました……」

ペリーヌ「……感動？」

アーサー「今朝、大量の物資と資金がこちらに到着しました。

差出人はブルーメール家とブルーメール家が懇意にしている北大路家から……『貴公らの行動に敬意を表する』とだけ添えられて……

お嬢様、　お嬢様の行動をちゃんと見てくれている人達が居ます……

「これは本当に喜ばしい事です」

ペリーヌ「……ブルーメール家、北大路家」

数度だけ、ほんの数度だけ戦場で顔を合わせただけの関係である二つの家からの支援物資。決して顔見知りだからと言う理由では無く。貴族としてペリーヌを評価しての事だった。

ペリーヌ「そう……私からお礼を言っておきます。後はよろしくね」

ペリーヌは急いで通信を切って貰った。自身の目から溢れ出て来る涙をアーサーに悟られないように。電信局から出ると彼女は近くの河原に座り込み感動と感謝の気持ちから溢れ出る涙を必死に拭いた。

大神達は広場に居た数人の子供と別れ、コロッセオや真実の口にトレビの泉と名だたる観光地を回った。最後にとサン・ピエトロ大聖堂からローマの街を一望している所だった。

マリア「凄い景色……あの小さな家々の中に多くの人達が暮らしている……守っていかなければ……」

ルッキーニ「任せてよ！ルッキーニ達がマリア達を守ってみせるよ！」

マリア「ルッキーニが守ってくれるの？」

ルッキーニ「勿論！だって私達は――」

その時、ローマ市内に警報が響く。

大神「ネウロイの襲撃か！？こんな内陸まで！」

大聖堂の中に居た人々がパニックを起こし始めたので大神が人々を避難口にと誘導する。

大神「ルッキーニ！迎撃に上がってくれ！」

ルッキーニ「うん！イチロー！」

マリア「いっちゃうのルッキーニ！？駄目よ、危ないわ！」

ルッキーニ「大丈夫、約束したでしょ？私は……私達は。スライクウィッチーズだから！」

そう言って、ルッキニーは大聖堂の上から飛び降りる。屋根から屋根を飛び移りストライクウィッチーズの軍用トラックに向かう様子をマリアが呆然と見つめる。

マリア「ストライクウィッチーズ……ルッキニーが……」

大神「マリア、ここは危険だ。避難しよう!」

マリア「は、はい!」

光武を持って来ていない大神は迎撃には上がれない。市民の避難を優先してからマリアの手を取る。

黒服「待て、彼女を渡して貰う」

大神「自分は扶桑海軍の大神一郎大尉であります! 怪しい者ではありません!」

マリア「……軍人さんだったの?」

大神「ああ、だから大丈夫だよ。そちらは何処の者達か?」

黒服「大神一郎……黒髪の貴公子か……ならばこちらも安心だ。

我々はこのよう者だ」

黒服がチラッと服の内側に付けられたバッジを見せる。

大神「その紋章……まさかマリアが!」

マリア「……はい、黙っていてすいませんでした。ルッキニーは……ルッキニーは大丈夫なんですよね!」

マリアは黒服達の静止を振り切り空の見える場所に戻る。大神は優しくマリアの肩を持って安心させる。

大神「大丈夫……ルッキニーは小さいけど抜群の才能を持っている。それにルッキニーは一人じゃない。大切な仲間達が居る。決して負けたりしないさ」

一つの機影が空に登って行くのが見える。それに続くように三つの機影。マリアの目にも見えたその機影がルッキニーであると彼女にも理解出来た。

大神「ルッキニーにはルッキニーの、マリアにはマリアのやるべき事がある。今は避難しましょう」

マリア「……はい」

黒服「姫様、こちらです」

マリア「……」

たった一日だけだった自由の時間、それでも、マリアにとってはかけがえの無い時間。

それが今終わってしまおうとしている。

大神「マリア！」

マリア「は、はい！」

黒服に連れられたマリアに大神が声を掛ける。

大神「また今度、ゆつくりとローマを見て回ろう！世界が平和になれば……きっと君も自由に外を歩ける時代が来る！その時代を作るように俺達も頑張るから！」

マリア「……はい、何時までも待っています。ルッキーニと一緒に迎えに来てくださいね、イチロー！」

自分が王族だと知ってもこうやって声を掛けてくれる大神はマリアにとってはとても眩しい存在だった。マリアは微笑んで大神の名前をルッキーニのように呼ぶのだった。

こうして、彼女のローマの休日は終わるのであった。

ルッキーニ「倒さないと……！約束したんだから……！」

シャーリー「どうしたんだよルッキーニ！焦るな！」

空で迎撃に当たるウィッチ達、いつもは飄々と戦うルッキーニらしくなく。今日は勝負を焦っているように見えた。

宮藤「危ない！」

先程から何度も芳佳のシールドに助けられている。

ペリーヌ「落ち着きなさい！絶対に勝つのは当たり前ですわ！」

私と宮藤さんがまず攻撃を仕掛けます！その隙にシャーリーさんとルッキーニさんのいつもの技でトドメよ！」

ルッキーニ「でも……早くしないとマリアが……ママが……」

ローマにはマリアの他にもルッキーニの母親も居る。彼女の異様な焦りはそこからも来ていた。

大神「落ちてくんだルッキニ！ マリアは無事に避難した！」
ルッキニ「イチロー！ 本当に！？」

大神「本当だ、三十秒後に地上の防衛施設から対空高射砲を一斉発射する。その後さつきペリーヌ君が言った攻撃だ！ いいな！」

「了解！」

ウィッチ達は一体ネウロイ達と距離をとり対空高射砲がネウロイを襲うのを待つ、高射砲が数発ネウロイに被弾し、ネウロイの起動がローマから外れる。

ペリーヌ「行きますわよ！」

宮藤「はい！」

ペリーヌと芳佳が攻撃を仕掛ける。その隙にルツキーニの元にシヤーリーがやって来る。

「始めて会った頃、覚えてるか？」

ルツキーニ「……うん」

シャーリー「あの頃はまだ寂しがりでよくママ、ママって言うてたよな」

「言っていないもん！」

シャーリー「もう、あの頃のルツキーニじゃない。こうやって立派にママや人々を守れるんだ。決めるぞ、ルツキーニ！」

ルツキーニ「うん！行くよシャーリー！」

ルッキーニの固有魔法『多重シールド』が展開される。いつより大きく、そして枚数も多いそのシールドはネウロイにと向けられる。

シャーリー「いつけえ！ ルツキーニ！」

シャーリーの『加速』でルツキー二を撃ち出し。ネウロイにと直撃させる。

ルツキーニ「いつけええええええええええ！」

そのまま物凄いスピードでネウロイを突き破りコアを破壊する。ローマの街をキラキラと輝くネウロイの残骸が彩るのであった。

ミーナ「お疲れ様でした。　大神大尉ちょうどよかった、　巴里から通信が入っていますよ」

基地に帰還したのは夜の事だった。　兵達が積み下ろし作業をしているとミーナが大神の元にとやって来た。

ペリーヌ「そうですねすわ大尉！　私にも変わっていただけませんか？」

大神「ペリーヌ君もかい？　ああ、構わないよ」

二人は急いで通信室に向かって行った。

大神「はい、　通信変わりました」

グリシーヌ「隊長か、　先程正式に申請したのだが、　少し巴里に来て欲しいのだ。　書いて貰わないといけない書類も溜まっているし、　どこかの馬鹿が盛大に昔の書類をぶちまけて書き直して貰わないといけない書類まで増えたのだ」

通信の向こう側からは泣きながら『ごめんなさい』と叫ぶエリカの声が聞こえて来た。

大神「あはは……分かった。　正式な申請なら問題無く行けそうだ。　そちらに向かうよ」

グリシーヌ「うむ……宿の心配はするな。　ブルーメール家には空き部屋がいくつも……うるさいぞ！　いいではないか宿くらい！　隊長を普通の宿に泊めるのもおかしいだろう！」

今度はブーブーとブーイングが聞こえて来る。　大神は彼女達の声に笑っていたが、　ペリーヌが要件がある事を思い出して彼女に聞く。

大神「ペリーヌ君、　誰にだい？」

ペリーヌ「あ、　グリシーヌさんでお願いしますわ……」

大神「グリシーヌ、　ストライクウィッチーズのペリーヌ君が君に要件があるそうだ」

グリシーヌ「うむそうか……詳しい事はストライクウィッチーズの隊長に伝えた。　すぐに聞きに向かってくれ」

大神「分かったよ、　じゃあペリーヌ君に変わる」

大神はペリーヌに通信機を渡してミーナの元に向かった。

ペリーヌ「……あの、この度はなんとお礼を言っていないか」

グリシーヌ「礼などいらぬ。貴公の行動はまさに貴族の鏡だ。

威張る事しか出来ない巴里の貴族達に貴公の爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだ」

ペリーヌ「でも……ありがとうございます。現クロステルマン家

当主の父に変わり私がお礼申しあげます。この恩は忘れません」

グリシーヌ「よいと言っているのに……大神は居ないな？」

ペリーヌ「？ はい、隊長の元に行きましたわ」

グリシーヌ「その、なんだ。同じ男に惚れた者同士だ。付き

合いも長くなろう、クロステルマン家が復興してから何か南方の名物でも送ってくれ……だからうるさいと言っているだろう！」

今度は向こうからグリシーヌをヒューヒューとはやし立てる声が聞こえてくる。ペリーヌは微笑んで返答した。

ペリーヌ「はい、クロステルマン家が復興できたら特上のワインをお送りしますわ」

眩しいまでの彼女の笑顔、ペリーヌ自身久しぶりに心から笑ったのではないかと思えるその笑顔はまるで太陽のように眩しい程だった。

次回予告 ペリーヌ「大尉も巴里に行ってしまったし、私達だけでも頑張らないと……へ？ 軍からの要請でガリア南方にて慰安のイベントをして欲しい!? クロステルマン家として、全力で慰安しますわ！ え？ ……何か出し物をして欲しい!? 次回『夢と勇気の羅馬若歌劇団』 な、なんでこんな時に大尉がい

ませんの！」

第六話「夢と勇気の羅馬若歌劇団」 (前書き)

ストライクウィッチーズ×サクラ大戦SS

第六話「夢と勇気の羅馬若歌劇団」

六話「夢と勇気の羅馬若歌劇団」

私、エーリカ・ハルトマンには好きな人が出来ました。この話を昔からの知人にすると皆驚いたような表情をします。失礼な友人達だと呆れますが自分でもまさかこんなに男の人を好きになる日が来るとは思いませんでした。今日はそんな彼との婚前旅行のお話。うそ、ただの護衛のお話。

ミーナ「……あのねえ」

ミーナは談話室で頭を抱えた。買い出しから帰って来た面々と共に食事を食べた後、大神が明日にでも巴里に向かうとの話を皆にした時の事だった。

『扶桑から預かっている歴戦の隊長大神一郎を一人で巴里に送り出してもし怪我でもさせたら大事だ。ここは我々の中から護衛を付けるべきだ』

と彼女達が一斉に言い出した姿を見てミーナは本日二度目の頭痛に襲われた。皆はそうだと誰となく言い出して頷きあっている。

ミーナ「……上手い言い訳を見つけたわね。確かに一理あるのが

厄介だわ……貴方達最近ちょっと露骨よ?」

バルクホルン「な、なんの事だ?」

美緒「そ、そうだ! 現に大神を失うのは相当の痛手だぞ!」

大神「死ぬ前提ですか……」

ミーナ「……はあ、本当に貴方達は。いいですか! 一人ですからね! 他には基地の兵を付けます!」

本来ならば基地の兵だけで行かせるのだろうが、彼女達の意見も取り入れなければ隊の士気に関わる。問題児集団ストライクウィッチーズの隊長は頭痛との戦いもあるのだった。

エーリカ「じゃー早速護衛ジャンケンたいかい！」

エイラ「……旅行。なあ一郎、旅の行程はどんなモンダ？」

大神「そうだね、ロマーニャからガリア。蒸気機関車で二、三日って所かな。途中宿が必要だね」

エイラ「……なりふり構ってらんないナ」

エイラは珍しく本気の表情で同じく異様なオーラを放つ少女達に相対する。

エーリカ「それじゃあ！ それぞれ相手を見つけて一発勝負のトーナメント方式で！」

エーリカの掛け声で本日二度目の大勝負が開催されるのだった。

ミーナ「……大神大尉、巴里でどうなっても知りませんかね？」

大神「い、いえ……自分はこんなつもりでは」

ミーナはジトっと大神を見つめる。

ミーナ「……皆さんをこんなにたらし込んで。悪い人ね」

大神「そういうつもりでは無いのですが……申し訳ないです」

エーリカ「あー！ ミーナが一郎に色目使ってる！」

天性の運か野生の勘か、やけにじゃんけんに強いエーリカがペリーヌを破って次の相手が来るのを待っていたが。ミーナと大神が話しているのを見つけて間に入ってくる。

ミーナ「違います！ 何言ってるのよフラウ！ 私は貴方達と違って冷静です！」

エーリカ「えー何それどういう事？」

ミーナ「恋は盲目って言うでしょう？ 私はストライクウィッチーズ最後の砦として常に冷静に判断しているの！」

エーリカ「ふーん、最後の砦ねえ。……色々あると思うけどさ、自分の気持ちに正直になると大分楽になると思うよ」

そう言うと、タタタとエーリカは再び戦いの中に走って戻って行った。

ミーナ「フラウ！」

大神「はは……相変わらずだなエーリカ君は」

ミーナ「……ああ見えて。とっても優しく仲間思いの子なんです、私も何度か相談に乗って貰ったわ」

大神「み、ミーナ隊長ですか!？」

ミーナ「あら、私が相談したらいけないかしら？」

大神「いえ……少し以外でした」

ミーナ「……私は、皆さんが思っているよりずっと情けなくて……臆病な人間です。一人の男性を忘れられない。駄目な女です」
皆がじゃんけんに熱狂する姿を遠目に二人は眺める。ミーナは普段からは考えられない程に淋しげな表情で居る。

ミーナ「……本当は、皆さんが羨ましいんです。一人の男性を思い切り好きになってその男性に全てを尽くして共に戦う……私は……」

大神「いいじゃないでしょうか。その人はずっと超えられない人。いえ超えてはいけない人。そう割り切ってしまった。二番目に好きな人でも……生涯その人を愛せば二番目でも許してくれますよ。きっと」

ミーナ「まためっちゃな事を言って……そんな気持ちで付き合ったら相手の男性に失礼でしょう？」

大神はそうですよね。と苦笑しすいませんと謝った。ミーナは少したってから理解した。これが大神の優しさなのだと。大神は知っている。ミーナには以前愛していた男性が居た事を。その男性がもう戦死してしまって二度と会えない事を。それを知っていたからその彼を忘れなくてもいいなどとんでも無い事を言ったのだ。

ミーナ「……居ると思いますか？ 始めから貴方は二番目ですなんて言ってそれを受け入れてくれる男性が」

大神「……ミーナ隊長程美しくて聡明な方だったら。きっと居ますよ」

ミーナ「また無責任な事を言って……そ、そう言えば……私知っているんです。私の知り合いで恐ろしい程の数の女性に思いを寄

せられ、それ全てに答えようとしている不屈き者が居るのを」

大神「は、はあ……」

ミーナの顔が悪戯っぽく笑う。いつも真面目な表情をしている彼女からは考えられない表情だ。

ミーナ「その不屈き者だったら……私が二番目に好きだと言っても……受け入れてくれるかしら」

大神「……きつと、受け入れると思います」

ミーナ「……大神大尉、その――」

ルッキーニ「ずるいずるいずるい――！ 反則だよエイラあ！」

ミーナが開きかけた口をルッキーニの大声が遮る。

大神「どうしたんだいルッキーニ？」

ルッキーニ「エイラ能力使ってるー！」

エイラ「な、なんの事だよ？」

エイラの頭にはピコピコと動く耳、お尻からは尻尾がスラリと伸びている。どう見ても能力を使っていた。

エーリカ「うわ……エイラ大人気ない」

エイラ「な、なんだよ！ ルールで能力使っちゃ駄目とは言っていないダロ！？」

エーリカ「まったくもう……いいよ。決勝は私とエイラだね」

決勝戦はエイラとエーリカの一騎討ち。能力を使ってまで大神と旅行に行きたいエイラなのであった。

エーリカ「ねえ、エイラの能力って『もつとも確率の高い未来を見る』能力だよね？」

エイラ「ああ、そうダゾ？ だからこの状態の私にじゃんけんで勝つのは――」

エーリカ「確実な未来じゃ無いなら大丈夫。掛かってきなさい」

エイラ「……フッフッフ中尉。悪いけど勝たせて貰うゾ」

エーリカとエイラが睨み合う。エイラは固有魔法を展開し数秒先の未来を読む。

エイラ「（見えるゾ……悪いな中尉）」

エーリカ「じゃーんけーんポン！」

エイラ「……ああああああああああああ！　な、ナンデ！？」

エーリカ「あ、勝った」

エイラがチョコキ、エーリカがグーを出してエーリカが勝利する。

シャーリー「どうなってんだあ？　未来読んだんじゃないのか？」

バルクホルン「……見ろ、ハルトマンのあの呆けた表情を。きつと何も考えずに出したに違い無い」

シャーリー「……ハルトマンの適当は確率すら超越すんのかよ」

エイラ「うううう……」

エーリカ「と、言う訳で。よろしくね一郎♪」

ずっと大神の腕に抱きついて頬を寄せるエーリカ。その表情だけで並の男ならば理性が吹っ飛んでいるだろう。

「……」

大神「え、エーリカ君取り敢えず離れて」

ジツと皆の突き刺さるような視線が大神に集中する。

ミーナ「……いいですね大神大尉、ハルトマン中尉。あくまで

任務と護衛ですので、羽目を外す事の無いように！」

大神「は、はい！　勿論です！」

エーリカ「はい」

いつもの数倍は怖いミーナの一声で、この日は解散となった。

その翌日。最寄りの駅に向かう為軍の車が用意される。エーリ

カと大神が軍の車に乗り込むのをウィッチの面々が窓から覗く。

エイラ「……なあ、中尉と何日か二人きりになって理性保てる男居ると思うか？」

シャーリー「無意識で男のドツボ撃ちぬくような人だからなあ……ま、まあ一郎なら……」

芳佳「や、宿に泊まったりするんですよね？　護衛だから同じ部屋みたいな展開になって……」

リーネ「いつもだったら誰かが邪魔に入りますけど今回は……」

ペリーヌ「大尉も男ですわ、何かの間違いで……さ、最後まで……」

ルッキニー「最後？ 最後って何？」

バルクホルン「そ、そんな訳があるか！ 任務中だぞ！ そんな……」

サーニヤ「（……ハルトマンさんいいなあ）」

ミーナ「ほら皆さん！ いつまでも見ていないで通常通り動いてください！」

美緒「そうだ！ まったく情け無い！ それでもウィッチか！」

エイラ「……宮藤、昨日一郎と少佐どうだった？」

芳佳「えっ！？ あ、あの……」

美緒とエイラの表情を交互に見る。そして顔を赤くして大声で叫ぶ。

芳佳「わ、私見てません！ 私寝てましたから……坂本さんが聞いた事が無いような声で大神さんに甘えてたの見てません！」

美緒「みやふじいいい！？ そんなに訓練がしたいのか？ よし分かった今日はフルコースだな！」

芳佳「え、エイラさんとか皆が言えって！ 言えって顔してたんです！ 助けて！ 誰か助けてええ！」

エイラ「ほらミロ、私達よりたち悪いじゃナイカ」

ミーナ「……はあ」

大きくミーナが溜息を付く後ろで美緒が芳佳を抱えて運動場にと連行して行くのだった。

エーリカ「わあ一等車中の一等車だよ。 お金持ってるねえ扶桑海軍」

大神「まさか個室とは……俺もびっくりだよ」

蒸気機関車に乗り込み指定された席に向かうとなんと小さな個室であつた。

護衛「まず本日はロマーニヤの国境沿いまで向かいます、その後

ヴェネツィアを経由してガリア入りとなります」

大神「分かりました。ではよろしく願います」

護衛「了解いたしました！ お楽しみください！」

何故かエーリカを見て護衛は敬礼をして部屋から出て行った。

エーリカ「お楽しみだって、私一郎に何かされちゃう？」

大神「何を言っているんだいエーリカ君！」

エーリカ「こうやって、ちゃんと二人きりになるのロマーニヤ来

てから初めてかもね」

大神「そうだね、色々と忙しかったしね」

エーリカ「……シャーリーとか少佐と忙しかったもんね？」

大神「あ、あはは」

エーリカ「……もう、私はちゃんと皆の前で恥ずかしい思いしてまで好きって一郎に言ったよね？ 少しはその勇気を称して欲しいなあ」

大神「それは……そうだね。何をすればいいんだい？」

エーリカ「えへへ……ご褒美欲しいな」

大神はごくりと息を呑んだ。スルスルと移動し膝の上にちょこんと座ったエーリカは上目づかいで大神を見つめる。

大神「（俺も男だ……すまん皆、これは無理だ）」

鉄壁を誇る大神の理性をなんなく破壊し、大神とエーリカは静かに唇を重ねた。数秒唇を重ねた後に大神が離れるとエーリカは何故かムスツとした顔をしている。

大神「……エーリカ君？」

エーリカ「……手馴れてるよね？」

大神「な、何を言っているのか……」

エーリカ「手馴れてるよね？」

大神「……ま、まあ初めてではない」

エーリカ「私は初めてだったのに……いいよー今日は、いや、これからの何日かは……私の独り占めだもん」

そう言ってギョツと大神に抱き着くエーリカ、本気でこの数日理

性が保てるか心配な大神であった。

ペリーヌ「慰安イベント？」

ミーナ「ええ、本日正午付けで正式に任務として発令されました。世間的にも人気があるストライクウィッチーズ総出でガリア南方での慰安イベントに参加して欲しいとロマーニャ政府から直々の御達しです」

バルクホルン「ガリアとの外交道具に使われるのは嫌だが市民の人々には関係無い事だ。良い事だと思う」

美緒「その間の管轄はどうなる？」

ミーナ「数日ですのでその間はロマーニャのウィッチ達が引き継ぐそうです」

エイラ「なんだヨー！ 昨日の内に言ってくれたら途中まで一郎と一緒に行けたじゃないかアー！」

エイラが声を荒げてそう叫ぶ。

ペリーヌにとっては自分の元領地での慰安とあって他の者達と違い大張り切りであった。

ペリーヌ「絶対成功させましょう！ それで中佐、一体何をするのです!？」

ミーナ「そ、それが……握手会や出し物をして欲しいと」

ペリーヌ「……へえ？」

シャーリー「出し物？ 何やれてんだよ！」

バルクホルン「あまり乗り気ではないが飛行ショーなどだろう。

それならばぶっつけ本番でもいつも通りやればなんとかなりそうだ」

本来ならば飛行をショーにするなど持ったの他だ！ と言うバルクホルンであるが家を焼かれた人々に少しでも勇気を与えられればとそれを提案する。

ルッキニー「えー!？」 歌劇団にしようよ！ 歌劇団！」

シャーリー「華撃団？ 戦うのか？」

ルッキーニ「そっちじゃ無く！ 歌って踊るの！」

宮藤「あ、面白そう！」

リーネ「で、でも難しいんじゃない……」

ルッキーニ「ロマーニャ歌劇団結成だね！」

美緒「ロマーニャ歌劇団か……」

どこか華撃団と言う響きに憧れていた皆は内心悪い気もせずに皆でその名を呟く。

美緒「大神が居れば色々と話も聞けそうだが……まあなんとかなるだろう」

ミーナ「……大丈夫かしら」

乗り気な彼女達を見てまた溜息を付くミーナだった。大神から数日遅れで彼女達もガリアにと向かうのであった。

幾千の夜と幾万の歌に飾られて誰もが恋する街。 巴里

エーリカ「この街に来たら誰もが忘れて歌うよ♪ だね」

大神「流行り歌かい？」

エーリカ「巴里の歌なんじゃないの？ ほら、ついたよ」

ガリアの首都であり重要都市である巴里。 その地に再び舞い降りた青年とその護衛の少女。

大神「エーリカ君、くっつかないでくれよ。 歩きにくいよ」

エーリカ「えー？ 巴里の皆に見られたら大変とか思ってるんでしょー？」

大神「い、いや……それは……少し」

エーリカ「もー……でもごめん。 少し遅かったかも」

大神「……え？」

大神が恐る恐るエーリカが見つめるホームの先を見る。

エリカ「……」

グリシーヌ「……」

花火「……」

コクリコ「……」

先程の大騒ぎはなんだったのか、 元来誰とでもすぐに仲良くなつてしまうエリカは早速エーリカと仲良しになっている。

エリカ「去年ブリタニアでお会いした時はあんまりお話出来ませんでしたもんね。 ゆっくりお話ししようね。 そういえばエリカとエーリカって名前も似てますよね」

エーリカ「そだねー。 巴里華撃団は帝都での戦いにも参加したんだっけ？」

エリカ「そうなんですよ！ 私達が帝国華撃団のピンチにカノン砲で颯爽と扶桑に現れ助けたんです！ 帝国華撃団の皆さんがエッフェル塔での戦いで助けに来てくれた御恩をやっと返す事が出来ました！」

エーリカ「凄いねーやっぱ華撃団はやる事が違うよ」

パクパクとお菓子を食べて話を聞いているエーリカだがエリカはまたも自分を抱きしめてクネクネと動きだす。

エリカ「それですね……扶桑で大神さんは……私を生涯のパートナーとして認めてくれたんです♪」

大神「エリカ君！？」

ブボツと休憩で飲んでいた紅茶を吐き出す大神、 エリカは恥ずかしそうに顔を覆っているがエーリカはジツトリとした視線を大神に向ける。

エーリカ「へー生涯のパートナーね……」

大神「そ、 それは双武のパートナーとしての事であって……うっ」
大神の眼にエリカのキラキラとした瞳が写る。 とても『あれは双武のパートナーだけの事だよ』と言える雰囲気では無かった。

エーリカ「……いいよー私と一郎だって色々してるもんねー？」

大神「え、 エーリカ君まで……ううっ」

大神の隣に座っていたグリシーヌとロベリアがギツチリと大神の脇腹を抓る。 表情は見えなかったが尋常ではない力だ。 花火も悲しそうな目で見ている。

エリカ「えー！？ なんですか！？ やっぱ現地妻ですか！？」

どんな事してたんですか!？」

エーリカ「えへへー内緒♪」

大神「……痛い、痛いよ二人とも」

ロベリア「あ？」

グリシーヌ「ん？」

大神「……いえ」

あまりの圧力に屈して俯く大神であった。

エリカ「大神さん! どういう事ですか!？」 あの夜ベッドで私に

言ってくれた事は嘘だったんですか!？」

大神「だからベッドは違うよエリカ君!」

エーリカ「……えへへ」

ロベリア「今完全に私の方が上行った。 って顔したろカールスラ

ントの英雄さんよ」

エーリカ「してないしてない」

グリシーヌ「ま、まさか。 したのか!? 一夜を共にするよう

な事をしたのか!？」

大神「そ、 そんな事は無いさ。 そうだよねエーリカ君」

エーリカ「……ぶー」

ロベリア「言っておくが、 巴里華撃団の面々は皆隊長と一線超え

てるからな? 勝ったと思うなよ?」

ロベリアがわざとらしく大神に抱き着く。 エーリカに見えない所

で大神の口を手で塞ぐ。

エーリカ「……本当?」

ロベリア「勿論だ、 まさか子供みたいに少し手を繋いだーとかほ

っぺにキスしたーとかで勝ったとか思っていないよな?」

コクリコ「ねー『いっせん』ってなに?」

グリシーヌ「い、 今は黙っているのだコクリコ」

エーリカ「……ちゃんとキスしたもん。 巴里に来る旅の道中だっ

てずっと一緒に寝てたもん」

ロベリアの策略にハマったエーリカの発言で時が止まる。 グリシ

ーヌとロベリアは無言で立ち上がって各自の武器を取る。

大神「ま、待つんだ皆――」

ロベリア「ついに尻尾出しやがったな。隊長、歯を食いしばれ」

エーリカ「え、あれ？ ……もしかして私ハメられた？」

グリシーヌ「ふ、ふふ……そうか、私だけでなく……ふふふ……」

花火「……」

大神「花火君！ み、皆を止めよう！」

花火「……不潔です」

エリカ「わ、私だってキスしたし何回も大神さんと一緒に寝ましたー！」

パイとソップを向いてしまった花火。 とんでもない事を叫ぶエリカ。 それを合図にしたようにロベリアとグリシーヌが大神に攻撃を仕掛けるのだった。

そんな大騒ぎを止めたのはシャノアールに久々に鳴り響いた警報だった。

大神「警報！？ 皆司令室に！」

「「了解！」」

それまでの痴話喧嘩などなかったかのように皆の顔つきは真面目そのものだ、エーリカは関心しながらバリ華撃団の後ろに続く。

グリシーヌ「ネウロイ！？ 何故今再びガリアに！？」

グランマ「どうやら、二十程の群れがウラルに向かっているようだね……幸い巴里は通らないが……お嬢ちゃん達が大変だね」

大神「お嬢ちゃん達？」

グランマ「聞いてないのかい？ 今ストライクウィッチーズはガリアの南方に慰安イベントに来ているんだよ、恐らく装備は持って来て居るだろうが……二十となると厳しいだろうね」

大神「皆が……」

シャノアールの地下には緊迫した雰囲気漂う、その頃ストライクウィッチーズはまだネウロイの接近には気がついていなかった。

バルクホルン「まったく！ 最初からこうすれば良かったのだ！」
シャーリー「まーまー、 いいじゃん。 思い出思出」

ルッキーニ「ちよつと練習不足だったねー」

ガリア南方、 ストライクウィッチーズは大神に遅れる事数日でガリアにと入っていた。 慰安イベントと称して羅馬若歌劇団の劇をやるという話になったのだが、 当然の如く舞台はグダグダになつてしまい急遽飛行ショーの後に植林活動を行っているのだった。

サーニヤ「あそこまで慌てているバルクホルンさんは初めて見ました……」

シャーリー「ハルトマンと大神が居なくてよかったなーあれは一生物で弄られるレベルだったぞ」

バルクホルン「うるさい！ だから私はあんなヒラヒラした服を来てお姫様役は嫌だと言ったのだ！」

エイラ「似合ってタツテ。 案外あんな服着てれば一郎も優しくしてくれるかもしれないゾ？」

皆で面白がってバルクホルンをお姫様役にしたてあげたのだが、当の本人は少しも嬉しそうではなかった。

ミーナ「いつも戦ってばかりだけれども、 こうして木々や花を植えるのもいいわね」

多くの住民達と協力して植林を行う彼女達ストライクウィッチーズ。

今ばかりは戦いの事を忘れてそれに励んでいる。

美緒「ほら、 宮藤とリーネが地域の人々と一緒に昼食を用意してくれたぞ。 ありがたういただこう」

美緒の言葉で皆が集まる、 かなり大規模での昼食を皆で地べたに座りながら取る。

ペリーヌ「……」

アーサー「お嬢様、 本日は本当にありがとうございました」

ペリーヌ「アーサー、 ガリアは……ここまで蘇っていたのね」

アーサー「ええ、 これも復興に関わってくれた全ての人々の力で

す。必ずやクロステルマン家は、いえ、ガリアは復興します！」

ペリーヌ「そうね……軍用トラック？」

その時、ペリーヌは物凄いスピードで迫って来る軍用トラックが丘を超えて来るのを見た。植林活動の本拠としていたテントにトラックが横付けされ兵が飛び出すようにミーナの元にと向かってくる。

伝達兵「報告します！　ネウロイが欧州を横断しようとしています！　恐らくウラルに向かうモノと思われ、数は二十！　この真上を通ります！」

ミーナ「二十！？　……決戦時と比べれば少ないですが、とても一部隊で対処出来る数じゃないわ！　距離は！」

伝達兵「会敵まで凡そ十分！　急いで準備を！」

バルクホルン「何故そこまで接近に気が付かなかった！　ミーナ！　すぐに迎撃に上がろう！」

ペリーヌ「そんな……また……せっかく……復興したのに！」

芳佳「落ち着いてペリーヌさん！　今はあの頃とは違います！　私達が……！　私達ストライクウィッチーズが居ます！」

アーサー「人々の避難はお任せください。お嬢様、御武運をしています」

ミーナ「ストライクウィッチーズ、出撃してください！」

ペリーヌ「もう……絶対に、絶対に！」

ギッ、とペリーヌの目がこれまでに無い程に憎しみの色に染まっていく、周りの者もそれに気がついていたがとてもそれを言える雰囲気ではなかった。

ガリアの空に上がるストライクウィッチーズ、ペリーヌ達が一生懸命復興した街や木々、ようやく形になって来たそれらをやらせる訳にはいかない。

ミーナ「皆さん！　この先を越されると一般の方々に大きな被害が出ます！　なんとしても食い止めます！」

「了解！」

目と鼻の先に迫ったネウロイの群れ、報告通り二十程のネウロイはこちらを確認すると直ぐ様戦闘態勢に移行し光線を放って来る。美緒「いいか！ 地上には光線を撃たせるな！ 出来るだけ上空に逃げるんだ！」

リーネ「難しいけど……やらないと！」

ルッキーニ「ペリーヌの努力を無駄にはしないんだからあ！」

本来、一匹のネウロイに対して複数のウィッチで対処するのが人類の基本的な戦法である、エース部隊であるストライクウィッチーズでさえ一対一の戦いは厳しいと言える、一年程前だったならまだ対処のしようもあっただろうが、この一年でネウロイ側も進化を続けている。

シャーリー「二匹行ったぞ！ 抜かせるな！」

リーネ「はい！」

狙撃手のリーネがネウロイに発砲し足止めする。エーリカと大神の抜けたストライクウィッチーズは総勢十名、倍のネウロイを相手にするのは相当厳しい戦いであった。

それでも、彼女達は戦った。数匹のネウロイを撃破し、なんとか突破される事無く持ちこたえた。しかし、限界は近づいていた。

ミーナ「つく……もう弾が……魔力も無くなり掛けてる」

美緒「まだだ！ 戦えるウィッチは前に出る！ ここを突破されては……！」

ペリーヌ「どうして……どうして！？ 私達は……ただ元に戻した

いだけなのに……どうしてそれすらも……！ どうして！」

力も尽き果てペリーヌが叫ぶ、これまで全てを掛けて行って来た復興、今それが無に帰そうとしている。

ルッキーニ「ね、ネウロイが……！」

数匹のネウロイが突破し、民家が立ち並ぶ地域の上空に入ると光線を放ち民家を吹き飛ばす。

ペリーヌ「もう……やめてよ……もう……」

「――諦めるな！ 貴族たるもの、常に優雅に美しくだ！ 貴公の戦いは決して無駄ではなかった！」

ペリーヌ「だ、誰ですの？」

突如インカムに響いた声、その直後にサーニヤの魔導針に反応が感知される。

サーニヤ「高速で接近する物体……地上で？ 列車です。物凄く

早い列車です！」

「そうだ！ 貴公の復興のおかげで！ 貴公が敷いたレールで！ 我々はここまでこれた！」

――緊急車両が通ります、ご注意ください！

汽笛と音声での注意が繰り返される、ネウロイとの戦闘の最中に強行突入して来る一つの列車、巴里の、いやガリアの守り手達を迅速に運ぶ為に開発されたその装甲列車はウィッチ達が戦う真下に停止し六色の煙幕を上げた。そして。

「[巴里華撃団、参上！]」

煙幕が晴れると上空には彼女達の姿、エーリカまでも一緒にポーズを決めている。直ぐ様迎撃に入り突破したネウロイを攻撃し始める。

ミーナ「お、大神大尉！ どうしてここに！」

大神「[巴里華撃団の皆がどうしても出撃したいと言ったので共に来ました。もう、心配はいりません！]」

ペリーヌ「み、皆さん……」

エリカ「もう大丈夫ですペリーヌさん。一年と少し前、私達が巴里を動けなかった時は助けに来れなかった……でも、今は違います！ 私達が、巴里華撃団が居る限り！ ガリアで好きにはさせません！」

大神「[巴里華撃団、出撃せよ！ 目標ネウロイを全て撃破するんだ！]」

「[了解！]」

エリカ「皆さん、回復です！ 久しぶりに同じ空を飛べますね！」
エリカの治癒魔法の加護が降り注ぐ、魔力ごと回復して彼女達に力が戻る。

バルクホルン「ありがたい！ 今一度力を振り絞るぞ！ ペリーヌの故郷を守るのだ！」

エリカ「えへへーバルクホルン大尉に褒められちゃいましたー」

ロベリア「馬鹿！ 後ろ！ 前も来てるぞ！」

エリカ「へ？」

褒められて調子に乗っていたエリカにネウロイが迫る。

大神「エリカ君！」

白銀の光武が空中を駆ける、まずは目の前のネウロイを抜刀し切り抜けエリカの光武を抱きかかえる。そのまま疾走し回転しながらもう一方のネウロイに返す刃で攻撃して撃破する。

体勢を立てなおしてからエリカの光武を降ろそうとするがガッチリと光武で抱きついて来るエリカ。

エリカ「大神さぁくん！ やっぱりエリカの事が一番なんですねぇ！ 私も大好きです！」

大神「エリカ君空中だから！ 落ちるから！」

「……」

完璧な動きでエリカを救出してイチヤイチャする二人を無言のプレッシャーで責める巴里華撃団とストライクウィッチーズの面々だった。

ペリーヌ「あと五匹！ 行きますわ！」

大神「ペリーヌ君！ 焦ったら駄目だ！」

ペリーヌ「大丈夫ですわ！ トネー——」

芳佳「危ない！」

勝負を急ぎ突出したペリーヌに光線が降り注ぐ、芳佳が間一髪でシールドを張りペリーヌを守る。

大神「ペリーヌ君！ 気持ちは分かる！ 俺もガリアで戦った人間だ！」

ペリーヌ「大尉……」

大神「一緒に行こう！俺達で倒すんだ！」

ペリーヌ「はい！大尉！」

大神とペリーヌがネウロイにと突っ込んで行く。

バルクホルン「何をする気だ！無茶だ！」

エリカ「まさか……？」

グリシーヌ「ウィッチとも出来るのか！？」

大神の紫電とペリーヌの雷撃、二つの力を一つにしてネウロイにとぶつける。

大神「――絶対正義の御旗のもとに、集いし魔法と降魔の力！」

ペリーヌ「――平和な明日を夢見て走る、民の笑顔をこの手で守る！」

心からの叫びを重ねあい、霊力と魔力が混ざり合う、青白い光は稲光となり残りのネウロイを襲う。

大神「狼虎滅却！」

ペリーヌ「紫電青雷！」

閃光が疾走し、それがおさまるとネウロイの姿はもうそこには無くキラキラと残骸だけが空中に舞っていた。

コクリコ「凄いね！ウィッチの人とも合体攻撃出来るんだ！」

エーリカ「合体攻撃？」

花火「はい、お互いの事を信頼し力を重ね合う事で使える強力な攻撃です」

シャーリー「まさか一郎とペリーヌがなあ……なんかまだ空高くに居るし」

ストライクウィッチーズも巴里華撃団も驚いて二人を見上げている、当の二人はまだ空高くに浮かんでいた。

大神「……ペリーヌ君、無事守り抜けたね」

ペリーヌ「ええ……大尉のおかげですわ……私の事……クロステルマン家の事……これからよろしくお願いしますわ」

大神「ああ、頑張っで行こう」

グリシーヌ「……クロステルマン家とはどういう事だ？」

エーリカ「あーあ、 どうするミーナ？ 本格的にミーナが最後の砦になっちゃいそうだよ？ もう決壊寸前かもしれないけど」

ミーナ「……うるさいわよハルトマン中尉、 貴方こそ巴里で羽目を外してないでしょうね？」

エーリカ「してないしてない」

ロベリア「何言ってやがるベツタリだったじゃないか」

そんな事を言っているウィッチと華撃団面々、 避難していた人達も戦闘が終わった事を察して外に出てきて手を振ってはいつまでも勝利を祝っているのだった。

エイラ「オイオイ、 巴里から帰って来た一郎と中尉前以上にイチヤイチヤしてるゾ！？ ……ンダヨー私ダツテエ……！ 面白くナイナ……サーニヤの盾役も宮藤に取られるしサ……私ダツテ……次回『空より高く』」

第七話「空より高く」（前書き）

遅くなってしまうてすいません

誤字脱字はまったり受け流してください

第七話「空より高く」

七話「空より高く」

ワタシ、エイラ・イルマタル・ユーティライネンには最近気になる事がアル。先日のカリアでの戦闘が終ワリ、私達は無事ローニャにと帰還シタ。それに遅れる事数日でまだ巴里に仕事が残っていると言って巴里に戻っていたあの馬鹿と中尉が帰って来タ。

ワタシは、イヤ、私達は驚愕シタ。何処かしら漂う二人のいい雰囲気、そして中尉の勝者の余裕とも取れる態度。まあ前からおっとりしてる人だったケド……とにかく、私達は絶対巴里で何かして来たに違い無いと踏んデルンダ！　まず第一そもそもあの馬鹿と最もディープな――（以下略）

美緒「何？　ミカサがこっちに来るだど！？」

大神「ええ、これから皆に詳しく説明したいと思う。　ミーナ隊長、　よろしいですね」

ミーナ「はい、　まず皆さんに詳しい資料をお渡しします」

大神とエーリカが巴里より戻って来て一週間程、　大神が欧州に来てから一ヶ月が過ぎようとしていた。

ウィッチ達の手元に配られた資料には『ユーラシア中央殴り込み艦隊第七次中間報告』と記されていた。

シャーリー「なんだあこの「ユーラシア中央殴り込み艦隊」ってなんとも言えないネーミングは？　それにユーラシア中央に行くのに艦隊？」

サーニャ「ユーラシア中央……ウラルの山々を超えて……」

大神「順を追って説明する。　まず留意して欲しいのはこのユーラシア中央殴り込み艦隊の設立は相当先の話だ。　まず我々はローマニアの巢をどうにかしなければいけない。　その役割は変わっていない」

美緒「ふむ……なるほど米田中将の仕業か？」

美緒は資料をペラペラとめくって目を通す、芳佳やリーネも同じようにページを捲るが書いてある事が難しくよく理解出来ていないようだった。

大神「そのようです。これが以前言っていた人類の大規模反攻作戦の真相のようなんだ。米田中将の考えた作戦は至ってシンプル。

超弩級空中戦艦ミカサを旗艦に空中戦艦で艦隊を組む。その艦隊に各国のウィッチ部隊や俺達降魔部隊が乗り込みネウロイに完全に占拠されてしまったユーラシア中央を目指す。ユーラシア奪還はまさに人類の悲願……これを成し遂げさえすれば残りの大きな戦線はアフリカ戦線のみとなる訳だ」

バルクホルン「空中戦艦で艦隊と簡単に言うが……あれは華撃団秘中の秘、一般に知られている蒸気技術しか持たない他の国々では艦を浮かせるなど……」

大神「それが……扶桑は空中戦艦の技術を公開したらしい。どうやら上も本気のようにです」

皆が集まったミーティングルームがざわつく。どうやらかつてない規模の戦いが起ころうとしている事を彼女達は悟った。

ミーナ「大神大尉はそこで降魔部隊の隊長を、私達はウィッチ部隊の一つとして参加する事になると考えられます」

ルッキーニ「ええー！ イチローと一緒にじゃないのぉー！？」

大神「まだ決まっていない事も多くあるんだよ、決まっているのは侵攻するのは欧州側からと言う事だけ、扶桑側から攻撃して欧州に敵が逃げ込んでも困るとの判断のようだ。だからそれに合わせて早くもミサカが欧州入りするって訳さ、欧州各国の技術者達から実際にミカサを見たいとの要請もあったようだしね」

美緒「そうか……では米田中将と帝国華撃団の面々が？」

大神「いえ、米田中将とメカニックススタッフも兼任している紅蘭だけが欧州に来るそうです。自分からの報告は以上です」

そう言って大神は自分の席にと戻る、そして何事も無かったかの

ようにそのすぐ隣にはエーリカが座る。皆は内心相当唸っていたがミーティング中にそんな事を言う訳には行かない。

ミーナ「ありがとうございます大神大尉。大規模反攻作戦も勿論大事ですが、まずは目先に迫った脅威から対処して行きましょう。先日ブリタニアより更に北の海上で発見されたネウロイです」

ミーナの後ろの壁に写真が投影される、タワー型のネウロイでそのデカさは今までのネウロイとは別格の物だった。

ミーナ「このネウロイのコアは恐らく成層圏にあると予想されます。現段階までに欧州各地のウィッチ部隊は軒並みこのネウロイに関してはお手上げ状態……結局私達に回って来た訳です」

シャーリー「やれやれ、私達は便利屋扱いかよー」

バルクホルン「しかしだ、成層圏の敵にどうやって攻撃する？超長距離射撃でも試みるか？」

ミーナ「……打ち上げます」

バルクホルン「打ち上げる？」

ルッキニー「何を？」

ミーナ「……ウィッチをです」

ミーナの言葉に、皆は目をパチクリとして誰も言葉を上げる事が出来なかった。

ペリーヌ「それにしても、中佐も大胆な作戦を思いつくものですわ。まだ構想段階ですが、本当に大丈夫なのかしら？」

大神「うーむ、ミーナ中佐と坂本さん、そして数人の戦術士官が昼から籠りっぱなしで作戦を立てている。なんとかなる筈さ」

夕刻、昼のミーティングの後すぐにミーナと美緒は作戦会議に入った。未だブリタニアの更に北に居るネウロイが迎撃可能地点に入るまでは時間の猶予があるとされている。それまでは大神達も待機するしか他無いのだった。

エーリカ「大丈夫大丈夫、きっとなんとかなるよ。ねー一郎」
大神「ああ、そうだねエーリカ君」

ソファ―に座る大神にエーリカがコテンと寄りかかる。

シャーリー「……」

バルクホルン「……」

エイラ「……ちゅ、 中尉！ 巴里から帰って来てから前に増して露骨だゾ！ オマエもオマエで少しは遠慮シロヨ！」

エーリカ「えー？ そうかなー？」

大神「痛いよエイラ君！」

ポカポカと大神を小突くエイラ、 エーリカはいつも通りニコニコしている。

バルクホルン「そうだ！ 少し目に余るぞハルトマン！」

シャーリー「ルッキ―ニの前では自重してくれよー？ 教育にも悪いだろーあんまりそういう雰囲気出すとき」

エーリカ「皆だって影では結構してるんでしょ？」

バルクホルン「……してないぞ、 リベリアンはどうか知らんがな」
シャーリー「……カールスラント軍人は嘘が下手だなー顔に書いてあるぞー？」

互いに牽制し合っては睨み合うバルクホルンとシャーリー、 エイラはそれを無視してエーリカに詰め寄る。

エイラ「中尉！ 巴里で何かあったんだろ！？ 正直に言うンダ！」

エーリカ「……えへへ」

エイラ「オイ！ オマエは！ シタのか！？ 何処マデヤツたんだ！？」

大神「ちょ、 ちょっと待ってくれエイラ君！ 何を言っているんだ！？」

はにかんで微笑むエーリカを見てエイラが大神に掴み掛かる。 少しテンションがおかしくなっているようだった。

リーネ「は、 入って行きづらくなっちゃたね」

芳佳「……なんか生々しい感じ」

ミーナ「皆さん揃ってる？ 作戦をまとめました……どうしたの？」
リーネ「い、 いえ」

談話室に続く扉の前で芳佳とリーネは顔を赤くしながら入るタイミングを見計らっていた。そこをミーナに見つかってしまいなんとか取り繕いながら一緒に中に入って行った。

美緒「エイラ、大神、何をじゃれ合っている！ 静かにしないか」

大神「す、すいません」

エイラ「……すいませんデシター」

皆が座りなおしてミーナと美緒の立てた作戦を聞く、それは驚愕の内容であった。

今回の作戦はアタッカーとシールド、二人のウィッチで遂行される。まずは大神の光武二式に垂直上昇用のブースターを取り付けまずは成層圏A地点にとアタッカーとシールドを運ぶ、そこからアタッカーとシールドは単独成層圏B地点にあるネウロイのコアを狙うという物だった。

シャーリー「はぁー物凄い作戦だなぁーそれでアタッカーとシールド以外はどーするんだ？」

ミーナ「他のメンバーは成層圏A地点の直前で待機です……有事に備えます」

バルクホルン「それで、アタッカーとシールドはどう配置するのだ？」

ミーナ「はい、それに関してはすべてのウィッチの中で一番火力のあるサーニャさんをお願いしようと思っています。どうでしょうか」

サーニャ「……はい、頑張ってみます」

ミーナ「ありがとうございます、シールドは宮藤さんに――」

エイラ「ちよっと待ったアア！ サーニャの護衛はワタシがやるに決まってるダロ！」

ミーナ「エイラさん……しかし、本作戦に最も適したシールド規模を持っているのは宮藤さんなのよ？」

エイラ「で、出来るさ。私だって……」

ペリーヌ「そう言えば、 エイラさんがシールドを展開している所を見た事がありませんわ」

エイラ「ウ……」

ペリーヌの言う通り、 ストライクウィッチーズの面々はエイラのシールドを誰も見た事が無かった。 これは彼女の能力に関係しており「最も確率の高い未来を見通す」という固有魔法の力により彼女はこれまでシールドを展開するどころか被弾0という驚異的な戦績を残しているのだった。 彼女の場合シールドを展開しないのではなくシールドを展開する必要性が無いのだった。 それ故に。

今回の任務は彼女には務まらない。

美緒「エイラ、 気持ちは分かるがこれは任務だ……分かってくれ」
エイラ「展開出来れば！ 展開出来ればいいんだろ！？ やってヤルサ！」

エイラもここで引くわけには行かないと食い下がる。 ずっと一緒だったサーニャを自らの手で守りたいという彼女のわがまま、 しかしそれを受け入れるのは難しい事だ。

美緒「……時間はまだ少し残されている。 エイラ・イルマタル・ユートイライネン中尉、 ならば見せてみる、 お前の覚悟を、 お前のシールドを」

いつになく厳しい表情の美緒、 今同情や余計な優しさでサーニャにエイラを付けると優秀なウィッチを二人失う事になりかねない。

それに、 彼女達を失うのは美緒からしても、 いや、 ストライクウィッチーズの全員が避けたい事だった。

美緒の言葉にエイラは少し俯いていたが、 決意を固めて美緒にと向き直るのだった。

リーネ「本当に……本当に撃っていいんですか？」

翌日、 午前中からリーネとエイラは空に上がっていた。 シールドの出来を見極める為にエイラの後ろには美緒が立っている。
エイラ「オーウ！ ドンとコーイ！」

リーネ「じゃ、じゃあ行きます!」

リーネの手がトリガーに掛かる、タンツと短い銃声が響き刹那の瞬間でエイラの元に訓練弾が到達する。

エイラ「ホイっと」

美緒「おい!」

エイラは何事も無かったように銃弾を最小の動きで回避する、その後ろに居た美緒は急いでシールドを展開して訓練弾を防ぐ。

エイラ「あ、あはは……」

美緒「はつきりしたな。お前はサーニヤを殺す」

エイラ「な、何言ってるんだヨ! い、今はたまたま……」

美緒の言葉は厳しいようだが真実であった。エイラの体には能力で回避する癖が染みついており、それを治すのはとてもこの数日で間に合う事では無かった。

美緒「お前を責めている訳ではない。エイラ、お前はウィッチとして抜群の能力を持っている。超一流と言ってもいいだろう。

だが、適材適所と言う言葉もある……悔しいだろうが……」

エイラ「しょ、少佐……頑張るカラ……ちゃんとやるカラ……」

美緒「……サーニヤの護衛には宮藤を付ける、決定だ」

エイラ「……ッ!」

美緒の言葉を聞いて、エイラは目に涙を溜めてハンガーにと降りて行った。途中数人の下士官達にぶつかりながらエイラは逃げるようにと部屋に入った。

サーニヤ「あ……エイラ」

エイラ「うう……」

出来る事ならば部屋に居ないでくれ、そう願ったが無情にもサーニヤは部屋でエイラの返りを待っていた。

サーニヤ「訓練……どうだった?」

エイラ「……は、ははは。ヤッパリ駄目だッタヨ。なんて言うのカナ、天性の才能だから仕方ナイナ! 宮藤なら完璧に守ってくれるだろうカラ安心してイイゾ! サーニヤだってわたしの出

るかどうかも分からないシールドなんかより宮藤の方がイイダロ？」
サーニヤ「そんな……私は……」

エイラ「あーあ、皆の前で格好付けるんじゃナカッターーえっ！？」

サーニヤ「……もう知らない」

エイラの顔にサーニヤの投げたクッションが当たる。サーニヤは小走りで部屋を出て行った。

エイラは自分の見た未来が信じられなかった。あの、あの優しいサーニヤが自分に向かって物を投げた。自分はそれだけの事をしてしまった。

エイラ「……ううう」

ジワツと目に涙が溜まっていくのを感じ、必死で拭ってエイラも部屋をトボトボと出て行くのだった。

エーリカ「ありやりや……それでクッション投げちゃったんだ」

サーニヤ「……」

無言で頷くサーニヤ、夜、月光に照らされ川で水浴びをしていたサーニヤの所にエーリカがやって来た。既にウィッチ達にはサーニヤの護衛には芳佳が付くと通告されていた。それはつまりエイラがシールドを展開出来なかったと言う事だとも理解していた。

エーリカ「まーったく、素直にサーニヤに謝ればいいのに、恋愛だけじゃなく友達関係でも素直じゃないんだから」

サーニヤ「……エイラ、きっと私の事嫌いになった。私は……エイラに守って欲しかった……それは私のわがままなのに……辛いのはエイラなのに……」

エーリカ「ほらほら泣かないの、後で謝れば大丈夫だから。そしてその倍エイラから謝って貰わないと。大丈夫、あんなに性格が良い子他に居ないもん。ちよつと素直じゃないけどさ。きつと許してくれるよ。それはサーニヤが一番知っているでしょ？」
サーニヤ「……はい」

川岸にうずくまって泣くサーニヤを必死に慰めるエーリカ、そしてその頃、基地から少し離れた小高い丘になっている所にエイラは体育座りして俯いていた。

大神「ここに居たのか、随分探したよエイラ君」

エイラ「……何しに来たんだヨ」

エイラは俯いたまま声を出す。丘からはストライクウィッチーズの基地が一望出来る。

大神「……エイラ君、シールドの事は残念だったね、でもこれで全てが決まる訳じゃない」

エイラ「……分かってるよ、シナ事は」

大神「そうか……そうだよな。すまん、こんな時なんて言えばいいのか……」

エイラ「……馬鹿」

大神「ごめん、何も言えないけど……エイラ君の話を聞く事は出来る」

エイラ「……わたし、サーニヤにシールド展開出来なかったって言うトキ……ちゃんと言うのが怖くて……逃げて……どうしようもなく馬鹿な事言ッタ……そしたらサーニヤにクッション投げつけられて……絶対嫌われタ」

大神「そんな事が……だが、サーニヤ君がそれでエイラ君を嫌いになるとは思わないけどな」

エイラ「……そう思いたいけど……本当に悲しいのは……本当に悔しいのは……違うンダ」

エイラはゆっくりと口を開く、いつも飄々としていて人に心の奥底に溜まった物を見せないエイラ。それが今一気に噴き出そうとしていた。

エイラ「何がウィッチダ……何が魔法ダ……わたしは……本当に守りたい人すら守る事が出来ナイ……臆病者だ……逃げる事しか出来ナイ……本当はサーニヤにエイラに守って欲しいって言われたカッタ、頼って欲しカッタ……それはわがままなのに……」

大神は優しくエイラは抱き寄せ頭を撫でてやる、エイラは子供の
ように涙を流して泣いている。

大神「力が及ばなくて……自分の實力不足で大切な人を守れない気
持ちは……痛い程分かるよ。俺も……新人の頃に、誰にも言っ
た事は無いけど内心懂れていた女性を助ける事が出来ずに……結局
その人生を終わらせてしまった事がある……辛いのは分かる、で
もそれを乗り越えるんだ。エイラ君、サーニャ君はまだ生きて
いる。今回の作戦では間に合わないかもしれない……でも、ま
たこんな機会が来るかもしれない。その時、今度こそ君がサー
ニャ君を守るんだ」

エイラ「一郎……」

流れる涙を止める事が出来ずに、エイラはずっと大神の胸の中で
泣いていた。

結局その日サーニャは部屋に戻ってこず、エーリカとバルクホル
ンの部屋に泊まったとの事だった。今の状態のエイラを一人にす
る訳にもいかずに、大神は一晩中エイラにと寄り添うのだった。

そして、その日から二日、結局仲直りする機会も無く作戦決行
の日がやって来てしまった。飛行場に耐寒服を着込んだウィッチ
達が集合する、そしていつもより重装備になった光武に大神が乗
り込む。その手の内に芳佳とサーニャが乗り込む。

大神「地点Bの直前まで粘ってみます。出来るだけ芳佳君とサー
ニャ君の負担を軽くしたい」

芳佳「ありがとうございます……頑張ろうねサーニャちゃん！」

サーニャ「う、うん……」

サーニャが横目でエイラを見る、エイラは耐寒服に身を包んで寂
しそうにポツンと立っている。

時刻が作戦決行時間となり、まずは光武二式とサーニャ、芳佳
が空にと登って行く。

間髪入れずに他のウィッチ達が後に続く、成層圏での戦い。全

てが初めての事なので何が起きるかは分からない。 全員での対応は必須だった。

大神「高度がドンドン上昇して行く……そろそろ通信機器も使えなくなる！ 出来る限りのサポートはする！ 幸運を——」

エイラ「……嫌だ」

ポツ、 とエイラが小さく呟く。

サーニャ「……エイラ？」

エイラ「嫌だ……サーニャは……サーニャは！」

ミーナ「エイラさん！？」

美緒「戻れ！ エイラ！」

エイラが隊列を離れ緊急加速用補助ブースターを引く、 これはもし仮に成層圏から投げ出されそうになった時の緊急脱出用の物、今これを作動させるのは自殺行為だった。

サーニャ「エイラ！？ 何やってるの！？」

エイラ「サーニャは……サーニャは！ わたしが守るんだ！」

補助ブースターが火を吹き大神の光武にとエイラがフラフラと近づく。

エイラ「あと少し……」

芳佳「行きましょう、 エイラさん」

エイラ「え……」

いつの間にか芳佳がエイラの元にやって来る、 芳佳も補助ブースターを引きエイラの背中を押す、 大神の光武がエイラを優しく掴んで引き寄せる。

芳佳はブースターの燃料が切れそのまま他のウィッチの元に戻っていく。

ミーナ「大神大尉！ 戻ってください！」

大神「敵が気づきました離脱はもう不可能です！ すいません、責任は自分取ります」

ミーナ「……もう！」

ルッキーニ「いっけえー！ エイラー！ サーニャー！」

敵を迎撃出来る地点にと到達する、通信機器も死に、無音の世
界が辺りを包む。

敵ネウロイはすでにこちらに気がついており行動を始めている。

――未来まで続いているレールの先かすんでいく

エイラ「(サーニャ!)」

サーニャ「(エイラ!)」

二人は手を繋いで敵ネウロイに相對する。敵のコアは本体と分離した箇所に数個、一気に吹き飛ばすにはサーニャのロケット弾を直撃させるしかない。

――誘導灯遮って迷わすプリズム 頼りないアンテナじゃ出口も見
つけられない 静寂に 暗闇に 飲み込まれそうなの

震える手で照準を付けるサーニャ、その手をエイラが優しく包む。
分離したコアを次々吹き飛ばし本体が姿を現す。

本体が発光を始め光線が射出される、その未来を見通したエイラ
の体が固まる。

エイラ「(や、やるんだ!)」

しかし、長年染み付いた癖は抜けない、彼女の体は勝手に反応
してしまうだろう。

その瞬間、彼女達の前に白銀の光武がかばいに入る。

エイラ「(馬鹿! 何やってンダ!)」

サーニャ「(大神大尉! 光武じゃ!)」

大神「(エイラ君! 君を信じる! 今こそ、今この時こそ!
自分を越えるんだ! エイラ!)」

光武の右腕が大きく振られ、行けとジェスチャーが送られる。

——震える指をそつと絡めて不安と勇氣　お互いに伝えあいたいよ

芳佳「……あ！」

美緒「光線が撃たれた！」

戦っている地点から高度を大きく下げた所から戦いを見守るウィッチ達、　撃たれた光線は何かによって辛うじて防がれている。

シャーリー「シールド……出来たのか!？」

美緒「いや……あの馬鹿!　あれは光武だ!」

ルッキーニ「あ、　でも見て!」

閃光が放たれ、　光武の後ろからシールドが光線を防ぎながら徐々に進んで行く。　そのシールドの主は、　勿論彼女だ。

——あなたの歌にわたしのハーモニー重ねて　夜に　はぐれないように導いて

エイラ「(未だ!　サーニャ!)」

サーニャ「(うん!)」

最後のロケット弾が放たれる。　ネウロイのコアを確実に撃ちぬき崩壊を始める。

サーニャ「(……あつ)」

発射の衝撃で体がフツと浮くのを感じるサーニャ。　成層圏での飛行はこれが初めて、　一度体勢を崩すとどうなってしまうか分からない。

その腕を、　エイラの腕がガッチリと掴む。　彼女の能力はそれを見通していた。　彼女の能力は大切な人を守る為に使われた。

崩壊をくぐり抜け、　光武の腕の中に再び回収される二人。　エイラは二、三言サーニャに告げるがまだ機器が復活しておらずサーニャは首を傾げる。　エイラはサーニャのおでこに自分のおでこをくっつけ、　骨伝導で言葉を伝える。

エイラ「(聞こえるか……?)」

サーニヤ「(……うん)」

エイラ「(……ごめん、わたし、ずっと臆病だった。自分の気持ちを伝えるのが怖くて、知られるのが怖くて、ずっと逃げた。それでサーニヤを傷つけて……)」

サーニヤ「(違うの……私こそごめんね。私もちゃんと言えばよかったの……エイラに守って欲しいって……芳佳ちゃんが悪いって訳じゃ勿論無いの……エイラに守って欲しかった……そして……エイラは守ってくれた)」

エイラ「(……わたし、ずっと、ずっと一緒に居たい。同じ人を好きになってしまつて、普通だったらもう一緒に居られないかもしれないけど。わたしはずっと、サーニヤと……あいつと……ずっと、ずっと一緒に居たい!)」

サーニヤ「(見て……ウラルの山々が見える……このまま……全てを捨てて……逃げてしまおうか)」

エイラ「(……いいよ、この馬鹿と、サーニヤとだったら。きっと、何処までだって行ける。私達なら……)」

サーニヤ「(嘘……ごめんね、今は帰ってくるのを待っていてくれる人達が居る……帰ろう……一緒に)」

——何千マイルの旅も平気二人ならどこまでも響かせて
S w e
e t d u e t

大神「ふう……なんとか基地に帰還出来そうだ。大丈夫かい二人とも。通信はもう復旧しているよ」

エイラ「お、 オウ……エト………ソノ」

サーニヤ「頑張ってエイラ……伝えるんでしょう？」

エイラ「そ、 その……さっきはつい勢いでと言ウカ」

サーニヤ「……ふーん、 私に言ってくれた事。 勢いで言った事だったんだ」

エイラ「あああ！ 違うんだってサーニヤ！ サーニヤアアアアア！」

彼女達の通信を聞いて大神は苦笑する。

大神「……まあ、 元通りって事か」

滑走路に着地し、 周りには先に帰還していたウィッチ達が集まってくる。

皆エイラとサーニヤをもみくちゃにして祝福している。

ミーナ「……分かってますね大神大尉、 エイラ中尉」

エイラ「ハイ、 罰は受けます」

大神「責任は自分が受けると言いました。 自分一人で十分の筈です」

ミーナ「規則ですから……二人共独房に一週間入っててください」
ストライクウィッチーズ基地の独房、 独房とは名ばかりの物で、

大神が来た時に物置として使われていた部屋を整理し、 なんとか人が入れるようにした空き部屋であった。

美緒「ま、 待てミーナ。 独房に……二人で？」

ミーナ「わ、 私だって出来る事なら……でも隊長の私が規則を破る訳には……」

大神「独房か、 仕方無いね。 行こうかエイラ君」

エイラ「お、 おう。 一週間優しくしろヨナ」

この時になって。 ようやく皆も『二人で独房一週間』の意味を知って抗議を始めた。

結局、 「優しい」皆の抗議のおかげで独房入りの期間は三日に短縮されたのだった。

罰と言うよりかは、頑張ったエイラへのご褒美となってしまうた
感も少しあり、皆の抗議は必死の物だったと言う。

次回予告

大神「ふう……謹慎も溶けて二週間程、今日は休みか……なんか
デジャヴを感じるが少し街にと出かけてみようかな。次回「や
っぱり長いロマーニャの休日」」

第八話「やっぱり長いロマーニヤの休日」

第八話 「やっぱり長いロマーニヤの休日」

俺、大神一郎が欧州はロマーニヤに来てから二ヶ月、ストライクウィッチーズが再集結してから三ヶ月が過ぎようとしていた。

今日はロマーニヤに来てから初めての休日なんだが……どうも一年前にもこんな日があったような……

大神は心地良い感触を指先に感じていた。遠くから悩ましげな吐息が漏れているのもうっすらと聞こえて来ていた。

大神「うう……り、リーネ君？」

リーネ「……大神さん、そんなに触られると……」
大神「す、すまない！」

知らないうちに寝間着の上からリーネの豊満な胸を揉みしだいていた大神は慌てて手を引っ込め体を起こした。

リーネ「だ、大丈夫ですよ。わざとじゃないって分かっていますから……あんまり大きな声を出すとペリーヌさんに……」

ペリーヌ「……もう起きてますわ！ 大尉！ 貴方は私が隣に寝ているのにな、何をしていますの！」

大神「不可抗力だよペリーヌ君！」

ペリーヌ「まったく……今日は二人共オフなのですよね？ どうしますの？」

大神とエイラが独房に入れられていたのが一週間程前、独房から出て来た二人の表情を見て中で何があったのか察するのは簡単であった。「どう考えても何かしただろお前」

と、ウィッチ一同の無言の重圧が大神を襲ったのであった。

大神「俺とリーネ君、そしてバルクホルン大尉がオフだったね。」

「どうかな、基地の近くにある街に行ってみようかと思うんだけど一緒に行くかい？」

リーネ「は、はい！ 行きます！」

目を輝かせてそう答えるリーネを見てペリーヌは少し面白くないと内心思ってしまったが、そんな自分を恥じてベッドから降りた。ペリーヌ「そうですか、 ゆっくりしていच्छゃい、 次のオフがいつになるかも分からない現状ですし」

大神「そうだね、 バルクホルン大尉も誘ってみようか。 都合が良ければいいけど」

ペリーヌ「……色々理由は並べるでしょうけど、 結局二つ返事だと思えますわ」

バルクホルン「何？ 近くの街に？ 私も？ う、 うむそうか。

昨晚の内に資料をまとめてしまったのでな、 ちょうど暇になっていたのだ。 大神がどうしてもと言うなら付き合ってもいいが？」

ペリーヌ「……ほらごらんさい」

大神「あはは……じゃあ俺とリーネ君、 バルクホルン大尉で街に行ってきますね」

食堂に移動し、 朝食を食べながらバルクホルンに尋ねるとペリーヌの言った通りの返答でリーネと大神は苦笑した。 向い合って食事食べていたミーナに報告すると彼女は頷いて許可を出す。

ミーナ「了解しました。 ゆっくり楽しんで来てくださいね」

それだけ答えると食器をトレイにと下げるミーナだった。

エーリカ「いいなあーリーネにトゥルーデ。 私も行きたかったな」

バルクホルン「お前はいいだけ一緒に居たろうハルトマン。 我々も休息は必要だ」

エーリカ「休息う？ デートでしょー？」

バルクホルン「違う休息だ！ 私は準備に行つて来る！」

バルクホルンはそう叫んで食堂を出ていった、 大神とリーネも食事を終えて各自準備にと向かうのだった。

バルクホルン「運転は出来るのか大神？」

大神「ああ、一通りの訓練は受けてるよ」

リーネ「シャーリーさんみたいな運転では……ないですよね？」

大神「あはは、流石にあればシャーリー君じゃないと無理だよ」

エイラ「何やってんダヨー出発するゾー」

サーニヤ「……お邪魔してます」

軍のトラックを大神が運転し街に向かおうとする、荷台にはまたいつの間にかエイラとサーニヤが乗っていた。

バルクホルン「またお前達は！」

エイラ「夜勤はちゃんとこなすからいいダロー？　一郎だってワタシと一緒にいきたいダロ？」

一郎「いや俺は――」

エイラ「行きたいダロ？」

一郎「……まったく、仕方ないなエイラは」

エイラ「ウンウン、分かれればいいンダ」

ニコニコ笑って胸を張るエイラを見てサーニヤは静かに大神を見る。大神「……どうしたんだいサーニヤ君？」

サーニヤ「……エイラは教えてくれませんでしたけど。独房で何があったんですか？」

バルクホルン「そうだな、大神も上手く誤魔化していたがあの三日で仲良くなりすぎだ」

エイラ「も、も、モトモト一郎がワタシにベタ惚れだったダロ！　別にあの三日で何かあった訳じゃ！　ほら一郎早く行かないと休みが終わっちゃうゾ！」

大慌てでエイラが大神を急かす、皆の疑いの瞳は相変わらずだったがなんとか皆トラックに乗り込み基地を出て行くのだった。その姿をまた皆で見つめるウィッチ達。

ルッキーニ「あーあ、行きたかったなあ……」

エーリカ「私もー」

シャーリー「ハルトマンはいいだろー？　まあでも私も行きたかつ

たなー」

ペリーヌ「まったく、 だらしないですわよ！ 少佐や中佐を見習
ったらどうですか！」

窓際に集まって軍用トラックが基地を出ていくを見守るウィッチ
達。 皆羨ましそうに見つめているが美緒とミーナはいつも通りの
ように見えた。

美緒「ふん、 いちいち気にしてられるか」

ミーナ「私はいつも通りです」

シャーリー「……宮藤」

芳佳「へ！？ あ、 いや何も無いです。 普通でした」

シャーリー「宮藤」

エーリカ「ミヤフジ」

芳佳「え、 え……えっと」

美緒「……宮藤！」

芳佳「えええ……えっとえっと」

色々な思惑を持った視線が芳佳の上を飛び交う。 芳佳はオロオロ
しながらもシャーリーとエーリカの強い視線に押されてつついま
た余計な事を言ってしまう。

芳佳「あの……よく寝言で……聞いたこと無いような甘い声で「一
郎」って……」

美緒「……」

芳佳「ああああああ！ 誰か！ 誰かあ！ 坂本さんが無言で！

鬼のような形相で！ 誰か助けてえ！」

物凄い力で引っ張られて行く芳佳であった。

ミーナ「はあ……まさか美緒まであんなっちゃうなんてね」

エーリカ「ふふーミーナ隊長殿は人の事が言えるのかなー？」

シャーリー「え？ どういう事だよ？」

ミーナ「……ハルトマン中尉」

静かなトーンで釘を刺すミーナ。

エーリカ「最後の砦陥落早すぎだよなー？」

ミーナ「フラウ！ 絶対に言わないでって言ったじゃない！」

エーリカ「いいじゃん、 どうせ皆同じ人好きなんだし。 私考えただけど皆でガッチリタックを組んで——」

ミーナ「フーラーウー！」

シャーリー「なんて言うか……意外？」

ペリーヌ「……まさか隊長が」

ルッキーニ「うにゃ？」

皆が驚きの表情でミーナを見る、 ミーナは慌てて言い訳を重ねる。

ミーナ「別に私はまだ！ フラウみたいにラブラブじゃないし美緒みたいに骨抜きになってる訳じゃないわ！ その……だって……」

エーリカ「分かる分かる、 優しいし強いし。 問題はその優しさや強さがいろんな人達に向いてるって事なんだけどね」

ミーナ「もう！ 皆さんは各自の持ち場に戻って！ ハルトマン中尉にはあとでお話があります！」

エーリカ「あーあ、 怒らせちゃった」

ペリーヌ「自業自得ですけどね、 はあ……結局エイラさんやサーニャさんも行ったみたいですし……また詳しく聞きそびれてしまいましたわね」

シャーリー「それに関しては大丈夫だ、 刺客を放ったからな」
ミーナが立ち去った後も、 意味深に笑うシャーリーを皆が疑問符を浮かべて見つめた。

基地から三十分と少し走った所にある街、 ロマーニャとの中継地点になっている街で古くから商業の地として栄えていたらしい。

大神「ロマーニャは新旧が入り乱れた街だったけどこっちは古都って感じだね」

サーニャ「ゆったりしてて……いい感じだと思います」

バルクホルン「ふむ、 それでどうする？ 買い物でもするか？」

エイラ「ア、 一郎見ろよ美味そうなケーキがあるゾ！」

大神「引っ張らないでくれよエイラ」

エイラに引つ張られケーキ屋にと連れていかれる大神、 どう見ても仲の良いカップルのように見えた。

バルクホルン「……むう」

サーニヤ「……」

リーネ「あ、 あの……シャーリーさんがもしエイラさんが来たらこれを読めって」

バルクホルン「リベリアンが？ どれ見せてくれ」

サーニヤとバルクホルンがリーネの持ったメモ帳を覗き込む。 そ

こにはエイラと大神の秘密を探る為の秘策が書かれていた。

バルクホルン「ふむ……なるほど、 妙案だ」

サーニヤ「……はい、 これなら」

リーネ「あ、 あの。 少し騙すようで気が引けるんですが……」

バルクホルン「それはそうだが……リーネは興味無いか？」

リーネ「……あります」

リーネは少し俯いてから恥ずかしさと申し訳なさが入り交じった表情でそう告げるのだった。

エイラ「一郎ー？ 何処行ったンダー？」

いつの間にか居なくなってしまった大神を探してエイラが路地を歩く、 その先にはバルクホルン達が待ち構えるように立ち塞がっている。

エイラ「オオ、 ちょうどいい所に、 一郎見なかったか？」

バルクホルン「……エイラ、 話は聞いたぞ。 ……まさかお前が

大神とそんな関係に」

サーニヤ「……エイラ、 幻滅した」

リーネ「え、 えっと……びっくりしました」

エイラ「オ、 オイ……？ エ？ 聞いたって……？ ま、 マサ

カ……？」

最高に狼狽しているエイラはタラタラと冷や汗をかきながらドンドン赤面していく。

バルクホルン「独房で二人きりになった事を良い事にまさかあんな……」

エイラ「ワァー！ い、一郎！ あ、あいつ絶対に言わないって言ったノニ！ ち、違ウゾ！？ その……一郎が！ 一郎からしてきたんだゾ！」

バルクホルン「そ、そうか、言い訳くらいはさせてやろう。

もうバレているんだ詳しく話すなら私達も鬼ではない。深くは追求はしない」

エイラ「……ほ、他の皆には内緒にしてクレヨ？」

バルクホルン「勿論だ、カールスラント軍人は嘘などつかん」

エイラ「そ、それなら……」

エイラは少し躊躇してから事の顛末を語り始めるのだった。

独房に入れられてからの数日、エイラの様子はどう見てもおかしくかった。ずっと大神を見つめてはモジモジとして何かを言わんとするが諦めそっぽを向くの繰り返しであった。

大神「エイラ君、食事が来たよ」

エイラ「オ、オウ！ 後で食ベル！」

大神「……大丈夫かい？ ずっと様子がおかしいが」

エイラが座るベッドの隣に大神が腰掛ける、ビクツと反応してカチカチに固まってしまうエイラ。

エイラ「あ。アアゝアノゝソノゝそ、ソウダ！ い、一郎！

お前！ 中尉といかがわしい事したダロ！」

大神「エーリカ君とかい！？ いや……いかがわしい事はしてないよ」

エイラが苦し紛れで出した言葉だったが、以外と痛い所を付けられる一言だった。

エイラ「……いかがわしい事「は」ってなんだ？」

大神「いやいや……何もしてないよ」

エイラ「……大神、まさかとは思うが去年ブリタニアで私の裸見

た時みたいに中尉の裸を見るような事を？」

大神「す、するわけないだろエイラ君！」

エイラ「ほ、本当ダナ！ 裸を見たのは私だけダナ！」

大神「裸を見たのはエイラ君だけだよ！」

帝都や巴里の彼女達に今の言葉が聞かれたら恐らく彼の命は無いだろう。それ程危なすぎる一言だったがお互いそう言っただけでガックリと肩を落とす。

エイラ「……いざ言葉にして確認すると恥ずかし過ぎて死にそうダナ」

大神「……俺もだよ」

エイラ「……あの、は、裸を見ておいて……他はもしないなんて……順番がおかしいと思わないか？」

大神「どういう事だい？」

エイラ「い、いや！ だから……その、私も今回は結構頑張ったダロ？ 命令無視しちゃったケド……だから……ご褒美が欲しいナッテ」

月明かりが差し込む独房でエイラは大神を上目づかいで恥ずかしそうに見つめる。自分でふざけて「美少女」と言うだけあってエイラの可愛さは目を見張る物がある。ストライクウィッチーズに居る女性達は皆それぞれ違うベクトルでの可愛らしさを持って居るがエイラはその中でも目立つ方であった。

そんな彼女が恥ずかしそうに自分を見つめておねだりをしている。

ここ数日様子がおかしかった理由も分かり大神は少し安心してエイラを抱きかかえる。

大神「（……我ながら、最近少し欲に溺れやすくなってしまっている気がする……だがここで我慢出来る男なんて居ないだろうな）」
内心で言い訳しながら、大神はガッチリ目を瞑って小刻みに震えているエイラを見る。

大神「……エイラ君、少し反則だよ」

エイラ「ナ、ナニを——」

エイラが言う暇も無く、大神に唇を奪われるエイラ。

エイラ「……いきなりはズルイゾ」

大神「ごめん、エイラ君つい」

エイラ「……我ながら月並みダッテ思うケド……エイラダ」

大神「ん？」

エイラ「大尉や少佐は呼び捨てで呼ぶのに私は君付けカ？」

大神「そうだね、分かったよエイラ」

それが、今回の独房での顛末であった。

バルクホルン「……」

サーニヤ「……」

リーネ「……」

エイラ「ド、どうして黙ってるんだヨ！ 全部ちゃんと言ったんだカラ皆には内緒で……」

バルクホルン「そ、そうかそうか……そんな事をあいつは……ふ、ふふふ……」

サーニヤ「……エイラ、やる時はやるのね」

リーネ「……あう」

エイラ「……オ、オイ！ まさかお前ら……！」

大神「ああ、ここに居たのか。探したよ皆」

ちようどそこに皆を探していた大神がやって来る。エイラは大神に掴み掛かって大声で叫ぶ。

エイラ「い、一郎！？ 喋ったんだヨナ！？ コイツらに独房での事喋ったんだヨナ！？」

大神「お、落ち着いてエイラ。喋らないって約束したんだから話さないよ」

エイラ「……オイ、その三人」

ゆっくりと街中に逃げようとしていた三人がエイラに呼び止められビクッとして固まる。

バルクホルン「いや……そのこれはシャーリーの入れ知恵でだな……」

…」

エイラ「う、嘘まで付いて聞き出す事ナイダロ！ どうせ皆だつて一郎と色々してるんだロ！ いいじゃナイカ私が少しくらいして貰ってモ！」

サーニヤ「エイラ……私もこの前の作戦では頑張ったのに」

エイラ「さ、サーニヤもサーニヤだぞ！ 嘘付くなんて酷いじゃナイカ！」

サーニヤ「それは……ごめんなさい。でもキスして貰うなんて……ずるい」

リーネ「あ、あの……皆さんとりあえずお昼に……」

リーネの言葉はヒートアップした皆には届かない。サーニヤは意を決したような表情で大神の前にと歩いて行く。

サーニヤ「大神大尉……私も、この前の作戦で一生懸命頑張りました……その……エイラにだけって言うのはずるいと思います」

大神「ちょ、ちょっと待ってくれサーニヤ君……ここでかい？」

サーニヤ「幸い人通りも無いですし……」
こう見えて意志の強いサーニヤはスツと大神に寄り添うと目を閉じる、エイラがして貰った事で多少のジェラシーも感じているようだった。

その様子をバルクホルンとエイラが「お前まさかやるのか？」といった目でジトーっと睨んでくる。

大神「（し、しかしここでサーニヤ君に恥をかかせる訳には……エーリカ君が言っていた『覚悟した方がいいよ』って事はこういう事……だったのかな）」

内心もう色々と後戻り出来ない所まで来てしまった事を悟り大神は観念してサーニヤを抱き寄せて口付けをする。サーニヤの頬がドンドン赤く染まって行く、数秒してから二人は離れてサーニヤが嬉しそうに微笑む。

サーニヤ「ありがとうございます……嬉しいです」

大神「い、いや——」

バルクホルン「ふ、ふふふ……大神。そんなに死にたいのか……よもや目の前で堂々とされるとは思わなかったぞ。これは後で問題にさせて貰うからな」

エイラ「ちょ、ちょっと待テヨ！ 問題にするって私やサーニヤの事バラすつもりカ！？」

バルクホルン「致し方あるまい、元はと言えば貴様らのこ、行為が原因だろう！」

エイラ「あーモウ！ じゃ、じゃあ大尉もして貰えばいいダロ！？ それでいいんだロ！？」

バルクホルン「ば、馬鹿を言え！ だ、誰がそんな事を……」
エイラ・サーニヤ「（やっぱノリノリじゃんこの人）」

嫌がりながらも大神の方をチラチラと見つめては赤面するバルクホルン、ゆったりとした休日のもりだった物が物凄い一日になってしまった。

大神「……こ、この際仕方無いか」

バルクホルン「仕方無いとはなんだ！ 嫌々なのか！？」

大神「まさか、絶対そんな事は無いよトゥルーデ」

バルクホルン「そ、そうか……じゃあさつさと済ませてくれ」
言動とは裏腹にカチカチに固まってしまっているバルクホルンの頭を優しく撫でてやって近づく大神。

大神「（もしかしくなくても……最低な事をしているな俺は……帝都や巴里の時点でもうアレだからかなり手遅れなのだが……）」

そう自嘲しながらバルクホルンと唇を重ねる、この短時間で大神の恐れていた「欲に溺れてしまう」事が連続で起こってしまったのだった。

エイラ「ほらもうお終いだ、リーネはいいノカ？」

バルクホルン「あ……」

エイラが間に入って大神とバルクホルンは離れる、少し名残惜しそうな表情を浮かべたバルクホルンであったがそれがバレないようにすぐにいつもの表情に戻る。

リーネ「いいいい、いえ私は結構です！ その、私お昼御飯に
良さそうなお店を探してきますね！」

そう言って走り去ってしまったリーネであった。

それからの数時間はもう休日と言うより完全にデートでウィッチ達
の目が無い事を良い事にイチャイチャ合戦となってしまった、リ
ーネだけは一目を気にしていつも通りであったが。

大神「ふう……到着だ」

すっかり夜になった頃に皆は基地にと帰還して来た。各自トラッ
クを降りて部屋にと向かって行くがリーネだけがトラックにと残っ
ている。

大神「リーネ君、どうかしたのかい？」

リーネ「その……実は……」

大神「？」

リーネ「……お昼の時は皆が居て恥ずかしくて……その……私も……
……して欲しいです」

大神「そ、そうか……分かった、でもこれは内緒と言う事で」

リーネ「は、はい！ 勿論他の人に言ったりしません！」

大神「じゃあ、おいでリーネ君」

リーネ「……はい」

周りに人が居ない事を確認した所で、大神とリーネは静かに唇を
重ねるのであった。

これが、大神の未来が大きく変わる確定してしまう引き金とな
るのだった。

ルッキーニ「あー！ 一郎とリーネがちゅーしてるー！」

大神「いい！ る、ルッキーニ！？」

ルッキーニ「にひひー皆に教えてこよー！」

大神「ま、待つんだ！ ルッキーニ！」

勿論彼女に悪気などない。幼い彼女にとってはただの面白い出来
事に過ぎなかったのだから。数分間に渡って大神とリーネが固ま
っている、物凄い怒りのオーラに包まれた聞いたことも無いよ

うなミーナの声で放送が響く。

ミーナ「大神一郎大尉、リネット・ビショップ軍曹、エイラ・イルマタル・ユートイライネン中尉、サーニャ・リトヴァク中尉、ゲルトルート・バルクホルン大尉！今すぐ雑務室に来なさい！」
大神とリーネはお互いに絶望的な表情を浮かべてトボトボと歩を進めるのであった。

その後の出来事は凄まじい物だった。

仁王立ちし恐ろしい表情で微笑むエーリカ、美緒、ミーナ、ペリース、シャーリーが正座の休日班に対して無慈悲の尋問を長時間叩きこむ。最後の方にはやはり「不公平だ」「○○だけズルイ！」の言葉が飛び交うのだった。

真っ白に燃え尽きていた芳佳とルッキーニは痴話喧嘩の嵐となった談話室でスヤスヤと眠っていたのだった。

次回予告 芳佳「……………どうして、私はこんなに役立たずなんだろう。一番大事な時に、結局何時も私はこうだ。……………やらなきゃ、飛べなくなっちゃったいい。今だけでもいい！私の、一番の友達を助けるんだ！次回『未完の最終兵器』扶桑の……………お父さんの……………皆の力をみせてあげます！」

第八話「やっぱり長いロマーニャの休日」(後書き)

次話で少し大きく原作改変をします。

タイトルだけでピンと来た人は股間督&ガイナを知っている!?

大まかな流れは変わらないのでご安心ください

第九話「未完の最終兵器」

第九話「未完の最終兵器」

大神さん達がとんでも無い休日をごして大問題になってから早一ヶ月、私、宮藤芳佳が欧州はロマーニャに来てから早くも四ヶ月が過ぎようとしています。あれから攻略目標の偵察やロマーニャ近辺に現れるネウロイを迎撃に上がったりと大忙しの毎日を送って来ました、皆さんは『あの事件』以降「いいんだな？お前そんな事するんならこっちももう遠慮しないからな？」と開き直って各自大神さんとイチャイチャしています……帝都や巴里の皆が見たらどう思うんでしょうか。そんなこんなで明日にはついに扶桑から超弩級空中戦艦ミカサ改がロマーニャにやって来ます。欧州各国の技術者の皆さんがミカサ改を一目見ようと基地に入ってきています。……そんな中、私は謎の不調に襲われていました。

欧州に来た頃は春だったが季節は真夏にと移り変わっていた。欧州の夏は扶桑よりかは湿気が無いので気温が高くなってもそれ程暑いと感じる事は無い。

美緒「……」

明日にミカサ改の入港を控えた本日、美緒は飛行訓練を行う芳佳とリーネの様子を眺めていた。下士官から見てもここ最近の芳佳の飛行は酷い物だった。本人は何処も不調は無いと言うのだが今日はもう編隊飛行すら出来なくなっていた。

美緒「宮藤、もういい」

芳佳「……はい」

芳佳も自分で分かっているようで美緒の言葉を聞き落ち込んで滑走路にと降りて整備兵にとストライカーユニットを託す。

整備兵「み、宮藤軍曹！我々が今一度きっかりと整備しておきます！体をゆっくりと休めればきっと大丈夫な筈です！」

芳佳「ありがとうございます……でも皆さんにはもう何度も整備して貰っていますし……きっと私に問題があるんだと思います」

芳佳の言葉に整備兵達はなんとか励まそうとするが言葉が出て来ない。整備兵達は自分の仕事に自信を持っている。彼らは完璧な整備で芳佳のストライカーユニットを仕上げているつもりだった。

芳佳がなんの問題も無く空を翔んでいたあの頃とストライカーユニットに変わった部分など無いのだ。

バルクホルン「どういう事だ……？ まだひよつこの新兵ならまだしも。宮藤は既に幾度と無く戦場に出ている。飛行時間から見ても中堅クラスに入ろうかという頃だ……いきなり自分の飛行を見失ったりするだろうか？」

ミーナ「何度も医療班に見て貰いましたが……体に異常は無く魔力反応も良好。原因はまったくの不明ね。精神的な物かしら」

基地の内部から芳佳の飛行を見守っていた二人も溜息をつく。芳佳は既にストライクウィッチーズの大事な戦力なのだ。いつまでもこのままでは隊の戦力が著しく低下してしまう。

美緒「駄目だな……私でも皆目見当が付かん」

ミーナとバルクホルンの後ろの扉が開いて美緒が入ってくる。芳佳を見出し愛弟子のように可愛がって来た彼女の不調をなんとか治そうと美緒も手を尽くしたのだがそれも叶わない状況だった。

バルクホルン「今ミーナと何か精神的な事で参っているのではないかと話していました。そうでないと……説明が付きません」

ミーナ「……例えば夜宮藤さんが寝ている隣でとてもシヨッキングな事をしている二人が居たとか？」

美緒「……うるさいぞミーナ、お前だって隊長の権限でよく二人きりで仕事しているじゃないか。職権濫用だぞ？」

ミーナ「大神大尉は美緒やトゥルーデと同じ副隊長相当の立場に居ます、色々と書類も作って貰わないと行けませんから」

バルクホルン「……今はよししましょう。ストライカーユニットの整備も完璧、体調も万全……いったいどうすれば……明日はミカ

サの入港だと言うのに」

バルクホルンは窓の外から基地の敷地を眺める。各国の技術者達はそれぞれテントを張り各々機材を持ち込んでベースキャンプを作り出していた。一つでも多くの技術を吸収しようと皆息巻いているようだった。

美緒「日程に変更は無いのか？」

ミーナ「ええ、まずはミカサが入港、数日遅れで大和他の扶桑艦隊が入港します。『ユーラシア中央殴り込み艦隊』設立まではここに居るらしいので半年になるか一年になるか……」

美緒「船員も大変だな……全ては私達次第か……」

そう呟くと美緒は作戦表を眺めるのであった。

芳佳「はあ……」

リーネ「元気だして芳佳ちゃん。きっとすぐによくなるよ」

ペリーヌ「そうですわ。貴方らしくもない」

芳佳は談話室で俯いて座っていた。その周りには皆が集まり心配そうに見守っているがなんと声を掛けたらいいか分からず皆黙ってしまっていた。

大神「……このような不調と言うのは。やはり珍しい物なのかい？」

シャーリー「そうだなー基本はウィッチカストライカーユニット、

どちらかに問題があるってのが大多数だからな。どちらも問題無しとなると……」

ルッキーニ「でも芳佳一週間前は普通に飛べたよね？　なんでだろー？」

サーニャ「芳佳ちゃん……何か辛い事でもあった？」

芳佳「……何も無いよ、いつも通り普通に飛ぼうと思ったらもう……」

サーニャ「そう……ごめんね変な事聞いて」

芳佳「そんな全然大丈夫だよ。私……体を休めてきますね」

サーニヤの言葉に笑顔を浮かべて芳佳は談話室から出ていくのだ。強がりな笑顔が今は痛々しい程だった。

大神「原因不明と言うのは……かわいいそうだね」

エイラ「ウムウ……宮藤の前じゃ言いづらかったが私は一つ可能性を見つけたゾ！」

ペリーヌ「なんですの!？」

エイラ「伝説と言うカ、噂で良く聞くダロ？ ウィッチは純潔を失うとその力を発揮出来無くなるッテ！」

皆はしばらくその言葉の意味を噛みしめ、数秒してから一斉に大神の方を向いた。

大神「え、エイラ！ 皆までよしてくれよ！」

シャーリー「……一応確認だが、変な事してないよな？」

大神「す、する訳ないだろうシャーリー！」

サーニヤ「……エイラ、芳佳ちゃんの前で言わなくて本当に良かったと思う……下品」

ルッキニー「ペリーヌ純潔って何い？」

ペリーヌ「そ、そういうのはシャーリーさんに聞くのが良くてよ」
シャーリー「おい！」

皆それぞれ赤面して恥ずかしがっているが、本気で芳佳の事を心配しての事だった。

夜、月夜に照らされる河原で芳佳は座り込んでいた。

芳佳「……どうして、私はいつもこうなんだろう」

体を休める事も、再整備も、魔力を鍛え直す事も全てこの一週間で試した。それでも、芳佳は飛ぶ事は出来なかった。

芳佳「……この力も、その内無くなっちゃうのかな」

芳佳に残された力、人を癒す力。今はまだそれは失われずにいたがこの先どうなってしまうか分からなかった。

芳佳「初めて欧州に来た時の艦の中でも……坂本さんを怪我させちゃった時も……結局、私のせい……どうしてこんなに……」

どんどん目に涙が溜まっていく。人々を守りたい。人々を救いたいと願うストライクウィッチーズに入隊してから一年と少し、芳佳は十分に成長しているのだが当の本人にはそんな事は分からない。

芳佳「同じだよ……昔から引っ込み思案で役立たずで……」

大神「……隣、いいかい？」

芳佳「お、大神さん!？」

突然掛けられた声に驚き芳佳は顔を上げる、そこにはいつものように優しい笑顔の大神が居た。

芳佳「い、いいですけど……どうしてここに？」

大神「いや……芳佳君の姿が見えなかったから探してたんだ」

芳佳「あはは……また皆に心配掛けちゃったんですね……役立たずの上に足まで引っ張っちゃった……」大神「芳佳君……自分を責めちゃいけない。人にはどうにもならない時だってあるんだ……座して待つ事も必要だ」

芳佳「……でも、どうして、どうしてこんな時なんでしょうか……明日にはミカサが入港して……ネウロイの巢の規模も明らかになって攻勢に入るって時に……どうして私はこんなに間が悪いんでしょうか……」

大神「……芳佳君」

芳佳の声はどんどん強くなっていく。今まで溜め込んでいた物が一気に溢れて来る。

芳佳「守る守るって……エーリカさんやエイラさんのように天才的な技術と能力がある訳じゃない……バルクホルンさんや坂本さんのような堅実な戦闘が出来る訳でもない……皆の盾になる事くらいしか出来ないのに……それすらも出来なくなるなんて……私は……」大神「いいんだ……芳佳君、いいんだよ。人にはそれぞれ役割があるんだ」

大神は芳佳を抱きしめる。まだ十五歳の少女だと言うのにこんな戦闘の事で思い悩まなくてはいけない。大神は今という時代が憎

らしくも思えた。

大神「戦う人もいれば……芳佳君のように癒す人だって居る……皆戦っているんだ……家で帰りを待つ芳佳君のお母さんだって……戦場に居ない人達だって日々を戦いながら生きているんだ……すべてじゃない……今の戦いが全てじゃないんだ……辛いと思う、芳佳君程優しい子は目の前で人々が傷づく事に耐えられないだろう……俺が守るから……芳佳君が飛べなくなっても……能力を使えなくなっても……せめて、君の目に写る人々を守ってみせるから！」

世界中すべての人々を救えない事は大神とて分かっている。それでも、せめてこの世界で一番優しい能力、「傷を癒す」という力を持ちこれまで多くの人々を救って来た彼女の目に写る世界を守りたいと心の底から思うのであった。

芳佳「大神さん……私……まだ飛びたいです……皆を……守りたいです……」

芳佳は子供のように大粒の涙を流して大神に抱き着く。

大神「大丈夫……まだ諦めちゃ駄目だ芳佳君。何か手はある筈なんだ。大切な人を守る為に……きつと手はある。困難と言う試練から一步も引いてはいけないんだ」

芳佳「一步も引かない……」

大神「そうだよ……芳佳君、君はストライクウィッチーズの一員だけど。華撃団の一員でもあるんだ。華撃団は、一步も引いてはいけない……辛い事だけど……引いてはいけないんだ」

芳佳「華撃団……私は……」

大神「今はゆっくり休もう……明日には紅蘭も来る、案外ストライクユニットを見て貰えば治るかもしれないよ」

芳佳「はい……大神さん」

そう言って、芳佳の手を取って大神は基地にと戻るのであった。

翌朝、ストライクウィッチーズ基地に朝一で定時の入電が入る。

皆が起きだして集合した頃にそれは毎回発表されていた。

ミーナ「皆さん、ミカサはすでは基地から四百キロの地点まで来ています。ミカサの飛行能力から言って、数時間もあればこちらに到着する筈です」

ルッキニー「やたーまたミカサ見れるー」

ペリーヌ「確かに……あれは壮観と表現する以外言葉が見つかりませんわ」

全長八キロにも及ぶミカサの姿はまさに圧巻、入港するだけでも近隣に避難命令を出さなければいけないような超兵器であった。

シャーリー「普通、あんな作らないぜ」

バルクホルン「普通じゃないから華撃団なんだろう、我々の常識などまるで通用しないからな」

エーリカ「言ってる、華撃団から来た人のせいでストライクウィッチーズも随分滅茶苦茶になったもんね」

ミーナ「……それを貴方が言うのね、とにかく、ミカサは目立つのでこの数時間は常に緊急出撃出来るようにしていただきますい。

もしミカサが落とされるような事があれば……人類反撃の気運は一気に無くなってしまおうわ」

ミーナの言葉に皆は静かに頷き各自の持ち場に付くのだった。事が起きたのはそれから二時間程後だった。念の為指令所に入っていたミーナに第一報が入る。

観測手「レーダーに反応あり！ネウロイです！攻略目標の巢から吐き出されています！数は……なんだこの数は！どんどん増えていきます！現在確認出来る物でも優に百は超えています！」

ミーナ「百ですって！？……ロマーニャに来てから文句無しに最大規模ね。スクランブルよ。警報を鳴らして」

報告をしている間にもその数はドンドン増えていく。皆が指令所に集合した頃には二百にまで膨れ上がっていた。

ミーナ「目標は真っ直ぐにミカサに向かっています。数が数です……私も迎撃に上がります。リーネさんと宮藤さんは基地で待機。

他の皆は迎撃に上がってください！」

芳佳「待ってください！ 私も……」

ミーナ「宮藤さん、貴方も自分の状況は分かっているでしょう？……それに何が起きるかわかりません。二人で有事に備えてください」

リーネ「はい、芳佳ちゃん……仕方無いよ」

芳佳「……」

ミーナ「では出撃してください！」

リーネと芳佳は皆が空に上がっていくのをただ見守る事しか出来なかった。

リーネは出撃間際にミーナが自分にした目配せの意味を理解していた。芳佳の性格から考えて、間違いなく戦いが激化すれば無理にでも出撃しようとするだろう。それを止めるのが自分なのだと理解していた。芳佳はリーネにとって親友とも呼べる相手、彼女を死なせる訳には行かなかった。

リーネ「大丈夫……きっと皆がなんとかしてくれるよ……私達は皆の無事を祈っていきましょう？」

芳佳「……うん」

空に上がった皆はネウロイの本隊を発見していた。素早い対応でミカサまで五十キロの地点で向かい打つ事が出来た。この地点ならば抜かれたとしても対処の使用はある。

かえで「ストライクウィッチーズが迎撃に向かってくれました。

これならば大丈夫でしょう」

米田「戦闘配置は解くなよ、対空砲はいつでも撃てるようにしておけ」

かえで「了解、紅蘭。悪いわねメカニックと戦闘要員まで」

紅蘭「ええよ、今に始まった事やあらへんし」

紅蘭は急いで作業服から戦闘服にと着替えていた。米田の依頼で建造している「最終兵器」はミカサの内部で建造が進められていた。元より「ユーラシア中央殴り込み艦隊」の最大の目玉としてミカ

サに搭乗する予定の機体だったので未完成の物がミカサに載せられ欧州までやって来ていたのだった。

かすみ「リーダーに新しい反応があります！……これは、かなり巨大です！ 数は一つですがこちらに向かっています！」

帝国華撃団風組の藤井かずみが声を上げる。その反応はブリタニアで大型ネウロイと呼ばれていたそれよりも更に大きい物だった。

米田「……二百ものネウロイを陽動に使ったのか！？ 奴ら何を考えてやる！」

その反応はストライクウィッチーズ基地でも補足していた。

観測手「どうしましようにリネット軍曹……隊長達を呼び戻した方が……」

リーネ「……報告はしておいてください。それでも戻ってくるまで時間が掛かります。私が出るので……芳佳ちゃん！？ 芳佳ちゃん駄目だよ！」

リーネの話が終わる前に芳佳は飛び出して走って格納庫にと向かう。リーネ「芳佳ちゃん！ やめて！ お願いだから基地で待機してて！」

芳佳「でも、 そうしたらリーネちゃんが一人になっちゃう。あの反応……一人じゃ無理だよ！」

リーネ「そうだけど……」

芳佳「大丈夫、 シールドは問題なく張れる。 盾変わりにはなるよ。 お願い。 まずいと思ったらすぐに退くから！」

リーネ「芳佳ちゃん……お願いだよ？ 少しでもまずいって思ったら退却してね！ 皆が帰って来るまでの時間さえ稼げればいいから！」

芳佳「うん！ 行こうリーネちゃん！」

そう言って、 出撃したのが空に上がってすぐ芳佳は異変に気がつく。

最早、 彼女は真っ直ぐ飛ぶ事すらままならない状態だった。 戦鬨などもっての外である。

リーネ「芳佳ちゃん！」

芳佳「大丈夫だから！　すぐに、　すぐになれるから！」

そう言いながらもドンドン体勢は崩れて行く。　ついには魔力で創りだされたプロペラ部が消えかかってしまう状況にまで陥ってしまった。

リーネ「ッ……！　こちらストライクウィッチーズ、　リネット・ビショップ軍曹です！　ミカサ聞こえますか？」

かえで「リーネちゃんね！　大丈夫なの！？」

リーネ「宮藤芳佳軍曹が飛行出来る状況ではありません！　どうか着艦許可をください！」

芳佳「リーネちゃん！」

リーネ「芳佳ちゃん！　……死んじゃうよ、　このまま戦ったら死んじゃうよ！」

芳佳「でもしたらリーネちゃんが！」

リーネ「大丈夫……今まで散々芳佳ちゃんに助けて貰ったんだもん……今度は私が助けるから！　だからお願いだからミカサで待っていて！」

そう言い残して、　リーネはネウロイが居る地点にと飛んでいく。

芳佳はそれを追いかける事すら出来ない。

芳佳は泣きながらなんとかミカサにと着艦するのだった。

紅蘭「み、　宮藤はん！　どうしたんや一体！」

宮藤「お願いします紅蘭さん！　お願いですから私のストライカーユニットを治してください！　リーネちゃんが！　リーネちゃんが死んじゃう！」

紅蘭「落ち着くんや！　……すぐにストライカーユニットは見るさかい！　こんな事なら宮藤はん宛のプレゼントを強引にでもミカサに積むんやった！」

宮藤「……プレゼント？」

紅蘭「そうや、　宮藤はんが貰った手紙に入っていた図面、　あれは新しい動力源の設計図や。　流石ストライカーユニットの父宮藤

博士や……とんでもない発明をやらかしおったんや。とにかくそのエンジンを積んだストライカーユニットを宮藤はん宛に持つていく言うたんやがその時向こうさん開発大詰めで無理や言うて来たんや。だから遅れて出港した大和の艦隊に……」

宮藤「その大和の艦隊は！」

紅蘭「……まだ海の間こうや、一週間は掛かるやろうな。まさかこんな事になるなんて」

芳佳「そんなあ……」

その時、かえでの声が艦に響く。緊急事態なのはその声で理解出来た。

かえで「本艦はこれより緊急で戦闘態勢に入ります。敵ネウロイは予想以上の機動力と火力を持っている模様です。現在ストライクウィッチーズの隊員が一人で対処していますが劣勢です。すぐに援護に向かいます！」

芳佳「リーネちゃん……お願いです紅蘭さん！　なんとか……ほんの少しでも飛べればいいんです！」

紅蘭「……すまん宮藤はん、うちの目にもこのストライカーユニットに異常があるとは思えへん……どうして不調なのか分からへんのや」

芳佳「ううう……どうして……どうして私は……もう嫌だ……！」

お願いです！　ストライカーユニットで無くてもいい！　どんな物でもいいです！　お願いですからリーネちゃんを助ける事が出来る物を！　誰か！」

芳佳はいつの間にか涙を流して叫んでいた。彼女の周りには目視出来る程の魔力が展開している。感情が高ぶり魔力が溢れているのだ。

紅蘭「（なんやこの魔力の量……エリカはんクラス……まさかアイリス以上の……そうか、宮藤はんの不調は——）」

芳佳「ううう……」

紅蘭「……宮藤はん、どうしても、リーネはんを助けたいんか

？」

芳佳「勿論です！」

紅蘭「……今から取る手段はとんでもない悪手や。最後の手段中
の最後の手段……それを、出来るか？」

芳佳は涙を拭い、紅蘭の顔を見据えた。

芳佳「……やります、やらせてください」

紅蘭「さよか……なら付いて来るんや」

紅蘭はハンガーを抜けて長い通路を歩いて行く。

紅蘭「宮藤はん、これはうちの推理やけど。多分宮藤はんの不

調は機体側にも宮藤はん側にも問題があるんや」

芳佳「そ、そうなんですか？」

紅蘭「さっきの魔力量、あれはもう異常や。ストライカーユニットには魔力が過剰に注がれると暴走を防ぐ為にリミッターが掛かる。多分そのせいや」

芳佳「つまり……どういう事でしようか」

紅蘭「宮藤はん、入れ物が小さ過ぎたんや。大量の水を小さい

コップに入れようとしてたようなもんや。宮藤はんの大きすぎる

魔力があのでストライカーユニットには収まりきらなくなってたんや」

芳佳「そ、それじゃあ……どうするんですか？ 私のストライカ

ーユニットを改造するとか？」

紅蘭「……残念やけど、そんな時間は無いやろ？ だから、本

当は大神はんの為に作っていた機体を宮藤はんに託す！」

紅蘭がそう言うのと丁度巨大な格納庫にと到着する。そこには「デ

カ過ぎる」機体が直立して立っていた。

芳佳「これ……なんですか？」

紅蘭「……人類の最終兵器や。米田艦長のオーダー通り。唯一無二にして最強の機体。ただただ大軍を殲滅する機能だけをつぎ込んだある意味の失敗作や。せやけど……動かせれば間違いない
どんなネウロイにも勝てる」

芳佳「本当ですか！」

紅蘭「せやけど……普通に考えたらまず動かん。この機体は元々二人乗りの機体を改修、大型化した物。二人分の魔力か霊力でようやく動くってシロモンや……けど今の宮藤はんなら……あるいは。でも……奇跡でも起きないかぎり……」

芳佳「やります」

芳佳は強い決意で紅蘭を見て、宣言した。

芳佳「奇跡は起きます、起こしてみせます！」

ミカサのブリッジは慌ただしい通信が飛び交っていた。

米田「全速前進だ！　こんなでけえ図体してウィッチ一人守れないなんて笑い草だぞ！」

かえで「……しかし、報告にあった火力とスピードが本当だとしたら……ミカサの主砲では追いきれません」

米田「まずは嬢ちゃんの回収が先だ。十五、十六の子供が一人で巨大な敵と戦ってるんだぞ……後はストライクウィッチーズ本隊が到着するまで防戦するしかあるめえ」

かえで「……厳しい戦いになりそうですね」

かすみ「応答してください！　何が起こっているんですか！」

米田「なんだ！　何があったんだ！」

かすみ「艦長……第七ハッチが……開いて行きます！」

米田「何ィ！」

白煙を上げ、第七ハッチが開いて行く。直立腕組姿勢のまま「その機体」がせり上がって来るのをブリッジからでも確認出来る。

米田「大双武だと！　誰が乗っているんだ！　紅蘭！　どうなってやがる！」

芳佳「私です、米田司令」

米田「宮藤の嬢ちゃんか！　よしな！　一人で動かせるもんじゃねえ！　なによりそいつは未完成なんだぞ！」

芳佳「現状で、二十分は動きます」

米田「宮藤！」

紅蘭「行かせてやってくれへんか米田はん。大双武が一人の手で動いている事事態が奇跡なんや……宮藤はんなら奇跡を起こせるかもしれないへん！」

米田「ちい……宮藤！ 敵はここから南西に数十キロの位置に居る！ 今の大双武のスペックならすぐに行けるだろう……ダチを救って来いや！」

宮藤「はい！ ありがとうございます米田司令！」

米田「司令は大神にくれてやったんだ。艦長って呼んでくれや」

宮藤「はい！ 米田艦長！ 大双武！ 発進します！」

そう言うと、大双武は背にあるノズルから火を吹き上昇して行く。

宮藤「発進！」

轟音を残し、大双武は敵にと向かって出撃して行った。

米田「……紅蘭、分かってるだろうな？」

紅蘭「あれえー通信の調子悪いなー？」

ブツツと紅蘭との通信が途切れて画面が真っ黒になる。

米田「ったく！ どのいつもこいつも可愛い面して問題児ばっかだよ！ 俺らも向かうぞ、急げ！」

米田の言葉にブリッジの皆は苦笑いで作業にと戻るのがあった。

リーネ「（もう……駄目かも）」

リーネはもはや敵の攻撃から避ける事しか出来ずにいた。高機動高火力、とてもではないが一人で相手に出来る相手では無い。

元々リーネは遠距離からの支援砲撃を専門にしているウィッチだ。

一対一の戦いはあまりにも不利すぎる。

リーネ「（ごめんね芳佳ちゃん……芳佳ちゃん優しいから自分を責めちゃうよね……でも私……ここまでみたい）」

光線が幾本にも束ねられ雨あられと降り注ぐ、やっとの思い出逃げていたが多方向からの光線で逃げ場を失ってしまうリーネ。

リーネ「……え？」

直撃を確信し、死を覚悟したリーネの眼前に青く光る魔力のシー

ルド。

リーネ「このシールド……何……あれ」

ネウロイにと相対し威風堂々と直立している機体。光武と言うにはあまりにもデカイ。優に光武の十倍以上はあるだろう。

芳佳「リーネちゃん！ 後退して！」

リーネ「芳佳ちゃん！？ それに乗っているの！？」

芳佳「うん！ もう大丈夫だから！ 早く逃げて！」

リーネ「う、うん！」

そう言ってリーネは離脱しようと後退する。それを見計らったように光線がリーネの背後を襲うが全て芳佳のシールドによって弾かれてしまう。

芳佳「（凄……感覚としてはストライカーユニットに乗ってる時と一緒だ）」

芳佳の手足は光武と同じように機器を纏っている、感覚としては足を異空間に入れるストライカーユニットに近い物があった。

芳佳「（紅蘭さんが言ってた……この機体にも……お父さんの作った動力源……新しいエンジンが搭載されてるって……お父さん……力を貸して！）」

大双武が身構え頭部に光が集中して行く。

美緒「こちらはストライクウィッチーズの坂本だ！ 宮藤が一人で戦場に出ているとはどういう事だ！ あいつはまともに飛べないんだぞ！」

ミーナ「皆さん急いで！ 後の事は考えなくていい！ 急いで！」
ミカサに美緒から通信が入る。二百のネウロイは巨大ネウロイが現れると途端に退却を始めた。陽動だと分かると彼女達は急いで引き返して来たのだ。

米田「……彼女の意思だ。大神に渡す筈だった機体に乗ってダチを救いに行ったんだ」

大神「自分の！？ では光武に乗って行ったんですか！？ 無茶ですよ！」

米田「操縦概念は今までの光武とは別物さ、ストライカーユニットを動かせるなら行けるってうちのアホのメカニック兼華撃団員が判断したんだろ」

美緒「とにかく急げ！ 宮藤一人では無理だ！」

ネウロイは高速で移動しては大双武に攻撃を仕掛けて来る。それを全てシールドで払うが敵の動きが早く攻撃に転じる事が出来ない。芳佳「相手が早すぎるんだ……こっちは未完成だから撃てても一発か二発……真正面に向き直った!?」

敵のネウロイが真正面を向きこちらに突っ込んで来る。

芳佳「突進……力比べなんて……この一発に掛ける！」

芳佳は軽く息を吸い込んで体勢を整える。機器に纏われた腕の先にある操縦桿で攻撃の操作をする。

芳佳「いっつけええ！」

大双武の頭部から光線が放たれる、独特の炸裂音を残してその光はネウロイを襲った。辺りを爆発が包み爆炎と共にネウロイの破片が辺りに飛び散る。

到着したミカサのクルーとストライクウィッチーズはその爆炎を見て呆然と立ち尽くす事しか出来なかった。

紅蘭「魔力と霊力、二つの力を一つにし無限の力を産むって言う新宮藤理論……『魔霊核縮退炉』その過剰エネルギーを頭部から発射させるいう発想は良かったみたいやけど……これはちよつと威力えげつないなあ」

坂本「えげつないじゃないだろ！ 宮藤は！ 宮藤は無事なんだろうな！」

紅蘭「扶桑の技術を舐めたらアカンよ、扶桑の技術とうちの頭脳があれば——」

かすみ「居ました！ 大双武です！」

爆炎の中から大双武が変わらない姿で現れる、ミカサのクルー達はブリッジ要員戦闘要員問わず歓声を上げて大双武を迎えた。

ミーナ「……私、もう本当に華撃団の技術を理解出来ないわ」

美緒「安心しろ、私もだ」

ルッキーニ「凄ーい！ デカイ光武だぁ！ あれに芳佳乗ってるのお！？」

ペリーヌ「……オーバーテクノロジーとかそういうのを華撃団に言うのは最早無粋なのかしら？」

エーリカ「いやぁ……もう言葉が出ないよね」

巨大な光武がミカサにと戻ってくるのを見てストライクウィッチーズの面々は驚きを通り越して呆れるしか出来ないのだった。

リーネ「芳佳ちゃん！ ありがとう！ また助けて貰ったね！」

芳佳「リーネちゃん、よかった……私も夢中で……」

戦闘が終わり、皆がミカサにと回収され基地にと向かう。

米田「ったく……大神、お前からも紅蘭にきつく言ってやってくれ」

紅蘭「せやかて……あの状況ではあれしか方法あらへんし……」

米田「お前の光武があるだろ！」

紅蘭「うちが光武二式で出たって焼け石に水や！」

大神「まあまあ、確かに機密中の機密の大双武を使ってしまったのはまずいがあるがとう紅蘭、かなり危ない局面だった」

美緒「あれが、『ユーラシア中央殴り込み艦隊』の隠し球という訳ですか？」

米田「そうだ、あれは最後の最後、切り札中の切り札だ。予定性能の二割も出ていない内に使いやがって……宮藤の嬢ちゃんが死んでたかもしれないだぞ！？」

紅蘭「それは……ごめんやで宮藤はん」

芳佳「そんな！ 謝らないでください！ ……って、あれで……二割？」

ミーナ「……本気で頭が痛くなって来たわ」

シャーリー「そりゃああんな機体あるなら無茶な作戦立てる訳だぜ」

米田「だがしばらく大双武は使えないぞ、しっかりと完成させな

ければ意味がない」

大神「分かっています、まだしばらくは俺達だけで頑張らないといけませんね。ところで、結局芳佳君の不調というのは紅蘭君の言う物で間違い無いのか？」

リーネやルッキーニと抱き合っていた芳佳に大神が声を掛ける。

紅蘭「それは間違い無いやろうな。ストライカーユニットが動かなくて大双武が動いたのがいい証拠や！」

バルクホルン「魔力の量が多すぎてストライカーユニットが不調なんて……初めて聞いたぞ」

エイラ「普通そんな魔力量多いヤツなんて居ないカラナ……」

美緒「羨ましい物だな……それにしても、大双武って……誰の命名だ？」

紅蘭「勿論うち！」

美緒「……ああ、それで」

紅蘭「どういう意味や坂本はん！」

シャーリー「カッコいいじゃないかダイソウブ！　なんか濁点一杯で迫力あるし！」

意味を理解して居ない皆がうんうんと頷く。

ルッキーニ「どういう意味なの？　扶桑の言葉？」

芳佳「えっと……大きい双武って意味……かな？」

ルッキーニ「……そのまま？」

シャーリー「……ダサ」

紅蘭「ダサとは失礼な！　拔群の命名やと思うやろ！？」

エイラ「……出来ればその意味は知りたく無かったゾ」

米田「やれやれ……とにかく一週間遅れで嬢ちゃんのストライカーユニットも来る、これまで通りネウロイ殲滅に努めてくれや。

あー長旅で疲れたぜ」

そう言って米田は艦の奥に入って着艦準備を進める。

大神「そうだね、芳佳君のストライカーユニットが届いたら早速攻勢準備に入らないと」

紅蘭「うちもしっかり任務をこなさんとなあ」

大神「紅蘭、大双武をよろしく頼むよ」

紅蘭「それもそうやけど、大事な大事な内偵任務も受けて来たしなあ？」

大神の顔を見て笑う紅蘭の顔を見て、ロマーニヤに来てから自分がストライクウィッチーズの面々として来た事が脳裏に浮かぶ。

大神は引きつった笑顔で紅蘭にと向き直った。

大神「な、内偵任務かい？ 一体何を――」

紅蘭「覚悟せえよ？ 洗いざらい全部調べて帝都に報告するさかい」

大神「……だ、大丈夫、何もないさ」

エーリカ「一郎……終わったね」

エーリカの小さな一言がこのあと更に大きな波乱を暗示しているように乾いた笑いを上げる事しか出来ない大神であった。

次回予告 ミーナ「……はあ、私とした事が。このままではいけないわ。もったときっちりしないと。ん……？ 何かもぞもぞ…… 次回「もぞもぞするの」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8601w/>

大神大尉が501統合戦闘航空団に着任するようです（第二期）

2011年12月19日19時46分発行